

この女は、曾て私が初めて見た時には、あんなに若く、美しく、天真爛漫で、正直で、親切で、強く、教養ある女性であつた、あゝ二年ならずしてこの女が斯くも急速に墮落し、斯くも底深く淪落の淵に陥らうとは！

私は一瞬間その罪を自分の一身に引受けて、彼女の罪を軽くしてやらうと試み、その方が結局私にとつても慰藉になるのだ。然しいくらさう思はうとしても矢張りさうは思へなかつた。何となれば、彼女に美しき物を崇拜することを教へ、高貴なる物への愛を鼓吹し、尊き行爲への憧憬の念を植多付けようと思つたものはこの私自身に他ならないのだから。彼女が芝居者の不快な言行を眞似て墮落して行くに従つて、私の方では反對になるべく洗煉せられた態度や言語に倣ひ、社會の良風と同化して、自分の人格を高めようと思つて来た。そして尙も、感情を制し、教養ある人間の明らかな象徴たる抑制を自分の上に加へた。又戀愛に於ても私は外面的な清淨といふ事を尊び、羞恥の感情を失はないやうに努め、美と禮儀とを傷けないやうにと出来る限りの注意を拂つて来た、何故なればこの二つあるが爲めに、私の感じでは肉體的であるよりもより多く精神的なる或る行爲の獸性を我々は忘れる事が出来るからである。私は時として或は獸的であるかも知れない、然し決して

野卑ではない。私は殺す、然し傷けはしない。私は必要の場合、事物をありのままの正しい名に依つて呼ぶ、そして決して曖昧な蔭口を利かない。私は自分の思ひつきは自ら工夫する、それが自然に自分の心に浮ぶがまゝに、そしてその場合の境遇が自然にそれを呼び出すがまゝに。そして私は決してオペレットや滑稽雜誌の機智なぞを利用しない。私は生活上の清淨と潔白と美しさを愛する、そして若し洗ひ立ての襪衣がなかつた場合には、むしろ正聲に缺席する方がいゝと思ふ。私は半裸體に上靴を突掛けてゐるやうなだらしない姿を決して愛人に見せはしない、私は彼女に只バタ付きのパンと一杯のビールをしか與へる事が出来ない場合もあらう、然しそんな時でも眞白いテーブルクロスだけはちゃんと用意してある。

だから彼女を墮落させるやうな手本を示した者は決して私ではなかつた。要するに、彼女はもう私を愛してはゐないのだ。愛してゐないから彼女はもう私の氣に入らうとはしない。彼女は最早私だけの物ではなくて一般公衆の所有物だ、彼女は公衆の爲めに裝ひ、公衆の爲めに着る。即ち彼女は一箇の公娼に墮したのだ、これまで幾度自分の體を私に提供したかと數へ上げて、その勘定書を私に突付けたとて何の不思議があらう！……

それからの數日間を私は圖書館に閉ぢ籠つてゐた。私は私の戀、尊く、馬鹿らしくもまたこの世の物ならぬ私の戀を叩つて、その喪に服した。すべては悉く葬られた。曾ては烈しい戀の戰鬥が戦はれた戰場は、今や静まり返つてゐる。そこには二人の戦死者と數多の負傷者が遺棄せられてある——古靴一足にも値せぬやうな一人の女を満足させる爲めの犠牲として！ 若しも彼女の情慾がせめて生殖を目的とするものであつたなら、若しも彼女が己れの身を與へんが爲めに己れを與へる賣女の無意識の本能に動かされたのであつたなら、まだしも救はれる。然るに彼女は子を憎み、子を生む事を屈辱視してゐる。不自然にも彼女は尊い母性の感情を卑しい悅樂に墮してしまつたのだ。それで彼女は、彼女自身が既に解體に瀕してゐる墮落の人間である事を感じてゐるので、種族の死滅にまで促される。そしてこの壞亂の機能を糊塗する爲めに、人間はより高き目的の爲めに、或は人類の爲めに生きなければならぬ、といふやうな屁理窟をこね廻すのだ。

私は今や彼女が鼻につき、彼女を忘れてしまはうとする！ 私は書架の前をあちこち歩き廻つて氣を紛らさうとするが、どうしても私をなやます恐しい夢魔から免れる事が出来ない。彼女は今や殆ど私に嘔吐を催させるばかり

で、私は最早彼女に對しては何等の欲望をも感じない、然しながら深い心の底からの同情と、殆ど父親のやうな、あはれみの思ひから、彼女の行末に對する責任を私は感ずる。若しも彼女を落ちぶれ行くまゝに委せたなら、男爵の情婦として、或は誰か他の男の情婦として……！

私は彼女の體を引上げてやるだけの力もなく、我々がはまり込んでゐるこの泥沼から這ひ出る方法もないので、さうした腐れ縁につなかれたまゝ、彼女の滅び行く末路を見せ付けられながら、甘んじてその道伴れにならうと決心した。人生に對する欲望も仕事に對する野心も悉く消え失せてしまつた私は、彼女と共に滅び行くより他に途はないのだ。自己保存の本能も希望も死んでしまつた。私は最早何物をも欲しない、何物をも願はない。私は人前に出るのがひどく厭になつてしまつて、行きつけのレストーランの入口の前まで行きながら晝飯を食ふのを諦めて、すぐ引返す事さへも厭々であつた、早く歸つてソファの上に體を投げ出して、頭から蒲團を引つかぶつて寝てしまひたいので。まるで致命傷を負うた獸のやうに、私はしびれた體をソファに横たへた、頭は空っぽだが睡る事も出來ず、物を考へる力もない、只病氣か最後の解決を待つばかりだ。或る日私はレストーランの別室の奥の方にこつそり坐り

込んでゐた、其處は何れも明るい日の目を恐れる人々——即ち戀人達が忍び會つたり、汚い身なりの人達が人目を忍ぶ暗い部屋なのだ。その時私はふと聞きなれた聲で夢から呼び醒された、誰か今日とは云つてゐるのであつた。

それは或る失敗した建築技師で、今では世界の隅々に四散してしまつたものボヘミア俱樂部の殘黨の一人であつたのだ。

「君はまだ生きてるんだね？」と彼は私の向う側に席を占めながら云つた。

「まあどうにかかうにかね……それで、君は？」

「まあ可なりさ……明日巴里へ出かけるんだ……或る馬鹿者が一萬フランの遺産を残して行つてくれたんでね。」

「そいつはうまくやつたね！」

「ところが困つた事には、それを僕は一人で食つてしまはなけりやならない。」

「そんなに困る事もないだらう、君に手傳ひをする丈夫な齒もあるし、素敵な工夫もなはないよ！」

「ほんとうかい？ そんなら君一緒に行つてくれる？」

「今直ぐでもいよ。」

「そんならこれで決つたね？」

「決つたとも！」

旅行は實際に私を若返らせた。青春時代の昔の記憶が、再び私に甦つて、私は物狂はしい歡喜を覺えた、何となれば、私はこの慘苦の二ヶ年をすっかり忘れてしまはうとする、そしてあの女の事を話したいやうな心持にはもう一寸もなれない。あの離婚悲劇の全部は私にとつてはもう排泄物の堆積と同じ事である。私はそれに唾を吐きかけたまゝ背後も見ずにひた迷れに逃れようとする。屢々私は、どんな事があつたつてもうつかまりはしないぞと堅く決心した牢破りの如くにひそかに會心の微笑を洩した、そして遠國に逃れて借金の心配がなくなつた人の心持が分つた。

巴里では劇場、美術館、圖書館と二週間渡り歩いて私は格別退屈もしなかつた。マリアからは一本の手紙もないので、彼女ももう諦めてしまつただらう、「この世はなべて善からざる無し」と至極樂天的な希望を抱くやうになつた。然し一定の時期が経過して、町をさ迷ひ歩くのにも飽き、初めは強烈であつた印象も追々刺戟が薄くなつて來るに従つて、何も彼も興味がなくなつた。私は漠然たる感覺と説明し難い不満に壓迫せられて、新聞等を讀み散らしながら、一步も外には出ずに部屋にばかり閉ぢ籠つてゐた。

と、一度蒼白い若い女の幻が、處女なる母の空中幻影が私の目の前に浮び出してからといふもの、私はもうすつか

「明晩六時、巴里行き」

「そして、それから……」

「額にピストルと來るんだらう！」

「悪魔！ どうして君はそんな事を考へるんだ？」

「君の顔にはちやんと自殺の相があらはれてるよ」

「いよう、人相見の名人！ ぢや、荷物を引つからせて、巴里行きだよ。」

私はその晩の中にマリアへ出かけて行つてこの吉報を知らせた。彼女は喜びと感動とを以てこの知らせを迎へて、それはあなたに屹度いふだらう、すっかり心持を新しくしてくれるだらうと繰返して喜びを述べた。要するに彼女は満足らしかつた、そして例の母親のやうな優しさを以て私をいたはつてくれたので、私も深く動かされた。

我々はその夜を戀の悩みと思ひ出とに語り明した。我々は未來に望みをつなぐ事はもう出來なくなつたので、將來の計畫はあまり立てなかつた。そして二人は別れた。……永久の別れだらうか？——この問題には觸れなかつた、我我二人は暗黙の裡に互に了解して、再び相會ふべきか否かは、これを偶然に委せる事にした。

六

り落着きを失つてしまつた。あの厚顔無恥な女優の面影は私の記憶から綺麗に拭ひ去られてしまつて、男爵夫人であつた昔の姿だけが、美化せられ、若返りつゝ私の記憶から浮き出して來るのだ、そして彼女のみじめな肉體は、あの聖地に住む禁慾の道士達が夢見るといふ、淨化せられた體に變形してしまつた。

私がこの痛ましくも甘い夢に耽つてゐる時、マリアからの手紙が來た。人の心をかきむしるやうな言葉を並べて、彼女は妊娠してゐる事を報じ、唯私と結婚する事に依つてのみその名譽が救はれるといふ事を云つて來たのだ。

一秒間も猶豫せずに、私は旅装を整へた。私はストックホルムの方へ行く最も近道の列車に乗り込んだ。私は彼女と結婚しようとするのだ。

自分がほんとうにその子の父親だらうかといふ疑惑の影は一寸も私の心にさした事はなかつた。一年半の長い間、いゝ氣になつて罪を犯して來たのだから、私は二人の罪の結果をばむしろ有難い恵みとして、二人の悩みの終りとして見た、また我々に重い責任を課して、どうにもならない宿命に結び付ける現實としても見た。要するにそれは、未だ知られざる、全然新しい物に對する出發點には相違なかつた。のみならず、結婚といふ事に對しては私は早くから

惹き付けられるやうな好感を抱いてゐた、そしてこの結婚といふ物こそは両性が共に棲む可き唯一の形式だと思つてゐた。故に二人の共同生活といふ事はちつとも私を驚かしはしなかつた。マリアが母にならうとする今日に至つて、私の愛は新たに飛躍した、彼女は我々のふしだらな結合の汚辱の中から浄められ、高められつゝ甦るのだ。

私の到着をマリアは甚だ不機嫌に迎へた、そしてあなたはわたしを騙したのだと云つてひどく私を詰責した。私は仕方なしに彼女に説明してやつた——尿道の狭窄は妊娠の危険を少くはするが、決してそれを全然除いてしまふわけではないのだ、と。のみならず、我々はこれまでだつて四五回も妊娠の徴候に驚かされた事があつたではないか——それは幸ひにしてほん物ではなかつたけれど。さうして見れば、今度の事だつて、何もそんなに驚くにはあたらないのだ……

彼女は結婚といふことを憎悪してゐた。彼女の例のいやな友達之感化で、結婚した婦人は夫の爲めに無料で働かされる奴婢であるといふ説を、堅く信じてゐるのである。私は元來奴隷といふものが大嫌ひであつたから、我々は二人の趣味に合ふやうな近代的の結婚をすることを彼女に提議した。

先づ三室のアパートメントを借りる事にして、一つは妻の、一つは夫の室とし、他は共同の室とする。それから家の中には所謂家事だの、召使だのといふものはない事にす。午餐は近所のレストーランから持つて來させる、朝飯と晩飯とは通ひで來る女中に臺所でこしらへさせる。さうすれば費用の計算なども至極簡單で、夫婦喧嘩の種も少くなるだらう。

妻の脛を嚙つて衣食してゐるといふやうな不快な疑ひをかけられないやうに、私は嫁資設定制度を提議した。北方の國々では、男が妻の持參金を受取る事は恥辱とせられてゐるが、これに反して他の文明諸國では、それは云はゞ妻の側からの一種の出資になつてゐるので、妻は只夫に養はれてゐるだけのものではないといふ感じを起させ勝ちになる。かうした不快の印象を根柢からなくしてしまふ爲めに、獨逸人と丁抹人とがかういふ習慣を組織した——それは、妻となる者が家具調度類を全部夫の家へ持ち込んで來るのだ、すると夫は自分の妻の家に住んでゐるといふ感じを持ちつゞける事が出来るし、妻の方でも自分自身の家にあるて、その夫を養つてゐるといふ氣持を始終續けて行く事が出来るのだ。

マリアは近頃その母が残した家具調度類を承け繼いだ、

それ等は賣つて見たところでもいくらにもならないやうな品物ではあつたが、只マリアにとつては捨て難き思ひ出の品であり、且つ随分古代の道具であつた。彼女は六室をしつらへるに足る程の家具類を持つてゐるんだから、三室の爲めに家具を新調するのは無益であると私に注意した。彼女は自分で各室の設備や裝飾をやらうと云ふのだ、私は喜んで彼女の申出でに従つた。

まだ肝腎の事が残つてゐた、それは生れる筈の子供である。幸ひな事には、どうしても出産を祕密にしなければならぬといふ必要から、我々の意見が一致して、生れた兒を町の或る産院に預けて養育させ、手許に引き取つて養育し得る機會が到來するまで待つ事にしようといふ事になつた。

結婚式は十二月三十一日と定められた。まだ残つてゐる二ヶ月の間に、私は恥かしからぬ生計を立てるだけの準備を整へなければならぬのだ。

この目的の爲めと、それから、マリアは間もなく舞臺の生活を諦めなければならぬだらうといふ事を見込んで、私は再びペンを執らなければならなかつた。仕事は非常に抄取つて、一ヶ月目の末には一卷の短篇小説集の原稿を本屋に渡すことが出來た、その出版は直ぐに引き受けら

れた。

その上に又幸運にも、私は千二百フランの俸給で司書官補に任命せられた、そして藏書が舊館から新館へ移された時には、六百フランの特別手當を貰つた。それは確に十分な幸福に相違なかつた。そして他の幸福な兆候と共に、私をして、流石地悪の運命ももう私を迫害するに疲れたのだらうと思はせるやうになつた。

芬蘭で一番有名な雑誌は、一篇五十フランの報酬で、文學批評を私に依頼して來た。瑞典のアカデミーから發行せられる政府の學報は、一欄三十五フランで藝術批評を書いて貰ひたいといふ、羨望の的となつた依頼を私にもたらしした。その他、その頃發刊してゐた古典の校閲の仕事も引受ける事になつた。

そして以上は皆私の生涯中恐らく最も幸運に恵まれたこの二ヶ月の間に降つて湧いた出來事なのである。

間もなく私の短篇小説集も出版された、そして非常の成功を贏ち得た。批評家は私をかうした形式の作品では若き天才だとまで賞讃した、そしてこの作は恐らく新時期を劃するものだらう、何となれば、それは初めて瑞典の文學に近代的の寫實主義を引き入れたものであるから、とまで激賞した。(ストリンドベリ自ら稱するウプサラ大學の學生生活を如實に描けたる十二の短篇を集めた「フェルデンゲン」ミズヴァートベツケ

ンより(一)
八七七年)

王室祕書官或は司書官補の稱號に加ふるに、追々世の中に知られ始め、且つ光榮ある未來を思はしめる名前を頂くこの私を、我が哀むべく、敬愛すべきマリアをして我が夫と呼ばせる事が出来るといふのは、何といふ幸福であつたらう。

私は將來何時か、再び彼女に舞臺生活の首途を祝つてやる事も出来るやうになるであらう、恐らくは不相應な不運の爲めに、ほんの一時鎖されたに過ぎぬ女優としての前途を、どうしても彼女の爲めに再び拓いてやらなければならぬのだ。

幸運は今や我々にほゞ多みかける、眼には一滴の涙をさへ湛へながら。

X X X X

婚約の告示は公にされた。私は荷物を引つからげて、あんなにいろんな悲みや喜びを親しく目撃した私の屋根裏の部屋に別れを告げた。かうして私は何人も恐れてゐない牢獄——結婚生活へと赴いたのだ。殊に我々は何人よりも一層それを恐れる事が少かつた。何故なれば、我々はその中に潜んでゐるあらゆる危険を既に早くから豫想して、すべ

ての障碍を悉く除いてしまつたつもりだつたのだから。
然しながら矢張り……

第三部

結婚生活といふ物の云ひ現し難き幸福よ！ 意地悪な世間の馬鹿者共にじろく〜睨まれる事もなしに、朝から晩まで戀人とさし向ひの生活をするといふ事は！ 久しく焦れて再び見出された母の故里、暴風の後にやうやく漂ひ着いた安全な港、幼き者の生れ出づるのを待ち侘びつゝある小鳥の巢！

自分の周囲にある物はすべて皆彼女の所有品なる家具と彼女の両親の家を思ひ起させる記念の品々なので、私はまるで彼女の幹に接木でもされたやうな感じがする、そして彼女の先祖の人々の肖像を眺めてみると、まるで、彼女の家族が私を養子にしたのでもあるかのやうな印象を與へられる——彼女の祖先はまた私の子供の祖先にもなるわけだから。私は何も彼も彼女の手から受け取つた、彼女はその父親の寶石で私の體を飾つてくれた、彼女はその母親の用ゐた陶器の食器で私に食物をすゝめた、彼女は細々した骨

董のやうな物を私への贈り物とした、それは彼女の故國の詩人達に依つて歌はれた有名な古武士達を偲ばせるやうな古代の物ばかりであつた。それ等の由緒ありげな古い品々は、一箇の平民に過ぎない私を威壓するに足るものであつた。彼女は斯くして私に對して恩恵を施す慈善家ともなり、あらゆる物を惜しげもなく與へる、寛大な施與者ともなつた。それでとう〜私は、自分こそ彼女を深い淪落の淵から救ひ上げて名譽ある地位を與へ、有望な未來ある人間の妻としてやつた御本人である事をすっかり忘れてしまつて、ひたすら彼女の恩恵に隨喜する程に血迷つてしまつた——彼女、それは名もなき一女優に過ぎず、且つ罪を宣告された人妻であり、恐らく最もひどい墮落のどん底から私が救ひ上げてやつたあの女に他ならぬのではなかつたか。

我々が創造した家庭生活は實に快適であつた！ 自由なる結婚生活の夢がそのまゝに實現されたのだ。夫婦共同の寢臺もなければ、共同の寢室もなく、共同の化粧室もない。従つてこの神聖な結合からは、一切の不淨なる物が除き去られてしまふ。かくの如く我々二人の相談の結果起草せられ、檢閲せられ、訂正せられたこの結婚生活は何といふうまい制度だつたらう。二人の寢臺は別々なので、我々は毎晩おやすみを云ふ機會が與へられるし、朝になれば、昨夜は

よく睡れたかどうか、具合が悪くはないかどうかを訊ねながら互にお早うの挨拶を交す喜びを繰返す事も出来る。かくの如くにして初めて寢室に於ける夫妻間のひそやかな心やさしきおとづれを享樂する事が出来る。然しかうした夫妻の交りは、あく迄も禮儀正しい用意の下に爲されなければならぬもので、それでこそ初めてよく夫妻の寢室に起り勝ちな、多少とも暴力を用ゐるやうな、あの不快さを全然除く事が出来るのである。

近く生れ出る筈の赤ん坊の襁褓を縫つてゐる妻の側でやる仕事は、私にとつて實に働かざるやうな仕事である。我はもう以前のやうに構束や詰らないのらくらした生活で時間を空費するやうな事がなくなつたのだ。

× × × × × × × ×

一ヶ月間のこの水入らずの同棲生活の後、時期よりも早い出産で我々は驚かされた。生れたのは、やうやく息を吐く事だけが出来るやうな、極めてひよわな女の子であつた。直ぐに赤ん坊は、しつかりした人だといふ評判の近所の産婆に預けられたが、二日の後その子は、産婆の手で假の洗禮を受けたまゝ、抵抗力の缺乏の爲めに、生れて来た時と同じやうに何の苦痛もなく、はかなく死んでしまつたとい

ふ通知に接した。

母親はこの知らせを聞いて良心の苛責を感じたらしいが、然しその中には又明かにほつと安堵の思ひが混つてゐなくはなかつた。この子が生きてゐれば彼女は世人の偏見の爲めにこの先どんなにひどい苦勞を重ねなければならなかつたかも知れないのだ、結婚後こんなに早く生れてしまつた子供を自分の手許で育てる事は到底世間が許さないのだから。

そこで私と彼女と相談の結果、新しい約束が取決められた。「最早子供は一人も作らない事」、生涯の伴侶としての男女二人切りの生活、然しながら愛情の點に於てはいさゝかも缺くる所なしに、各々その特種の目的を達する爲めに努力を續ける生活。一度避妊に失敗して、彼女は最早私の言葉を信じなくなつたので、我々は今度は最も簡單な、最も罪のない方法に頼る事になつた。

遂にそこまで到達して、最早あらゆる危機も除かれて安全になつた今になつて初めて、我々は久しぶりでほつと息を吐いて、我々の身の上をぢつと考へ始めた。私の生家の家族は私を敬して遠ざけてゐるので、我々の結婚生活を妨げる邪魔な親類は一人もなかつた、そして私の妻の方でも、身内といつては市内に一人の叔母がある切りなので、我々

は、新婚の夫婦にとつてとかく不愉快な煩ひとなり易い邪魔者に押掛けられる事はなくて済んだ。

× × × × × × × ×

それから六週間を経て、我々のこの水入らずの夫婦暮しの中に忍び込んで妻の腹心となつた二つの侵入者を私は發見した。

第一には一疋の犬だ、キング・チャールズ種の、しよほしよほした眼付の怪物で、私が歸つて来る毎に、まるでよその家の者でもあるかのやうに、烈しく吠え立てるのだ。私は元來犬といふ物を好かない、自ら攻撃者に噛み付くだけの勇氣なき臆病者の保護者などは大嫌ひだ。そして私は特別にこの犬が嫌ひであつた、此奴は彼女の先の結婚時代の遺物で、常に彼女の先夫を思ひ出させる種になる奴なのだ。

私がとうとう我慢がし切れなくなつて、初めて妻に、あの犬をもう少し静にさせろと云つた時、妻はおだやかに私の口を返して、これは亡くなつた自分の娘のかたみなのだから、と云つて犬を辯護し、あなたはまさかそんな残酷なお方ではないでせう……とか何とか、そんな泣き言を並べ立てた。或る日私は、この醜惡な怪物が客間の立派な敷物の上に汚物を残して行つたのを發見した。私は犬に相當の

懲しめを加へた。すると私は、理性のない動物を打擲するやうな恐しい亂暴者だと云つて散々罵られた。

「だつて仕方がないぢやないか？ 犬には物を云つて聞かせたつて分りはしないんだもの。」

すると彼女はめそ／＼泣き出して、あなたのやうな残忍な男と一緒にゐるのはほんとうに恐しい事だと云ひ出す。

そして怪物は相變らず平氣で貴重な敷物を汚し續ける。

私は、そんなら少し面倒を見てこの犬を仕込んでやらうと思つた、そして先づ妻に、犬といふものは非常に伶俐なおとなしい動物であるから、少し辛抱して訓練を與へれば驚く程の結果が見られるものだといふ事を説いて聞かせようとした。

すると彼女は怒り出してしまつて、その敷物は私のです、といふ言葉を初めてこの時云ひ放つた。

「そんなら、それを持つて行つておくれ！ 僕は厠の中に住んでゐなければならぬ義務はないんだ。」

敷物は依然そのまゝにして置かれたが、その後犬は今迄よりもいくらか善く監視せられるやうになつた。私の懲罰がいくらか利いたのであつた。

すると今度は又ぞろ新たな面倒が持ち上つた。私はなる可く費用を節約し、特に臺所に火を焚く手数を

省く爲めに、晩は冷たい食物だけで我慢する習慣になつてゐた。ところが或る日何気なく臺所へ行つて見ると、どうだらう？ 女中がかん／＼火をおこして仔牛のカツレツをこしらへてゐるではないか。

「そのカツレツは誰が食ふんだ？」

「犬にやるんですの。」

「そこへ妻がやつて来た。」

「ねえ、お前……」

「代はあたしが拂ひます！」

成程……然し僕でさへ冷たい物を食つてるんだ、お前の犬よりも餘程悪い事になる……そして矢張り自分の物は自分が拂つてるんだぜ！」

善い女！ 自分が拂ふんだと云つてる！

それ以來、犬は殆ど偶像視せられ、殉教者の如くに取扱はれた。マリアは新しく出来た一人の女友達と一緒にやつて、その犬の崇拜をやり出し、頸には青いリボンで飾りを付けてやつた。そしてこの二人の女同士は、私の厭ふ可き人格——人間の意地悪さがそこにそのまゝ具體化されてゐる——を歎じて共に溜息を吐いてゐる。

私の行く先々で私の邪魔をするこの家庭平和の攪亂者を憎む情がたまらない程に強くなつて来た。妻は犬の爲めに

羽根枕と毛布で寢床をこしらへてやつた、それが又、私が彼女に例のお早うを云つたりおやすみを云つたりする時の通路の邪魔になるのである。一週間の勞苦に疲れ切つた土曜の晩、今夜こそ妻と二人切りでしんみり過去を思ひ未來を語り明さうと楽しみにしてゐる時、妻は必ず三時間も例の女達と臺所に籠城し、女中を叱り付けて、どん／＼火を焚いては家中を煙にしてしまひ、まるで引繰り返るやうな大騒ぎをやらかす——何の爲めに？ 怪物の御入浴日だから！ 「何といふ薄情な女だらう——僕をこんな目にははせるなんて！」

「まあ、奥さんを薄情だなんて、あんなやさしいお方を勿體ない——可哀想な動物の爲めに、結婚生活の幸福も犠牲にしてしまつていらつしやるぢやありませんか！」さう妻の友達は叫ぶのだ。

それから言語同斷の屈辱的な正餐になつた。

近所の料理屋から運んで来る食物が目に見えて粗悪になつた事を私は餘程以前から氣が付いてゐた。それを注意すると妻は私が氣むづかしくなつたからさう思ふのだ、といふ事を、抵抗すべからざる程の物やはらかな調子で私に説伏するのだ、そして彼女は自ら正直で公明正大な人間だといふ事をうるさく繰返して止まないの、私もとう／＼閉

口して、それを信じてしまふ。

扱て、遂に呪はれたる食事が始まつた。見ると、私の前に運ばれた皿には、肉はなく骨と筋だけだ。

「どうしたんだ、お前！」と私は女中に云つた。「お前の持つて来たものは一體何だい？」

「え、旦那様、わたしよく承知して居りますの。持つて来た時にはそんなぢやなかつたんですけれど、奥さんがいゝ所は犬にとつて置けと仰しやるもんですから、つい……」

諸君よ、現行犯で捉まへられた女には注意し給へ！ 彼女の怒りは十倍に加はつて君等の頭上に落下するであらう！

嘔吐きの假面を引剥かれ、のみならず詐欺犯人の正體を見現された時、彼女はさながら電光に撃たれた者の如くであつた、何故なれば彼女は口癖のやうに、犬は自分の金で飼つてゐるのだと云ひ張つてゐたんだから。忽ち蒼白になつて一言もない彼女の姿は、むしろ私に同情の念を起させた。

私は彼女の爲めに恥ぢた、私は私の足下に屈服してゐる彼女を見る事を欲しなかつたので、寛大な勝利者のやうに彼女の失策を慰めてやつた。私は優しく彼女の頬を撫で、こんな詰らない事でく／＼しないやうにと、彼女に云つて聞かせた。

然し寛容は彼女の弱點ではなかつた。彼女は忽ち私に食

つてかゝつた。——薄ぼんやりなもんだから人の指圖を聞き違へるやうな下女風情の前で、自分の妻をそんな目にははせるあなたといふ人は、それだけでもお里が知れる、教養のない平民の出だといふ事がよく分る、とかう云ふのだ。要するに、悪い者は私だけであつた。おまけに、神經的の發作が突發して、彼女は荒々しく食卓から躍り上つて、ソファーに身を投げ、まるで狂人のやうにあれば廻つて、死ぬ死ぬと泣き喚いてはおい／＼しゃくり上げる。

私は無論彼女のこの死ぬといふ言葉をそのまゝに信じようとはしない、そしてこのお夢居をひや／＼かに眺めてゐる。

「一疋の犬からこの大騒動だ！」

ほんとにどうかなくなつたぢやないか知ら、と私もとう／＼心配になつた程に彼女は吠え狂ふ、産後の衰弱がまだすつかり恢復してゐない彼女の體を、恐しい咳嗽の發作がゆり動かす。私は再び彼女のこの有様に欺されてしまつて、とう／＼醫者を迎へにやつた。

醫者は急いでやつて来て、胸部を診察し、脈を見てからぶつ／＼云ひながら歸りかけた。敷居の處で私は彼を呼び止めた——

「如何でせう？」

「ふ……！ 何でもありませんよ。」彼はさう呟きながら外套を

着る。

「何でもない……でも……」

「全く何でもないんです……あなたは女といふ物は一體どんなものか御存じでせう……左様なら！」

あゝ、その當時若し私が、今私の知つてゐる事を、私の發見した、ヒステリー女の大小の發作を治す秘術を心得てゐたなら、何でもなかつたんだが。然しその時私は只いたづらに彼女の目に接吻したり、どうぞ宥してくれと一生懸命に御機嫌を取るより他にどうすることも知らなかつたのだ。何故？ 彼女は私をその胸に抱き寄せて、私を向う見ずのお坊ちゃんと呼び、彼女は非常に繊細な弱い體質なのだから、よくいたはつて貰はなければならぬのだと云ひ、若し彼女の小さないたづら小僧がもつと伶俐になつて、二度とこんな馬鹿げた騒ぎを起さないやうにしてくれなかつたら、彼女は遂にはその爲めに死んでしまふかも知れないと云つて私をたしなめた。

彼女をすつかり喜ばしてやる爲めに、私は犬を抱き上げてその背を撫で、やつた、それで私は三十分程の間は、天國に在るやうな喜びに充たされてゐる彼女の優しい眸を以て酬いられた。

それ以來犬はもう公然と到る處に汚物を撒き散して憚ら

なかつた——此奴は一種の復讐意識を以てわざとさうするのぢやないか知らんとさへ疑はれる位であつた。然し私は私の怒りを抑へた。

私はこんな不潔極まる家の中に住まねばならぬ苦痛から、一時も早く免れ得可き好機會の來る事をひたすら待ち焦れた。

遂にその機會はやつて來た。或る日私が食事に歸つて見ると、妻が涙にかきくれて悲歎に沈んでゐる。食事はまだ出ない。女中は見えなくなつた犬を捜し歩いてゐるのだ。

私は包み切れぬ喜びを辛うじて押し隠しながら、泣き悲んでゐる妻を一生懸命に眞心から慰めてやつた。私は無論私の敵がなくなつてしまつたといふ事實に就いては内心喜びに堪へないが、同時にまた妻の悲みに對しては大いに同情する事が出来る、といふこの簡単な理窟が彼女にはどうしても分らない。それで彼女は私の心を見抜いて叫び出す。

「あなたさぞ嬉しいでせうね？ あなたは今あたしの不幸をいゝ氣味だと思つてるのね！ それでもうあなたほどれ程意地悪だかちやんと分つてよ、そしてもうあたしを愛してはくれないつて事も！」

「だつて、お前、僕はお前を何時だつて愛してゐるよ、そ

れは信じてくれたつていゝだらう、但しお前の犬だけはどうしても好きにはなれないがね。」

「あたしを可愛がつて下さるなら、あたしの犬だつて可愛くないといふ法はないわよ。」

「お前を愛しなかつたら、僕はとつとにお前をぶん擲つてやるよ。」

あゝこの言葉の効果は實に凄じいものであつた！ 女を擲る！ まあ考へても御覽、女を擲る！……それを聞くと、彼女の氣持はもうめちやくちやになつてしまつて、この私が犬を追ひ出したのだらう、多分毒を飲ませて殺したのだらう、と無茶な事を云ひ出して、手が付けられない。

我々はあらゆる警察區に届けを出し、犬殺しにまで手を廻して詮索した揚句、平和の攪亂者はやうやくにして見付かつた。それで妻とその友達とはその日大袈裟な祝宴を擧げた。そして二人はその後私を、少くとも毒殺位は企み兼ねない男として、警戒するやうになつたのだ。

この日以来、この怪物は妻の寢室に鑿いで置かれる事になつた、かくして、私が藝術家的趣味を以て裝飾したあた

ら戀の巢も、あはれや、犬小屋になつてしまつた。既に狭きを感じてゐたこの住居は、それで到底住み難いものになつてしまつた、そして折角の共同生活はめちやめ

ちやになつた。私がこの事を妻に訴へると、彼女は、それは自分の部屋だ、と答へる。

私は奮然として最早容赦なき十字軍を起した。しばらくの間彼女を放つておらして置くと、彼女は果してその熱血の爲めに悪寒を發して、私を呼び寄せた。

「あなたはもうあたしにお早うも云つてくれないのね。」

「お前の側へは寄り付けないからさ。」

彼女は拗ねる。私も拗ねる。私は辛さを堪へて二週間の空閑生活をやり通す。遂に彼女の方で根負けがして止むな

るか與へてくれと泣き付く、然しそれを與へてやつた代りに私は、再び彼女の要求があるまで、その憎しみを受ける事になる。

とうとう彼女も我を折つた、そして犬を殺してしまはうと決心した。然し直ぐにはやつてしまはないで、先づ彼女の友達を澤山呼び集めて、「死刑を宣告せられたる者の最後の日」とでも云ひたいやうな、一場の別れの喜劇を演出した。彼女は私の前に跪いて、どうぞ和解の印にその小汚い犬を抱いてくれるやうにと大眞面目で願ひさへした、何となれば、彼女の言葉に従へば、犬だつて靈魂を持つてゐるだらう、そして我々は他界へ行つて、又彼等と相會はない

ものでもない、といふのである。
 その結果として——私はこの死刑を宣告せられた者に對して生命と自由を與へた。その時の彼女の大袈裟な感謝の仕方と云つたら、殆ど信じ難い程度のものであつた。
 おれは癡狂院へ幽閉されてゐるのぢやないか知ら、と思はれるやうな事も度々であつた。然し人は戀する時、それ程几帳面には取らないものである。

この『死刑を宣告せられたる者の最後の瞬間』の場面は、それ以來三年間に亘つて、殆ど半年毎に繰返された。
 讀者諸君よ、諸君は一人の男と一人の女と一疋の犬とに關する事實そのまゝのこの物語を讀み、かくの如き告白を聞かされて随分惱まされたであらうと思ふ。そして諸君は恐らく私に對する最も深刻な同情を拒まれないだらうと思ふ、何となれば私の悩みは實に、各日二十四時間を有する三百六十五日の六倍に亘つて繼續したのですから！ 何とぞ私を嘆賞して下さい、私は、それにもかゝらずよく生き通して來たのですから！ 若し又、私の妻が主張する如くに、私は幸ひにまだ生きてはゐても、實際既に狂人になつてしまつた人間だとすれば、その罪を負ふ者は私自身の他には誰もないので、一思ひにこの小汚い犬を毒殺してしまふだけの勇氣のなかつたこの私自身の他には！

二

マリアの友達といふのはもう五十歳に手の届く老嬢で、私の既に見捨て、しまつた色々の變な貧しい理想に憧れてゐるやうな、不思議な、貧しい女であつた。

彼女は私の妻の慰藉者である。私が邪慳に犬を突飛ばすやうな時、妻は彼女の胸にすがつて泣き伏して、そして又そこに泣き止むのであつた。妻が結婚を呪ひ、人妻の奴隷的屈從を呪ふ時、喜んでその聴き手となるのも亦この女であつた。
 彼女はあまり出しやばらず、家政の事などにも口を出さない、少くとも私の知つてゐる限りでは。尤も私の知つてゐる所と云つては至つて範圍が狭いのだ、何故なれば、私はその頃から着手した大きな仕事の方に忙しかつたので、内向きの事などには殆ど注意を拂はなかつた。然し彼女が私の妻から少額の借金をしてゐるといふ事だけは分つてゐた、私はそれに就いては別に何とも云はなかつたが、或る日その女が銀製の皿を持ち出して、自分の爲めにそれを質入れするに至つて、私は黙つてはゐられなくなつた。
 そこで初めて私はマリアの感情をなるべく害しないやうな鄭重な言葉を用ゐて、たとひ嫁資設定制度の下に在つて

も、さうした交際は面白くないと思ふと云つた、何故なれば、彼女の夫にして終生の伴侶なる私自身が借金で首も廻らないといふ際ですらも、彼女はさういふ事をしてくれた事は、まだ一度もなかつたのだから。
 「赤の他人の、そんな蟲のいゝ頼みをきいてくれる位なら、」と私は彼女にその時云つてやつた。「僕にだつて株券でも少し貸して貰ひたいものだね、早速抵當にして金を借りるんだが。」

彼女はそれに反對して、自分の持つてゐる株は目下暴落して殆ど無價値に等しく、従つて賣る事も出来ない、のみならず、彼女は自分の夫とそんな金銭上の取引きをするのはいやだ、と云ひ張つた。
 「だけどお前は、やうやく七十五フランかそこらの恩給だけで食つてるやうな、何の保證もない赤の他人には大事の物を貸してもいゝんだね！ そして僕にはそれがして貰へないといふのはをかしいよ——それで未來を開拓し、お前が一文なしになつた時にもお前の安全を保證してやらうといふ夫の云ふ事を——何處までも利害關係が一致してゐる筈のこの夫の僕の云ふ事はきいてくれないといふのは！」

遂に彼女は承諾した。そして株券で三千五百フランに見積られる負債が成立した。

彼女はそれからはもうすっかり私の恩人氣取りになつてしまつて、相手になる人さへあれば、誰にでも、自分の持參金を犠牲にして夫を立身させたのだといふ自慢話を吹聴して止まなかつた！ そして私は彼女を知る前から既に劇作家として又小説家として、自分の才能を發揮してゐたといふ事實はけろりと忘れてゐるのであつた。然しながら、私にとつては、彼女に恩恵を受け、一切が彼女のお蔭だと思ふ事はむしろ自分の喜びとする所であつた——自分の生命も、自分の幸福も、さては自分の未來さへも妻のお蔭だと思ふ事は！

我々の結婚契約に於ては、私は財産の分離を望んだ、彼女の財政は甚だしく不整理であつたのがその主なる理由であつた。男爵は彼女から金を借りてゐたが、彼女に現金で返却する代りに、或る負債者の保證人に立つた。私は豫めあらゆる警戒を爲したにも拘らず、婚禮の翌日早速銀行へ呼び出されて新たにその金額に對する保證を求められた。私は一生懸命に抗辯したが、駄目であつた、私の妻は第二の結婚に依つて、再び未成年者と同じ事になつたのだから、支拂能力がないのだと云ひ張つて銀行では承知しなかつた。私は非常に腹が立つたけれど仕方なくとうとう私の名前を男爵の名前に書きかへて保證をさせられてしまつた。

若し私がその時自分のした事はどういふ性質のものであるかを知つてさへゐたなら！ 然し私は人の言をそのままに信じ易い單純なお人好しに過ぎなかつた。私は世の中の事に通じた人間が私と同様の立場でする事ならば、何でも間違ひのないものと信じて少しも疑はなかつたのだ。

三

或る晩、私が自分の部屋で一人の友人に會つてゐる時、男爵が訪ねて來た。それは我々の結婚以來彼の最初の訪問であつた。私の『先輩』が訪ねて來たといふ事は、あまり香しい事ではなかつた、然し彼の方では、その『後輩』の前に格別尻込みもしないので、私もなるべく打ち解けた顔をしてゐた。前に來てゐた友達を支關へ送り出す時、私はその男をわざ／＼男爵に紹介する程の事もあるまいと思つた。すると後に私はその爲め妻から不作法な人だと云つてひどく叱られた。私はそれに答へて、彼女も男爵も物の感じが鈍い人間だと云つてやつた。

お定りの喧嘩が始まつて、あなたは要するに野人だと罵られた。賣り言葉に買ひ言葉で口論が募り、果ては男爵の家から持つて來て、今は私の部屋を飾つてゐる繪の事まで引合ひに出された。私はそんな物は返してしまへと主張した。

「貰つた物を突返したら」と妻は答へた。「くれた人の感情を害するに決つてますわ。あの人だつてあなたがやつた贈物を今でもちゃんと大事にしてゐますよ、友情と信頼の印として。」

「信頼」といふ美しい言葉に、私は負けてしまつた。この刹那、私に不快な記憶を呼び起す一つの家具が目につつた。

「この机は何處から持つて來たんだい？」

「お母さんの家からですわ！」

彼女の云ふ事は事實であつた、然し、それは彼女の先夫の家を通過して來たものである事を云ひ足すのを彼女は忘れたのだ。

何といふ神經の遲鈍だらう、何といふ惡趣味だらう、私の名譽に對する何といふ不注意だらう！ それは公衆の面前で私を辱しめる爲めにわざとした事だらうか？ 私はこの毒婦が仕掛けて置いた罠の中へまんまと落ち込んだのだらうか？

私は彼女の亂暴な論理に對しては辯護するだけの勇氣もなく、無條件で屈服した、彼女の立派な教育は、私の教養では決斷の付かないやうな場合に私を指導してくれるに相違ないと確信しながら、彼女は何を訊ねられても答辯流るるが如くである。彼女の言に従へば、男爵は家具と云つて

るでなんにも御存じなしであつたのだ！

四

マリアは出産後しばらくの間引籠つて靜養しなければならなかつたが、産褥から出るやうになると再び活動を始めたくなつた。

彼女は先づ研究の爲めと稱して繁々劇場へ出かけ、私が仕事の爲めに家に閉ぢ籠つてゐる際にも各方面の社交界に顔を出した。彼女は今ではもう立派な亭主のある體なので、離婚當時の彼女をすげなくはね付けた各方面の社會でも、今は喜んで彼女を迎へた。彼女はさういふ處へは私をも一緒に引張つて行きたがつた。亭主がちつとも顔を出さないといふ事は人に善くない印象を與へるといふのだ。私はそんな事には一切無頓着であつた、我々は結婚はしても、互に自由は保有する事に豫め約束をしてゐるので、私は彼女に一切の自由を許し、行きたい處へは一人で勝手に出て行かせた。

「亭主はちつとも見えないわ。」と人々は云ふ。
「それでいゝよ、見えなくつても、聞えるよ！」と私は答へる。

要するに、亭主は一つの綽名のやうなものになつてしま

は何一つ買つたためしがなかつた、みんな彼女が求めたものだ、といふ！ そして男爵は私の妻の家具調度を今でも平氣で用ゐてゐるのだから、私だつて自分自身の妻に屬する一切の家具を使用するのに何の遠慮をする事もないわけだと、かういふのだ。

「男爵は私の妻の家具を平氣で用ゐてゐる」といふこの最後の一句が、私を大いに満足させた。そして私の客間にかかつて、男爵から貰つたあの繪は、高き信頼の證據として、云はゞ我々の交遊關係の理想的特質を示す看板のやうなものであるから、私はそれをそのままにして置いた。のみならず、私は、物好きな客に問はれれば、その風景畫をくれた人の名前を告げてそこに一種の喜びをさへ見出す程に無邪氣であつた。

その當時若し私が、單に一平民に過ぎぬ自分の方が貴族と稱する彼等よりも却つて繊細な神經と上品な趣味とを持つてゐたのだといふ事を知つてゐたなら！——これ等の本能はもつと下等な社會にも見出されるもので、却つて上流社會と稱するものには往々缺けてゐるものなのだ——彼等は巧みに化の皮を被つて卑しい本性を包みかくしてはゐるけれど！……自分はどういふ女の手に自分の全運命を委ねたのかを、あの時若し知つてさへゐたなら！……然し私はま

つた、そして細君は彼を眼下に見くだす習慣が付いた。家に一人切りである時、私はあの人種史研究の論文にとりかゝつてゐる、それは図書館に於ける自分の地位を高くしてくれるやうな仕事である。私は巴里、伯林、彼得堡、北京及びイルクツク等の權威ある學者達と文通して、舊世界の全般に擴がる交渉を操る糸を机上で掌の中に握つてゐる。マリアは私のこの仕事を非難した。彼女は私に喜劇でも書かせたいのだ。それで機嫌を悪くしてゐる。私はこの仕事をつまらない時間の浪費とは思はないで、どうぞ最後の結果を待つてゐてくれと彼女に頼む。然し彼女は何と云つても、この一文にもならない支那研究の價値を認めようとはしないのだ。まるでソクラテスの妻クサンティッペといつたやうな彼女は、私のこのソクラテスの忍耐を責めて止まない、そして私がそんなくだらない道樂の爲めに彼女の持參金を浪費してしまふ、と云つて口惜しがらる——何かと云へばこの『持參金』だ！

私は苦味と甘味とが奇妙に混じてゐるやうな生活を送る、そして日夜女優としてのマリアの將來の爲めに心を碎く。三月にこんな噂が擴まつた——王室劇場では數名の座員が首を齧られるさうだ、そしてその顔ぶれは毎年契約が新しく書き換へられる五月の末に發表されるだらう、とい

ふのだ。例のに加へて又も特別の涙に充ちた三ヶ月間！私の家はこの首の危い芝居の連中で毎日一杯になる。私の精神は知識の進歩と才能の生長とに依つて貴族的になつてゐるので、これ等の落伍者連に對しては反感を禁じ得ない。彼等は全然低能で、何等の教養もなく、その虚榮心で人に悪感を抱かせ、彼等の社會に特有な言葉で、陳腐極まる下らない事をさも新しい眞理の如くに騒ぎ立てゝゐるといふやうな、とても鼻持ちのならない手合なのだ。

私は散々彼等の無意味な饒舌に惱まされた揚句、とうとう我慢がし切れなくなつてしまつて、かういふ連中と同席する事はもう御免を蒙りたい、と妻に願つた。それから私は彼女にも、かうした癩病患者と卑小なる者共から遠ざかつてゐるやうに忠告した、何故なればかういふ連中と一緒になつてゐると、自分までが一緒に墮落して、大事な氣力を奪はれてしまふのだから。

その結果は——私は『貴族主義者』の一語を以て冷笑し去られてしまつた。「無論僕は貴族主義者だよ！」と私は彼女に云つてやつた。「相當の才能を抱いて、高く向上しようと努力してゐるといふ意味に於て、そして名稱だけの所謂貴族主義のやうなけちな物をあてにしてゐるんぢやないんだからね。然しさう云

つたからつて、相續權を奪はれた者の悲哀を味ふ事はちつとも妨げないのだ。」

一體私はどうして何年も何年もの間、私をいぢめたり、私の髪の毛を引張つたり、自分の友達や犬とぐるになつて私の物をくすねたりするやうな女に束縛せられて、生き存へてゐる事が出来たものか、と今日に至つて考慮をめぐらして見ると、これは確に自分の満足し易いおめでたい性質、周囲の人間、殊に自分の戀愛に就いては、物事をあまり几帳面には取らないやうに教へる私の禁慾主義の哲學のお蔭だと思ふ。私は實際それ程までに彼女を愛した、或る時は私のこの強烈な熱情はむしろ彼女をいやがらせるといふ事をつけ／＼と見せ付けられるやうになるまでも、彼女をうるさからせた。然しながら彼女が子供のやうに私に甘えかかる時、私の熱した頭を優しく彼女の膝に抱いてくれる時、彼女の指が獅子の鬘のやうな私の髪の毛をいぢくる時——さうした時には一切を忘れてしまひ、何も彼も宥す氣になつた。私は幸福であつた、そして私は愚にも彼女に白狀した——おれは最早どうしてもお前なしには生きてはゐられない、おれの全存在は只お前の手の中に握られてゐるのだ、と。そしてその結果彼女はだん／＼自分を私よりももつと高貴な人間であると思ひ込むやうになつてしまつた。かう

した間違ひは、私が自ら好んで彼女の前に屈服するところから生じたものであるが、遂に私はまるでこの家の赤ん坊になつてしまつた——おしまひには彼女は只私を甘やかしたり囁いたりしてゐればいゝやうになつた。それからといふもの、私は最早全く彼女の手中の物であつた、彼女はその權力を濫用する事を少しも憚らない、しかもそれはその後間もなくの話だ。

夏になると彼女は女中を連れて田舎へ避暑に出掛けた。私が止むを得ぬ用件の爲めに日曜以外は毎日圖書館に閉ぢ籠つてゐなければならなかつたので、彼女はその間田舎に一人であるのはいやだと云つて、例の女友達をその田舎の家を下宿させた。その女は到底下宿料を拂ふ事は出来ないだらうし、我々の家にだつてそれ程の餘裕もない、といふ事が分つてゐても、彼女はそんな事には頓着しなかつた。マリアは私を『意地悪』として取扱つた、そしてあなたは誰の事でも悪い方につかり解りたがる人間だと主張した。……結局私は彼女の意志に従つた、最もいやな不愉快と、無理強ひの空闊生活を免れる爲めに。私は従つた……あゝ、又もや例の如くに！

一週間孤獨と空闊の生活を送つた後に、私は安息日の如くに土曜日を喜び迎へた。喜びの爲めに心臓を踊らしなが

私は汽車に乗り込む、それから又三十分間、日曜日の御馳走に葡萄酒や食料品をどつきり抱へ込みながら灼け付くやうな太陽の下を喘いで行く。道々私は空想を描いて喜ぶ——もう直きマリアがおれを迎へるのだ、兩腕を擴げて、微風に洗ひ髪をなびかして、嬉しさに頬をほてらして、新鮮な空気の爲めに再び健康を恢復して。……私は丁度時分に料理された午餐を想像して心の中で既にこれを味つてゐる。何故なれば、私は朝のコーヒを飲んでからまだ何んにも口に入れてゐないのだ。とう／＼湖水のほとりのほりもみの木蔭に小さい家が見え出した。同時に、明るい色の着物を着て浴場の方へ出かけて行くマリアと彼女の友達の姿が目に入った。私は胸一杯の力で彼等呼び立てた。彼等は私の聲を聞き付けたに相違ない、それ程の距離しかなかったのだから。然し彼等はまるで私から逃げて行かうとするかのやうに歩みを早めて、浴場の中へ飛び込んでしまった。

一體どうしたといふんだらう？

女中が私の足音を聞き付けて出て来て、屹度不快な質問を浴せ掛けられるだらうと豫期してゝもゐるやうにおどおどした面を出した。

「みんなは何處へ行つてゐるんだ？」

「あの、浴場の方へ……」

「そして飯は？」

「四時前には出来ないのでございます。お二人ともたつた今方お目ざめになつたばかりでございます、そして私それからずつとアマリエさんのお召物のお世話をしてゐたものでございますから。」

「お前、僕と呼んだ聲が聞えたかい？」

「聞えましたとも、旦那様！」

……さてこそ彼奴等は屹度不安な良心に驅られて逃げ出したものに相違ない、そして私は疲れ切つて、空腹を抱へたまゝ二時間も彼奴等を待つてゐなければならぬ。

勞苦と憧憬の一週間の後にかうした歓迎を受けようとは！そして彼女は、まるで何かよくない事をしてゐるところを見付かつた女生徒と云つた態度であわてゝ逃げて行つた、といふ事を考へると！

とう／＼彼女は歸つて来た！私はそれまでソファの上で睡つてゐたが、勿論ひどく不機嫌だ。彼女は機先を制して、まるで何んでもなかつたかのやうに私に接吻する。然し流石の私の神経ももうこらへ切れなくなつてゐる。飢ゑ切つてゐる胃の腑にはそんな女の甘つたれなんぞを聴く耳がない。そして壓迫せられてしまつた心臓は、こんなうはべだ

けの接吻位のもど通りになれよう道理はない。

「あなた怒つてらつしやるの？」

「僕の神経が怒つてゐるんだ、どうか觸らないやうにしておくれ！」

「あたしあなたのコックぢやありませんわ！」

「お前にコックをしると云やしないよ、然し少くとも、我々が雇つてゐるコックの仕事は妨害するのは止した方がいゝよ。」

「あなたはお忘れになつてゐるんですわ——アマリエさんはあたし達の下宿人なんだから、下女に用を云ひ付ける権利があるんだつて事を！」

「お前、先刻僕と呼んだのが聞えなかつた？」

「えゝ、ちつとも！」

あゝこの女は嘘を吐く！私はまるで心臓をかきむしられるやうだ！

あゝ午餐——あんなに待ち焦れた安息日の午餐はむしろ長い苛責に等しい物であつた。そしてそれから後の幾時間涙の中に過ぎて行く、マリアは結婚——神聖にして幸福なる結婚を呪ひ、彼女の友達の肩にすがり付いて泣き出し、彼女の小汚い犬に狂人じみた仰山な接吻を浴せかける。殘忍刻薄で、不實で、虚偽だらけで——センチメンタル

なこの女の心！

そしてこの心が無限の變化を見せつゝ一夏中を通して繼續せられる。私は私の日曜日をこの精神薄弱な二人の女と一疋の犬を相手にして過ぎなければならぬ。我々の結婚生活の不幸はすべて皆私の調子の狂つた神経のせみだから、私は醫者に診て貰はなければならぬだらう——彼等は私にさういふ風に思ひ込ませようとするのだ。

日曜の朝私はボートで湖を遠くの方まで漕いで行つて遊ばうと計畫した、然し私の妻は午飯前には姿を見せない。彼女は化粧に夢中なのだ、それで私はその時刻までひとりぼつちでぶら／＼そこいらを歩いてゐなければならぬ。

その後ではもう時間が遅過ぎるのだ。

まるで私の神経を針の尖で突付くやうな事をするこのセンチメンタルな心は、或る朝園丁が晝飯の御馳走に兎を一疋殺したと云つてめ／＼泣き出した。そして、彼女はあのあはれな動物が斧の下であまりひどい苦みを受けないやうにと神様に祈つた、といふ事をその夜寝てからわざ／＼私に告白した！

或る精神病學者は精神病の徴候の一つとして、法外に動物を可愛がる事を擧げてゐる、そしてさういふ人間に限つて必ず人間に對しては冷刻無情を極めてゐるのだから面白

い！

この女は一定の兎の爲めに大騒ぎをして神様にお祈りを上げるかと思へば、一人の人間を冷笑を以て迫害して何とも思つてゐない！この現象は何と解釋したものだらう？我々が田舎で過した最終の日曜日に、マリアは私を小側に呼んで、先づ私の寛容の徳と善良な性質に訴へて散々おべつかを使つた揚句、あのアマリエ嬢はあまり懐が温かでないらしいからどうぞ下宿料を免じてやつてくれ、と哀願した。

私は一言の異議もなしに承諾した、そして私は初めからこの提議を豫期してゐたのだ、この奸計を見破つてゐたのだ、その避く可からざる事を承知してゐたのだ、といふ事も一言も口に出しては云はなかつた。然るに彼女は、何時も喧嘩腰になつてゐるので、私が一言の反對も唱へないのに、おしまひにかう一本釘をさした。

「けれど、若しさうしなけりやならないと仰しやるなら、あたしが拂ひますわ！」

それもいゝだらう！けれどあの女の爲めに私が味はされた色々の煩しさや腹立たしさをも彼女は金で支拂ふ事が出来るのだらうか？……無論、夫婦の仲では物事をそんなに几帳面に取れるものではないのだ！

五

新年になると、當時世界中一般的な經濟界の恐慌が老國の信用を脅して、私がマリアから借りてゐた例の株券の銀行が破産した。私の負債の通告が發せられ、私は保證した金額を現金で支拂ふ事を命ぜられた。それは私にとつて大打撃だ。然し幸ひにも、散々面倒な交渉を重ねた揚句、債權者等との間に話が付いて、一ヶ年だけの猶豫をして貰ふ事になつた。

それは實に恐しい一年、私の一生中で恐らく最も恐しい一年であつた。

すつたもんだがやゝ納まると、私は出来るだけ早くこの窮境から脱する工夫をしようと試みた。

圖書館の勤務の他に私は大規模な、現代風の風俗小説の起稿に着手し、各種の新聞や雜誌に論文を寄稿し、おまけに私のあの科學的研究の仕事をも完成した。マリアは劇場との契約期限が切れたが、もう一年間のお情を頂戴した、然しその給金は千四百フランに引下げられた。それで經濟界の恐慌が始まつてからは、私の方が彼女よりも經濟的にも優勢の地位を占めることになつた。

その爲めに一層みじめな氣分に陥つた彼女は、一切のも

しやくしやをみんな私の頭の上へ打ちまけるのだ。そして二人の勢力が再び平均するやうに、彼女はひたすらその獨立を計つて、新たに借金を企てた、この試みは私に對抗しようといふ彼女の意地から出たものである事は云ふまでもない。たとひ善意の目的から出たものでも、思慮のないやり方の爲めに、彼女は自分自身を救ひ私の負擔を軽くしようと努めながら、却つて私を害するやうな結果になるのだ。

そして私は、彼女の善意はどれ程尊重しても、さうした輕はずみには非難を加へないわけに行かないのだ。彼女の氣むづかしい性質は遂に陰險な手段に傾くやうになつた。そして或る新しい事件が發生して、彼女の精神状態の一面が暴露したので、私は随分心配になつた。

劇場で假裝舞踏があつた時に、私は男の假裝だけはやらないやうにと彼女にきつぱり約束をさせた。私は何の故とも説明し難い理由からそれを追つたので、彼女は堅く私に誓ひを立て、約束したのだ。ところが翌朝になると、彼女は燕尾服姿で舞踏會に出て、男達と晚餐を共にしたといふ噂を私は聞き込んだ。

何よりも彼女のこの嘘吐きに私は腹を立てた。殊にその晚餐の事を考へると私の神經は殆ど堪へ難い程にいら立つた。

「何ですつて？」と彼女は私の非難に對して答へる。「あたしにはそれだけの自由もないんですか？」

「ないよ、お前は結婚してゐるんだからね！お前が僕の苗字を名告つてゐる以上、我々の間には相互的の責任といふ物がなければならん筈だ。お前の名前が傷けられれば、僕の名前も同時に傷けられる事になるんだ——然もお前よりも一層ひどくだ！」

「ぢやあ、あたしにはまるで自由といふ物が無いのね？」
「ないよ、この社會に生きてゐる人間は誰だつて自由ぢやないんだ、この社會ではどんな人間でも皆その運命は隣人の運命と結び付けられてゐるんだからね。若し僕が女達と一緒に晚餐に行つたら、お前は何と云ふね？」

彼女はそれでもまだ自分の欲するまゝに行動する自由を有つと云ひ張る、彼女の意のままに私の名譽をさへ毀損するの自由、即ち絶對の自由を有すると主張する！この亂暴な女は、自由といふものは他人の名譽も幸福も足下に蹂躪して憚らぬ暴君の威力の事だ、と思つてゐるらしい！

x x x x x

最初は口論、その次には涙に移つて、おしまひはヒステリーの發作で終るこの場面に引續いて、私を尙一層不安な

らしめる第二の場面が起つた。私はまだ性生活の秘密には十分に通じてゐなかつたので、その變態的な場合に遭遇すると、ひどく氣味が悪くなるのだ。

或る晩、私の部屋の隣室で女中がマリアのベッドの支度をしてゐる際に、半ば抑へ付けられたやうな叫聲と、擦られてゐるらしい、息詰るやうな忍び笑ひを聞き付けた。私は突然云ひやうのない恐怖と不安に襲はれた、私はもう少しで怒鳴り出すところであつた。私は烈しい勢ひで扉を蹴開いた——とマリアが胸をはだけた女中の襟に手を突込んで、眞珠色に光る乳房に唇を押し付けようとしてゐる。

「何をしてゐるんだ？ みじめな奴等！」と私は雷のやうな聲で怒鳴つた。「お前達は氣でも狂つたのか？」

「あたし一寸この人にかからかつて見たばかりよ！」とマリアは恥かしげもなくかう答へた。「それがあなたにどうかしたといふの？」

「さうとも、僕にはだまつて見ちや居れない。此方へ来てくれ！」

そして彼女と二人切りのところで、私は彼女がどういふ間違つた事をやつてゐるのかを説明してやつた。

彼女は無遠慮に、そんな事はみんなあなたの『小汚い空想』から生れるのだと云つて私を罵り、あなたはどんな場

合にも醜惡な物だけを嗅ぎ付けて變に氣を廻す腐敗した人間だと云つて退けた。

悪い事をしてゐる現場の女を捕へる事は危険である。女は自分の事をば棚に上げて、屹度見付けた人に罵詈謗を逞しくするものだ。

この押問答の間に私はふと思ひ出して、彼女がいつか私に自白した事がある、彼女の従妹の美しいマティルデに對する彼女の狂氣じみた愛の事を彼女に云つて見た。すると彼女は世にもあどけない顔をして私に答へた——あたしは自分でもあの愛の熱烈さにはびつくりした位である、女が女にあれ程夢中に惚れ込む事が出来るものだらうとは思はなかつた、と……

この無邪氣な告白にやゝ安堵して私はふと思ひ出した——さう云へばマリアは、いつかも私の義弟の家に大勢集つた時に、従妹に對する彼女の愛情を包みかくしなくざつくばらんにみんなに打ち明けた事があつた、そして顔を赧らめもしなければ、それが一つの變態的傾向だといふ事さへも自覺してゐない様子であつた。

然し私は機嫌を損じた。さうした事柄といふものは、最初は多分何の罪もないところから出發するのであらうが、間もなく一種の罪惡になつて、悲む可き結果を惹き起すや

うな事にもならうから、そんな風の事はつゝしんだ方がいいだらうと、なる可く彼女の感情を害しないやうに云つて聞かせた。

彼女は何やらわけの分らぬ屁理窟をぶつゝ並べ立て、私をまるで阿呆あしらひにする——彼女は何時でも私を愚なる者の中の最も愚なるものゝ如くに取扱つてゐるのだが——そして結論として、あなたは嘘を吐いてゐるのだ、と主張する。

法律はこの種の罪を罰するに體刑を以てする、といふことを説明してやつたところで、彼女にかゝつては何にならう？ 又、他人の欲望を挑發するやうなさうした接觸は、醫書では罪惡の一つとして數へられてゐる、といふやうな事を彼女に信じさせようとかゝつたつて、何の役に立つだらう？

私は——この私こそは實は仕方のない道樂者なのだらう、一切のさうした罪惡に通曉してゐるのだから！ そして彼女に至つては、何物と雖もその無邪氣な戯れから彼女を引離す事が出来ないのだ。

彼女は恐らく無意識の犯罪人の一人なのだらう、そして、多分自分の側で監視するよりも、婦人懲治監にでも監禁して置いた方がいゝ人間なのだらう。

六

晩春の頃彼女は一人の新しい女の友達を家に引張つて來た。それは彼女の美しい女優仲間の一人で、三十歳位の女であつた。マリアと同じく、矢張り首を緘られさうな不安に怯えてゐる連中の一人で、私にも同情す可き女のやうに思はれた。曾てはその美貌をちやほやされた人氣女優が今は見るかげもなく凋落して路傍に打ち棄てられてゐるのを見ると、私も氣の毒になつた。しかしどうしてさういふ事になつたものか、その理由は分らなかつた、然し恐らくは、今度或る有名な女優の娘が同じ舞臺に立つ事になつたのが、主なる原因でもあらう！ 常に一つの勝利は無數の失敗者を犠牲として出すものだから。

それにもかゝらず、私はこの女にあまり好感を抱く事が出来なかつた、彼女は常に何かしら獲物を狙ひ廻してゐるやうな、油斷のならない面魂を持つてゐた。そして私の鋭い目をくまます爲めに、いやに私に媚びへつらひ、私を手に入れてしまはうとかゝつてゐるらしかつた。

無論マリアのこの新しい友達と舊い方の友達との間には時々嫉妬騒ぎが持ち上つた、そして一方は必死に他を陥れようとかゝつてゐたが、私は勿論どちらの云ひ分にも耳を

傾けようとはしなかつた。

夏も終りに近付いた頃、マリアに又も妊娠の徴候が現れた、それは最早疑ふ餘地がなかつた。出産は私の計算に依ると、二月中になるらしい。それは正に晴天の霹靂であつた。我々はその期限が経過してしまはないうちに、帆を張り切つて安全な港へ乗り入るやうに努めるより他なかつた。

前述の長篇小説は十一月に出た。成功は素晴らしいものであつた。金かうんと入つた、そして我々は救はれた。(ストリリの有名な長篇自傳小説「赤い部屋」(一八七九年))

遂に目的を遂げて決勝點に到達し、やうやく自分の實力を認められ、一躍大家として喝采を博するやうになつた私は、最も暗い憂鬱の幾年の後に、初めて救はれたやうにほつと息を吐いた、そして我々は今や子供の誕生をこれ迄にない喜びを以てひたすらに待ち設けた。我々はまだ生れないうちから名前を付けて、その子にクリスマスの贈物もした。私の妻はその妊娠を誇り、我々の友達は、坊ちゃんは如何ですか? と今から挨拶をする習慣になつてしまつた——もう生れてゐるかの如くに。

× × × × ×

夏になつた。私は二三ヶ月間の休暇を貰つて、この夏を、ストックホルム多島海の端にある一つの緑こまやかな島で、私の家族と水入らずの生活をして過さうと思つてゐた。

その頃、私は先年以來従事してゐた私の科學的研究をとうとう仕上げた。この論文は佛蘭西學士院の文藝部によつて朗讀せられるの名譽を荷つた。その上に尙ほ私は外國の二三の學會の會員に推薦せられ、且つ露西亞の帝國地學協會からは賞牌を授與せられた。

三十歳にして初めて私は文學及び科學の領域に於て優秀の地位を獲得し、光榮ある未來が私の目の前に展げた。これ等の戦利品をマリアの足下に捧げ得る事は私の大きな幸福であつた。然し彼女は二人の間の平衡がすっかり破れてしまつたので、私に對して快くない。それで私は、自分よりも遙に高い地位に在る夫に從つてゐるといふ屈辱の感じを彼女からなくしてやる爲めに、自分の身をわざと少しづつ卑くして見せた。私は丁度あのお伽嚙の巨人のやうに私の鬘を引張つてふざける事を彼女に許した、すると彼女は直ぐに付け上つてそれを悪用し始める。彼女は召使の者や、訪ねて来る友達や、殊に彼女の女友達の面前で私を見くびつ

自分の名前を擧げる事はこれでもう十分なので、私は今度マリアの名譽をも再び回復し、彼女のしくじつた生涯をどうにかしてやりたいといふ希望を抱くやうになつた。さうした目的で私は、王室劇場に上演すべき四幕物を書く計畫を立てた。その中には、屹度見物の喝采を博するに相違ないやうな一つの役がマリアの柄にはめて書いてあるのだ。

恰もマリアの出産の當日、その戯曲は首尾よく採用されて、私の豫期通りにその儲け役はマリアに振られたといふ事を私は聞いた。(中世紀の瑞典を舞臺とする喜劇「組」(合の秘密)(一八七九—八〇年))
何も彼も上々首尾にうまく行つた、そして私の両親との間の一旦斷たれた絆も、この子供の出生といふことをきつかけとして、ふたゝびもとの如くに、結び付けられるに至つた。

とうとう結構な時代が、私の生涯の春がめぐつて來たのだ。家にはパンあり、數本の葡萄酒さへも貯へてある。母親は敬せられ、愛せられて、再び人生の喜びを見出し、一旦衰へた彼女の容色も新たに又美しく花咲いた。死んだあの子には親として、非常にすまない事をしたからといふので、その代りにもこの子に對しては二倍の心づかひが費されたのであつた。

て見せる事を好んだ。そんな場合には、彼女はいやに尊大にすまし込み、私を踏臺にして自分を高く大きく見せかけようと努めて、私がわざと自分を卑下すればする程、彼女は私をないがしろにするのだ。私は、自分の名聲の全部は悉く彼女のおかげであるといふ誤れる考へを彼女に抱かせるやうにした——然し實は、彼女は私のこの名聲の眞意義を理解する事も出來ず、却つて輕蔑してゐるらしくさへ見えるのだ。そして私自身も妻の尻に敷かれる事を以てむしろ快としてゐる。私は美しい女の亭主であるといふ事だけで満足する、すると彼女はとうとう私の天才を手中に握つてゐる人間であるかの如くに信ずる。その事は日常生活の一すした事の中にも現れて行く。例へば、水泳の上手な私が彼女にそれを教へてやる、その時私は彼女に元氣を付けてやる爲めに、わざと臆病者の眞似をして見せる、すると彼女はそれを見ては手を拍つて嘲笑ひ、自分の勇敢な行動を大勢の前で誇らかに物語つて愉快がる——そしてさうされる事が又直ちに私にとつてもこの上ない樂みになるのであつた。

× × × × ×

その間にも時は過ぎて行く。私は妻なる母を崇拜しつ

つ、自分を三十歳の女と結び付ける絆に心を煩さない。危険なる時期が始まる、私を不安ならしめるやうな徴候が早くも見え始めて来た、それはその瞬間だけに就いて云へば多分それ程重大なものではないだらうけれど、然し將來の禍根をその中に藏してゐるといふ點で輕視する事が出来なかつた。

出産後精神の不調和に加ふるに肉體の不和合が始まつて抱擁は厭はしくなつた。彼女は官能的に刺戟される時には、まるで無恥な淫婦のやうな態度に出た。彼女は私に嫉妬を起させて喜んだ、或は彼女は、多分締りのない情慾に壓迫されるからであらう、殆ど不安ならしめる程に過度な放縱に陥る事があつた。

或る朝早く我々は一人の若い漁師を連れて、帆を張つたボートに乗つて、多島海から大洋の方へと乗り出した。私は梶と大帆とを見、その若者は前檣の帆を守つた。彼の近くに私の妻が坐つてゐる。風がぱつたりと風いで、長い沈黙が船の中を領した。と私は氣が付いた、その若い漁師は帽子の蔭から盗むやうに目を擧げて、妻が足を投げ出してゐるに相違ない方角へ怪しげな視線を向けてゐる。……彼女の足？……多分彼女は靴下をはいた脛をも見せてゐるのだらう——私のゐる處からは見えないけれど。今度は私

は妻の方を見た。彼女の眼は情熱に燃えつゝ若者の體を孔の明く程見詰めてゐる。私は何か不快な夢からでも逃れようとするかの如くに、突然體を動かして、自分が此處にゐる事を彼女に思ひ出させた。マリアはやうやくその神經を支配して、視線を若者の大きな靴の尖端に落し、不器用な問ひを發してこの間の悪さから脱れようとした——
「そんな靴はどの位ゐるものでせうね？」
ふむ、かういふ馬鹿氣切つた事は何と解釋したものだらう？——私は自分の心に問うて見た。
彼女をさうした肉感的な聯想から引離す爲めに、私は口實を設けて、席をとり換へさせた。

私はこのなげかばしい場面をなるべく早く忘れてしまはうと努力し、屹度自分の目の迷ひだらうと無理にも信じようとなす——然し、彼女が矢張り曾てあれと同じ火のやうなまなざしで私を見詰めて、着物の下にかくれてゐる私の體の輪廓までも探らうとするやうな眼付を見せた事があつた——その場面が意地悪く私の目に浮んで來るのであつた。

X X X X X

私の疑惑は一週間後に又も或る出來事の爲めに呼び起さ

れた、それはこの反自然的な女の裡に、どうかして私の渴仰して止まぬ『母性』を探し求めようとする私の一切の希望を一擧に粉碎してしまつた出來事であつた。

或る時私の友達の一人が一晝夜の間私の家に滞在した事があつた。するとその男はマリアに秋波を送つて、御機嫌を取つた。彼女は彼の騎士的奉仕に酬む爲めに不愉快極まる媚女の言行を以て男を嬉しがらせた。大分おそくなつてから我々はおやすみを云つて別れた。マリアも寢室に退いたらしかつた。

それから三十分の後、私は露臺の方に人聲を聞いた。急いで出て行つて見ると、妻と友達とがコニキクの襪を間に置いて談笑してゐるではないか。私はわざとちつとも厭な顔を見せなかつた。然し翌朝になつてから、夫を人の物笑ひにして憚らぬやうなこのふしだらを責めて彼女を強く叱り付けた。

すると彼女は私の言を一笑に附し、私をあくまで偏狭な人間と罵り、私の想像を無稽な、汚らはしいものだと言つて片付けてしまつた……要するに、彼女の取つて置ききの十八番の議論を並べ立て、私を煙に捲いてしまはうとするのだ。私も遂に怒り出す、彼女は例の通りに一寸したヒステリ

1的發作の場面を實演する、然しそれがあんまりうまいので、後には私の方から折れて出て、悪い事を云つて濟まなかつた、と詫びる！私は敢て悪かつたといふ言葉を云つた——正に叱責すべき行爲を叱責したといふだけで！
彼女の最後の言葉が私に止めを刺してしまふ！
「そんならあたしもう一遍離婚の苦みを嘗めたいと思つてると信じていらつしやるの？」

私は最近に於て經驗したあらゆる苦痛を思ひ浮べながら、欺かれたる夫の心安さを以て寢入る。
媚女といふのは何だらう？……自分の方から持ちかける女だ。そして媚女の本性と云ふのはこの持ちかける事にあるのだ。決してその他の何物でもありはしない！
そして嫉妬とは？……自分の所有する最も貴重な物を失ひさうになる危懼の念である！……嫉妬家とは？……自分の所有する最も貴重な物を失ふまいとする嗤ふ可き理由から、嗤ふ可き者となる人間の謂である！

七

私は成功から成功へと急ぐ。負債は全部償却してしまつて、金がどん／＼降つて來た。然し、私はこの夥しい収入の大部分を家政の爲めに注ぎ込むのだが、それでも一家の

經濟は整理せられない。家計簿を預つて現金を取扱つてゐるマリアは、幾ら與へても金、金と際限もなく要求する。それに引續いて不快な場面も家庭内に持ち上り勝ちなのであつた。

彼女が將來女優として舞臺に立つ事は全く絶望になつた。そしてその結果の責任は残らず云ふ迄もなく私の肩に落ちて来るのだ。あなたが悪いんです！……わたしが若し結婚さへしてゐなかつたら！——さう云つて彼女は愚痴をこぼし抜く。私が彼女にはめて書いたあの脚本の事なんぞはけろりと忘れられてしまつた、實際彼女はその役を何の曲折もなく亂暴にやつて退けて、あつたら儲け役を臺なしにしてしまつたのであつた。

丁度その頃の事だ、諾威の有名な フリュニーストキヤ 男が書いた戯曲が評判になつて、所謂『婦人問題』と稱する怪しげな駄法螺にみんなが夢中になつて騒ぎ出したのは。その當時、癡てに乗り易い、だらしない人間共は、女とさへ見れば誰彼の差別なく男に壓制せられたる奴隷としてその解放を叫ぶといふ馬鹿らしくも滑稽な妄想にかゝつてしまつた。私は無論こんな不合理な空騒ぎに捲き込まれはしなかつたので、それ以來、私は殆ど生涯の間『女嫌ひ』といふ有難い綽名を頂戴する事になつた！ （「諾威の青髭男」は無倫イブセンの事だ、彼の有名な問題劇人形の家の出

× × × × ×

に拘らず、諸君の忠實な友たるこの私の言葉を信じ給へ——私は今如何なる難治のヒステリーをも根治する貴重秘法を傳授するのだ……大事にして取つて置き給へ、何時か一度は役に立つ時があるに相違ないから！

この日より以後私の最後の運命は女の手に握られてしまつた。彼女は私を嫌ひ始めた、女の奸計を易々と見破る恐る可き奴だから、といふので彼等は私を殺してしまはうとするのだ。彼女とその同性の仲間共は、精神的にも物質的にも私を滅してしまふ事を宣言した。そして我が復讐の女神は、私を斷末魔に至るまで苦め抜かうといふ忘恩的な、困難な任務を引受けたのだ。

先づ手初めに彼女は私の友達を間借り人として引入れ、我々のアパートメントの家具付きの室に住はせる事にした。私は烈しくそれに反對したけれど無駄であつた。マリアはそれにも飽き足らずに、彼女を我々の食卓で一緒に食事をさせる事にしようと言ふ云ひ出した、然しそれだけは私は斷乎として斥けた。私の抗議と豫防策との甲斐もなく、私は到る處でその美しい友達と袖すり合せた、遂にはおれは二重結婚の生活をやつてゐるんじゃないか知ら、とさへ

たのは一八七八年

或る時例の争論で、私はマリアに向つて彼女の行爲の真相を無遠慮に云つてやつたので、非常なヒステリーの發作を惹き起してしまつた。近頃神經療法といふ十九世紀の最大発見があつた。然しそれは他のすべての大発見と等しく、何といふ簡單至極なものだらう！

病人が烈しく吼え狂つてゐる最中に、私は水の一杯入つた罐を取つて、びつくりするやうな聲で咒文を唱へるのだ——

「起て、起たないとこれを打つかけるぞ！」

叫喚はびたりと止んで、飾り氣のない嘆賞と、物やはらかな感謝と、死の如き憎惡とに充ちた眸が、愛する女の目から迸るのである。

最初私は恐れた。然し一旦目醒めたる私の男性はこの獲物をむざ／＼逃しはしない。……再び私は罐を振り上げて叫ぶ——

「ぎざな眞似は止め、水を打つかけるぞ！」

彼女は體を起す、然しもう惡者、ならず者、嘔吐き……等の惡口を私に浴せ掛けるのみである。——即ち私の療法が全く效を奏した印なのだ。

苟も世の夫たる人々よ、妻に欺かれたる夫であると否と思つた位であつた。そして私が妻と二人切りで過したいと思ふやうな晩にも私は詰らなく自分の部屋に獨りぼつちでゐなければならなかつた。何故なればマリアはその友達の部屋に閉ぢ籠つて出て來ないのだから。其處で二人は私の費用で——私のシガーを吹かしたり、私のボンスを飲んだりして楽しんでゐるのだ。私は遂にその友達を嫌ひ出した、そして私は自分の感情を包み隠してゐる事が出来なかつたから——或は十分には出来なかつたから、私は『あの可哀想な子』に對する禮を缺くといふので、あらゆる機會にマリアの輕蔑を招いた。

この女は斯くして私の妻をその夫と子供とから奪ひ去つてしまつたのみならず——子供は今や事實上四十五歳位の或る惡婆の手に渡されてしまつた——それに飽き足らずして今度は私の料理女をも手なづけた、そして三人一緒に集つては私のビールで酔拂つてゐるのだ。

料理女は酔拂つて爐端にぐう／＼寝込んでしまつて、料理の事なんぞはとんとかまはうともしない、そしてビールの消費は一ヶ月五百本といふやうな殆ど信じられない程の量に上るのだ！

あの美しい友は、私を恰好の餌食として選んだ『人喰ひ女』に過ぎなかつたのだ。

或る日マリアは一枚のマンテルを買ひたいと云つて私に見せた。私は型も色もあまり気に入らなかつたので、他のを選んだらうと云つた。するとその場に例の女達が居合せて、自分がそれを取つて置くと云つた、そして私はそんな事はすっかり忘れてゐた。すると二週間程経てから私は、妻が買つたといふマンテルの勘定書を突付けられた。私はこの事件を吟味してやうやくその真相が分つた。——マリアは、その女にそのかされて、女優達の社會で流行つてゐるといふ一種の詐偽手段を用ゐて、私から巧に搾り取つたのであつた。

そんな危険な女とは斷然絶交しろとマリアに要求して私は、例の如くに彼等の怒りを一身に引受けなければならなかつた……

だん／＼悪くなつて行くばかりだ！

しばらく経つてから私の妻が、如何にも素直な女房といふ風に、ぐつと下手に出て、哀訴するやうに私の前にやつて来て、『可哀想な子』が金を借りる爲めに亡父の友達を訪ねるさうだから、事情をよく話してやる爲めに、一緒に行く事を許してくれと願つた。その願ひは私には何とはなしに變に思はれた、その女の悪い評判を思ふと、何かしらそこに危い陥穽がひそんでゐるやうな感じがした。即ちその

女は幾人かの年取つた男達と關係してゐるといふ評判があるのだ。それを思ふと私ははつとして、私の妻を將に深淵に突き落さんとしてゐるこの迷ひから早く目をさましてくれと、彼女の何の罪もない子供の名に於て懇願した。……その際彼女の唯一の答へは、例に依つて例の如ききまり文句の繰返してあつた。——「又相變らずそんないやらしい想像ばかりして……」

何も彼もだん／＼悪くなつて行くばかりだ！

美しい友達は或る時朝餐の催しをした、有名な俳優を招いて、この機會に於て彼女に結婚の申込みをしなければならぬやうにうまく持ち掛けてやらうといふ魂膽である。私は新たな驚きに打たれて、深い睡りから呼び覺された。

シャンペンが抜かれて、女達は例の如くに酔拂つた。

マリアは安樂椅子にぐつたり身を沈めて、その膝には例の美しい友達が乗つてゐて彼女の唇に接吻をする。この異常な光景に惹き付けられて、その有名な役者が一人の仲間を呼んで、恰も罪状を示さうとするものゝやうに、この奇妙な二人を指した——

「どうだい、見たかね？」

それは疑ひもなく世間に専らな或る風評を暗に諷刺したもので、この冗談の蔭には隠れた意味が潜んでゐるのであ

る。

もうかうなつてしまつては、何としたものだらう？

家へ歸ると私はマリアにむかつて、どうぞあんな氣まぐれな盲動を止めて、子供の爲めに、その名譽を臺なしにしてしまふ目に餘るやうな事だけはどうぞ慎んでくれと願ふやうに云つた。すると彼女は包まずに自白した——美しい娘を見てその乳房に接吻する事はわたしにとつて無上の快樂である、だからわたしはあの女達だけをそんな風にするんぢやない、劇場の樂屋に於て、わたしは他の女優達にもこれと同様の寵遇を與へてゐる。わたしは決してそれを止めようとは思はない。何故なれば、それはほんの無邪氣な戯れに過ぎないのだ、只『あなたのいやらしい想像』に於てのみ猥褻に見えるのだ……

彼女の行爲の性質をよく呑み込ませる事は、到底不可能である。この場合、私には唯一の方法あるのみであつた。そしてそれは——彼女の母性的本能を再び甦らせる爲めに、新たに又妊娠させる事であつた。

彼女はそれで烈しい怒りに陥つた、然し體がさういふ状態になつたので、數ヶ月間は止むを得ず、家庭の人となつてゐなければならなかつた。

× × × × ×

奔梅の時期が過ぎると、彼女はこれまでにはなかつた新しい一面を現し始めた。これまでのやうな同性に對する變態的な愛は恐るべき結果を來すかも知れないといふ事が不安になつたので、今度は男性に對して媚女的態度をとるやうになつたものか、それとも又彼女の女性的本能が再び目覺めた爲めか——今度は彼女は男達に向つて一生懸命に秋波を送り始めたのだ、然しそのやり方があまりにおほつびらで、鐵面皮過ぎるので、私は却つてほんとうの嫉妬を起すには至らない程であつた。

一定の職もなく、仕事もなく、その時の氣分まかせに獨裁的に振舞ふやうになつた彼女は、今や私に對して生死を賭する血戰を宣した。

或る日彼女は私に、女中は二人置くよりも三人にした方が經濟的であるといふ事を納得させようとした！ 私はそんな狂人と云ひ合つてゐる閑がないので、彼女の腕を搦んで扉の外へ突き出した。

彼女は斷然私に復讐を誓つた。そして全く不必要な第三の女中を雇ひ入れた。それでも家の仕事は何一つろくに出来ない事になつてしまつた。何も彼もめちやくちやにな

つた。三人の女中共は朝から晩まで喧嘩したり、ビールに酔
拂つたり、それが彼等の仕事なのだ、そして主人の物を費
つて彼等の情夫達に素晴らしい御馳走を振舞ふのだ。

私の結婚生活の幸福をいよ／＼完全ならしめる爲めに、
一人の子供が病氣に罹つた。それで私は遂に自分の家の中
に五人の召使を見るの喜びを見るやうになつた。醫者は二
人來た。一ヶ月の後に五百フランの不足を生じた。私はも
う何でもやつて來いといふ氣になつて、自分の精力を二倍
にして働いた、然し私の神經も流石に追々に衰へて行くの
を私は感じた。

のみならず彼女は、私が彼女の例の曖昧極まる持參金を
勝手に浪費してしまつたといふ非難を相變らず私に浴せか
ける。そしてコペンハーゲンにゐる一人の叔母に月々仕送
りをしろと私に強ひる。この叔母なる者は『彼女の財産』を
蕩盡したといふ罪を私に被せ、まるで、相手にする事も出
來ないやうな馬鹿げ切つた理窟で私をごまかさうとかゝる
——即ち、マリアの母が臨終に際して、マリアとその叔母
とでその遺産を分配するやうにと遺言をした、といふので
ある！ 私は何の事かまるでわけが分らなかつた。然しそ
の理由はともかくとして、事實は斯ういふ事になつた——
懶け者といふだけで何の取柄もないが只慾の皮だけは十分

に突張つたこの叔母なる人間が私の厄介ものになる事にな
つた、おまけにその遺産から生ずる『財産』なる物は實に、
單に空想の上のみ存在する代物に過ぎないのだ。私はそ
れにもかゝらず妻の意志に従つた、のみならず彼女のあ
の古い方の女友達——第一號の名稱を有つあの不可思議な
山師女の爲めに保證をさせられてしまつた。事茲に至
つては私は何も彼もすべてを一身に引き受けた、何となれ
ば私の愛妻は夫に對する寵愛を金で賣り付けるべきものと
思ふやうになつてしまつたのだ。單に彼女を抱擁する事を
許して貰ふ爲めに、私はありとあらゆる罪を残らず我が身
に引き受けた——彼女の持參金を無駄に費したといふ例の
罪も、彼女の叔母の財産を蕩盡したとかいふ罪も、結婚の爲
めに彼女の舞臺生活を臺なしにしてしまつたといふ罪も、
果ては彼女の健康を亡してしまつたといふ罪さへも、罪と
いふ程の罪は残らず自分の身に歸した。

斯くの如くにしてこの時以來、我々の結婚生活に於ては、
合法的な賣淫制度が勝利を得て、何も彼も賣り付けられる
事になつたのである。

私がすべてを悉く自分の罪として告白したその結果は、
彼女は私がしたといふ悪い行爲を丹念に蒐集して、それで
一つの傳説をでつち上げた。この作話はその後評判の善く

ない新聞や雑誌にも出たし、彼女のあらゆる友達に依つて
盛に廣く宣傳せられもした。

彼女は殆ど狂氣じみた憤怒に捉へられた。彼女はいいい
よ私の身を滅さうと覺悟を定めた。この年の年末に私は家
政の費用として一萬二千フランを出してやつた、それでも
足りないといふので私は本屋から前借りをしなければなら
なかつた。

私がこの驚くべき入費をこぼすと、彼女の答へは斯う
だ——

「そんならあなたは何故子供をこしらへて、あたしをいぢ
めるんです？ あなたと結婚する爲めにあたしどれだけの
地位を棄てなければならなかつたかと思ふと……」

然し私は彼女に對して一つの返答を持つてゐた——
「ねえお前、男爵夫人時代だつて、お前は三千フランと借金
だけしか貰つてゐなかつたぢやないか。僕はその三倍もお
前にやつてゐるよ、いや三倍よりもつと餘計な位だ！」

彼女はそれに對しては何にも云はない、彼女はたゞ私に
精進を守らせるばかりだ！ そして夜になると、私は自分
の方から折れて出て、彼女の欲するまゝに何も彼も與へて
しまふ。私は彼女の前に平伏する——はい、三千フランは
確に一萬フランの三倍でございます、……はい、私はひと

い男でございます……はい、私はけん坊でございます……
はい、私は確に美しい友でございます、渴仰する女——
特にその寢衣姿を渴仰して止まぬ女を踏み臺にして立身出
世をしたベル・アミに正に相違はございません……

その餘憤を洩らす爲めに彼女は、悪い男に虐げられ食物
にされた女を主題とする長篇小説の第一章を書き出した。
然るに一方私の書く物の方には、彼女は到る處に、愛すべ
き金髪の女として、聖母として、小さなママちゃんとして
描かれてゐる。私は飽かず彼女を禮讚する歌を繰返す、
神の恵みに依つて一詩人の苦しい生涯へ贈られたこの嘆賞
すべき女性の爲めに不滅の傳説をせつせと書き續ける。そ
れで、厭世的小説作家の天才として私を激賞して止まぬ批
評家達は、まるで悪魔のやうな彼女を、天使のやうな女だ
と誤信して讚美してゐるのであつた。

私は現實に於てこの狂女の不法な振舞に惱まされ、ば惱
まされる程、理想に於ては、まるで神聖なマリアのやうに
彼女の頭に輪光をめぐらして光り輝かす事にいよ／＼骨折
るのであつた！ 現實が私を壓迫すれば壓迫する程、我が
愛する女人の幻影はいよ／＼私の精神に光彩を與へるので
あつた……お、戀とは！

八

時々私はこんな疑ひを抱くやうになつて来た——この女はおれを嫌つて、第三の夫を手に入れる爲めにこのおれから逃げようといふ肚なんぢやないかしら、と。

私は時々、この女は一體情夫を持つてゐるのではないだらうか、といふ疑惑をさへ抱くやうになつた、何故なれば、底の知れない變な物の影がちらと彼女の表情に閃く事がある、そして私に對する彼女の冷淡なそぶりがこの疑惑をますます深めるのであつた。

突然烈しい嫉妬が爆發して我々の結婚生活を根柢からゆり動かした、そして恐しい地獄が我々の足元に口を開いた。彼女はふと體の具合が悪いと云ひ出した。最初彼女は何處かしらはつきりしない病氣を煩つてゐると云つた、それから後には脊骨だとか關節だとか又或る時は腰のあたりとか場所を云ふやうになつたが、然しはつきりした事は分らないのであつた。

私は大學時代の舊い友達で、家の子供を診て貰つてゐる醫者と呼んだ。彼は診察して背の筋肉にリユーマチスの結節があると斷言し、マッサージ療法をすゝめた、何の疑ひを挿むまでもない事なので、私はその治療に對しては一言の

反對も唱へなかつた、そしてマリアは毎日續けて治療を受ける事になつた。私はこの手術のやり方を詳しくは知らなかつたので、一向無頓着で自分の仕事にのみ没頭してゐた。そして治療は進んで行つた、私はそんな物に少しも注意を拂はうとはしない。妻の病氣といふのもあまり大した事ではないらしかつた、彼女は平日のやうに外出もすれば、劇場にも出かけるし、色々の會合へも顔を出す、しかも、そんな時には屹度一番しまひまで残つてゐるといふ風なので。或る晩友達が集つた時に、その一人が今は女醫がどうも少な過ぎると云つた。そして、知らない男の前で着物を脱ぐといふ事は婦人にとつて忍び難い不快に相違ないと主張し、マリアの方に向つてかう云つた——

「ねえ、さうぢやないでせうか？……随分苦痛でせうね？」

「まあ、醫者の前で！……」

その時初めて私はマッサージ療法なる物の真相が分つた、そして、早くから氣が付いてゐたマリアの殘忍な情慾の表情を見たばかりで、もう私の心臓は恐しい疑惑に締め付けられる。

彼女は、不品行な男として定評ある、あの放縱な獨身者の前で、着物を脱いだのだ！

そしてこのおれは、そんな事とはんと御存じなかつた

のだ。

二人切りになると、私は彼女に詳しい説明を要求した。

一向平氣な口調で彼女はその治療のやり方を説明した。

彼女は下裳は脱がない、然し肌衣は後にはねて、背中をすつかり露出するのだといふ。

「それでお前は恥かしいとも何とも思はないのかい？」

「あたし何故恥かしがらなけりやならないんです？」

「だつて僕にはよくはにかみやの風をして見せるからさ。」

二日後その醫者は子供の診察にやつて来た。私の室にゐて私は、醫者と妻との、怪しいといふより以上の話聲を洩れ聞いた。互に何やら笑ひあつたり、口に手をあてて怪しげな言葉をひそく囁いたりするのが聞える。

間もなく扉が開いて、二人はまだ變な微笑を唇に浮べたまゝで入つて来た。

どす黒い不安に押付けられて、私はへどもどしながら何か云ひ始めた、話はおしまひに婦人患者の事に移つて行つた。

「君は婦人の病氣といふ事に就いてはよく知つてゐるだらうね？」と私はドクトルに云つた。

マリアはちらと私を見た。その眼付と云つたら、まるで復讐の女神のそれである。私はその中に恐しい憎悪がひそ

んでゐるのを認めて、背筋をさつと戦慄が走つた。

醫者が歸ると、彼女は私に突つかゝつて来て、口汚く罵り始めた。

「賣女奴！」と私はとうとう彼女に面とむかつて云ひ放たなければならなかつた。

この言葉は私の意志に反して私の口から出てしまつた、それは何等の考慮をもめぐらす餘地もない直觀から迸つたありのままの表白であつたのだ。すると彼女に與へたこの侮辱は早速私の方に跳ね返つて来て、私の心を苦めた。私は子供達の顔を見るとたまらなくなつて、マリアの前に跪いて宥しを乞うた——跪いて、そして目には一杯の涙をたたへながら。

彼女はまるで復讐の女神であつた。二時間もかゝつて歎願と哀訴の百萬遍を繰返しても遂に私は彼女の心を柔げる事が出来なかつた。

これは確に私が悪かつたに相違ないんだからそれを贖ふ爲めに、また一つには追々ひどくなつて行く彼女の憎悪を免れる爲めに、氣保養かたぐひ芬蘭の方へ數週間の旅興行に彼女を出してやる事にした。

私はそれで劇場の支配人達と交渉を始め、契約を定めて、それに必要な金を調達してやつた。

彼女は故國への旅に出かけて、愛國的の勝利と家族的榮冠とを贏ち得た。

私は子供達と田舎に止まつてゐたが、そこで病氣になつた、私は死ぬかも知れないといふ氣がしたので、電報で彼女を呼び戻した。それは決して彼女の妨害にはならない筈であつた、興行は既に豫定通り済んだ後であつたのだから。

彼女が歸つて来て見ると、私はすっかりよくなつて起きてゐる。あなたは嘘の電報を打つて、折角親類達の處で無邪氣に楽しんでゐたわたしの邪魔をしたのだと云つて彼女は散々に私を責め立てる。

彼女の歸宅後、何とも説明の仕方がないその性格に又も新しい變化が起つた、そして私に新たな不安を注ぎ込んだ。

妻はちつとも躊躇せずに、私の抱擁に全く體を委せてしまふやうになつた。これは今迄にはない事であつた。

「あれ程恐れてゐた妊娠をもうこはがらなくなつたといふのは一體どういふわけだらう？」と私は自ら訊ねて見た、然しあまり深く突込んで詮索を進めようといふ氣にもなれない……

その翌朝とそれからの數日間といふもの、彼女はひたすら芬蘭の面白かつた事ばかりをしやべり續けた。ふと一瞬間回想に魂を奪はれたやうな状態で、彼女は汽船の中で知

合ひになつたといふ技師の話の話を始めた。それは極くさげた、話好きで近代的人間で、その男が彼女に説いて聞かせて、遂に信じ込ませたところに據ると、この世に人間の罪といふ物は全然存在しない、何も彼もその境遇と運命次第だ、といふのであつた。

「ほんとにさうだよ、然し我々の行爲といふものは矢張り決して結果なしに終るものぢやないんだからね。罪惡といふものは全然この世に存在しないといふ事も一應僕は承認するよ、人格的の神なるものが存在しない以上はね。然しながら我々は、我々が不正を犯したその人間に對しては矢張り責任を免れる事が出来ないだらう。よしや又、一步を譲つて罪惡といふ事を否定しても、少くとも犯罪といふものはあるわけだよ、法が存する限りはね。そしてたとひ罪惡といふ物の神學的の概念はなくなつても、復讐——といふよりもむしろ應報と云つたやうなものは残つてゐて、他人を傷けた者は年中不安に脅されてゐなければならぬ事になるだらう。」

彼女は何か思ひあたるらしく、俄にきつとなつた、然し強ひて私の言葉が分らなかつたやうな風を装つた。それから彼女は答へた——
「復讐なんか企らむのは劣等な人間に限りますよ！」

「それはさうかも知れない、然し世の中にその劣等な人間といふ奴がほんとに多いんだからね、他人の爲めに傷けられても仕返しをしようとするやうなお人好しだけに、うまく出會せばいゝけれど、それが一寸分らないんでね。」
「矢張り運命があたし達の行爲を支配してゐるのよ。」
「さうかも知れない、然し、復讐の刃を導く物も矢張りその運命なんだらう。」

……その月末に彼女は流産した。
それでもう私には、姦通が十分に證明せられたも同様であつた！そして、この瞬間より私の疑惑は増し、彼女の誹謗が私を不安ならしめるに従つて、それはますます苦しいものになつて行つた。

その頃から彼女は私に、自分は氣が變になつてゐるものと思ひ込ませようと骨を折り出した！彼女の説に依ると、私のかうした疑惑は皆腦の過勞から來るのだといふ事であつた。

今一度私は私の罪の宥しを彼女から受けた、そしてその和解の印に、専ら彼女の爲めに一つの重要な婦人の役割を有する戯曲を書いた、それはどうしても演り損じやうもない程に善い役に出來てゐるのだ。八月十七日に私はその原稿を贈呈書と一緒に彼女に渡した。かくしてその戯曲は全

く彼女の所有に移つた。彼女は自分でその役を演ずる限り、どこで上演してもいゝのであつた、それは實に二ヶ月間に亘る刻苦精勵の結果の贈物であつたのだ。
彼女はそれを落ちぶれたへぼ女優殿下の祭壇に捧げられた當然の生贄として一言の感謝の言葉もなく受け取つたのであつた。
（騎士ペンゲットの妻（三題）
（三幕の史劇（一八八二年））

X X X X X

家政の状態はますます悪く／＼となつて行くばかりであつた。どんな忠告でも、どんな干渉でも彼女にあつては侮辱として素氣なく跳ね付けられてしまふので、私は施すべき術がなかつた。女中共が寄つて集つて家の物をみんなさらつて行つても、私は只指をくはへて眺めてゐるばかりで、全然無能力であつた、彼等はそれをいゝ事にして貯への食物はどん／＼食ひあらしてしまふ、子供は打棄り放しにしてかまはない……

この家政の紊亂に加ふるに夫婦喧嘩だ。
妻が芬蘭旅行——その費用は勿論私が先にちやんと出してやつたのだが——から歸つて來た時に、二百フランの金を持つて來た、それは彼女が旅興行で得た収入なのだ。彼女が會計をやつてゐるので、私はこの金額を家計豫算の一

部として私の記憶に止めて置いた。然し豫定の期限がまだ経過しない中に、彼女は又も私から金を要求する。私はこの意外な催促に驚かされて、あの金はどうしてつかつたのかと穩かに訊ねて見た。彼女はそれを友達に貸したのだといふ、そして自分が働いて儲けた金は自分の勝手に始末する権利を法律に依つて有すると主張する。

「そんなら僕だつて矢張りさうだよ！」と私は彼女に云つてやつた。「家政經濟から金を引くつて事は、勝手に處分すべきぢやないよ。」

「だつて、女の場合は又それと違ふのよ！」

「それは只壓制せられた女の場合だけの事だらう！ 何も彼も一切亭主に支拂はせて平氣である『女奴隷』の場合だらう！ それが所謂『婦人解放』と稱する駄法螺の當然の歸結なんだ。」

エミリー・オージェが『フルシャンポー家の人々』に於て嫁資設定制度に就いて豫言した事が、今や實現せられたのだ。そして亭主は奴隷となつた。世の中には實際自分で自分の墓穴を一生懸命に掘つてゐる程に目がくらんでしまつた男達もあるのだ！ 馬鹿者共！ (オージェ(一八二〇—一八九九)は劇の代表者。フルシャンポー家の人々はその傑作の二に数へられる問題劇である。)

私の悲惨な結婚生活が斯くして徐々と巻物のやうにほど

け行きつゝある間に、私は自分の文名を利用して、馬鹿げた世人の偏見を根絶し、我等の社會を毒する古臭い迷信を覆してしまふ決心を堅めた。それで私は諷刺の書を一巻書いた。私はそれに依つて首都の最もひどい術學者共を目がけて、中性的の女共をも一緒にして、一掴みの石を投げ付けてやつたのだ。(「新帝國、暗殺と祝宴の時代からの諷刺的」)

世人は私を誹謗書作者として攻撃した。マリアも敢て人後に落ちるものではなかつた。彼女はこの一件で側杖を食ふのを免れる爲めに機敏にも私の敵と同盟した。夜も晝も彼女は淑女振りを發揮して、夫の愚痴をこぼして歩く——臆面もなくあんな破廉恥極まる物を書く人と一生連れ添うてゐなければならぬわたしはまあ何といふ不幸な女だらう！——さう云つて彼女は歎く。そして彼女は、この諷刺家は實は特色ある劇作家及び小説作家である事を忘れてゐるのだ。

彼女は神聖な殉教者氣どりで、その不幸な子供たちの未來に就いて心配する——妻の持參金を蕩盡し、その藝術家としての生涯を臺なしにしてしまひ、おまけに、妻を虐待するといふやうな父親の、あるまじき非行の結果は、やがて、直ちにその子供等の身にふりかゝることになるだらう……

矢張りその頃の事であるが、或る新聞が、『反響』欄に私が頭が變になつたといふ記事を掲げた。又金次第で何でも書く或る雑誌は、マリアとその子供達のいはゆる受難の全歴史を流布した。それにはこの愚昧な女の頭が考へ出し得る限りの一切の馬鹿げた捏造記事が、一つも洩さず麗々と掲げられてあつた。

彼女が遂に勝負に勝つた。私が敵の詭計に脆くも敗れてしまつたのを見ますや否や、彼女は徐ろに起ち上つて、遊蕩兒を歎く神聖な母親と云つた態度を裝ひ始めた。自分の夫以外の人間なら誰にでも愛嬌をふり撒きながら、彼女は私の友達を——ほんものにもせものもみんな引つくるめて私の周圍に呼び集めた。孤立して、まんまと吸血鬼の手中に落ちてしまつた私は、自分の身を守らうといふ望みを放棄してしまつた。我が子等の母親に向つて、渴仰して止まぬ女に向つて、手を擧げるといふやうな事が……

いや、そんな事は斷じて出来るものでない！ 私は觀念する。すると彼女は私に愛撫を浴せる——然しそれは家庭以外の場所に於てである、家の中では、私に對しては侮辱と輕蔑の他には何も無いのだ。過勞と懊惱とに私は疲れ果てた、そして病氣になつた。

頭痛、神経過敏、消化不良……醫者は胃カタルの診斷を下した。それは、實に、精神過勞から來た思ひがけない結果である！

X X X X X

この病氣は私が丁度外國旅行を決心した少し後に始まつた。私の妻に同情を寄せて止まない無数の仲間が張つた網から身を脱するには、この外國行きの他には方法がなかつたのだ。この不可思議な病氣の徴候は、私が或る舊い友達の化學實驗室を訪問した日の翌日に現れた。其處から私は、私に死を與へる事になる胃酸加里の罐を一本持つて來て、妻の道具の中へ鍵をかけて入れて置いたのだ。

全身痲痺して、まるで雷に撃たれたやうに私はソファーに倒れた、そしてそこらに遊んでゐる子供達を眺めながら、美しかつた過去を思ひ、今や目の前に迫る死を覺悟した。然し私は一言半句も書いたものを死後に残さうとはしない、何故なれば私は自分の死の原因やこの暗い疑惑を強ひて明るみに出さうとは思はないのだ。

私は一人の女の手に殺されて、然も甘んじてその罪を宥しながら死んで行かうと覺悟してしまつたのだ！

なたなんかよりも、強いのだと云ひながら。そして、遂に、彼女は私に飛びかゝつて来るやうな亂暴をも敢てするに至つた。然しその時は、流石に私もあまり兼ねて猛然と起ち上つた、そして彼女の両手を引摺んで、ソファーの上に投げ出した。

「どうだ、いくら弱つたつてお前よりは強いぞ！」

然し彼女はまだあやまらずにうろたへやうな顔をする、そして仕損じたのを怒つて、ぶつ／＼口小言を云ひながら出て行く。

争論といふ段になると、私は、女であり、おまけに女優である彼女の敵ではない。考へても見給へ、讀者諸君、一日朝から晩まで働き通さなければならぬ亭主の方は、その奸策を編み出す十二分の時間を持つてゐる女房にかなふ筈はない。とう／＼亭主は、四方八方から搦めつゝ、む網の中へまんまと生けどられて、手も足も出ないことになつてしまふ。

彼女はこんな風に、自分の非行をごまかす手段として、世間に向つてしきりに、私が性的に無能力な男であると云ひ觸らしてゐる。これに反して、私は名譽と羞恥と同情との爲めに、彼女の或る肉體的缺陷を暴露するに忍びなかつた——その缺陷といふのは、最初の出産が原因となり、そ

の後引續き三回の出産に依つて一層悪くなつたもので、解剖學的の術語では會陰破裂と稱するものである。結婚生活の祕密などを他人に口外する事は思ひもよらぬ私のやうな人間が、自分の妻のさうした缺陷を發かなければならぬやうになるとは！

「無能力！」抑へ難い熱い血に驅られて彼女の寵を哀願して、それを得る爲めには最も不愉快な讓歩をする事をも厭はなかつたのは常にこの私であつた。だから彼女は決して不平を云ふ必要はなかつた筈だ。然しまるで牝犬のやうな性質の彼女は、どんな事をして、享樂せずんば止まなかつた——自分の幸福と子供とを犠牲にしてさへも！

「戀愛に於ては」と女性の偉大なる通人なるナポレオンは云ふ。「逃げるが勝ちである！」然し嚴重に監視せられてゐる處には逃げ出す事さへ不可能である、そして死刑の宣告を受けた人間にとつても無論それは不可能である。

私はかうして心身を休めてゐる間に、腦の力も恢復した。勞作からやゝ解放せられた私の頭は一策を案出して、この惡逆及び彼女に目を眩まされてゐる連中に堅く守られてゐる要塞の圍みを突破しようと企てた。私は醫者に手紙を書いてやつて、私はどうも發狂しさうな豫感があるから、その豫防法として外國旅行をして見たらどうだらうと云つて

てくれる人のゐないところで、あなたと一緒にゐられな

いわ！

この女は情夫を持つてゐるに相違ない。それでなければ、私にその罪を發見せられるのを恐がつてゐるのだ。そんならおれは彼女を恐れさせてゐるのだな——まるで犬のやうに彼女の足下に躊躇つてゐるこのおれが、彼女の眞白い足を拜む爲めに泥の中を這ひずり廻つてゐるこのおれが、獅子の如き鬚を缺で刈り取らせて、馬の額髪にしてしまつたこのおれが、彼女の危険なる情夫共と戦ふ用意の爲めに、口髭を捻り上げてダブルカラーを着けてゐるこのおれが！……

彼女のこの畏怖が私にそれ以上の畏怖の念を與へ、同時に私の疑惑を新たにした。

「この女は、この國に残して行きたくない情夫があるのに相違ない、それとも又自分の審判を恐れてゐるのか……」

と私は思つた。

何時終るとも果てしない争論の後に、彼女は遂に、少くとも一ヶ年以内には歸國する事といふ約束を無理に私にさせてしまつた。

私はそれを約した。生きんとする意志が再び私に戻つて來た、そして出發後

見た。醫者の返答は私の提議に一致する、それで私は急いでマリアにこの診斷を話して聞かせた、それに對しては如何に彼女でも異議を申し立てるわけに行かないのだ——

「醫者がさうしろと云つてゐるのだ！」

この言葉は、自分のしたい事を醫者に頼んで云はせる時に、彼女がよく使つて來た慣用の文句である。

彼女はそれを聞くと顔色を變へた。

「あたし自分の國を離れるのはいやです。」

「自分の國？——それは芬蘭ぢやないか！ それに、瑞典にゐたつて何處にゐたつてどうせ同じことぢやないか——此處にはお前の親類もなく友達もなく劇場もないんだもの。」

「それでもあたし行きたくないわ！」

「何故さ？」

一寸ためらつた後、彼女は續けた——

「あたし何だかあなたが恐いんですもの！ あなたとつた二人切りになるのはいやだわ！」

「お前は自分がしつかり手綱を握つて抑へてゐる仔羊をそんなに恐がるのかい？ そんな言草はほんとうの理由ぢやないだらう。」

「あなたは全くひどい人なんですもの、あたし自分を護つ

の冬に出版される筈の一卷の詩集を完成する爲めに仕事にかゝつた。

そしてこの盛夏の頃、私は新たなる力を恢復して歌つた——私は特に我が渴仰する婦人を歌つた、彼女の青いヴェールは我々の初めて相見た日にその麥藁帽に翻つて、その後嵐の海に乗り出す毎に必ずマストに高くそれを掲げた、あの婦人を歌つた。(附録第二の中)
或る晩私は小人数の集りでこの詩を友達に讀んで聞かせた。マリヤは敬虔な面持をして耳を傾けてゐたが、朗讀が終ると、彼女は泣き出した、そして起ち上つて私の額に接吻した。

さうした場合には勝れた女優である彼女は、私の友達の目をまんまと欺いたのである。するとこの單純な男はそれ以來私を、かくも愛すべき妻を恵まれてゐるにも拘らず、嫉妬騒ぎなんかする馬鹿者だと思ひ込んでしまつた!

「君、細君は君を愛してるよ!」とこの若い男は私に云つた!

そして四年後になつてもこの男は、まだこの場面を私の妻の貞操を證明する最も確な事實として記憶してゐた。

「僕は誓つてもいゝが、少くともあの瞬間だけはあの人は本氣だつたんだよ!」と彼は繰返してゐる。

振つて、早速それを私に密告したものだ。

それは全然身に覚えのない濡衣だといふ事を證明するのにマリヤはたつた三つしか文句が要らなかつた、そして私は以後その婦人に家の敷居を跨がせなかつた、その爲めに私はその學者との友誼を斷たれ、お蔭で大切な友人を一人永久に失ふ事になつてしまつたけれど、それも止むを得なかつた。

私はその女がマリヤを罵るに用ゐたその「墮落」といふ言葉の意味を追究して、彼女の非行を何處までも詮索しようとする程の好奇心は持てなかつたが、然しその言葉が血の滲み出してゐる私の肉に一本の刺を残した事は事實であつた。その汚ららしい女がマリヤに浴せた侮辱の言葉は、芬蘭旅行中のマリヤの怪しい生活をあてこすつてゐるのであつた。それに刺戟されて私の古い疑惑が又も頭をもたげる——歸宅後間もなくの流産、運命といふものに就いての彼女の變な解釋、旅行前にはなかつたやうな思ひ切つた身の委せ方……すべてを綜合して見て私はいよゝ逃げ出す決心を堅めた。

マリヤはどうして病詩人を利用すべきかを發見して、自ら心やさしい妹となり、看護婦となり、若し必要の場合には、精神病患者の番人にもなつた。

「さうだ、自分の良心に責められたといふ點に於てはね! 賣女のやうな女を讚美してまるで聖母の如くに歌つた僕の愛の前には、あんな女だつて本氣に頭を下げるのは當り前だよ。」

九

遂に我々の家からはあらゆる女友達が一掃せられてしまつた。

一番後に出來た美しい女友達は、私の最良の友達なる有名な學者と一緒に去つてしまつた、その男は四つの勳章と將來の地位の保證とを得てつい近頃或る探検から歸つて來たばかりなのであつた。その美しい人は泊る處がないので、無料で私の家に同宿してゐたのだが、うまく機會を捉へて、一年前から止むを得ず獨身生活をしてゐるその氣の毒な男に嚙り付いた。彼女は何處かへ彼を連れて行くといふ口實で或る暗い晩馬車を雇つて、その中で彼を誘惑し、二人が招待せられた第三の家へ行つて、公衆の面前に醜態を演じて、彼を餘儀なく結婚させてしまつた。そしてもう大丈夫と見て取ると、彼女はいきなり假面をかなぐり棄てた。或る會合で彼女は酒に酔拂つて前後を忘却しマリヤを墮落女呼はりした。するとその場に居合せた一人の友達が、忠義

彼女は例の殉教者を氣取つて、しかも私の目の届かない處では氣隨氣儘の振舞をして、遂には——これは後に分つたのだが——私の名前で私の友達から金を借り出すやうな事をさへも仕出來す。同時に家の中から貴重な家具類がぼつ／＼見えなくなる、それはあの第一號の山師女の許へ運ばれて、その手で賣り拂はれるのだ。

それらのすべてによつて私もだまつてはゐられなくなり、初めて不安な問ひを自ら發した。

「マリヤには祕密の支出があるのだらうか? それで彼女はあんなに騒ぎ廻つていろ／＼の品物をこつそり賣却する必要などがあるのだらうか? それであの莫大な世帯の費用を要するのだらうか! 若しさうなら、それは何の爲めなんだらう?……」

私は今瑞典の國務大臣と同じ程の収入を得てゐる。陸軍大將などよりは、餘程多いのだ。それにもかゝらず私は、まるで足に鉛の彈でも結び付けられたやうななじめな生活をしてゐる。我々の暮しと云つたら、實に簡素なものだ! 食物などは、普通の小市民のそのやうな不味い料理ばかりで、時には到底口にするに堪へない事すらある。私達はまるで勞働者の飲むやうな飲料を、ビールとブランデーとを飲んでゐる、稀に飲むコニャックと云つたら御馳走になつ

たお客が家へ歸つてから悪口を云ふ程にひどい代物だ。煙草と云つても、私はたゞパイプを吹かすばかりだ。自分の慰みと云つても、たまに友達と氣晴しの爲めに何處か一寸したところで夜を過す位のものだ、それも一ヶ月に一回位。

到底堪へ切れなくなつた時唯一度、私はこの疑問を探究しようと思つた。私は或る經驗の深い婦人をつかまへて相談をしかけて見た。我々の世帯の入費はあまりかゝり過ぎはしないだらうか、と訊ねて、その總額を擧げて聞かせる、彼女はいきなり笑ひ出して、まるで狂氣の沙汰だと云ふ。

だから私はマリアの何か特別な、祕密の支出を信すべき理由があるのだ。然し一體何の爲めの支出だらうか？ 親族、叔母、友達、情夫——それ等を残らず彼女は養つてゐるのだらうか？ 誰が亭主にそんな事を打ち明ける者があらう？ みんながぐるになつて、彼女の姦通の加勢をやつてゐるんだから！

それからそれへと際限ない準備をやつてから、遂に出發の日が確定した。すると兼ねて豫期してゐたやうな新しい困難が持ち上つて、愁歎場がそれからそれへと連続して行つた。あのキング・チャールズがまだ生きてゐるのだ。私は

現にこれまで此奴の爲めにどれほど惱まされて來た事であらう！ 特に女達が子供等を閑却して、此奴にばかりかゝり切つてゐるのは、私には到底腹に据ゑ兼ねることであつた。

そのうちにマリアの偶像で、私の悪靈で、老いぼれて、臆みたゞれて臭い匂がするこのたまらない畜生が、私の非常な歡喜の下に、その一生を終へる瞬間が遂にやつて來た！ 今度は流石のマリアも自分からこの動物の死を願ふやうになつた、然し、犬がゐなくなるので私がどんなに喜ぶだらうといふ事を思ふと、彼女は腹が立つてたまらないのであつた。そしてこの問題をなるべくずる／＼に引延して行つて、その間に私のこの願つてもない幸福を出来るだけ高價に拂はせようといふ新しいいぢめ方を案出した。

彼女は先づ犬の爲めに別れの盛宴を張つて、斷腸の場面を演出した。そして一羽の鶏が屠られ、私はまだ病身だからといふので、その骨を與へられた、——それから彼女はその怪物を携へて町へ出かけて行つた。

彼女は二日間家を明けた後に、『殺戮者』に向つて物を云ふやうな冷淡な言葉で歸宅の時刻を知らしてよこした。私は六年間の苦行から遂に解放せられた幸福に酔ひながら、彼女を迎へに汽船へ出かけて行つた——無論彼女一人で來

る事と思ひながら。彼女は私をまるで毒害者でも迎へるやうな態度で迎へ、目には一杯の涙を湛へてゐて、私が接吻しようとするときなり私を突き飛ばした。彼女は不思議な恰好の大きな包みを携へてゐて、まるで葬式にでもついて行く人のやうに、さながら葬送の曲でも聞えて來るかの如くに調子を付けた歩調で歩いて行く。

その包みの中には犬の死骸が入つてゐるのだ！ あゝ神様！ まだこれから葬式といふ難物があるのだ——運命の最後の打撃が！ 一人の男は棺を作り、二人の男は墓穴を掘る。私は出来るだけこの騒ぎから遠ざかるやうにしてゐたが、遂にこの虐殺せられた者の埋葬に參列すべく餘儀なくされてしまつた。何といふ御信心深い事だらう！ マリアは強ひて心を落着けて、この無辜の犠牲とその殺戮者との爲めに神に祈禱を捧げた。それから衆人哄笑のうちに彼女は墓の上に十字架を押し立てた——それは實に、遂に私をこの怪物から釋放してくれた救主の十字架である。尤もあの怪物だつてそれ自身には何の罪もないのであつた、只、明らさまには夫を苦める事を敢てしない卑怯女の惡意の化身として初めて恐いものになつたのである。

我々は深い喪に籠つて數日間を過した、その間彼女は、私に接吻を與へようとしなかつた、何故なれば毒害者を

接吻するなどいふ事は思ひもかけない事だから。——それから我々はいよいよ巴里へ向つて出發した。

第四部

一

私は旅行の第一目的地として巴里を選んだ、何となれば、私は其處へ行く私の奇矯な性質をよく理解してくれる舊友等に會ふ事が出来る、私の移り氣をよく承知し、私の空想や矛盾や傍若無人振りをゆるし、従つて私のやうな詩人の瞬間毎に移り變る心境を批判し得る、心置きないうる友達の會ふ事が出来る。その頃巴里には第一流のスカンディナヴィアの文人達が集つてゐた、それで私はこれ等の仲間を保護されてマリアの悪企みに對抗しようと思つた、彼女は私を癡狂院にでも投り込んでしまひたい氣でゐるのだから。

旅行中にもマリアは決して武裝を解かなかつた、そして誰に遠慮も要らないので、私をいよ／＼輕蔑すべき人間として取扱ふやうになつた。彼女は常に何か物思ひに沈んでゐる、その目は何を見るときもなほぼんやりして、何に對しても冷淡である。宿泊しなければならなかつた町々では、彼女を見物に引張り廻しても見たが、何んにもならなかつた。

た、彼女はどんな物にも興味を感じない、何んにも見ようとはしない、私の云ふ事にさへ殆ど耳を傾けない。私がかいれこれと彼女の爲めに心遣ひをするのが彼女にはうるさくてたまらないのである、彼女はひたすら何物かに憧れてゐるらしい。然し一體何物に？ 彼女があれ程に苦患を受けた國、一人の友達をも残しては來ないあの國——然し恐らく一人の情人と別れて來たのでもあらうあの國に憧れてゐるのだらうか？

それに又彼女は旅行中、女の中でも最も非常識的で世間に通ぜぬ、最も教養の足りない人間であることを暴露した。そして彼女は常に自ら組織や管理の能力を持つてゐるといふ事を自慢してゐたが、實はそんな物は何一つ持つてゐないのだといふ事を私は發見した。彼女は何處へ行つても必ず第一流のホテルに案内させて、たつた一晚の宿でも、家具類を残らず置き換へさせた、お茶の出し方が悪いと云つてはわざ／＼ホテルの主人を呼び付けた、廊下でひどくやかましくしては、他の客から蔭口をきかれた。午餐の時間までも床の中に温もつてゐたい彼女のおかげで度々一番便利な汽車に乗り遅れた、彼女の不注意から荷物も飛んでもないステーションへ紛れ込んだりした、そしてホテルを立つ時には、彼女は給仕に一マルクの祝儀をふりまいた。

私がそれに對して何か口を出すと、
「あなたは氣が小さいのよ！」と一言の下に跳ね付けてしまふ。
「そしてお前は下品で無教育な女か！」
いやはや、結構な氣保養の旅ではあつた！

× × × × ×

我々が巴里に到着して、彼女の美には迷はされない私の友達の中に入ると、彼女は俄に私の方が優勢になつたのに氣が付いて、自分は畏にでもはめられたやうな氣がし出した。彼女にとつて最も腹立たしくてたまらなかつたものは、私が自分に非常な好意を寄せてゐる或る第一流の諸威詩人と非常に親密になつた事であつた。彼女は無論その詩人を憎んだ、この人の賞讃は他日私の文名を擧げさせる機縁になるかも知れないから。(これは、彼より十七歳の年長なるビヨルンソンの事である)

或る晩美術家と文學者の會食の席上で、その諸威の有名な詩人は、私を近代瑞典文學の大家と呼んで乾杯の辭を述べてくれた。その時私の可哀なマリアもそこに居合せて、彼女の中性的な友達の所謂「評判の悪い誹謗書作者」と結婚するといふ不幸に會つた受難の女が！ 列席者の大喝采に依つて私の名譽が絶頂に達した時のマリアの悄氣やうと云

つたら、そゞろ私の同情を惹き起した程であつた。それからこの詩人が、少くとも二ヶ年間は佛蘭西に滞在するといふ約束を否でも應でもさせようと私に迫るに及んで、私は最早妻の苦しうな眼付を見てゐる事が出来なくなつた。それで私は彼女の心を慰め、彼女の落膽をいくらか勵ましてやる爲めに、私共の結婚生活では、重要な事柄は必ず夫妻二人の相談で取決めるのですからと答へた。さう云ふと、マリアは再び温味のある眼付を見せた、そして私はこの言葉に依つてその席に列る婦人達の好感をも贏ち得た。

然し私の友達はややく私を逃さうとはしない。彼はどうあつても私の滞在を延期しろと云ひ張つた、そして演説家らしい身振りで、彼に賛成するやうにと一座の人々を煽動した。すると一同は彼の提議に賛成して杯を擧げた。

私は茲に告白して置かなければならない、私の友達の親切で執拗なこの勸告振りはどういふ風に説明したらいいものか、私には到底解し兼ねる次第であつた。尤も、私の妻とこの人との間には、私には原因の分り兼ねる一つの暗闘がひそんでゐたといふ事は、當時私も知つてゐた。この人は多分私よりもつとよく内情に通じてゐたのだらう、そしてその鋭い慧眼を以て、疑ひもなく私の秘密を洞察したものであらう、それに又この詩人自身が頗る怪しげな評判

のある夫人と結婚してみたのだから、それは私には今以て明かにする事の出来ない一つの謎である！

マリアには自分の夫の價値が汎く認められてゐるこの巴里はあまり居心地がよくない、それで、三ヶ月も滞在すると、彼女はこの大都會を嫌ひ出した。「何時か一度は屹度あなたの身に禍するに相違ない悪友共」を警戒するやうにと、彼女は私を戒めて止まなかつた。

又も新たに妊娠の徴候が現れ出した、そして地獄が再び我々の眼前に展けた。

然し今回は私も、今度生れる子は疑ひもなくほんとうの自分の子に相違ないと思つた、受胎されたのは何時であつたか、その日も私にはよく分つた、のみならず、その場の種々の情景と共に、その受胎の瞬間をさへはつきり思ひ出す事が出来るのであつた。

× × × × ×

我々は瑞西の中、佛蘭西語を用ゐてゐる地方へ向つて旅立つた。其處では、例の間斷なき家計問題の紛擾を免れる爲めに、或る市民の家に下宿する事になつた。と間もなく、全く孤立して、何の防禦もなかつた私は、又も彼女の手中

に落ちてしまつた。

到着の瞬間からして彼女は、わたしはおとなしい精神病患者の附添人ですと云ひふらした。そして先づ醫者としてめし合せて、宿の主人や主婦にもそれを呑み込ませ、のみならず、女中から下男や同宿人達に至るまで洩れなくそれを吹聴してすつかり私を狂人扱ひにしてしまつた。私は最早自分と同程度の知識階級の間人や私を理解してくれるやうな人々と接する事が出来なくなつた。同宿人が一緒に食卓に就く時には、この愚な女は、巴里では仕方なく沈黙しなければならなかつたそのとり返しに、今こそとばかりに盛におしやべりをやり出した。彼女は殆どあらゆる機會毎に口を出す、そして私が既に千度も非難して戒めて置いた事だが、實に下らない馬鹿話の百萬遍を繰返して飽く事を知らない。そして無教育な平民共はこの馬鹿げ切つたおしやべりに、お愛想のつもりで相槌を打つので、私は只だんまりしてゐるばかりだ、すると彼女は沈黙は自分の方が私よりも優越せる人間である證據と思ひ込んでいゝ氣になつて益々つけ上るのだ。

彼女はどこか具合が悪いやうな様子で、何か心配事でも附き纏つてゐるかのやうに、浮かない顔をしてゐた。そして私に對する態度は憎惡の他に何物もなかつた。

必要のない完全な抱擁が私を満足させることが分ると、彼女は、私が彼女に依つて享樂するこの悅樂の故に私を怒り出した。

然もそれは私にとつては非常な幸福であつた、何となれば私の從來の神經的の惱みは、主としてこの不自然な禁慾から來るものであつたのだから。

同時に私の胃痛はだん／＼ひどくなつて行つて、遂には只スープしか取れない程になつてしまつた。烈しい腹痛と堪へ難い咽喉の渇きで、私は夜もろく／＼睡れなかつた、そして冷たい牛乳を飲んでやうやくこの渇きを抑へる事が出来るばかりであつた。

完全な教養に依つて十分に發達した私の精緻な頭腦は、下等な頭腦の人間と交渉してゐると自然働きの鈍くなる、私の頭を妻の頭と調和させようと骨折れば、私は烈しい癢癢を起すばかりだ。それで私は今度はそれを妻以外の人達との間に試みようとした。然し私に對すると人々は、丁度精神病患者とでも話をする時のやうないはりと遠慮とを以て話をするのであつた。

それで私は三ヶ月間も續けて沈黙を押し通した。三ヶ月の終りに至つて私は氣が付いてはつとした、私の聲はあまり長く使はなかつたので、うまく咽喉から出なくなつてしま

私の愛してゐる物をば、彼女はすべて嫌つた——私がアルプスを實に善いと云つて褒めれば、彼女は散々にけなし付ける、私が散歩をしたいと云へば、彼女は家の中にぢつとしてゐたいと云ふ。彼女は私とたつた二人切りになる事がたまらなく恐しいのであつた。彼女は私の望みとあればどんな事でもこれを邪魔する爲めに、私が今どんな事を思つてゐるか、心中を見抜く術を練習した。私がいやと云へば、彼女はいゝと云ひ、私が右と云へば、彼女は左と云ふ——要するに彼女は私を憎んでゐるのだ、私を嫌つてゐるのだ。

この知らぬ他國で全然孤獨に陥つてしまつた私は、止むを得ず、なるべく自分の側に一緒にゐてくれと彼女に哀願しなければならなかつた、我々は口論の始まる事を恐れて互にもう言葉を交さなかつたので、私は只彼女が自分の側にゐてくれさへすれば、自分は全然獨りぼつちではないのだといふことを思つて、いさゝか自ら慰めてゐるのであつた。

彼女の妊娠が確定してからは、彼女との愛の交りに於て、私は、もう少しも手心を加へる必要がないと信じた。彼女は最早私を御ける理由がなくなつたので、どうにかして私を困らすやうな口實を工夫し出した、そして他を顧慮する

つた、そして最早口に出して發音せられる言葉を使ひこなす事が出来ないやうになつてしまつた。その代りに、私は本國にゐる私の友達と熱心な手紙の交換を始めようとした。然し彼等の變に遠慮勝ちな言葉使ひや、心苦しいやうな同情や、父親のやうな忠告ぶりなどを見ると、彼等は私の精神状態をどんな風に思つてゐるのかはつきりと分るのであつた。

彼女は遂に勝利を得た。私は彼女の註文通りに、もう狂人にならうとしてゐた、迫害妄想の最初の徴候がもう現れ始めたのだ。

「妄想」？ 何故そんな言葉を使ふのだらう？ 私は迫害せられてゐる！ 故に私が自ら迫害せられてゐると信ずるのは、立派に論理的ぢやないか！

要するに、私は子供に返つたのだ。全然氣力を失つてしまつて、何時間もソファの上にくつたり横になつてゐた、私の頭をマリアの膝にもたせ、私の腕で彼女の腰のまはりを抱いて、まるでミケランジェロの『ピエタ』(基督の死を歎)のやうな姿勢をしながら。私は額を彼女の胸に押付けた。彼女は私を彼女の子供と呼んだ、すると私も繰返した。「さうだよ、お前の子供だよ。」私の男性的なる物はこの母の腕の中で残りなく消え去り、彼女は最早女ではなくなつた。時

には彼女は勝利者のやうな誇りを以て私を見下し、時には又、首斬人がその犠牲者の前に感ずるやうな突然の憐憫に捉へられて、やさしい眼付で私を見詰める事もあつた。彼女は、雄蜘蛛と交つて子を孕んでしまつた後には、その夫を食ひ殺してしまふあの雌蜘蛛であつた。

私がかうして悶え苦しんでゐる間のマリアの生活振りには奇怪極なものであつた。彼女は午餐の頃まで床に入つてゐる、それは午後一時頃である。それから格別の用もないのに町へ出かけて行く、そしてやうやく晚餐の頃になつてから歸つて来る、度々はもつと遅くだ。奥さんはどちらへ、と誰かに訊ねられると、私は答へる――

「あれは町へ参りました。」
するとみんなは變な微笑を浮べたまゝ行つてしまふ。
私は決して疑惑を抱かうとはしない、又彼女の行動をひそかに嗅ぎ付けようなどとも思はない。
晚餐後、彼女はサロンに残つて、他のお客達と例のおしやべりをやつて過す。
夜彼女は女中とコニャクを飲む事がある、私は彼等が何やらひそ／＼囁いてゐるのを聞くけれど、扉の側で立聞き

なんぞをして自分を卑しくするやうな眞似をしようとは決して思はない。

何故？ それは人間として爲すまじき行爲に屬するものだから。

何故？ それは一種の男性的宗教として私の教養の中に忍び込んでしまつたのだから。

× × × × ×

三ヶ月が過ぎた。と、私は驚いて目をさました――我々の支出は非常な額に上つてゐたのである。今は下宿住ひであるから費用は一定してゐる、私は容易に計算して見るこ

とが出来た。
我々の下宿料は一日十二フランである、即ち一ヶ月には三百六十フランになる、そして私はマリアに毎月一千フランをやつた。それで毎月六百フランの雜費が出た事になる。「それは特別の支拂ひに使ひました。」と私が彼女にこの清算を求めた時に、彼女は躍起となつて答へた。

「何だつて――決つた支拂ひが三百六十フランで、特別の支拂ひが六百フラン！ お前は僕を馬鹿にしてるんだね？」
「あなたはたしかにあたしに千フラン下さいました、けれど大部分はあなたの爲めに遣つたのですわ。」

「ようし！ そんなら勘定をやつて見よう。煙草(非常に悪い)が十サンティームのシガーも入れて十フラン……郵税が十フラン……それから……」

「あなたの劍術のお稽古がありますわ！」

「一遍しかやらない、三フランだ！」

「馬もありませんわ！」

「二回で、五フラン！」

「本の代！」

「本？ 十フランさ！……それでみんな……三十八フランか、まあ百フランとしてもいゝさ。残りの五百フランはその他の小遣ひだね……たしかにひどい！」

「ぢやあなたは、あたしを盗人だと云ふのね？……ほんとにあなたは何といふ情ない人間でせう！」

私はこれに對して何を答へる事が出来たらう？――何んにも！……私は甘んじて情ない人間になつた、そして翌日はもう瑞典中の彼女の友達が、私の發狂は一段進行したといふことを彼女の手紙で知らされるのだ。

こんな具合に彼女の創作した傳説は追々に眞實化して、發展して行つた。私の人格の輪廓は年々はつきりとその傳説の中に現れて来るやうになつた、そして昔の罪のない詩人の面影は消え失せてしまつて、今やいたづら書きのやう

に眞黒く塗り潰されて、犯罪人の型に近いやうな、荒唐無稽の神話的人物が出来上つてしまつた。

× × × × ×

私は伊太利へ逃げ出さうと計畫を試みた、其處へ行けば自分と氣の合つた藝術家仲間と交際する事も出来る筈であつた。然しこの試みは失敗した。そして再びレーマン湖畔に歸つて、マリアの出産を待つ事になつた。

子供が生れると、マリアは自ら受難者、壓迫せられた女を氣取り、虐げられたる奴隷の輪光を以て自らを神聖化し、生れた兒にどうぞ洗禮を授けさせてくれと私に一生懸命に哀願した。私は丁度その頃論文を書いて基督教の迷信を攻撃してゐたので、従つて教會の慣習に倣つて洗禮なぞを受ける事が出来なくなつてゐる、といふことを彼女はよく承知してゐるのだ。

彼女は元來非宗教的な性質に出来てゐるので、十年以來寺院に足を踏み入れた事さへなく、聖餐式に出たのは何時の昔の事やら分らず、祈禱と云へば只犬や鶏や兎の爲めに祈つた事があるばかりなのだ、どうしたわけかこの洗禮で夢中になつて、大袈裟な式を擧げたいと云ひ張る。私は一體そんな形式的の儀式なんぞは詰らない偽善だと思つて

居り、又自分の教義に反するものとして斥けてゐる事を彼女はちやんと見抜いてゐるので、それでこの洗禮の事は躍起となつて騒ぐのであらう。

兩眼に熱い涙をすら流れて彼女が私に哀願し、私の人情と寛厚の徳に訴へて彼女の意に従はせようとかゝつた。とう／＼私は彼女に根負けがしてしまつた、そして少くとも自分だけはその式に列席しないといふ條件でそれを許した。すると彼女は私の手に接吻を浴せ、私のこの愛情の表示に對して溢る／＼ばかりの感謝を表した、何故なれば洗禮は、彼女にとつては『一の實際の良心の問題』であり、又人生の重大問題だといふのであつた。

洗禮の式が擧げられた。ところが彼女はその式から歸つて來ると、みんなのゐる前で、『この滑稽劇』の馬鹿らしさを笑ひ飛ばしてしまひ、自ら近代的の自由思想家を氣取つて見せ、その古臭い儀式を滑稽化してしまつた、そしてたつた今自分の息子に洗禮を受けさせたばかりのその信條の價値をば、自分ではちつとも認めてゐないのだといふ事を、自慢顔に吹聴するのであつた。

彼女が一度私とのこの勝負に勝つてしまふと、あれ程の大騒ぎをした嚴肅な儀式を嘲笑の種としてしまひ、あの重要な『人生の問題』なるものは、私に打ち勝つた勝利に化し

てしまつた、そしてそれは將來私の弱味を敵の手に握らせることになるのであつた。

尙ほ今一度私は、この征服慾の強い女の氣まぐれを満足させる爲めに身を下して、防禦なき素裸を敵前に暴露するやうな事をした。

然し今度のは今までよりもつと重大な結果を惹き起す事になつた。それといふのは——スカンディナヴィアの方から、例の婦人解放といふ狂氣じみた妄想に捉はれてゐる一人の未婚婦人がやつて來た。彼女は直ぐにマリアの友達になつた、それで私の運命はもう破滅の他はなかつた。

彼女は男性を失つてしまつた或る男の書いた臆病未練の書を持つて來た——その男といふのはあらゆる方面から排斥せられた爲めに、世界中の文明諸國の青鞨連中と同盟して、自分と性を同じくする全世界の男性への裏切り者となつた、奇怪至極の人間なのだ。私は先にエミール・ドゥ・ジラルダンの『男性と女性』を讀んで以來、かうした運動といふものは必ずや女性に對して不相當の利益を與へる重大の結果を及ぼすに相違ないといふことを見抜いてゐたのである。(ジラルダン(一八〇六年)は佛蘭西の著作家にして政治家)

男を斥け、女を以てこれに代へて再び昔の女子家長制度を復活する——文明を創造し、文化の恩澤を弘め、偉大な

る思想藝術職業その他の一切を創作したる、眞の創作の主人公の地位を奪ひ、僅少の例外を除けば全然文化の事業に参加した事のない小汚い愚物共の地位を高めてこれに据ゑようとするのは——我が男性全體に對する挑戦に他ならないのだ。然しながら、この青銅時代の知識階級、この類人的動物、この半猿類、この有害なる動物の一群を『成り上らせる』といふことは、それを思つたばかりでも私の裡に存する男性的なる物の反感を呼び起すに十分であつた。そして不思議な事には、こいつ等に對する反感と反抗心のお蔭で私の病氣はけろりと直つてしまつた、そして彼等は、精神に於ては遙に男性に劣つてゐるが、たゞ道徳を全然缺如してゐるといふ點だけで我等に對して絶對の強味を有するといふ厄介な奴等なのだ!

凡そ民族間の戰爭に於ては、必ず名譽と正義の觀念のより少ないの方が勝利を得るに決つたものであるから、生れながらにして女性に對して尊敬の念を抱いてゐる男性にとつて、又十二分に戰爭の準備をなすに足るだけの自由な時間を女性に與へてゐる男性にとつては、この戰爭の勝利甚だ覺束なしと見たので、私は眞剣にこの問題の爲めに頭を悩ました。私はこの新たな争闘の爲めに戰鬥準備を整へ、直ちに一書を著す準備にとりかゝつた、この書こそ私が例

の解放せられたる女共の面に——男子を奴隷として以て自由を得ようとしてゐる狂人共のしやつ面へ叩き付ける宣戦布告となる筈であつたのだ。

春が近付いて来た、そして我々は下宿を換へた。間もなく私は一種の煉獄の中に住んでゐる事を見出した、そこには私を監視する女が三十五人も詰めかけてゐた、そして夫の權利を奪はうとする馬鹿な女共を攻撃しようとする私の作物に、この上もない好材料を與へてくれた。

三ヶ月にしてその書は出来上つた。それは結婚生活に關する物語を集めた短篇小説集である。私はその巻頭に一篇の論文を掲げ、その中に私はこの種の不快な事實の多數を發表した。(本書收録結婚物語の第一巻一八八四年)

女は、男の働きに依つて自分や子供を養はせてゐる以上は、彼等の稱するが如き男の奴隷では決してないのだ。女は決して壓制せられてはゐない、何となれば、自然は、母性としての任務を果しつゝ、男の庇護の下に立つべき運命を女に與へたのだから。女はその智力に於ては無論男に及ばない、然し男は子供を生む事は出来ない。女は偉大なる文化事業の勞働に於ては不要な者である、男の方が遙によくこれを理解し、又實行する事も出来るのだから。進化論に依れば、兩性の差が大なれば大なる程、壯健な子を生むことが

出来るといふ。故に所謂男性模倣や兩性均等論の如きは、明かに人類の退歩であり、嗤ふべき愚劣であり、浪漫的、理想主義的社會主義者共の最後の夢たるに過ぎないのである。

男性にとつて缺く可からざる附加物であり、男性の精神的創造物である女性は、夫の權利を左右するといふやうな權利は決して持つべきものではない。何となれば、女は只その數に於てこそ人類の『他の半分』をなしてゐるが、その比例に至つては、六々三十六分の一にもあたらずからである。故に男がその妻子を養ふ義務を引受けてゐる間は女は決して男の勞働市場を侵害す可きでない。記憶せよ——一人の男がその仕事の地位を奪はれる時、それと同時に必然的に一人の老嬢或は一人の賣女が餘計社會に發生する事になるといふ事實を……

私の短篇集を見た時の男性模倣主義の女共の憤慨は如何にすさまじいものであつたか、又これによつて如何に恐る可き決死の徒黨を彼等は結ぶに至つたか——それは、彼等がこの書の没收を要求し、遂に告訴をさへなすに至つたといふ事實によつて、容易に想像する事が出来るであらう。彼等はこの攻撃の口實として、私がその中の一篇で神を冒瀆するやうな言辭を弄したといふ罪を算へ立てたのだが

淺はかな女共の智慧では遂にこれを最後までやり通す事が出来ずに終つてしまつた。何故といふに、これ等の性を失へる者共の馬鹿らしさは既に『宗教』の地位にまで高められてしまつたのだ！

このやうな事情で私は本國の法廷に立たせられる事になつたが、私一人で瑞典へ歸るといふ意向に對しては、マリヤは斷乎として反對した。然し家族を残らず一緒に連れて歸るといふことも、私の經濟状態が到底許さなかつた。彼女は内心では私が彼女の嚴重な監視から逃れ去ることを恐れてゐるのである、殊に又、私が法廷に立ち、公衆の面前に現れて、彼女が私の精神状態に就いて一生懸命に捏造し、流布したあらゆる悪評が全く偽りであつたといふことが暴露されてしまふだらうといふことを、一層ひどく恐れてゐるのであつた。

彼女は病氣になつた、然し何處が悪いのかはつきりと分らなかつた、そして床に就いてゐた。それにはかまはず私は自ら法廷に現れることを決心して、出發した。

二ヶ年の懲役を求刑せられるといふ、不快極まるこの六週間に私が彼女に書き送つた手紙と云つたら、彼女から別れて空閑生活をやつてゐる爲めに再び目ざめたやさしい愛情に充ちあふれたものであつた。私は頭があまり疲れすぎ

た爲めであらうか、自分の空想の中で彼女を詩的に淨化し、彼女の顔に輝くばかりの輪光をめぐらして神聖な物にし、憧憬の念と肉體的精進から、彼女に天使のやうな白衣を纏はせた。彼女の中に潜む一切の下劣、醜惡、邪曲なるものは忽ち消滅し、私の最初の戀のまぼろしに現れたやうな聖母の神々しい姿が新たに甦つて来た。私は自分の舊友なる或る記者と會見した時、こんな事まで云つた程であつた——『僕は善良な性質の一人の感化で、今までよりも謙虚な、清淨な人間になつたよ。』——多分この告白は聯合王國の各新聞に依つて、廣く世界中に傳へられたのであらう。あの女——不實なあの女がそれを讀んだ時、彼女は笑はなければならなかつたらうか？

讀者は少くとも拂つた金の値だけは喜んでに相違ない。前述の如き私の愛の手紙に對するマリヤの返書を見ると彼女はこの事件の經濟的方面に多くの興味を持つてゐるらしいといふことがよく分るのであつた。然し私が故郷へ歸つて、劇場や街路や法廷など到處で一般民衆に喝采されるのが益々盛になつて行くに従つて、彼女は掌をかへす如く俄に裁判官を無能だと罵り、自ら陪審員の一人でないのが口惜しいといふやうになつた。

私の手紙での愛の告白に對しては、彼女は怜悯な、控へ

目勝ちの態度で應へた、彼女は問題に深入りする事をなるべく避けて、『互に理解する、互に相手の心を掴み合ふ』といふやうな抽象的の言葉の反復以外に出でなかつた。そして我々の結婚生活の不幸は、私が彼女を理解し得なかつた點に在ると主張した。然し私に云はせたら、さう云ふ彼女自身こそは、その夫なる博學な詩人の言葉の一語をも理解する事の出来ないやうなあはれな女ではなかつたか！

さて、彼女から來た手紙の中に、私の古い疑惑を新しくするやうな文句の一通があつた。私は彼女に云つてやつた——若し幸ひにして無罪となつて放免されたら、私はいつそ外國に永住することにした、と。

すると彼女は躍起となつて私を罵り、そんな事を云ふなら最早私を愛してはやらぬと脅し、さうかと思へば私の同情に訴へて、さながら私の前に身を投げ伏し、私の母の記憶を呼び起して故國をなつかしからせようとする。そして彼女は自白する——再び自分の故國(分蘭ではない!)を見る事が出来ないのかと思つたばかりでも、わたしは頭から足の爪尖まで氷のやうな戦慄に襲はれる、そして死んでしまひさうだ、とさへ云ふ。私は自分に問うて見た——『何故あの女はそれを思ふと惡寒を催すのだらう?』その時分はまだ私にはこの疑問を氷解することが出来な

かつた。

遂に私は無罪の宣告を受けた。私の爲めに開かれた祝宴では、頗る皮肉な話だが、マリアが私にすゝめて法廷に立たせたのだといふので、彼女に感謝を表す爲めに乾杯せられた。

いや……それは結構な事であつた！

私は自分の留守中家族が滞在してゐたジュネーヴへ向つて直ぐに出發した。私のびつくりした事には、マリアは手紙で、病氣で寝てゐると云つて來たのが、ちやんと停車場に出迎へてゐて、びん／＼して至つて元氣であつた、只どうかすると、何かに氣を取られてぼんやりする事があつた。

私は再び生き返つたやうな氣持がした、それからの楽しい夕と幸福な夜とは、私が長い間堪へ忍んだごた／＼の不快を償つて餘りあるものであつた。

翌日になると私は、この下宿は學生達や浮氣な女達などで一杯になつてゐるのに氣が付いた。彼等のべちやくちや饒舌を弄してゐるのを聞くと、自分の留守中マリアがこの怪しげな連中と酒を飲んだりカルタをしたりして喜んでゐた自墮落な有様が、目に見えるやうな氣がした。私はこの家に泊つてゐる人々のいやに馴れ／＼しい甘つたるい調子に胸が悪くなつた。マリアは若い大學生連に對して例の『小

さなママちゃん』を演つてゐる。(昔からのこの女の癖で!) その中でも最も悪いやうな女と彼女は親しく交つてゐた、そして私にこれは酔拂つて食卓に就く牝豚さんだ、と云つて紹介した。

まるで娼家のやうなこの家に私の子供達は六週間も暮してゐたのだ! そして母親はそれを何とも思はない、何故なれば彼女はちつとも『偏見』を持たないから! そして彼女の病氣——假病——は、かうした怪しげな人間共と疑はしい附合ひをするには少しも差支へがないやうな物であつたのだ!

私は少しでも聲を荒くすると、無造作に叱り飛ばされてしまつた。——私は只『やきもちやき』で、『舊弊』で、『貴族的な』人間であつた。

そして昔ながらの格闘が又も新たに始まつた。

二

今や新しい難問題が迫つて來た——それは子供の教育の問題である。今まで全然無教育な百姓娘の子守女が保姆といふ事になつてゐた、そして母親と一緒に、あらゆる不始末を演ずるので、二人とも始末に負へぬ怠け者で、朝は日が高くなるまで睡りこけてゐる。従つて子供達は朝目がさめ

てからも床の中におつとしてゐなければならぬ。そして起してくれとせがむと、遂には打たれる。私はとう／＼見兼ねて彼等の中に入つた、そして何とも云はずに子供達の部屋で起床喇叭を吹き鳴らした、彼等は喊聲を揚げて私を喜び迎へた。すると妻は自分の個人的自由——それは彼女の意見によると、他人の自由を束縛する事に依つて成立つものだ——といふ事を云ひ出して抗議を申し込む。然し私は無論そんな馬鹿な話に耳を傾けようともしない。

決して平等になり得ないものを平等にしてしまはうとわかる、この弱々しい下等な頭から生れた偏執狂がその頃私の家庭を攪亂する原因となつた。可なり早熟な私の長女は二三年來私の繪入りの本を繙くことを許され、その他にも尙ほ長子としての特權を享けてゐる。そしてそんな貴重な本をおもちやにする事は小さい方の子供にはまだ許されてないので、母親は私を不公平だと云つて非難する。

「何も彼も平等でなけりやいけませんわ!」と彼女は云ふ。

「何も彼も一切? それぢや着物や靴の寸法もかい?」

直ぐに返事はなかつた、然しあなたは要するに『馬鹿』だといふ悪口を以て早速その返事に代へられた。

「何でも物事は能力と價値とに應ずる事さ! これは姉へ、あれは妹へ、といふ風にね!」

然し彼女は無論そんな理窟を認めようとはしない、そして私は妹の方を『憎がる』『不公平な』父親だ、と云ふ。正直のところ、私は姉娘の方をより多く愛してゐた事は實際である、この子は私の生涯中の美しかった昔を思ひ出させ、且つ大分智慧付いても來てゐるので。それに又、妹娘の生れたのは、丁度母親の貞操が最も疑はれる時期にあつてゐたのである。

それに、母親の所謂『公平』なるものは、子供達に對して全然無頓着にするといふ事であるらしかつた。母親が寢てゐない時は、即ち外出してゐる時であつた。母親は子供達にとつてはまるで赤の他人であつた。それで彼等何とか私を慕ひなつた、そして遂には母親が嫉妬を起すやうになつた程、私に對する子供達の愛は伸びて行つた。それで私は、いつも自分が買つて來た玩具や菓子などを母親の手から子供に與へさせて、そんな事で母親に對する子供の愛を増させようと努めたのである。

かうして幼き子等は眞に私の生命の一部分となつた、そして孤獨の感に打ちひしがれて暗黒な氣分に鎖されるやうな瞬間にも、小さい者達を見れば再び自分の生活へ——それから同時に彼等の母なる私の妻へと繋かれて行くのを感じた。子供達の故にこそ、離婚といふやうな事は考へて見

るさへも全然不可能であつた、そしてそれは同時に私にとつては不幸な事であつた、何故なれば、私はそれから益々妻に束縛されて、この腐れ縁に動きの取れない人間になつてしまつたのだから。

三

私がこの男性横倣主義の女共の本城を衝いた攻撃の結果は、直ちに現れて來た。瑞西の各新聞は筆をそろへて辛辣に私の人身攻撃を始めて、とう／＼そこにゐたまらないうやうにしてしまつた。私の著書の發賣は禁止せられた、そして私は町から町へと迫害せられつゝ放浪を續けて、遂に再び佛蘭西へ逃げ出してしまつた。

然しあの巴里に來ても、今ではもうもとの友達に私に背を向けて、私の妻とぐるになつて私に反抗するやうになつた。まるで野獸のやうに包圍されて、私は戰場を換へなければならなかつた。殆ど困窮に陥つてしまつた私は、止むを得ず巴里の近郊に在る或る美術家村に中立の避難場所を求めなければならなかつた。

私は體よく畏にはまつてしまつたのだ、私はそれからの十ヶ月間を、恐らく私の一生涯中最も悲惨な期間を此處で過さなければならなかつた。

物が、だん／＼著しくなつて行つたのである。

スカンディナヴィア人の知名人士の漫畫を澤山蒐めたアルバムがホテルにあつた。それは何れもその國の有名な畫家の筆に成るもので、その中には私の肖像も一枚あつた。そして髪の毛の間から一寸見れば分らないやうな具合にうま／＼一本の角が生やしてあつた。

この肖像を描いた畫家は私の親友の一人であつた。それで私の妻の不貞は今や一般世間に周知の事實となつてゐるといふ事を推定する事が出來た——正に、知らぬは亭主ばかりであつた。私はこのアルバムの所有者に釋明を求め、事にした。

初めから私の精神は異狀だといふ風に思ひ込まされてゐた宿の主人は、それはあなただけに見るので、繪の中には決してそんな物が描いてあるのではない、即ちあなたは見當違ひな事を怒つてゐるのだ、と私に誓言した。それで更に詳しい詮索が付くまで、私はそのまゝにして置かなければならなかつた。

或る日の夕方の事であつた、我々は丁度スカンディナヴィアから來たばかりの或る老紳士と宿の庭でコーヒーを飲んでゐた。戶外はまだ明るかつたので、私は自分の坐つてゐる處からマリアの顔面のあらゆる表情を一つも洩らさず觀

私はその地で近付きになつた仲間といふのは、主に若いスカンディナヴィアの畫家連中であるが、彼等の前身は種々雑多で、多くは、變つた素性と經歷の人間共であつた、それにもつと困つた事には、連中はそれだけでなくて、他に匪秀畫家と稱する者が加はつてゐるのである、この連中と來たら、あらゆる古臭い偏見から離れ、一切の慣習から解放せられて、自ら男性と同様な物と心得てゐる程に、半陰陽性的の文學を熱心に推賞した。自分自身の性を蔽ふ爲めに、彼等は極力男性の外觀を模倣した——煙草も吸へば、酒も飲む、球も突く……そしてお互に戀もする。

正にどん底だ！

全然孤獨であるよりはむしろと思つて、我々はこの怪物共の中の二人と知合ひになつた——その一人は所謂閨秀作家で、一人は畫家だ。

この閨秀作家が、先づ私を大家扱ひにして訪問したものだ。これが私の妻の嫉妬を煽つた。彼女はこの同盟者を自分の味方に引き入れようとした、この閨秀作家は、私が中性的女性を攻撃してゐる理由とその價値を十分理解する程に賢明な女のやうに見えたからである。

丁度この時或る出來事が、私の考へを再び暗くした、そしてその後有名な物になつてしまつた私の所謂偏執狂なる

察することが出来た。老紳士は我々の出發後瑞典國內に起つた色々の出來事を話して聞かせた。その中にはいつかマリヤにマッサージ療法をやつた醫師の名前も出た。すると彼女はこのドクトルの名前をそのままには聞き流さずに、その老紳士の話を遮つて、厚かましくも問ひかけた。

「あゝ、そんならあなたはドクトルXを御存じ？」

「えゝゝゝ大分騒がれたお醫者さんで……といふのはつまり、一種の評判を取つた人物で……」

「氣障な鼻下長先生としてね！」と私が附け加へた。

と、マリヤの顔は眞蒼になつて、一種の無恥な微笑がその唇のあたりに凝り付いた、そして口の隅が上の方へ引き釣つて、眞白い齒を現した。

それから、妙に座が白け渡つて氣まづい状態の中に、話が途切れてしまつた。

私はその老紳士と二人切りになると、こんな風説は私を甚だしく不安にするものだから、それに就いてもつと詳しい事を知つてゐるなら是非教へてくれ、と頼み込んだ。すると彼はあらゆる悪魔に誓ひを立てゝも、さうした風説を耳にした覚えはないと云ひ張つた。小一時間もかゝつて彼にせがんだ揚句、私はやう／＼、かういふ神祕的な「慰め」を彼から引き出す事が出来た――

妻の風評に關する最もひどい部分をそのまま信じてしまへばしまふ程、益々その内容は私の境遇に似て來るのであつた。(これは一八八四年に現れた「イブセンの野鴨」をいふ)

その内容といふのはかうだ――

一人の寫眞師が(寫眞師といふのは、寫實小説家としての私を諷してゐるのだらう)素行の善くない或る女と結婚する。この女はもと或る資産家の妾であつたが、結婚後は、この男から引出してひそかに貯へて置いた財産で家計を助けてゐる。夫は仕方のないなまけ者で、カフェーに入り浸つて、ボヘミアン仲間と酒ばかり飲んでのらくらしてゐる、それで彼女が夫の職業を習ひ覺える。

これ等はすべて出版者の用心から、事實を作り變へたものであつた。この作者は、マリヤが翻譯をやつたといふ事實を知つてゐたので、女主人公に寫眞を習はせるのである。然し私が何等の報酬なしにそれを訂正してやつた事、彼女の仕事の収入は何の條件も割引きもなしにそつくり彼女にやつてしまつた、といふやうな事情をば、この男は勿論御存じないのである。

さて、この戯曲の筋によると、その後事情は一層悪くなつて來た、何となれば、この不幸な寫眞師は、その可愛がつてゐる娘があまり早く生れ過ぎたので、自分の子ではな

「それにね、あなた、一人の男を疑ふ位なら、他にももつとあるに相違ありませんからね。」

彼の言葉は唯それ切りであつた。然しその後ドクトルの名がマリヤの口から出る事はもうなくなつた、これまでは彼女は好んでその話を持ち出し、人前でも憚らずにその男の名を口にしたのであつた、まるで、顔を赧らめずに彼の名を聞く事に慣れようとでもしてゐるかの如くに――あらゆる懸念も忘れてしまふ程に彼女はそれで夢中になつてゐたのだ。

この新しい發見で私の注意は少からず喚起せられた、そして自分の記憶を辿つてそれと似寄りの情況證據はないかと探して見た。即座に私は、私の公判中に出版された或る作品の事を思ひ出した。それは確に私のこの詮索に一手を與へるものだ――それはもとよりそれ程はつきりしたものではないが、少くともかうした風評の出る源に導く細い溝を見付ける位には立つたものであつた。

それといふのは、例の有名な諸威の青鞥詩人なる平等狂の宣傳者が書いた戯曲で、その頃私の手に入つたものだ。私は當時それを讀んで、その中に私自身の境遇と似たところはちつとも見出す事が出来なかつた。然るに今日になつて見ると、この戯曲の筋は私達の事情と全く符合して居り、

いらしいといふ事を、即ち彼の妻は彼を動かして結婚するに至らしめた時、甚だ卑劣にも彼を欺いたものであるといふ事を發見したのだ。

尙もこの事件の卑劣さを徹底させる爲めに、この欺かれたる夫は厚顔にも妻の元の情夫から多額の賠償金をふんだくるといふ淺ましい所行を敢てするのである。

これは恐らく男爵が保證人に立つたマリヤのあの借金の事をあてこすつたものだらうと私は感付いた――即ち私が結婚式の翌日に保證をさせられたあの金の事である。

然しこの戯曲に出て來る私生兒の事に至つては、我々の場合と何處が似てゐるのだらうと解釋に苦んだ、私の長女は結婚後二年も経つてから生れたのであるから。

然し、ふと思ひ付いた！……生れると間もなく死んだあの子供は？……それに違ひない！……あのあはれな、小さな死兒！……あれが一體私をして彼女と結婚するに至らしめた原因なのだ、でなかつたら私はあんな女と結婚なぞをする氣にはならなかつたかも知れないのだ！……

決して確定した推論ではない、然しともかく一の推論には相違ない。符節を合する如くである。マリヤが離婚後もよく男爵の許へ出かけて行つた事、男爵も亦ちよい／＼我我のところへやつて來た事……私の部屋の壁には男爵の繪

がかゝつてゐたし、それからマリアの借金……その他の事もよく符合する！

私はこの一件にきつと決りを付ける事に決心して、午後彼女との間に何か悶着が持ち上る覺悟をした。我々夫妻はこの男性横倣主義者の彙人形にしか過ぎぬ男に依つて攻撃せられてゐる點に於ては同一の境遇に在るので、我々二人の冤を雪ぐ爲めに、一の起訴或はむしろ辯護を提出する事をマリアにすゝめようとした。まるででくの坊のやうに女共の傀儡になつて甘んじてゐるこの男は、屹度利を喰はされてこの有利な請負仕事を引受けたものに相違ないのだ。マリアが呼ばれて部屋に入つて來ると、私はなるべく優しい態度で彼女を迎へた。

「何か御用？」と彼女は訊ねた。

「重大事件だ——僕にもお前にも關係のある事だ！」

それから私は彼女にこの戯曲の筋を話して聞かせて、主人公の寫眞師に扮した役者は私の似顔で顔をこしらへるといふやうな事をさへも敢てした、といふ事も付け加へて話した。

彼女はちつと考へ込みながら、明かに鼻奮に捉はれて、黙つてゐる。それから私は辯護を始めた。

「若し事實がこの脚本にある通りなら、正直にさう云つて貰ひたい、僕はそのまゝ宥す積りでゐるんだからね。あの死んだ兒がたとひグスタヴの子だつたとしても、お前はあの頃はまだ自由な體だつたんだからね。僕とお前の間には只ぼんやりした約束がしてあるだけだつたし、お前はまだ一文も僕から金を受取つてはゐなかつたんだからね、それからこの脚本の主人公の事だがね、この男は僕の考へでは少くとも人情といふ物の分る人間として行動したものだと思ふ、この男は自分の娘や妻の將來を悲惨な物とするに忍びなかつたのだ。子供の養育費といふ名義で受取つたその金だつて、當然の損害賠償と見るべきものだらうと僕は思ふんだがね。」

彼女は注意深く私の言葉に耳を傾けてゐた、そして良心の苛責でいら／＼してゐたその顔色がのんびりと落着いて來た所から判断すると、私からまだ一文の金も受取らぬ間は自分の體を勝手にする權利があつたのだといふ私の論法は、彼女を満足させたらしかつた。この脚本の中の欺かれたる夫に就いては、「人情の分る男」と云つた私の言葉を承認した。そして確に「氣高い情の持主だ」と主張した。

この女にすつかり泥を吐かせてしまはうといふ私の目論見が成功しない中に、私は結論に達した。私はこの難關を

切り抜ける道を彼女に示し、我々二人はこの傷けられたる名譽をどうして恢復すべきかを彼女に相談した、そして、一般世間に對し、又我々自身の子供に對してもあらゆる汚名をすゝぐ爲めに、一つの小説の形式で我々の辯護を書いたらどうだらうといふことを彼女に提議して見た。

私は一時間もしやべり續けた。その間彼女はペン軸を弄びながら私の机の前に腰かけてゐたが、時々間投詞を挿む他には一言も云はずに、極度に神経過敏になつてゐるらしくかつた。

私はそれから出かけて、ゆつくり散歩をしてから球突きของเกมをやつた。二時間後歸つて見ると、マリアはまださつきの場所に、まるで塑像のやうにぢつと動かずにゐる。

私の足音を聞き付けると、彼女は起ち上つた。

「あなたはあたしを畏にはめようとしたのね？」と彼女は云ふ。

「飛んでもない！ 僕は自分の子供達の母親を永久に失つてしまつてもかまはないと思つてゐるとでも、お前は疑つてるのかい？」

「あなたはどんな眞似だつてやり兼ねない人です。あなたは、もうあたしと別れてしまひたいんでせう。あたしをあつたYさんに紹介した時に、もうさうしようとなすつたんで

せう。(Y氏といふのはまだ擧げた事のない名前である。)屹度さうですわ、あのYさんにあたしを誘惑させようとなすつたんでせう、あたしの不義の現場をつかまへる爲めにね？」

「誰が一體お前にそんな事を云つて聞かせたんだい？」

「ヘルガですわ！」

それは我々が瑞典を立つ前の、マリアの最後の友達であつた女の名である。マリアと同性戀愛に陥つてゐたあの女が、このおれに體よく復讐を企てたのだ！

「そしてお前はそれを本氣にしたのかい？」

「えゝ無論よ……だけど、御存じの通り、あたしはどちらをも馬鹿にしてやつたのよ——Yさんと、それからあなたもね。」

「といふのはつまり、第三の男をこしらへて僕を騙したといふのかね？」

「そんな事はあたし云やあしなくつてよ。」

「だつてお前だつた今自分で白狀したぢやないか！ 我々二人を騙したといふんなら、僕をも騙した事になるだらう！ 決り切つた話だ！」

彼女はそれに對して罪人の如くに抗争し、そんなら證據

を見せろ、と私に迫つて来る。

證據を！……

凡そ人間の心の奥底に萌し得るものと想像せられるあらゆる見下げ果てた墮落にもまさつたこのやうな悪辣手段を發見した時、私はまるで打ちのめされるやうな氣がした。

私は頭をうなだれ、彼女の前に跪いて、ひたすらあはれみを乞うた。

「お前はその女の言葉を本氣にしたんだね！ 僕が、お前から別れたがつてゐるといふやうな言草を信ずる事が出来たんだね。ところが僕は何時でもお前の忠實な親友であつた、お前に執着してゐる夫であつた、さうだ、僕はお前なしには到底生きては居れないんだ。お前は僕の嫉妬をこぼしたね……そして僕は誘惑しようとして附き纏ふやうな女は、一人残らずお前に訴へたぢやないか——ほんとに一人の例外だつてありはしない。それなのに、お前はそんな女の云ふ事を信じたんだね！ ほんとうに信じたんだね！」

と、不意に彼女もさすがにあはれみの念を起す！ 突然眞直に何も彼も打ち明けてしまはうといふ氣になつて、實はそんな友達のおしやべりなどは本氣になかつたのだ、と白狀する。

「そんなら矢張りお前は僕を騙したんだね……さあ云つて

御覽、僕は宥してやるんだから！……とにかくこの堪らなく恐しい暗い思ひから、僕を解放しておくれ！……どうぞ云つてしまつておくれ！……」

然し彼女は何んにも云はない、そして只、Y氏を「情ない人」だと云つて烈しく罵るばかりである。

「情ない人」——私の最親最愛の親友を！

私は只もう死にたくなつた！ この恐しい生存は私には堪へ切れなくなつた！……

午餐の時は、マリアは私に向つて懇切を極めた。私が寢室に退くと、彼女もやつて来て、ベッドの縁に腰かけて、私の手を握り、私の目に接吻し、遂には身を揉みながらよよと泣き崩れてしまつた。

「何故泣くの、お前、心配事があるならすつかり打ち明けておくれ、僕に慰めさせておくれ！」

彼女は私の寛厚、私のやさしい感情、私の慈悲心、それからどんな情ない人間にも及ぶ私の博大なる同情といふやうな事に就いて、連絡のない、切れぬ言草を吃り出した。

何といふわけの分らない話だらう！ 私が妻の不貞を責める、すると彼女は私に甘えかゝつて私を褒めちぎるといふのだ！

然しながら火は既に點ぜられた、そして焔はばつと燃え上つた。

矢張り彼女は私を騙したのだ！

私はその相手を知らなければならぬ！

その次の一週間は、私の暗澹たる生涯の中でも最も暗澹たる一週間であつた。

私は、生れながらに自分に遺傳し、或は教育に依つてこれ迄に得て来たあらゆる原則を破つてまでも悪戦を戦はなければならぬことになつて来た——即ち私は一つの犯罪を企てようとするのだ。私は最後の手段に訴へて、マリア宛てに来る書狀は残らず封を押切り、自分は今どんな男を相手にして戦はなければならぬのかを知らうと欲したのだ！ 私自身は妻を絶對に信賴して、自分の不在中に来る書狀はみんな讀むことを許して置くのではあるけれど、私は今更にこの信書の祕密の神聖なる掟を、共同生活に於ける最も微妙な不文の義務を破り棄てようとする罪の恐しさに戦いた！

然し私は遂に思ひ切つて坂路を迂り下りた。私はもう祕密といふやうな事はちつとも尊重しないやうになつてしまつた。ぶる／＼ふる／＼ふる／＼ふる／＼或る日彼女へ来た手紙の封を切つてしまつた。

それは彼女の第一號の友達なる、あの山師女から来たものであつた。

この女はこの手紙の中に、嘲笑的な、輕蔑的な文句を列ねて、私の發狂云々の事を並べ立て、神が私の狂へる精神の最後の閃きを消し去つて、一刻も早くマリアをこの受難の苦みから救ひ出してくれるやうにとひたすら神に祈つてゐるのであつた。

私はその中から最も破廉恥な文句を書き抜いて、手紙は夕方のでマリアに渡す爲めに、もとのやうに封をした。時刻が来ると私は妻にその手紙を渡した、そして彼女の顔色を覗き込む爲めに彼女の側に座を占めた。

私の死を祈つてゐる條——それは二ページ目の上の方にあつた——に來ると、彼女は何と思つたか、亂暴に笑ひ出した。

そんなら、私の渴仰して止まぬ我が妻は、私に死んで貰ふ他には、その良心の苛責から免れる途がないのか。彼女の罪の結果から免れる最後の希望は、この私が一刻も早く死んでしまふ事の他にはないといふのか。私が死ねば、彼女は私の生命保険の金と有名な詩人の年金とを手に入れる事が出来るだらう、そして再び結婚しようと、又は浮氣後家として好き勝手な眞似をして遊び暮さうと彼女の勝手であ

る！ 私の渴仰して止まぬこの女が！……
Mortuus sum! (余は今將に死なんとす) 私は今や私の唯一の幸福となつたアブサンと、私の昂奮した頭を鎮めてくれる球突に耽つて、免れ難い破綻の日をわざと早めようとする。

× × × × × × × × × ×

さうしてゐる中に今迄のすべての葛藤よりもつと質のよくない、新しい悶着が生じた。私にくらか思ひを寄せてゐるやうに見せかけてゐたあの閨秀作家が、今度はマリヤを手に入れてしまつたのだ、そして私の妻は、又もいやな噂の種になる程彼女に惚れ込んでしまつた。すると今度はその女の仲間の女が嫉妬を起す、そしてその嫉妬なるものが又あの不快な噂を一層ばつと擴めるばかりで、それを打ち消すどころぢやなかつた。

或る晩ベッドの中でマリヤが、あなたはあのZ嬢に惚れてゐるんぢやないかと訊ねた。

「いゝや、飛んでもない話だよ！ あんな下等な飲んだくれなんか！ まさかお前、そんな事を思つてやしないだらうね？」

「ところが、あたしあの人に首つたけなのよ！」と彼女は答へる。「ほんとに變ねえ！……あたしあの人と二人切り

でゐるのが何だか恐くつてたまらないのよ！」

「どうして？」

「どうしてだか分らないけれど！……あの人ほんとにたまらない程いゝ所があつてよ……あの様子が……」

「さうかなあ……」

× × × × × × × × × ×

一週間経つてから、我々は巴里から友達を——何の遠慮も偏見もない美術家連をその夫人と一緒に招き寄せた。

すると男達は來たが夫人達は來なかつた、そして來られないといふ申し譯は、我々の感情を少からず害した程に見え透いた嘘であつた。

思ひ切つた馬鹿騒ぎの無禮講が始まつた。男達の見苦しい振舞は、我慢がならない程に私を憤慨させた。

彼等はマリヤの二人の女友達をまるで淫賣婦かなんぞのやうに取扱ふのだ。酒正に酩酊にして混亂の眞最中、私の妻が幾度も或る若い士官に接吻をさせてゐるのを私は見付けた。

私はたまらなくなつて、この馬鹿者共の頭上に球突の棒を振廻した、そして詰問した。

「この方はあたしの幼馴染よ、親類なのよ！ どうぞ笑ひ

者になるやうな眞似はしないで下さいな！」とマリヤは答へた。「それに、人の見てゐる前で接吻するのは露西亞の習慣ですよ、そしてあたし達は露西亞の臣民なんですもの。」
「嘘を吐け！」と二人の友達に叫んだ。「何、親類だつて？ 飛んでもない！ 御親類筋が聞いて呆れらあ！」
私はもう少しで人殺しになるところであつた。私はもういつそ……

× × × × × × × × × ×

然し、子供達を孤兒にしてしまふといふ事を思ふと、一旦振り上げた腕も鈍つた。

客が去つてマリヤと二人切りになると、私は彼女に相當の懲罰を與へようとした——

「賣女奴！」

「おや、何故？」

「賣女のやうな眞似をするからさ！」

「無論、さうとも、僕は嫉いてる、嫉妬をしてゐる——僕の名譽の爲めに、僕の家族の品位の爲めに、僕の妻の體面の爲めに、僕の子供達の將來の爲めにだ！ お前があんな下等な眞似をするもんだから、立派な奥さん達はもう僕達

を相手にしやしないよ。大勢の面前で、あんな風に男に接吻をさせるなんて！ お前には分らないのかい、お前は狂人なんだ——何を云はれようが目と耳を塞いで、あらゆる義務觀念を棄て、しまつて平氣である以上は立派な狂人だ！ 若しこれからもあんな眞似を止めなかつたら、僕はお前を監禁してしまふからさう思へ、そして先づ手初めに、今後あんな女達とつき合ふ事は一切嚴禁だぞ。」

「一體あたしを罵つて、どんな人でも誘惑させようとした張本人はあなた御自身ぢやありませんか。」

「畏をかけてやつたのさ、そしてびつくりさせようとしたのさ！」

「それにあなた、何か證據があつてそんな事を仰しやるの——あたしとお友達との間にあなたが疑つてるやうなそんな事があるといふ？」

「證據、そんなものはありやしないよ。然し僕はお前の白狀を聞いてゐる——お前の皮肉な話。そしてお前の友達のが僕に話して聞かしたぢやないか、あの女は國にゐたら、風俗を害する行爲の爲めに追放の刑に處せられるところだつたつて？」

「あなたは一體惡徳といふものを認めていらつしやらないやうに、承りましたけれどね？」

「あゝした女達がそんな真似をしてたのしんでゐるだけなら、いくらたのしんでもそれはかまはないさ、僕の家族にちつとも関係のない間はね！ 然しお前の所謂「特性」なるものが、我々に危険を感じさせるやうになつたその瞬間から、それは我々にとつて有害な行爲となるんだよ。哲學者としての自分の考へでは、この世の中には所謂悪徳といふやうなものはない、あるのは只肉體的及び精神的缺陷だけだといふ事は事實だ。そして近頃佛蘭西の議會でこの不自然な悪徳が問題になつた時にも、主なる醫師の意見では、市民各自がその利益を害せられる場合の他は、國法がそんな事に干渉す可きではないといふ事に一致したんだよ。」

然し彼女にこんなお説教をしたつて何にならう——いつそ魚達に説教をして聞かした方がましだ。只動物的本能に盲従するより他に能がないこんな女に哲學的の差別を知らせようとかゝるなんて！

かうしたうるさい評判の真相をつかまへる爲めに、私は巴里の或る腹心の友達に手紙を書いて、一切を打ち明けてくれるやうにと頼んでやつた。

その返事に私の友達は残らず打ち明けて知らしてくれたい——一般にスカンディナヴィアの人々の信ずる所に依ると、私の妻が許す可からざる不自然な愛の傾向を持つてゐる事

は事實である、それから、あの二人の丁抹婦人は同性愛の女として巴里でも有名であつて、よく巴里のカフェーに同傾向の婦人達と姿を現してゐる……

我々は宿屋に借りがある上に、金がなかつたので、此處から逃げ出す事が出来ない。ところが我々には丁度仕合せにも例の丁抹の婦人達は、近所の美しい娘を誘惑したといふので百姓達の怒りを買ひ、止むを得ず俄に出發しなければならなくなつた。

然し彼等との交際は既に八ヶ月間も繼續して、そんなに無造作に断ち切るわけには行かなくなつてゐたので、又この娘達は何れも良家の子女で立派な教育を受けたものであつたので、尙又、彼等は我々の逆境の仲間でもあつたので、私は彼等の去り際を、恥かしくない、花々しいものにしてやりたいと思つた。その爲めに或る若い畫家のアトリエで彼等の爲めに送別の宴を開く事になつた。

もう酔ひが十分に廻つてデザートになつた頃、マリアは抑へ切れない感情を洩らす爲めに起ち上つて、「ミニオン」の中の有名なメロデーに従つて作曲した一つの短い唄を歌ひ出した。彼女は唄によつて愛する人への別れを告げたのだ。彼女は熱情と眞の感情とを籠めて歌つた、彼女の扁桃形

の目は涙に溢れて、きら／＼と蠟燭の灯影にまたゝいた、彼女はさながら心臓を掴み出したやうな眞情の流露を以て歌つたので、私でさへも動かされ魅惑された程であつた。

彼女の唄には純朴さがあつた、眞摯な物が籠つてゐた、この女が同性の戀の唄を歌ふのを聞いてゐても、ちつとも穢しい感じは浮ばない程に、それは人を動かす力があつた。そして不思議な事には、その時の彼女には中性的な「男女」らしい様子も表情もまるで見えなかつた、それは只、愛してゐる、優しい、神祕的な、謎のやうな、解すべからざる一箇の女性であつた。

ところでこの美しい戀の對象たる御本尊は、赤ちやけた髪の毛に、男のやうな顔立ち、鉤鼻、圓い頰、黄色い目、過度の飲酒に腫れぼつたくなつた頬、扁平な胸、曲つた指……要するに、人間の想像し得る最も醜惡な呪ふべき怪物で、多分どんな下賤な男でも見向きもしまいと思はれるやうなタイプの女である。

歌ひ終るとマリアはこの怪物の側に坐らうとした、するとその怪物は立つてマリアの頭を兩手に抱へ込んで、口をあんぐり開いてマリアの唇を、接吻するのではなくて、ずば／＼吸ひ込んだ。少くとも肉感的な戀だ、と私は思つた。私はこの赤髮の女と一緒に飲んで、すっかり彼女を酔拂

はしてしまつた。彼女は私の前に跪いて、おびえてゐるやうな大きな目で私の顔を見上げて、それから壁にぐつたりよりかゝつて、まるで白痴の女のやうにしく／＼しゃくり上げるのであつた。

私は未だ曾て人間の形をした物の中で斯くも醜惡なる物を見た事がなかつた、そしてそれからの婦人解放運動に關する私の意見は、この時の印象で決つてしまつたのだ。

この宴會は往來に於ける一つの醜穢な出来事の後に終りを告げた。畫家の娘が歩道の縁石の上に坐つて二つの吐瀉物の間に泣き啼えてゐたのだ。

翌日二人の女友達は出發した。

× × × × ×

マリアはその後恐るべき危機を通過しなければならなかつた、それは實際私に同情の念をさへ起させる程であつた、それ程までに彼女は、行つてしまつた友達をなつかしがつた、それ程までに彼女は惱んだ。彼女は偽りならぬ失戀の悩みを見せ付けた。彼女は惱ましげに一人で森の中をうろつき廻つたり、戀の歌をうたつたり、あの友が好んでよく行つた場所へ出かけたたりして、深く傷つけられた心のあらゆる徴候を見せた——私は、氣が變になつたんぢやないかと

思つて心配になつた位であつた。彼女は今や慰める術もなく不幸なのだ、私はどうしても彼女の氣を紛らす事が出来ない。彼女は私の愛撫を素氣なく退け、接吻をしようとすれば、牙聲に突き飛ばす。私は彼女の愛するあの女友達を死ぬ程憎み始めた、あの女が彼女の愛を私から奪つてしまつたのだから。

マリアはこれ迄よりも一層無遠慮になつて自分の失戀の歎きを人の前に隠さうといふ氣は少しもない。あらゆる彼女の言葉には失はれたる戀の歎きの反響がある。實際、親しく見ない人には、とてもほんとうには出来ない位の話だ。

この懊惱の最中、彼等の間には熱心な手紙の交換が始まつた。あの女のお蔭で罪もない自分までが空閑を守らせられる苦しさは腹が立つて、或る日私はその女から來た手紙に手を付けた。これこそほんとうの戀文だ！ 私の小さな天使、私の仔猫、伶俐な、立派な、やさしい、氣高いマリア様——あの亂暴なあなたの御亭主は薄のろの動物です……等と。それからその手紙には、マリアはどうしておびき出したらいいか、どうして私の手から逃げ出したらい……等といふことを細々と語つてゐた。

私は猛然とこの戀仇にむかつて起ち上つた。その晩月光の下に、お、神よ、マリアと私との間に一つの争鬭が、體

と體との格闘が始まつた。彼女は死物狂ひに私の手に嚙り付いて來た。私はまるで猫を水の中へ投げ込まうとするかの如くに、彼女を川端まで引きずつて行つた——と、子供達の顔が私の頭に浮び上つた、そして私を正氣に返らせた。

私は自殺の準備をした、然し死ぬ前に、私は自分の生涯の歴史を書いて置かなければならないのだ。(ストリンダベリの「二八八六」年)を指す)

× × × × ×

この書の第一部は完成した、すると丁度その時、丁抹の婦人達が夏期を過す爲めに近所に家を借りたといふ評判が村中に擴がつた。

私は即刻荷物を整へた。そして我々は獨逸語の通用してゐる瑞西の地方へ向つて旅立つたのであつた。

四

アルゴヴィ州の愛すべき土地よ！ こゝはまことに古代希臘のアルカディ地方の如くに牧歌的情調の溢れてゐる土地である。郵便局長はその家畜の群を悠々と牧場に追うて行く地、聯隊長は唯一つの貸馬車を町の方へがた／＼驅つて

行く地、若い娘達は悉く純潔なる處女のまゝに結婚しようとする地、少年達は標的を射たり、太鼓を叩いたりする地。……一の理想國、眞の武陵桃源、黄金色なすピールの泡立ち湧く國、爾陽詰の産地、九柱殿、ハブスブルク家、ウィルヘルム・テル、鄙びた村祭、單純な心から生れ出る素朴な歌、牧師の妻及び牧師の家の牧歌の祖國！

我々のいら立ち騒いだ心にもさすがに平和は歸つて來た。私は氣分が恢復した、そしてマリアも最早戦に倦んで、今は飾りけのない無頓着の氣分に浸つてゐる。二人の間の破裂を避ける避雷針として、罪のない遊戯が我々の家庭に入つて來た。そして我々は危険な會話をとり交す代りに賽を轉がして遊んだ。刺戟的なアブサンやワインの代りに、無害な上等のビールを用ゐる事にした。

環境の影響は直ぐに感知せられた。人間の生活があんなに凄しくあれ狂つた暴風の後にこんな明るく快活になり得るものか、人間の精神的彈力が、よくこれ程ひどい打撃に堪へ得るものか、人間がその過去をこんなになややすく忘れ得るものか……私は只々驚くの他はなかつた。果ては、自分は最も忠實な妻の最も幸福な夫であるときへ思ひ込むやうになつた。

マリアは此處では交際といふ程のものもなく、友達もな

いので、少しの不平もなく母親としての役目を再び引受けるやうになつた。一ヶ月の後に子供達は、母親が裁つたり縫つたりしてくれた着物を着るやうになつた。彼女は子供達の爲めにその全時間を捧げて倦まなかつた。

彼女も今はさすがに衰へを感じ始めた、その享樂慾は減じ、中年の成熟が目立つて來た！ 或る日第一の絲切齒を失つた時の彼女の歎きは如何ばかりであつたらう！ あはれのマリアよ！ 彼女はさめ／＼と泣き沈んで、私をその腕にかき抱いて、どうぞいつまでもわたしを可愛がつて頂戴と哀願した！ 彼女は何時の間にかもう三十七歳になつてゐるのであつた！ 髪の毛は薄くなつた、乳房はまるで嵐の後の浪のやうに平になつた、あの小さな足は階段の昇降にさへ疲れるやうになつた、肺ももう以前のやうな壓力では働かなくなつたのだ。

これに反して私自身は今や我が更生の、第二の春を迎へんとして、男性としての力は生長し、健康は榮える男盛りの絶頂にあると云へ、自分の妻は今度こそ私の——私と子供達だけの物となるのだといふ事を思ふと、私は彼女が一層いとしくなるのであつた。畢竟彼女は自分の物だ、彼女は今やあらゆる誘惑に對して保護せられ、私の心遣ひにとり圍まれて、止むなくこのまゝに年老い、その生涯を子

今夜は疲れてゐるからと云ひ譯をして、おやすみの挨拶をしてから自分の室へ退いた。私は横になつて少し讀書をしてから寝入つた。

突然私はこの睡りから目ざめた。下のサロンで誰かピアノを弾いてゐる者がある、それから誰か歌つてゐる——マリアの聲だ。

私はがばと跳ね起きて、女中を呼んで、直ぐに妻のところへやつた——

「早く奥さんに云つてくれ、直ぐに止さないで、僕が出て行くからつてね——そして大きな棒を持つて行つて、みんなの見てゐる前でうんと躡をしてくれるからつて！」

するとマリアは直ぐに上つて來た、顔を赤くして、いかにも無邪氣な女のやうに見せかけて。そして、あなたは何故あんな變な事を云つてよこしたのか、何故わたしは友達と一緒に、他の奥さん達もゐる處にゐてはいけないのか、と食つてかゝつた。

「それがいけないといふんぢやないよ、僕を邪魔にしてサロンから追拂はうとするお前のずるいやり方が氣に食はないんだ！」

「あなたがさう仰しやるなら、ようござんす、あたし直ぐにやすみますから！」

このあどけなさ、この突然の服従！一體この女はどんな事をして來たんだらう？……

× × × × ×

秋の次には、雪の多い、暗い、淋しい冬がやつて來た。我々はあまり大きくはないこの宿屋の最後の客として、二人切りになつてしまつた。食事は寒さの爲めにレストランの方の入り込みの廣間でとる事にした。

或る日朝の食事の時、がつしりした體格の、一見雇人らしく見えるが可なり立派な風采の男が一つの食卓に腰を下して、葡萄酒を一杯註文した。

マリアはいつもの放縱なやり方で、ちつとその客の顔を見詰めて、まるで尺でも取るやうにその男の體をじろく眺め廻してから、何やらちつと思案に沈み出した。

その客は間もなく出て行つた、見知らぬ婦人にあまりじろく／＼と見守られたので、明かにどぎまぎしながら。

「好男子ね！」とマリアはホテルの亭主の方へ振向いて云つた。

「以前はうちの門番だつたんです！」と彼は答へた。

「おやほんとうに？ 全く堂々たるものね、とてもそんな事をしてゐた人とは見えませんわ！ ほんとに好い男ね！」

それから彼女は尙も細かい事をそれからそれへと云ひ出して、その男の男らしい美しさを褒めたゝへたので、亭主もびつくりしたらしい。

翌朝廣間へ入つて見ると、堂々たる前門番氏はもうちやんと昨日と同じ席に坐り込んでゐる。

晴衣を着て恐しくめかし込んで、頭や鬘を綺麗に手入れして、この女はもう此方の物だと云つたやうに確信のある顔をして納まり返つてゐる。この野人は我々に會釋して、妻から丁寧な挨拶をされると、まるでナポレオン皇帝にでも成り上つたかの如くにふんぞり返つて威張り出した。

三日目には、彼はよく火蓋を切る覺悟でやつて來た。そして如何にも門番らしい下卑た色つばい態度で單刀直入にマリアを目掛けて話し掛けて來た。この男は、女房を射落さんとすれば先づ亭主の方から手に入れにかゝる慣用手段に依つて時間を空費する事なく、妻を相手取つて直接談判と出かけて來たのである。

實際とても信じられないやうな話だ！

然し事實は——マリアは夫や子供達のゐる前でそんな男の御機嫌取りが嬉しさうな顔をして、愛想よくべちやくちやしやべり出したのだ。

どうぞお前の名譽を大切にしてくれと願ふやうにしながら

ら、私は今一度彼女の迷ひをさましてやらうと試みた。すると彼女の答へは例に依つて例の如きものであつた——

「あなたはほんとにいやらしい方へ方へとばかり氣を廻していらつしやるのね！」

すると間もなく第二のアポロともいふ可き男が加勢にやつて來た。この男は村の煙草屋で、ぶんぐりした小男で、マリアがよく一寸した小買物をする店の亭主であつた。この男の方は例の門番の男よりは一段上手で、先づ私の方から手に入れようとかゝつた、そしてこの男はもつと大膽でもあつた。初めての出會ひ頭に彼は厚かましくもマリアの顔を孔のあく程見詰めてから、高い聲で亭主に叫んだ——

「ねえ、何て綺麗な家族だらう！」

マリアの心には直ぐに火が點いた、そしてこの田舎紳士はそれから日毎にやつて來る。

或る晩彼は酔つてゐた、従つていつもよりも一層無作法であつた。我々が雙陸をしてゐる處へやつて來て、マリアにその遊戯の仕方を説明してくれと云つた。私は出來るだけ氣に障らぬやうな鄭重な言葉を使つて、彼を遠ざけようとした。するとその男はおとなしくもとの席に歸つて行つた。私よりも感じ易いマリアは、その「侮辱せられた人」に對して何とか申し譯をしなければならぬと心得て、早速

に浮んだ問ひを彼にしかけた——
「あなた球突きをおやりになつて？」

「いゝえ、奥さん、やつても拙いんです……」

それから彼は立ち上つて、我々に近寄つて来て、シガーをすゝめた。私は斷つた。彼は今度はマリアの方へふり向いて同じ調子で——

「あなたは如何ですか、奥さん！」

彼女の爲めにも、その煙草屋の爲めにも、それから又私の家族の將來の爲めにも仕合せだつた事には、妻も私と同じやうにそれを辭退した、然し甘つたれた調子の感謝の言葉を以て。

一體この男はどうして、レストーランで、上流の婦人にその夫の面前でシガーをすゝめるやうな大膽不敵な眞似を爲し得るのであらう？

それともこの私が並外れの嫉妬焼きの阿呆なんだらうか？ それとも又、彼女は出會ふ程の男に、情慾を煽り立てるやうな劣等な嬌態を見せるのだらうか？

我々の室へ退くと、私と彼女との間に一つの場面が持ち上つた。この女はまるで夢遊病者だ、どうしても私が呼び醒ましてやらなければならぬのである。彼女は眞逆様に破滅の淵へと落ち込みながらちつとも氣が付かない。私は彼

女の行動を微に入り細を穿つて解剖して、その舊惡や新しい罪を發き立てた。

一言も答へずに、眞蒼な顔をして、夢見るやうなうつと

りした目をして、彼女はおしまひまで私の話に聞き入つた。それから立ち上つて、下の寢室へ降りて行つた。然しこの度は——こんな事をしたのは生れて初めてだが——私は探偵犬のやうな卑しい眞似をしてしまつた。私はそつと階段を降りて行つて彼女の部屋の扉の前に立つて鍵孔から中を覗き込んで見た。

ランプの光をばつと浴びて、子守女が私の眞正面に、よく見える位置に坐つてゐる。マリアはひどく昂奮して、部屋中を歩き廻り、私の疑惑は不審だといふことを一生懸命にしやべり立てゝゐる、彼女はまるで自分の罪を辯護してゐる被告の如くであつた。彼女は頻りに私の云つた言葉を繰返した、それを残らず吐き出してしまつて、早くそんな物から釋放せられてしまはうとするかのやうに。

「それでもあたしは悪い事はしなかつたのだ、悪い事はちつとも……する氣さへあれば、機會もなくはなかつたんだけれど……」

それから彼女は二つのコップにビールを注いで、子守女とコップをかち合せた。それから彼女は子守女の側にびつたり

坐り込んで着物をぬがせてから、この新しい「友達」の遅く發育した乳房の間に頭を突込み、腰のあたりに抱き付けて、接吻をさしてくれとせがむ……

情ないマリアよ！ 不幸なる彼女は、私を見棄て、彼女の良心の苛責を癒し得る唯一人のこの私を見棄て、こんな處にその慰めを見出さうとしてゐるのだ。と俄に、彼女は立ち上つて、耳を澄して扉の方を指して云つた——

「誰かゐるらしいわ！」

私はそつと離れた。

私が再びもとの處に歸つて覗き込むと、マリアは半ば裸體になつて、子守女にその肩を見せびらかしてゐるのが見えた、然し子守女は格別それに心を動かされたくも見えなかつた。それから彼女は再び辯護をやり出した——

「あの人はどうも氣が變になつてゐるらしいわ！ たとひあたしに毒を盛らうとしたからつてちつとも不思議はありはしないわ……あたし、時々たまらない程胃が痛むことがあるのよ……けれど、まさか、あたしそんな事を信じたくはないわ……あたしいつそ芬蘭へ逃げてつてしまはうかしら……ねえ、お前、どう思つて？ けれど、そしたらあの人、屹度死んぢまふわ……そりやあの人、子供を可愛がつてるんだもの！」

これ良心の苛責でなくて何だらう？……あらゆる秘密の思ひに責めさいなまれ、恐怖に捉へられて、彼女は他の女の胸に隠れ家を求めようとする！ 淪落の女、不貞なる罪の女——然し、何よりも先づ不幸な女だ！

私は懊惱のあまり床の上に轉輾して一夜を遂に睡らずに明した。朝の二時頃になつて、マリアが悪夢に驚かされて物凄叫びを揚げ始めた。私は可哀想になつて彼女を惱ます夢魔を追拂つてやる爲めに壁をどん／＼叩いた。こんな事はこれが初めてではなかつた。

翌朝彼女は昨夜は有難うと禮を云つた。私は彼女をねんごろにいたはり、憐みながら、いつまでも強情を張り通さずに、彼女の最上の、唯一の友達である自分には心の苦みを残らず告白してしまつた方がよくなるかと思つた。

「何を告白すればいゝんですの？……だつてあたし、何もそんな事を申し上げる覺えがないんですもの。」

彼女が若しもこの時洗ひ浚ひ私に白狀してくれさへしたら、私はどんな事でも宥してやつたであらう、彼女の良心の苦悶は實にそれ程の同情を私に起させたのだ、彼女が犯したあらゆる罪にも拘らず、否むしろ、その淺ましい罪の故にこそ、私は彼女をそれ程までに深く愛したのである。

それは只不幸な女に過ぎなかつた！ 決して悪い女ではな

い、不幸な女に對して、どうして手を擧げて打つ事が出来るよう。

然し彼女は思ひ切つて私の烈しい疑惑を解いてはくれず、相變らず頑固な抵抗を試みた。彼女はもう私を氣が狂つてゐるものと思ひ込んでしまつてゐるのだ。自己保存の本能から彼女は事實の真相をごまかす架空の物語を捏造し、それが僅に良心の苛責を免れるはかない頼みとなつてゐるのであつた。

六

新年を迎へてから我々は獨逸へ向つて旅立つた。コンスタンス湖畔に我々は居を定めた。

家長權が今尚ほ行はれてゐる軍國主義の國なる獨逸に來ては、マリアは俄に肩身が狭くなつた。此處ではもう女性の權利だとか何とかいふ寢言に耳を傾けて感心してゐる人間は一人もゐない。此處では丁度その頃若い女が大學の講義を聴くのを禁ぜられる事になつたばかりであつた、こゝでは士官の夫人の持參金は、自由に處分する事の出来ない特殊の資産として、陸軍省に保管せられるといふやうな事さへ平氣で行はれてゐる國である、此處は、男子のみが、家計を維持する夫のみが、國家の官吏に任命せられる國である。

マリアは此處へ來ると、まるで陥穽にでも突き落されたかのやうにもがき出した。先づ何とかして、婦人達の間で私の事を悪し様に云ひふらして私を全く孤立させようとしたが、この第一の試みは、誰にも相手にされずに、まふまふと失敗に終つた。私が女性に自分の味方をされたのは、生れてこの時が初めてである。そして、かうなつては流石のマリアもすつかり參つてしまつて、もう手も足も出ない。一方私の方は士官達と親しく交際するので元氣は恢復し、順應作用の結果として、自然男性的の態度や動作を取返すやうになつた。十年間の長い年月、精神的に殆ど去勢せられてゐた男性が再び私の裡に勃起したのである。

同時に私の頭髮は、マリアのお氣に入りの額髪は止めて、例の獅子の鬘を自由に蔓るに委した。ヒステリー女の御機嫌を取結ばうとする間斷なき習慣の爲めに半ば潰されてしまつた私の體量は、再び朗々たる響きを回復した。落ち窪んだ頬は豊に肉付いて來た。年齢は最早四十の坂に近付かうとしてゐたが、私の體格は却つて全體に於て發育して來た。同じ家に住んでゐる婦人達と知己になつて、私はよく彼等の會話に仲間入りをするやうになつた、これに反してマリアは、これ等の婦人達にはあまり好かれず、とかく遠ざけられ勝ちであつた。

を注ぎ込むやうな婦人達であつたのだ。

× × × × ×

彼女は私を恐れ出した。或る朝、我々の結婚生活の最近六年間には未だ曾てなかつた事だが、彼女は私がまだ床に入つてゐる間に、すつかり身支度を整へて私の寢室に顔を出した。私はこの思ひがけない現象の理由を解する事が出来なかつた、彼女は色々の申し譯を云つてゐたが、その言葉の端で想像すると、彼女は毎朝私の寢室のストーヴに火を入れに來る女中に嫉妬してゐるらしい事が分つた。同時に彼女は、私の近頃の様子が一體に氣に食はないと云ひ出した。

「あたし男らしいといふ事が大嫌ひなのよ、そしてあなたがいやに威張りくさると、あたしもうあなたを厭になつてしまひますわ。」

然り、然り、彼女が愛したのは——若しいさゝかでも愛したとすれば——常にお小姓であり、小犬であり、弱き者であり、彼女の『坊や』であつたのだ。悍婦は由來その夫の裡に存する男性的なる物を愛しないものである——たとひ他の男の場合に於てはこれを熱愛し崇拜しても、である。

然し私は周囲の婦人達には益々氣に入られて來た。私は好んで彼等と交り、眞の女からのみ發する氣持のいゝ温情にすつかり包まれてしまつた——彼等こそ、男子がひとり女らしい女にのみ感じ得る敬愛の念と、純眞な恭順の念と

さて、その頃我々は再び故國へ歸る事が出来るであらうかどうかを相談し始めた。昔の不安が再び私に甦つて來た、昔の友達とまた友情を結ぶ事を私は躊躇した、彼等の中には果して妻の情人も交つてゐるだらうかといふ事は、私にとつては重大な問題であつた。このはつきりしない不安に結末を付けてしまふ爲めに、私は精密な探索を始めようと決心した。

既にその以前にも私は、妻の不貞の風説に關して、瑞典にゐる數名の友人に質問を發したのだが、彼等から偽らぬ答へを誘き出す事は無論不可能であつた。

人々は只『母』に對してのみ同情を寄せてゐた！『父』を滅亡に陥れようとして脅すこの笑ふべき風説なぞを誰か心にかけてくれる人があらう？

これを詮索するに就いては、最新の心理學の方法に頼つて讀心術を應用して見たら、といふ事を私はふと思ひ付いた。私は晩に婦人達など、一緒に集つた席上で、ピシヨーフ一派の方法を一種の遊戯でもあるかのやうに何氣なく持ち出して應用して見た。マリアはそれを怪しんだ。彼女は私

を降神術士と罵つたり、迷信的な自由思想家だと云つて責めたりして、あらゆる不潔な言葉を浴せ掛けた——つまりこの實驗は、自分の身にとつて危険だと見て取つたので、これを避ける爲めに、あらゆる手段を盡したのである。彼女に油断をさせる爲めに、私は負けてしまつたやうな風を装つて、催眠術を止めてしまつた、いつか彼女が油断してゐる時に、二人切りの處でその不意を襲ふ爲めにある。或る晩、食堂で二人だけがさし向ひになつてゐた時、私は話を自然に體操術の方へと持つて來た。大分熱心に云ひ争ふ程に彼女の興味を喚起した後に、私の意志の力に作用せられた爲めか、それとも私の暗示に従つて當然生ずる聯想作用の爲めか、彼女はマッサージュに就いて話し出した。その話から彼女の聯想は直ちに、マッサージュに依つて惹き起される苦痛の方へと飛んで行つた、そして、醫師の手術を受ける場合を回想して叫んだ——

「え、ほんとうに痛いよ、あのマッサージュつてものは！ あたし思ひ出したばかりでも痛くなる位ですわ……」

もう澤山！ 彼女は俄に死人のやうに蒼白になつて、それをかくす爲めに首をうなだれる。彼女の唇は無理に何かよそ事を云はうとするが、適當の言葉が見付からないので、只びく／＼慄へてゐる、彼女の目は眩しげにぱち／＼瞬く。

この恐しい沈黙の時間を、私はわざと引延さうとする。これこそ——私が發車せしめて蒸汽の全力を以て最初から目論んだ方向へと走らせた觀念の列車である。彼女は一生懸命にブレーキを掛けようとするがもう遅い。既に深淵は目の前に口を開いてゐる。然も機關は止まらない。あらゆる限りの努力を以て彼女は身を起し、ちつと捉へて動かさない私の眼光から身を振りもぎつて、一言も云はずに室から出て行つてしまつた。

命中だ！

數分の後彼女が歸つて來た時には、その顔色から緊張は消えてゐた。彼女はマッサージュの効能を實驗して見せて上げると云ひながら、私の椅子の背後に廻つて、私の額を撫で出した。ところが彼女の爲めには丁度運悪く、我々の前には鏡が立つてゐる。私はそつとその方へ目をやつて見た、すると彼女の困惑して血の氣を失つた顔色がちらと映つて、そのうろたへた眼は一生懸命に私の顔色を窺はうとしてゐる……そして二人の探り合つてゐるやうな眸が鏡の中でひたと交叉した。

何時になく彼女は子供のやうに私の膝の上に坐つて、甘つたれたやうにその腕を私に巻き付けて、ひどく睡くなつた、と瞬く。

「お前、一體どういふ悪い事をしたんだい、こんなに僕に甘えかゝるなんて？」と私は問ひかけた。

すると彼女は額を私の胸にこすり付けて顔を隠した。それから接吻をして、おやすみを云ひながら出て行つた。

この證據だけではこの女を裁判官の前へ突き出すわけには行かない事は事實であらう、然し、彼女の正體を一から十まで掌中に握りしめてゐるこの私にとつては、それだけでも彼女の罪を證據立てるに十二分なのだ！

おまけにこんな事實まであるからには尙更の話だ——といふのは、あのマッサージュ先生は、私の義弟の妻とも怪しからぬ關係があつたといふので、近頃その家からも追ひ出されたといふ。

七

私は自分の名譽を臺なしにしてしまふかも知れない危険を恐れて、斷じて故國には歸らない事にした。其處へ行けば、曾て我が妻の情人であつたかも知れないといふ疑ひのかゝつてゐる男達と毎日のやうに顔を合せなければならぬいだらう、それは私にとつてたまらない事であつた。妻に欺かれた夫にふりかゝるあらゆる嘲笑を免れる爲めに、私はヴィーンをさして落ち延びた。

ホテルにたつた一人切りであると、私は又も、渴仰して止まなかつた昔の彼女の幻影に悩まされ出した。ちつとも仕事をやる氣にならずに、私は彼女に手紙を書き出して、毎日二通の手紙——といふのは即ち戀の手紙であるが——を書き送つた。見知らぬこの古い都は私にとつてまるで墓地のやうな感じがする。私はさながら幽霊のやうに町の群衆の中をさ迷ひ歩いた。突然私の空想が動き出して、この寂寞境を人間で一杯にした。私はこの死滅せるが如き環境の中へマリアを持つて來る爲めに、一篇の詩的な物語を空想に描いた。と忽ち、建物や人間等の不活潑な物質が、すべて皆生きて動き出した！ 私は私のマリアが豪い歌うたひになつたと想像して見る。尙もこの夢を實現させる爲めに、そしてこの美しい都を彼女の姿を浮き上らせる爲めの舞臺とする爲めに、私は音樂學校の校長を訪ねたり、感じが鈍くなつて、劇場などは大嫌ひになつた自分のやうな男が毎晩のやうにオペラやコンサート通ひをやつた。私の見たあらゆるものを、私の聞いたあらゆる事をマリアに知らせるやうな時、非常な興味で私に湧き起つた。オペラから歸ると私は直ぐに机にむかつて、今夜は何々嬢かどんな風に歌つたかといふ事を詳しく彼女に書いて送つた、その際すべてがマリアに有利であるやうに比較されるのであつた。

畫廊の繪を見に行つても、私は到る處にマリヤの面影を見た。ベルヴェデーレの宮殿では、グイド・レニーのヴィーナスの前に小一時間も佇んでゐた——それは渴仰する我が妻に恐しく似通つてゐるので。

遂に私は彼女の體を戀ひ慕ふ郷愁に捉へられてしまつた、そして行李を引つからせて、最大急行で彼女の許へ歸つて行つた。あゝ私は既にこの女の魔の手に捉へられてゐるのだ、到底脱け出すべき術はない！

歸つて行くのは善いものだ！

私が書き送つた愛の手紙がマリヤの熱情を煽つたらしい。私は庭に立つて私を出迎へた彼女に飛び付いた、そして狂人のやうに接吻の雨を浴せた。私は彼女の頭を両手に抱へ込んで、云つた——

「お前は一體魔法を使ふのかい、小さな魔女さん！」

「まあ、何ですつて？……あなたあたしから逃げ出したんでせう——今度の旅行は？」

「さうだ、逃げ出さうとしたんだ！ けれどお前の方が僕よりは餘程強い……僕はもう降参するよ！」

私の部屋の机の上に赤薔薇の花束が載つてゐた。

「それぢやお前はまだいくらか僕を愛してゐるんだね？」
すると彼女はまるで處女の如くにはにかんで、顔を眞赤

に染めた……もう私は駄目だ、私の名譽も駄目だ、彼女の束縛から身を脱しようともがき苦むあらゆる努力も駄目だ——一度その束縛から脱れたと思ふと、却つてそれが戀しくなつて来るやうな自分なのだ！

X X X X X

それからまる一ヶ月といふものは、我々はまるで魔の國の春の中に暮した——我々は椋鳥のやうに囀り、限りもなく相愛し、何時解けるともない抱擁に酔うた。我々はピアノに伴つて合唱をやり、一緒に雙陸もやつた。最近五ヶ年間の最も甘美なる日と雖もこの時には及ばなかつた！

我々の結婚生活の秋の末に奇しくも甦れる春よ！ 我々はその間にも冬の忍び寄つて来るを思はなかつたのだらうか？

八

その後又もや彼女の桎梏の中に跪き苦まなければならぬ自分であつた。

マリヤは私が戀の甘酒に新たに酔ひしれてゐるといふ事を一旦承知してしまふと、再びもとの冷たい無關心に歸つてしまつた。彼女は最早なりふりに關はず、私がいくら願つ

ても、自分をなるべく美しく見せようとする身だしなみをしない、その結果は、無意識のうち夫に對する冷淡となつて現れるだらうといふことを私は恐れたのである。のみならず彼女の例の同性愛の悪癖さへも再び現れて來た、然しこの度は今までよりもつと危険で悲む可き傾向であつた、といふのはこの度は、年少の者に目を付け出したからである。

或る晩私は要塞司令官と、その十四になる娘と、我々の宿の主婦とその十五になる娘と、それにもう一人の同じ年頃の娘をさゝやかな晩餐に招待して、音楽をやつたりダンスをやつたりした。

十二時近くになつて——私は今でも尙ほ恐怖の爲めに戦く——少し酔つてゐるマリヤが娘達を自分のぐるりに集めて、みだらな眼付で彼等を眺めまはしてから、同性愛の女達がよくやるやうな仕方、彼等の口に接吻したのである。

客間の小暗い一隅からこの様子をぢつと眺めてゐた司令官は、この時彼女の振舞はどいふ性質のものであつたかが分つたらしく、今にも飛びかゝらんとする氣勢を示した。私はもう心の中に監禁や懲役や再びどうする事も出来ない恥辱をはつきりと見た……私は直ちに私の妻と娘達との集

りの中へ飛び込んで、娘達をダンスに誘ひ出した。

その夜二人切りになると、私はマリヤを自分の前に引き据ゑた。烈しいいさかひが朝に至るまで繼續した。彼女は酔つてゐるので、正氣では云へないやうなほんとうの事を打ち明けた、そして私が未だ曾て夢想する事も出来なかつたやうな恐い事をも平氣で自白した。

激怒に捉へられて私はあらゆる詰責と疑惑の言葉を百遍も繰返した、そして私自身でさへもよく考へて見れば少し突飛過ぎると思はれるやうな疑ひをも付け加へた——

「そして僕のこの奇體な病氣も……」と私は叫び出した。

「こんなひどい頭痛を起すあの病氣も矢張り……」

「まあ、そんならあなたはその病氣もあたしから貰つたのだと仰しやるの！」

……そんな意味で云つたんぢやなかつたんだ！ 私は只自分で氣の付いた青酸加里中毒の徴候の事を云はうとしただけなのだ。

この瞬間一つの記憶が私の頭に閃いた——それはその當時には殆ど私の意識には痕をも残さなかつた程に、私には有り得可からざる事と考へられた或る一事を思ひ出したのである。

私の疑惑は鋭くなつた、そして、あの裁判一件の後間も

なく受取つた或る無名の手紙にあつた文句を不意に聯想したのだ——その手紙の中でマリアは『セデルテルエの醜業婦』と呼ばれてゐたのだ！

一體これはどういふ意味なんだらう？ 私はその當時いろ／＼と考へをめぐらしても見たが、何等の結論に到達する事も出来なかつた。今こそ何か新しい事實が嗅ぎ出されるに相違ない。

彼女の先夫なる男爵が初めてセデルテルエでマリアと知り合ひになつた時、彼女はあまり健康でないらしい一人の少尉と半ば婚約の仲であつた。それだから氣の毒なグスタヴは、體のいゝお人好しの役目を演じさせられるところだつたのだ！……マリアが離婚してからもまだ男爵に感謝の念を抱いてゐるといふのは、かういふ事情に由来するものである、だから彼女は私に『あの人があたしを危険から救ひ出してくれたのです。』と話して聞かした事があつた。然し、どんな危険からか……それは云はうとしなかつた。

然し、『セデルテルエの醜業婦』？ 私は思ひあたつた——あの若い男爵夫妻がとかく引込み勝ちな生活を、交際もなく、招待といふやうな事も無い孤獨な暮しを送らなければならなかつたといふのも、確に貴族階級から擯斥せられてゐたからだ！

たりをしたゝかに蹴飛ばしてやりたくなる事があると、自白したあの謎のやうな言葉の意味も、やうやく呑み込めて来る。

彼女は無理にも母の口止めをしなければならなかつたのだらうか？ 恐らくはさうであつたらう。何故なれば、『何も彼も』打ちまけてお前達夫婦の仲を裂いてやるぞ、と度度母親に脅されてゐたんだから。

それから自分の母親に對するマリアのあの反感……男爵はマリアの母を何時でも『下司女奴』と呼んでゐた——それは全く、マリアの母はその娘に夫を掌中に丸め込む爲めの一切の手段を傳授したのだといふ男爵の告白に依つて説明するより仕方がないやうなひどい悪口である。

それ等の悉くが寄り集つて、いよ／＼逃げ出さうといふ私の決心を堅くした。逃げなければならぬ、どうしても逃げ出さなければならぬ！ 私は自分の名前も名譽も擧げて悉くその手中に委せてしまつたこの女の素性に就いて、出来得る限りの詮索をする爲めに、コペンハーゲンをさして旅立つた。

九

故國の人々に久しぶりで會つて見ると、彼等は私に就い

恐らくあのマリアの母が——前身は平民出の家庭教師で、マリアの父なる芬蘭の男爵を生け捕り、揚句の果てには、首も廻らぬ借金から免れる爲めに瑞典さして逃げて来たといふ曰く附きのあの女が——その貧窮を人目にかくす事の上手なあの寡婦が、その娘の體をセデルテルエで金に代へるやうな屈辱をも忍んだものだらうか？ 六十歳にして尙ほ媚女であつたこの老婦人は、私をしてたゞ憐憫の交つた反感を催さしめるばかりであつた。慾張り、享樂好きで、冒險的の性質を多分に持つた彼女は、眞の『人食ひ女』として、どんな男を見ても、それを生け捕る事を考へてゐるのであつた。それで彼女は無法にも私には自分の妹の扶養の義務を背負ひ込ませたり、初めの婿なる男爵を欺いては、その債權者の詭計に由るいかさま物の持參金を持ち込んでひどい目にはせざるやうな事をも敢てした。

あはれなるマリアよ！ この怪しげなる過去の中にこそ、その良心の苛責も、その不安も、その一切のどす黒い思ひも根ざしてゐるのだ。これ等の遠い過去の出来事を私が親しく見聞した新しい出来事と比べて見ると、あの母子の間には屢々暴力にも訴へ兼ねまじき程の烈しい争論が起つたわけも分つた。マリアが、どうかすると自分の母の胸のあては先入見的な變な見方と考へ方をして、それから一步も出ないやうになつてゐた。マリア及び彼女の仲間の熱心な努力は遂に成功して、彼等をすつかり手に入れてしまつたのだ。マリアは神聖な殉教者で、私は、妻に欺かれたと妄想してゐる狂人だ、と思はれてゐるのだ！

詮索をする？ まるで壁を相手にして打つかるやうなものだ！ 人々は私の話を聞いて、にこ／＼ほ／＼と、何か珍しい動物でも見るやうに私の顔をじろ／＼眺める。私は一言の説明をも聞く事が出来ず、あらゆる人々に、私を陥れて自分だけが高い處に登らうとする羨望者達に見棄てられて、何の得る所もなく再び暗い牢獄へとす／＼歸つて来た。マリアは直ぐに目に付く程の不安の色を泛べて私を迎へた。私は彼女のさうした顔色を見たばかりで、この全旅行中に知り得たよりも遙に多くのものを知る事が出来るのであつた。

二ヶ月の間私は懺忍のならぬ懺忍に堪へた。それから私は四度逃げ出した、夏の最中、今度は瑞西へ。然し悲しいかな、私の體を繋ぐ鎖は鐵の鎖ではなかつた。私はどんな力を振つてもそれを断ち切る事が出来なかつたのだ！ それは、どこまでも伸びて行くゴムの綱であつた。長く、強く、引つ張られ、引つ張られる程一層烈しく出發點へと

私を弾き返すのであつた。
もう一度私は歸つて来た、今度は彼女はおほつびらに私を輕侮してゐる、今度私が逃げ出したら、それは死の旅へ赴く時だといふ事を彼女は確信してゐる、そしてそれこそは彼女の唯一の希望なのだ！

私は病氣になつた、もう死期が近付いたと自分で思つた程にひどく病氣になつた、そして、死ぬ前に自分の一切の過去の生涯を書いて残さうと決心した。自分は一の吸血鬼に騙され通して来た人間だといふ事を茲に至つてはつきりと發見した。この女の爲めに塗り付けられた一切の汚辱を自分の體から洗ひ清めるまではどうしても生きなければならぬ、彼女の不貞な行ひの動かぬ證據を到る處に蒐集して復讐する爲めに、再び生に歸らなければならぬ。

十

憎惡の念が私の胸に燃えた、それは無頓着よりも一層不幸なものだ。何故なれば、それは愛の反面であるから。私は今からいふ定理を立てなければならぬ——『余は彼女を愛すればこそ、彼女を憎む。』

或る日曜日、庭の四阿で食事をしてゐた時の事であつた。十年間蓄積された電流が遂に放電した。

るまで互に戀を味つた。

何といふ不思議な結婚生活！ 晝、私は彼女を擲つた。そして夜は二人添ひ臥して寝る！

何といふ不思議な女！——彼女を擲つた男をば満身の愛を籠めて接吻するとは！

何故私をもつと早くこの秘密を悟らなかつたのだらう？ 若し彼女を十年前にもこんな風に擲つたら、私は世の中の夫の中の最も幸福な夫であり得たらうのに！

さてこれは一つの御相談である。『欺かれたる亭主』仲間の諸君よ、この事を考へて見てくれ給へ！

然し彼女は復讐を準備した！ それから四五日経つてから彼女は私の部屋へやつて来て、長い前置きと面倒臭い、廻りくどい云ひまはしの後に、彼女はこれまで一度、唯一度芬蘭の旅行中、或る男から『辱められ』た事があると白状した。

私の糾問はいよ／＼確められたのである！
彼女は必死に私に哀訴して、こんな事が幾度もあつたのだらうとはどうぞ思つてくれぬやうに、その他にももつと情夫があつたらうなど、疑つてはくれぬやうにと泣きすがつた。

それは詰り——幾度もあつた、幾人もあつた、といふ意

どうした事情が導火線になつたのかは分らなかつた。それはどうでもいゝ。私はこの時初めて彼女を擲つた。私は急激の如くに彼女の横面を掌で張り飛ばし、彼女が抵抗しようとする、その手頸を捻り上げて、そこに膝を突かせた。彼女はものすごい叫びを發した。と、私がその際に感じた瞬間の快感は直ちに恐怖の念に變つてしまつた——そこに居合せた子供達が恐しさに夢中になつて、火が付いたやうにわつと泣き出したのである。それは正に私の無残な生涯の中でも最も苦しい瞬間であつた。自分の妻を、子の母親を打擲するといふ事は、一の冒瀆、一の殺人、一の不自然な犯罪とも云ふ可きである！ しかも子供達の面前で！ 太陽もかゝる光景を照してはならない……！

この世に生きる事は私にはたまらなくなつて来た！
然しそれにも拘らず、暴風の後のやうな静けさが、義務を果し終へた後のやうな満足感が私の心に忍び入つた！

私はこの行爲を悲しみはしたけれど、敢て後悔はしなかつた。『かくの如き原因あれば、かくの如き結果あり！』

この事があつた日の晩、マリアが月光の下を散歩してゐた。私は彼女を迎へて接吻を浴せた。彼女は敢て私を突退けようとしない、そしてさめ／＼と泣き出した。そこで一寸話し合つてから私の部屋へ一緒にやつて来て、夜半に至

味に他ならない！

「そんならお前は僕を騙したんだな、そして世間の目をくらます爲めに、僕が發狂したといふ作り話を云ひ觸したんだな！ 自分の罪跡をかくし終せる爲めに、死んでしまふまでも僕をいぢめ抜かうといふのだらう。お前は兇惡無残の人間だ。今ではもう分り過ぎる位によく分つてる。僕は達は別れる事にしよう！」

彼女は私の足下に泣き伏して、熱い涙を流しながら宥してくれと願ふ——

「それはいゝよ、宥してやるよ。然しともかく僕達は別れる事にしよう！」

十一

その翌日にはもう彼女は平靜に返つた、二日目には再び立ち上つた。そしてあの恐しい破綻の後三日目に至つては、けろりとして、まるで何の罪もない女のやうに平氣に振舞つてゐる。

『あたし何も彼もきれいさつぱり懺悔してしまつた以上は、何もかれこれ云はれる覚えはありやしませんわ！』
彼女は單に『罪がない』だけではない、もう立派な殉教者になり澄ましてゐる、そして私を遇するに輕蔑的なお情の

態度を以てする。

彼女は自分の犯した罪の結果を意識してゐないので、私の陥つてゐるディレンマの苦みを解する事が出来ない。若しこのまゝにしてゐれば、私は欺かれたる夫として永久に世間の物笑ひになるばかりだ。彼女から去つてしまつても、この不幸は矢張りそのまゝである——どの道、私は亡びたる人間である。

二三回の打擲と唯一日流した涙とに對して十年間の忍び難き苦患——たしかに公平な沙汰ではない！

いよ／＼今度こそは最後だといふ覺悟を決めて、私は家を出た、子供達に別れを告げるだけの勇氣は、私になかつた。

それはよく晴れた日曜日の正午頃であつた。私はコンスタンス行き汽船に乗り込んだ——佛蘭西にゐる私の友達を訪ね、其處で直ぐに、この中性的女性が勢ひを得てゐる時代の眞の代表的タイプであるこの女を小説に書かうといふ覺悟を以て。

最後の瞬間にマリアは汽船の上に現れた、目を泣き腫らして、興奮して、まるで熱を病むものやうに——その上私の爲めには不幸にも、再び私をして背後を振りかへらせるほどに美しく。けれども私は、冷淡に、何の感情もなく

黙り込んで突つ立つたまゝであつた、そして、彼女の眞なき接吻をたゞ受けたばかりで、それを返さうともしなかつた。

「せめて、あたし達はお友達だ、とだけでも云つて下さい！」

「警士だよ——生きてゐる間は！」

我々は別れなければならぬ！

汽船が動き出すと、彼女が波止場に沿うて走つて來るのが船の上から見えた、十年の間よく私を騙し終せたあの眸の魅力を以て最後の瞬間に私を繋ぎ止めようと必死になつて！ 彼女はまるで主人に見棄てられた犬のやうにあちこちと走り廻る——厭ふべき牝犬！ そして私は、彼女が絶望して水に飛び込む刹那を待つ——私も彼女のあとを慕つて飛び込もう、そして最後の抱擁のまゝ溺れ死なう！……然し彼女は水に飛び込みはせずに背を向けて、その蠱惑的な表情を私の心に刻み付けたまゝ横町へ姿を消してしまふ、それから、私が十年の間聲をも立てずに自分の胸を踏むに委せてゐた、あの小さな足を持てる影繪を私の目の底に残して。これまで私は只自分の書く作品の中に於てのみ時々自分の感情を洩らして來た。然しさうした場合でさへも、この女のありのまゝの罪をば包みかくして讀者を欺

き、今日に至るまで常に詩人としての讚美を彼女に捧げて來たのである。

私は堪へ難い苦悶に抵抗する爲めに、直ぐに汽船のサロンへ降りて行つた。私は食卓に就いた、然し最初の皿が出た時にもう私はしゃくり上げて呼吸が止りさうになつた、それで私は止むを得ず食卓から立ち上つて、再び甲板へ登つて行つた。

と、目の前に緑の岳が見える、そしてその上に緑色の窓の戸を閉じた白い小さな家が。あすこに私の子供達が住んでゐるのだ——見棄てられた鳥の巢に、見護つてくれる者もなく養つてくれる者もなしに。氷の如き苦痛が私を捉へる、そして私の心臓を刺し貫く。

私の身はさながら、大きな蒸汽機關に依つて徐々に糸をほぐされて行く蠅の蛹のやうな氣がした。

ピストンの一回轉毎にこの身は瘦せ細つて行く、そしてほぐされた糸が伸びるに従つて、冷たさがだん／＼身に沁みて應へて來る。

近付いて來る物は、死である！

私の身は、さながら時期に先立つて臍の緒を切られた胎兒のやうなものである。家族といふ物は、何といふ総合的な生きた有機體であらう！

我れ自ら恐れ戦き、殆ど死ぬ程の自責の念に惱まされたあの男爵との離婚以來、私は既にそれを豫想してゐたのだ。然しあの女は——姦婦、人殺し女はいさ／＼かもそれを恐れなかつた！

コンスタンスで私はパール行き汽車に乗り込んだ！ 何といふ日曜の午後！

若し神天にましますものならば、私は不倶戴天の敵にすらも、かゝる苦悶の時間をば與へ給はざらん事を、神に祈つたであらう！

先には船の蒸汽機關によつて散々に苛まれたのが、今度私の腸や腦髓や神経や血管や内臓を紡ぎ取つて、まるで骸骨の姿となつてパールに着かせたものは、汽車の機關車である。

パールに來ると私は、曾て我々が滞在した事のある瑞西のあらゆる場所を再び見て歩きたいといふ突然の熱情に捉へられた——マリアと子供達の思ひ出に十分浸り切る爲めに。

私はジュネーヴに一週間、ウーシーに一週間といふ風に、なつかしい思ひ出に驅られながら、休息もなく、安靜もなく、まるで追放せられた罪人の如く、永遠の猶太人の如くに、ホテルからホテルへと渡り歩いた。

私は幾夜を涙に泣き明し、到る處で幼き者達のいたいな姿を思ひ出させられた、そして彼等が行つた事のある場所には洩れなく巡禮して歩いた、ローマン湖上の『彼等の』颯にはパンのかけらを投げてやりなどして、まるで影のやうによろめき迷ひながら。

私はマリアからの手紙が今日は来るか明日は来るかと、毎日待ち焦れた、然し遂に一本も来はしなかつた。彼女は當の敵の手に、書いた證據を渡すやうなへまをやるには餘りに意地が悪いのである。そして私は、何も彼も一切を宥してやるといふ愛の手紙を彼女に宛て、書く——日に四五回も……然し、それを出しはしないのだ。

まことに、私に裁きを下す人々よ、若し私が狂亂に陥るべき運命に在るものとすれば、かゝる最高の懊惱と最深の煩悶とのこの時にこそ、それは起らなければならなかつたのだといふ事を私は茲に告白する。

私の抵抗力は將に盡きかゝつて、こんな想像を描く、マリアのあの告白は、私から逃げ出して他の男と——あの神祕的な情人と、或は最も悪い場合には、あの丁抹の同性の戀人と共同生活を始めようとする爲めの偽りに過ぎなかつたのではあるまいか、と。私は『繼父』の手に、或は『繼母』の毒牙に落ちた私の子供達の姿があり／＼と目に見え

るやうな氣がする。彼奴等は私の全集の収入で甘い汁を吸ふだらう、そして、私の妻を奪ひ去つたあの半陰陽的の女の目で眺めた私の生涯の傳記を書くのだらう。と、私の自己保存の本能が猛然と目ざめた。私は遂に一計を案出した。私は自分の家族の側でなければ仕事をすることが全然不可能になつてゐるので、再び彼等の許へ戻り、マリアの罪に關する貴重なノートを蒐集して長篇の小説を書き上げるまで彼等の側に止まつてゐようと決心したので。この方法によつて私は、彼女に氣付かれずに彼女を利用する事が出来るのである。斯くして彼女は、私の復讐の道具となる。そして、一旦使つてしまへばそれを投げ出してしまふばかりだ。

この目的の爲めに私は感傷をちつとも交へない事務的の電報を彼女に打つてやつた——我々の離婚の申請は却下せられて署名の必要があるから、コンスタンス湖の北方の岸なるロマンスホルンで會見しなければならん——さういふ風に云つてやつた。

X X X X X

この電信を打つてしまふと、私ははつと再び生き返つたやうな氣持になつた。翌朝私は汽車で定刻に到着した。懊

惱の一週間は綺麗に忘れ去られた——地平線の彼方に、私の愛兒達が住んでゐる對岸の岳を望み見る時、私の心臓は常の如くに鼓動し、私の目は輝き、私の胸は脹れる。汽船は近付いた、然しマリアの姿はまだ見えない。遂に彼女の姿が甲板の上に現れた、ひどく面やつれして十年位も老けて見える。まだ若い妻がこんな俄に俄に老けてしまつたのを見るのは、私にとつて何といふ打撃だらう！ 彼女の足どりは引きずるやうに重々しく、その目は眞赤に泣き腫れ、その頬は凹み、その額は垂れてゐる。

この刹那、哀憐の情が打撃つて、憎悪と反感のあらゆる感情を押し退けてしまつた。私は將に腕を擡げて彼女を抱かうとした——と私ははつと飛びすさつて、氣を取直し、何か構へにでもやつて来た大膽な男のやうなさりげない様子をする。私はマリアを近くから精密に觀察するに及んで、電光の如くに、或る發見に打たれた——彼女は例の丁抹の女友達と驚く程に酷似してゐる。そこにはあらゆる類似が見出される——顔も、姿勢も、動作も、髪結び振りから顔面表情に至るまで！ あの同性愛の女は私に最後の惡戯をしたのだらうか？ マリアはこの戀人の腕から此處へ来たのだらうか？

私はこの夏の初めの出來事でこの臆測を確めるやうな二

つの事件を思ひ出した。或る時彼女が隣の下宿の主人に、部屋が一つ明いてゐないかと訊ねてゐるところへ、丁度私が行き合せたのである。

誰の爲めに、何の爲めに？

それから彼女は夜ピアノを弾きにこの隣の下宿へ行つてもいゝかと私に訊ねた……

動かし難き證據を提供するものではないとしても、これ等の出來事を思つて、私は用心しなければならぬ、私はマリアをホテルに連れて行つて、筋書き通りに、やつて見た。

彼女は意氣銷沈して惱ましげに見えてゐたが、それでもその冷靜な落着きは失はなかつた。彼女は離婚の手續きに就いてはき／＼と氣の利いた質問を浴せかけた。そして私があまりがつかかりしてゐないらしい様子を見ると、直ぐにあはれつばい様子をかなぐり棄て、出来るだけ上手な態度に出で、私を軽くあしらはうとくまつた。

かうして話を交してゐる間にも、彼女の様子には烈しく例の女友達を思ひ起させるものがあつた、それで私はあの女は今どうしてゐるのか訊ねて見ようかといふ氣にすんなつた。殊にあのテーブルに手を突いてゐる悲劇女優じみたあのポーズは、あの女の好きな姿勢の一つなのだ……私

には一目でわかる……あゝ！
私は彼女の爲めに葡萄酒を註文した。彼女はそれを一息に飲み干して、俄に感傷的になつて來た。

私はこの機會を利用して、子供達はどうしてゐるかと思つて見た。すると彼女は俄にすゝり泣きをやり始めて、この一週間實に辛い目を見せられたと自白した、朝から晩まで子供達は彼等のパパを慕つて彼女を困らせたのだといふ、そして彼女は私なしには到底生きて行けさうもない、と云ふ。

婚約の指輪が私の無名指にはまつてゐない。彼女はそれを見付けて、ひどくうろたへて、

「あなたの指輪は？」と訊ねる。

「ジュネーヴで賣つてしまつたよ。そしてその金で女を一人……お前と丁度釣合が取れるやうにね。」

彼女の顔はさつと蒼ざめた。

「それであたし達は帳消しになつたわけね。そんなら又新規に出直したら？」

「お前の所謂帳消しといふのはさういふ意味なんだね！

お前のやつた行爲は、家族全體にとつて、この上もない恐しい結果を及ぼしてしまつたんだ、僕はもう自分の子供達がほんとうに自分の子かどうかといふ事さへも疑はなければならぬ。」

ばならない羽目に陥つてゐる。お前の罪は、即ち一家の血統を紊したといふ事なのだ。お前は四人の人間の生涯の名譽を臺なしにしてしまつた——三人の子供達は私生兒扱ひにせられるし、お前の夫は欺かれたる夫として世間の物笑ひになつてしまふ。これに反して僕の行爲は一體どんな結果を及ぼした事になるんだらう？」

彼女は泣き出す。私は彼女に、離婚は離婚で事を運んでゐる間に私の愛人として一緒に住む事にしたらどうだと相談した。そして子供達は遺言に依つて私の子とすることにしよう……

「さうしたら丁度お前の空想してゐたやうな自由な結合といふことになるんぢやないかね？ お前はいつでも結婚生活といふ事を呪つてゐたんだから。」

彼女は一瞬間考へ込む。この提議は彼女の氣に入らないのである。

「お前はいつか僕に云つた事があつたね、何處かの鰥夫の家へ家庭教師に入りたいつて！ こゝにお前の探してゐる鰥夫があるよ！」

「それは尙ほ考へて見なけりやなりませんわ……さうしてゐるうちには……どうにかなるでせうよ。その時まであなたはあたし達と一緒にゐて下すつて？」

「お前が來いといふなら。」

「來てさへ下さるなら！」

かくして六たび私は私の家族へ歸つて行つた、然しこの度は、私にまだ残されてある時間の全部を利用して例の小説を完成し、この不可思議な事件に關する精確な情報を手に入れて、自分の身を護らうといふ決心を抱いて……

十二

この物語はこれで終りを告げた。我が愛人よ、私は復讐を遂げた、我々の關係はこれで貸借なしの帳消し済みになつた。

一八八七年九月——一八八八年三月

痴人の告白

痴人の告白附録

一、冬の眞夏

冬の夜は今外面に凍り、
巷は闇く、人影もない。
開ゆる物は風のざわめきのみ――
暖爐の鐵板を煽り、
扉をはためかせる。

夜食は今しも終り
食卓は片付けられる。
ある程の灯をともし列ねよ、
喜びは充ち溢れるまでに、
夜を變じて日ともなせ！
窓の帳を引きしめよ、
隣の人々に見られぬやうに。
そして、さあ、酒を飲まうよ、

お前も明るい顔をして、
ピアノを弾いて歌をうたへ！

夏をうたへ、森を歌へ、
しかし何よりも先づあの海原を！
海は荒れ、浪は逆巻き、
崖にあたつては碎け散る、
軽き浪、深き淵。

朗なる歌聲と、
妙なるピアノの音に
天竺葵の花は打ち顛へる――
熱帯の烈日に匂へるこの花、
葉影小暗き森の中に……！

暖爐の蓋の上には
三桅艦の眞白い帆影、
その前のやはらかい絨毯の上には
軟風の如くになごやかに滑らかな
お前の小猫が咽喉を鳴らしてゐる。

然し、私に向つてその眸は
鏡の中に幸福をほゝるむ。

お前のはれやかな額を見てゐると、
ランプの赤い光も色あせて来る。
お前の胸の留金から出る光が
二人の目と目の出會ひ頭に發する火花に、
電光の如くに合の手を入れる。

静に！ あちらの方で鈴が鳴る！
あゝ分る、誰が來たのか。
郵便屋だ、最後の配達だ、
静に、我が子よ、手も口も――
それを今開ける要はない！

あんな物は暗い箱の中に寝てればいよ、
冷たい手紙や校正刷等は。
さあ、鍵盤に觸れよ、
平和を擾す邪魔者共は
支關に鎖されて、最早我等を妨げない。

柱掛けの鏡はさゝやかなこの住居を
透視畫法の如くに映し出し、
私の空想の幻影は
甘い葡萄酒に酔はされて、
夢見る如くにこんな繪を描く。
金文字輝く書架の下には
不恰好な私の仕事卓が立ち、
卓上のランプはペンやインキや
眞白い原稿紙などの
表面を温く照し出してゐる。
そとお前の部屋を覗き見れば、
綠色の家具には花模様の変更、
裁縫道具の籠の中からは
お前の例の家計簿が、
白く光つて見えてゐるね。
と扉の隙間からお前の首が
おどろしなながらちらと私の方を見る、
鋼鐵の如くに冷たい眸、

愛する者よ、我が妻よ、歌へ！
今は我等を妨ぐる何物もない。
うたへ、弾け、
窓の硝子も打ちふるへるまでに、
今宵は我々二人だけの物だよ！

二、かすみ

彼は荷物が残らず積み込まれてゐるかどうかと気づかはしげに見廻した——人間や荷物でござい／＼混雑してゐる後甲板の真中で、それが分るものであるかのやうに。
汽船が製粉所の前を通過するまで、彼は何か知られぬ罪を犯してゐる人間でもあるかのやうな気がした。と、強烈な太陽の光が彼の目を眩ます。海原は無限に遠くひろがり、青みわたれる山々は不可思議な魅力を以て人の心を誘ふ。そこには乳母車がある、骨を白く塗つて青い幌のかゝつてゐる方のだ——もう一つではない——彼はそれをよく見覚えてゐる——青い幌の上には小さな牛乳の汚點があるのだ。それそこには、一等いゝ部屋から持つて来た大きな肘掛椅子とソファーとがある、それから、草花の鉢が付いてゐる浴槽も。みんな埃だらけになつてゐるらしい、あの貧しげな道具が——何しろ一冬の間濼々たる標草の畑の中に

閉ぢ籠められてゐたのだからな。……あすこには、まだ夜の長い早春の頃、天竺葵がランプの光を浴びて机の上に在つた、そして其處にある肘掛椅子はその机の右手の方に在つたのだ、そして彼が仕事の手を休めてペンを紙の上に行ろ／＼させながら顔を上げて見ると、その椅子にかけてゐる人がひそかに、親しげに、勵ますやうに、につとほゝゑんで見せるのであつた。然しその椅子にかけてゐる人がゐない時には、彼は疲れた目を何處に休ませたらいいものかとうろ／＼部屋中を見廻してから、其處にあるそのソファーの更紗の花模様の上に目を落すのであつた。……だが、そんなに澤山の目が部屋の中を覗き込む、そしてランプがあか／＼と燃える。あゝ、あゝ！ あれは後甲板に照り付ける日光だつた！ そら、そこに去年から見覚えのある二つの目が——何とまあ着い事だらう！ 彼は病氣だつたんだらうか？ いや、我々は昨年以來一度も會はなかつたのだ！ さうだ、町にゐては中々會へないからな、色々忙しいので！ 學校から出て——それから家へ歸る！ 雖儀な多であつたよ。子供達は癩疹にかゝるし……此處は風が吹いて寒いなあ、サロンの方へ降りて行かう！
又も、ソファーと椅子とを凝視する澤山の目。然しそれらの目は何れも幸福さうだ、そして屹度やつて来るに相違な

い或る物を待ち受けながら、憧れてゐるやうな眼付だ。
彼は席を離れて、顔を新鮮な風に吹かせる爲めに前甲板の方へと出て行つて見る。料理場の方からは煙と料理の匂がして来る、其處には料理女が坐つて、涼んでゐる。それから大きな船室——卓布は前年と同じに眞白だ、飾り臺は相變らずピカ／＼光つてる、鏡の前の卓上にある花も同じやうに活々として露もした／＼らんばかりだ、ランプも先年と同じやうに眞鍮の腕金の中にゆら／＼と揺れる、然し新しい。それは春の——いや自然の、物を若返らせる活力だ！
開いてゐる小さな窓の外を、海岸が長い帯のやうにすうつと通り過ぎる、或は人の心を脅すやうに暗く、或は親しげに、明るい笑顔を見せながら——然しどの場合にもほんとに新しく、そして永遠に若々しく……

x x x x x

彼はいやな夢に落ちる——彼は狭い、小暗い小路の中で兩側の家に挟まれて體を壓し潰されさうになる……彼は或る井戸の底にゐる……彼は穴倉の中を這ひ廻つてゐる、そして外には出られない……胸の上に煉瓦を積み上げられた……と窓の鏡戸をどん／＼叩く音で目をさました。彼は跳ね起きる、然し室内は眞暗だ、彼は鏡戸をあける、と光と

緑の海が目の前に光る。おゝ自然！ あらゆる夢を超えたる現實！ 見よ、夢見る者よ、お前の脳は遂にこのやうな物を夢見る事が出来なかつた、しかもお前はまた『冷たい現實』と稱してこれを見くびつてゐるのか。
朝の太陽が八月の景色を輝かす、彼はパンをポケットに押込んで、角笛を肩から提げ、ステッキと籠とを手にする——彼は今獵に出かけようとするのだ——血を流さぬ獵に。
彼等は樹と榛の茂りの中を踏み分けて行く、そこには秋草の花が咲き亂れてゐる——霜が来るまでは誰にも妨げられぬ生命を樂む爲めに、大鎌が過ぎ行くまで、日の目を見ずに待つてゐた花共である。彼等は刈田の上を跋り、溝を飛び越え、垣根をひらりと乗り越えた、そしてこれから岸の芝生の上で獵が始まるのだ。
霞といぢけた沼の植物とで織りなされた、短い草の牧場の上に、まるで生み立ての卵のやうに雲類が散らばつて、朽ち果てる前にその使命を果さんと太陽の訪れを待ち受けてゐる。然し彼等の望みはもう達せられない、新しい使命——若くして死ぬべき使命が決つてしまつた後には！
それからこの戦場を棄て、はりもみの林に入る、そこはテレビンの匂がする——健康と病室——よく云ふ通り、傷ける胸の香膏……辿り行く森の下道は音もない、然し、頭

上二十ヤードの處はざわ／＼する。一尾の雄山鳥が飛び立つて、梢をそよかす。こんな時には銃があるといふんだが！何故人はいつも森の中で何の害もない生物を見る時、銃があつたらと思ふのだらう？ この世には、銃があつてもよい機會がもつといくらもあるのだけれど。

ほら、そこには車の道が——牛車の轆の跡が地中に深く食ひ込んでゐる、然しそれは猛毒をもつ一種の赤い輩が頭をもたげるのを妨げるまでには至らなかつた、彼等が顔を出してお日様の光を仰ぐ爲めには、恐らく頭に車輪の釘と、額に牡牛の一蹴とが必要であつたのだらう。

だん／＼と森がまばらに明るくなつて来る、そして道は伐材區域で終つてゐる、そこには根元から掘り返す事が出来ないで斧で切り倒された森の巨人の残骸が横はつてゐる。然しまだ切株が残つてゐて、あらゆる種類の色と大きさの輩の群に取圍まれてゐる。彼等はまるで死屍に群る蠅のやうに切株を包圍してゐる、然し彼等は主として、容易に負かし得るやうな腐朽した切株に密生する、けれども彼等は餓ゑ切つて血の氣もなく蒼ざめてゐるやうに見える、これ等の輩類はあの赤い毒輩のやうに綺麗でもなく又毒をもつてもゐない、然し彼には立つ。又も森は小暗くなつた、そしてはりもみの樹の枝が地面

の苔と觸れ合はんばかりに石を抱いて、そこに天然の涼しい四阿を作る——その中にはサフラン色の一種の輩が苔の樽の中から顔を出して、輝く日光と貪慾な昆蟲の害を護られながら、はかない命を樂んでゐる。

地面が濕つぽくなつて来た。もとは癡醉劑の原料として熱心にあさり採られたミョウカは隆起した土の間に、過剰の爲めに枯死した灰色鬚の松の木の下に、平和に生長してゐる。一疋の啄木鳥が木の上で一寸幹を突付いて見ては、それが果して空洞であるかどうかと、小首を傾けながらちつと耳をすます。太陽が又もぢり／＼と照り出した、地面は石ころが多くなつた、森が又だん／＼と開けて来た、そして地の底から唸り聲がして来て、新鮮な風が横顔をさつと掠める、もう下枝の隙間から青い海がちら／＼と光り出して、新鮮な牡蠣の匂をほりもみの木の間から風が持つて来る——それからもう五六歩坂を登ると——そら——海！海！陸は風が収まつてゐるが、浪は斷崖にぶちあたつて跳ね返され、又も同じ勝負を繰返す可く、あたつては碎け散る。着物を脱ぎ棄て、海の底へさんぶり。一秒の後に彼がそこに見出した物は何？ 木が海藻のやうに赤く、空氣はさながら海水のやうにエメラルド・グリーンなる別世界を——と見る間に彼は又も浮上つて、逆巻き狂ふ浪の上に在る。

彼は疲れ切つてぐつたりしてしまふまで怒濤と喘ぎ闘ひ、その背に身を横へる。すると怒濤は彼を恰も九天の上まで投げ飛ばさうとするかのやうに持ち上げて、又も、奈落の底へ引き入れようとするかの如くに闇黒の深淵に突き落す。

彼は一切を諦め切つて最早何物をも望まない、何等の抵抗をも試みない、彼の肉體はその重みを失ひ、最早重力の法則に支配せられる事さへなく、水と空氣との間に漂ふ——それは何等の感覺もなき絶對の靜寂境である。

彼は浪に漂つて浅い砂濱に打ち上げられた、そこには岩の狭間に一種のごみ溜が出来てゐた。そこには大海が遂にその底に呑み下す事の出来なかつたあらゆる廢物を蒐集して、これを分類し、洗濯し、磨き上げたのである——碎かれた櫓、コルクの群、樹の皮、管笛、桶板、籠等。そこに彼はどつかと腰を下して、こはれた船の板をちつと眺めやつた。

入江の端れなる島も通り過ぎ——
舷は風の上下に鳴りはためく——
帆の下綱を弛ませて、
今や大海原に乗り出す。

船首は上下に揺れる、唸る、
帆は一杯の風を孕み、
緑の波を渡りつゝ、
蒼き大空の眞只中へと。

揺らぐ船首から彼は眺めやる、
果も知られぬ周圍の海原を。

彼は何物かにその目を休めようとするが、
目を止む可き物は何處にも見出されない。

疲れたる彼の目はたゆたふ、
彼の視線は遠くに及ばない。
と、はるか彼方に何物かを見る——
一の小點、さまよひつゝ、光りて。

逆巻く浪の上を彼方へ遠く
よろめきつゝ尾を曳く、
灯を逃れんとして、却つて
灯に誘はれる夏蟲の如くに。
それは一疋の胡蝶、

大洋の眞只中に唯一つ——
彼は自由を憧れ求めて、
飛んで自ら墓穴に入る。

然も前へ／＼と運命の如くにひた進んで、
一瞬にして姿は見えず。
彼は青み渡れる雲の中を見入る、
然しそこには最早影もない！

* * *
小石だらけの長石の磯に、
肉太の毒人蔘一つ。
根元に一疋の蝮うづくまつて、
日光に灼かれつゝ睡る。

* * *
一疋の蜂は花の中に唸つて
花粉を浴びつゝ蠢く——
兒等の爲めには蜜を吸ひ、
刺の爲めには毒汁を集める。

* * *
前檣の帆の綱を張れ、
風は今眞面に吹き付ける。

面紗はひら／＼と飛び、
髪の毛のそよぐにもそれと知られる！

こゝ檣と帆綱の間に
青くひらめくお前の面紗は——
蒼空の一片、又は
一つの青波とも見える。

初めてそれを見た日から
既に十年の年月は流れた。
その間には大きな争ひもあつた、
然し愛は矢張りより強かつた！

暑く、蒼ざめた六月の或る日、
所は女王街で、
ゆくりなくも二人はめぐり會つた、
往きかひ繁き、狭い歩道の上に。

間もなくお前の姿は飾窓の前を
つと人波に吞まれてしまつた、
小さな靴の足音と

衣ずれの音も遠ざかつて。

道行く人々の帽子と傘の上を
あの青色の面紗が流れてゐた、
と見る間に、人波に沈んで行つて、
おもむろに呑み込まれてしまつた。

然し、私は又もやそれを見出した。
そしてさながら細長い旒旗の如く、
嵐の海に乗り出す毎に、
檣頭高くそれを掲げた！

お前のひら／＼する青色の面紗は
今でも矢張り青いね。
それはあの日の物と同じ品ではないだらう、
然し私にとつては、矢張り同じ品だ。

いざ、前檣の帆の綱を張れ、
海は荒れ、浪は湧き立たんとする。
我等は如何なる嵐も恐れはしない、
しかし家に待つてゐる幼き子等がある。

彼等は、雨が降り續いたので、一週間閉ぢ籠つてゐた。
彼は窓際に席を占めた、何故なればそこには、古びと日光
とで、黄に、緑に、紅に染まつた窓硝子がある、そしてそ
れを通して灰色にどんより曇つた海の面を眺めると、そこ
には太陽の輝きがある、灰色の鷗岩は赤く見える、空氣は
黄色に見える、樹木の色はエメラルド・グリーンに見える。
そしてこの面白い窓硝子越しに變な具合に覗き込むと、空
中にさながら虹の如き七つの色彩を見る事がある、すると
彼は、間もなく天氣が上りさうな氣がして嬉しくなるのだ。
遙か彼方に、他の島々よりもうるはしく眺められる一つ
の小さな島がある——はりもみの木は密生し、崖は蒼く、
岸には葦が生えそろつてゐる、彼の憧れは今その島へと飛
ぶ、其處からならば屹度汪洋たる大海原を見渡す事も出來
るに相違ないのだから。

……と再び日光があか／＼と輝き出した。彼はボートを
漕ぎ出して、帆を高く張つた。小舟はゆら／＼する浪の上
を滑つて行く、そして海峡は今までよりも廣くなつた、然
しあの緑の島はまだ遠くの方から彼を招く。それからだん
だん近くなつて、遂にボートはさら／＼と嘯き交す蘆の茂
みの中へと分け入る、そして彼は上陸する。

彼の夢は實現せられた。樹木と懸崖の間に唯一人、海を目前に、無限に青い大空を頭上に——邪魔な人間の存在を思はせる何の物音もなく、水平線には一の帆影をも止めず、岸には一軒の小屋さへも立つてゐない。孤獨を愛する一羽の千鳥が、人影に驚き立つて、不安らしく、助けて！助けて！と叫ぶ。母を先頭にした一隊の鷺もびつくりして、恐る可き人間の目をのがれて水の上へと逃げて行く、一疋の灰色の蝮蛇はうね／＼と身をくねらしながらまるで石の狭間を走る細流のやうに身をかくしてしまふ、鷗共はこの闖入者を見物する爲めに大勢連れ立つてわざ／＼やつて来たが、まるで赤兒のやうにぎやあ／＼鳴きわめいて飛び去つてしまふ。と一羽の鳥がこんもりしたほりもみの木から飛んで来る、そしてばた／＼翼ではたきして、叫んで、脅して、啼いて、又も遠い洲の方へと飛び去つた。かくしてあらゆる生物が悉く、人間を逃れて来たこの人間から逃げ去つてしまつたのだ。

彼は砂濱をさ迷ふ。そこに松の木の骸骨が横はつてゐる、海水に眞白く晒されて、日光に蒼白く染められて。それはまるで龍の骸骨の如くに横はり、その肋骨の間には赤紫色のリトルムの花と金色のリシマキアの花が咲いてゐる。打ち棄てられた螺旋貝は一本のえぞ菊のまはりに堆積

して、この淋しい植物はまるで貝殻の塚墓の上にその生を送つてゐるやうなものだ、そして、かのこ草は悪臭を放つ海藻の床に匂ひつゝ繁茂する。

彼は海岸を去つて、再びほりもみの林の中へ入る。樹木が蠢々とそ／＼り立つてゐる、少し眞直過ぎる位にすく／＼と——然し彼は木々の隙間から海を望む、海——孤獨、自然！然し地面は非常に平かである、恰も人間の足で踏みならされたかのやうに。そこには一つの切株がある、して見ればそこには曾て斧があつたのだらう。そこにはいら草が生えてゐる、して見ればそこには曾て人間が住んでゐた事もあるに相違ない、何故なればいら草といふ奴は必ず人間に附いて廻るもので、人間を離れて人迹絶えたる森の奥や、平野の眞中などには決してひとりて入つて行かぬものである。それは丁度人間に寄生する害虫のやうなもので、唯人間に依つてのみ養はれ、唯人間の在る處にのみ生長する事が出来るものである。それは手の達し得る限りのあらゆる塵や芥を、毛の生えてゐる、粘つた葉に集めて、人が觸れればこれを刺す。——罪に依つて養はれる不可思議の種族だ！

彼は尚も辿り行く。一羽の雀——下水と後庭の隣人——塵埃の中に愉快を感じ、汚物の中に浴してゐる鳥——翼を

用ひなかつたら鼠になつてしまはなければならぬ鳥——人間の爲めに大骨を折る鳥！若しこゝに人間が住んでゐないとするれば、一體彼は何を食つて生きてゐるのだらう？多分いら草の種でも食つて？

もう四五歩進むと、彼は靴の痕を發見した、それは労働の爲めに歪んだ大きな足がどしり／＼と重々しく踏んで行つたやうな大きな足跡だ。木々の間に石で疊み上げた爐が、自然の克服者を祭る祭壇の如くに立つてゐる、それは彼が力に對して犠牲を捧げた場所だ。火はとづくに消え失せてゐるけれど、その名残はまだ見られる。地面は動物の蹄を以てせるかの如くに掘り返され、木の皮は剥がれ、崖さへも碎かれてゐる。彼處の山には、褐色の汚水を一杯湛へた巨大な井戸が見える。のみならず、人は大地の内臓までも露出して、その碎片をば、その意志を満足する事の出来なかつた、或は求むる物を見出し得なかつた悪戯小僧のやうにあたりを散亂してある。然し、山の一片は削り去られてある！それを人は、長晶石を陶器工場へ船で運ぶ時に、一緒に持つて行つてしまつたのだ、そして、最早持つて行く物が何一つなくなつた時、人は二度と歸つては來なかつたのだ！

彼はこの廢墟から逃れた、そしてその歩みをポートの方

へと向けて降りて行つた。

砂上の足跡！彼は呪つて逃れようとした、然しその時彼は實は自分自身を呪つた事に氣が付いた、そして何故に先刻鷗や蝮やその他の者共が自分から逃げて行つたかを初めて了解した、そして彼は再び自分の足跡を辿つて行つた、彼にはどうしても自分自身から逃れる術はなかつたのだから。

彼は望遠鏡を取つて、自分の渡つて来た海面の方へとそれを向けた。彼は櫛の木の下の白い着物とそれから青い被覆とを見た。彼はポートに乗り込んで、火酒とタバコとを取り出した、そして橈を握りながら思つた。——お前の欲するあらゆる物を、人生の與へ得る最も善き物をすべて手に入れたお前は——何故お前はそれでも不満なのだ？

三、それだけでも十分ではないか？

あの聖書の中の富裕な若者が、人生の謎を解く爲めにはどうしたらいいだらうか、といふ質問を基督に向つて發しなかつた、といふ事は、そんなに惜しい事ではなかつた。何となれば基督は、たとひこの質問を受けたとしても、恐らくあの幸福に就いての質問に對する答へと同一の言葉を

繰返すに過ぎなかつたらうから。——『往きて、汝の有
て一切の物を賣れ、そしてそれを貧しき者に與へよ。』
(馬太傳、十九) だからさういふ質問の必要はなかつたとして
も、この富める若者が基督の教訓を身に實行しなかつたと
いふ事こそは惜む可きであつた、分けても、彼が一八八五
年六月の巴里の灼き付けるやうな酷熱の日を見ず、又、こ
の目六十歳の青物賣りのあはれな姿となつて、間歇的に襲
ひ来る餓ゑと寄る年波に打ちふるへる聲も悲しく——

水芹や、水芹!

體のおくすり!

一把四サンティーム

一把四サンティーム

と絶間なく呼ばりながら、アヴェニュー・ドゥ・ヌイイを手
車重く押して行く身とならなかつた、といふ事こそは惜し
い事であつたのだ。

老人は左手の方、とある並木路へと曲つて行つて、戸毎
戸毎に立ち止つた、然し何處の家でも番人の女が首を振つ
て見せた、既に朝早くもつと丈夫な若者がこゝらを廻つて、
今日要るだけの野菜は残らず賣り付けてしまつた後であつ
たので。彼はやうやくポト・メーヨーまで辿り付いて、一
見果てしもなくセーヌ河のほとりまで走り下つてゐる大通

き出してゐた。

老人は覆れた聲を振り絞つては觸れ歩いた。けれどもそ
の聲は乗合馬車や荷車等の騒音にかき消されて、誰一人呼
び止めようとする者もない。今はぐつたりと疲れ切つてし
まつた老人は、見棄てられたやうに、篠懸の木蔭の透した
ンチに腰を下した。然し太陽は埃だらけの木の葉を透して
目ざとくも彼の姿を見つけて出して、そのあちこちにまだら
な光を投げつける。この疲れ切つた老人の目には、太陽の
光さへ如何にうら悲しく見えたであらう——彼はもし出来
る事なら直ぐに空一面をかき曇らしてしまひたかつた、そ
してさつと降りそぐ夕立でこの堪へ難い苦熱を洗ひ去つ
て貰ひたかつた、それでなければ今にもその神経は力を失
ひ、その肉は乾からびてしまひさうであつた。

然しかうしたたまらない苦熱の中からも、飢餓の苦みと
明日を如何にすべきかといふ不安が頭をもたげる。彼はよ
ろ／＼と起ち上つて再び提棒を握りしめ、峻しい坂路を凱
旋門の方へと喘ぎ／＼登つて行くのであつた——聲もうら
悲しく『一把四サンティーム』を叫び続けながら。
最後の町角で一人の裁縫女が初めて二把だけ買つてくれ
た。

それから彼はシャンゼリゼーの通りを行く、そして、『人

りを見下して見た。そして黒木綿の帽子を脱いで、青い勞
働服の袖で額にじむ汗を拭つた。もう引返して左側へ入
らうか、それともまたいつそ巴里の市中へ入つて行つて一
つ運試しをやつて見ようか——明日も亦この手車を引きず
つて来る元氣を得るに必要な僅かばかりの金を儲けるとい
ふ、素晴らしい幸運を冒険して見ようか? 即ち最後のフラ
ンを入市税に拂つてしまつて、のるかそるか運試しをや
る爲めに、知られぬ運命に向つて猛進して見ようか? さ
うだ——彼はこの投機的冒険に誘惑されて、思ひ切つて入
市税を拂つた後、アヴェニュー・ドゥ・ラ・グラント・アルメエに
沿うてとぼ／＼と辿つて行くのであつた。

太陽は空高く登り、舗道の敷石はまだ昨日の熱が冷え切
らずには、つてゐる、美しい街々にはまだ寢部屋臭い匂が
ちつと立ちこめて、家々の寢室の開放された窓から街へ
流れ出した甘酸っぱい空気をゆるがす程の風もない。窓際で
打ちたたく敷物から立ち登る濛々たる塵埃は、太陽に照さ
れて金粉の如くに飛散する、公衆便所は曲馬や見世物の新
しいポスターに彩られ、息詰るやうなアンモニアの臭氣を
漂はせる。葉巻の吸ひ殻や、煙草の唾や、馬糞や、蜜柑の
皮や、和蘭三葉の莖や紙片等が、大きな鐵管から迸り出て
一切の物を下水溝の格子の方へと流し去る水流の中から浮

生の目的』といふ問題に就いて思ひを凝らす爲めに、英人の馭
者の後に坐つてブローニの森として馬車を走らせてゐる
金持の家の息子に出會ふ。大きな邸宅や大きな料理屋では
勿論こんな老人を振向いて見ようともしない、太陽はぢり
ぢりと車に積んだがらしを焦し始める、そして花椰菜な
どは長い、青い耳をぐつたりとうなだれてしまつたので、
彼はロンボアの噴水まで來ると、車上のしをれた青物に
水を注ぎかけてやらなければならなかつた。

コンゴードの廣場を横切つて埠頭まで辿り着いた時に
は、もう正午に近かつた。カフェーの前の歩道では大勢の紳
士達が午餐をした／＼めてゐて、中にはもうコーヒを飲ん
でゐる人もあつた。彼等は何れも充ち足りてゐるやうに、
然し又この世の生活を續ける爲めには悲しく辛い務めを盡
さなければならぬかのやうに心配らしく見えた。然し老
人はこれ等の人々を幸福な人間だと思ふ——彼等は少くと
もこれから食後の六時間を生きてゐる事は出来よう、然る
に彼自身に至つては、その生命が刻々と、まるで乾からび
た林檎のやうにしながら行くのを感じた。

車はボン・ヌーフをかた／＼やつて行つた、道に在る程の
あらゆる石ころが意地悪くも車輪にぶつかつて軋るやうな
氣がした、そして疲れた腕の肉も神経もその度毎にぶるぶ

る慄へた。彼は朝から何も食ひもしなければ飲みもしなかつた。そしてその聲はまるで肺病患者のやうに弱り細つて、あはれな觸れ聲は、今や呼吸困難の爲めに力ない溜息と共に、救ひを求める叫びのやうにも聞えるのであつた。

シテの方へ折れ曲つて、ロールロジの河岸に木蔭を求め出さうと迎り行く頃には、足は焼けほてり、手は慄へ、まるで脊髄がとろけてしまふかとはかりに背中が熱し、稀薄な血液は額にどきんどきんと脈を打つた。パルヴィ廣場の酒屋の前に立ち止つて、彼はポケットの中の僅かばかりの銅貨をばい一つ一杯の酒に換へてしまはうかと思つた。それから彼は氣を引締めて、又もノートル・ダム寺院の前を通り過ぎて、變死屍體陳列場の方へとぼくんと足を運んだ。

人生の謎の解決をふんだんに藏してゐるこの神秘的な小さな建物の前を、彼はどうしても素通りする事が出来なかつた。その内部はどんなに涼しくてきれいだらう——そこには澤山の死骸が、富める若者のやうに大理石板の上に横はつてゐる、そして凍り付いた髪や髭の霜が、美しい冬の日に於てのやうにきら／＼光つてゐる。これ等の屍の或る者の顔には今尚ほ不快の表情が残つてゐた、肺の中に水を一杯詰め込まれたり、心臓や腹の中に短刀を突込まれたりするのはあまり氣持のいゝものではないに相違ないから。

中にはまた、もう萬事終つてしまつた事を結句喜んでゐるかの如くに微笑をさへ死に顔に浮べてゐる者もある、或る者は、もうどうでもいゝよと云つた風に平氣な顔をして寝そべつてゐる——善かれ悪かれ問題はもう解決せられてしまつたんだから。もう着る物も、食ふ物も、住む家も、何んにも要らない！ 悲しみもなく、心配もない。彼等は皆人生の最も貴重な物を手に入れてしまつたのだ——貧困にも、凶作にも、病氣にも、死にも、戦争の悲惨にも、さては亞米利加の穀物にも、賃銀に關する嚴重な法律にも、最早邪魔されるといふ事のない絶對の安靜を擱んでしまつた連中なのだ。夢なき睡り——それはどんなに平穩無事なものだらう、醒むる事なき睡り——何といふ素晴しきだらう！

この老人はたしかに彼等の身の上を羨んだに相違なかつた、何故なれば彼は立ち去り際にもう一遍振り返つて、大きな硝子窓の蔭に涼しく睡る幸福な人々の方をぢつと見詰めてゐたから。

それから彼は大寺院の他の側の方へ廻つて、正面の入口に立ち止つた。彼はそこにゐた聖物賣りへ一寸自分の車を見てくれるやうにと頼んでから、御堂の中へ入つて行つた。彼は先づ右手を聖水に浸して顔や唇を冷した。大伽藍の内はひや／＼として、太陽も色硝子の窓を通してはさし込ん

で來ない。たつた今顔を剃つたばかりで青い肌にはまだ白い粉がくつ付いてゐるさうな一人の小柄な僧が説教壇に立つてしゃべつてゐた、老人はそれに耳を傾けた。

「野に花咲ける百合を見よ、彼等は縫はず、紡がざるなり、然も、サロモ王があらゆる榮華の極みに於てすら、なほその花の一つにだも若かさざりき！ 又、空飛ぶ鳥を見よ、彼等は蔭かず、納屋に集めず、然も我等が天の御父彼等を養ひ給ふ。汝等の彼等にまされる事そも幾何ぞや！」

「我等の彼等にまされる事そも幾何ぞや！」——老人はほつと溜息を漏らす。

「先づ神の御國とその正義とを求めよ！」その僧は尙も續ける。「然らば一切の他の物は招かずして自ら汝等に來るであらう。」

「一切の他の物！」と老人は歎聲を發する。「一切の他の物！ 先づ神の御國で、その次に一切の他の物か！」

と、御堂の外陣の柱にもたれて、一人の富める青年が一冊の旅行案内を手にして立つてゐる、そして過去の建築藝術の中に人生の因果關係と本質を探究しようとしてゐる。彼は神の御國を信じない、然し人生の目的に就いて瞑想を凝す、そして人間は何故に七十歳、或は高々八十歳の老人となるまでも生きて徒に時を消す事に骨折つてゐるのか、そ

の理由を解する事が出來ない。若しそれが禮を失する振舞でなかつたならば、青年はこの老人の側へ駈け寄つて、とつくに人間の定命を過ぎてしまつたこの老人に向つて、かうも問ひ掛けたのであつたらう——

「どうぞ私に人生の謎を教へて下さい！」

そして若しこの老人が飢渴の爲めにこれ程に弱り果てゝゐなかつたならば、かうも答へたであらう——

「私が今日までに解き得た人生の謎と申しますと、それは私にとつては、『くらしを立てる』といふ事でございまして。」

すると富める若者はいぶかしげに訊ねる。

「たゞそれだけですか？」

「たゞ？ それだけでも十分ではありませんか？」と老人は云ふ。「たゞですつて？」

「私どもは、どうもお互に意志が疏通してゐないやうですね！」と富める青年は云ふ。

「左様です、私共はお互に意志が疏通してゐないのです。」と老人は繰返す。「私共はお互に意志が疎通してゐないのです。」

「あなたは只自分自身の爲めばかりに生きてエゴイストだからですよ。」と富める青年は云ふ。「然し人類、人間の種

族……」

「いや、あなた！」と老人は答へる。「私だつて矢張り人間の種族の爲めに生きては來たのです、私は子供を四人育て上げて、教育もしましたからね。これはどうしてもあなたを抱いて居られる問題よりもむづかしい問題だらうと思ひますがね——あなたの所謂問題の解決なら何處の本屋へ行つてもちやんと出來上つたのを賣つてまさあ。ねえ、あなた、行つて、あなたのもつてゐる一切を悉く賣り拂つてしまひなさい、そしてそれを貧しき者に施しなさい、そしてあなたは初めてお分りになるでせうよ——人生といふ物にはその他の何かを容れる餘地なんぞがあるものかどうかといふ事がね！」

然しこの富める青年は、むしろこの問題を未解決のままに残して置いて、その財産を保有した方がいゝと思つた。だから彼は携へてゐた旅行案内を讀み續けて、貧しい青物賣りの翁に人生の目的を訊ねる事は止めにした。

然し亂されざる信仰を持つ老人は、「明日の爲めに思ひ煩ふ事勿れ！」といふあの僧の慰め多き言葉を抱いて寺院からよるぼひ出た、そして再び手車の梶棒を握つて、左岸の方へ下りて行つた。ブルヴァール・サン・ミシエルの曲り角で、彼は十二サンティームばかりの青物を値段をまけて賣る

事が出來た。それから尙も進んで、彼はリニー・ボナバルトの方へと折れて行つた。それは午後、一日の中でも最もうら悲しい午後の時刻であつた——太陽は沈みかけてゐる、然し疲れた人々の心を安らかならしめる黄昏はまだ降りては來ない——人々は苦しい夢と思ひ出に入る前に、今しばしの時を休んだり楽しんでいたいと思つてゐるのだけれど。

老人はとある石段に腰を下して、ポケットの錢を數へて見る。八十サンティームは、町の入口で拂つた一フランよりもまだ二十サンティームだけ不足である。どうしてあの畑の持主に仕入れの六フランを拂ふ事が出來よう、どうして食つたらいゝだらう、どうして飲んだらいいだらう、そして、晩までにどうしてシュレーヌへ歸つたらいいだらう？ 彼は目の前に、果ても知らぬジャンゼリゼーの通りと、長い／＼アヴェニュー・ドゥ・ラ・グラン・アルメエと、恐しいヌイー・アヴェニューとを見やつた。駄目だ、歸つて行くにはあまりに遠い、あまりに遠い！

彼は何物かを求めようとするかのやうに、あたりを見廻す、するとしよほ／＼した目が、街の向う側にある藥屋の青や赤の硝子罎が日光にきら／＼光つてゐるのに眩まされた。そこには色々の大きさの罎や紙箱が棚一杯並んでゐる——消化不良に用ゐる藥、食慾不振に對する丸藥、人生の目

的』に就いてあまりに瞑想を凝し過ぎた爲めに痛めた頭に

用ゐる散藥、人口過剰と貧窮の豫防藥、社會問題解決者の用ゐるといふ偏頭痛藥、夜遊びする者の爲めの顔料、神經を病む者と經濟的に獨立せる者の爲めの錠劑等、何も彼もそこにはそろつてゐた。

老人はまるで誰かに呼ばれてもしたかのやうにふら／＼起ち上つて、その藥屋へつか／＼入つて行つた。

「阿片エキスを十三サンティームばかり下さいな！」と彼は云つた。「喉が癢癢で弱つてるんで。」

自分の言葉を確かめようとするかのやうに、彼は自分の右手を擧げて、第二指にはまつてゐる管の指輪を店の者に見せ、自分も見ようとした。然しその指の鳶巴の皮膚には、一筋白く凹んだ輪の痕が残つてゐるばかりであつた。

然し、これもお客を待つてゐたらしい藥屋は、そんな物は見むきもせずに、小さい罎にそれだけの液體を充たし、貼紙を舐めて、コルクをして、金を受取るとそのまゝ再び藥學の本を讀みにかゝつた——藥を何に使はうとおれの知つたことかといつたやうな顔をして！

老人はその罎をポケットに入れてよろめき出て、又も車の梶棒を握りしめ、町を少しばかり登つて行つた。それから彼はとある本屋の前に佇んで、自分でさへも最早信じては

ゐない幸運を試して見ようとするかの如くに、今一度最後の聲を振り絞つた——

一把四サンティーム！

一把四サンティーム！

まるで誰か買手に呼び止められるのを恐れてゐるかのやうに、彼はあわてゝさつきの小罎を口にあてゝ、焼け付くやうな渴きを癒さうとでもするかの如くに、赤黒い液體を呑るやうにごく／＼と飲み下した。と、彼の瞳は恰も太陽の中を見入りでもしたかの如くに収縮した。烈しい紅潮がさつと頬に上つた。膝がくづをれた、そしてはつたり溝の縁に倒れた。最初、深い睡りにでも落ちたやうな願が聞え、額には玉のやうな冷汗が滲み出し、腓のあたりがひく／＼と烈しく痙攣した。

巡査がやつて來た頃には、彼はもうびくともせず静にそこに横はつてゐた、然しその顔の表情は、まだ明かに彼の最後の思想を物語つてゐた——

『人生といふ奴は、時には善い物だと思ふ事もあつたし、時には悪いと思ふ事もあつた。然しこの最後は最も善いものであつた。人生の謎を私の力で出來るだけよく解いた、あの金持の青年は、お前の云つてゐる物だけでは十分ぢやない云つてゐたが、それだけでも決して小さな問題ぢ

やなかつた。然し私達はお互に意志が疏通してゐなかつたのだらう。人間といふ者、とかくお互に了解し合ふ事の出来ないといふのは悲しい事だ。』

四、太陽を目ざして

四州湖畔のゲルザウの村では、三週といふ長い間お日様の光を見る事が出来なかつた。十月の初めにアルプス嵐が吹き出した頃からといふもの、日光を仰ぐ日はもう一日もなくなつたのだ。その日太陽が没してからは風は全く止み、私は半夜をすやくと睡り續けた。と寺の鐘の音と物騒がしさにふと目をさました——それはあの獨特な暴風の叫喚で、アルプスの山々を越えて轟とばかりに南の湖畔に吹き付けられ、一旦湖の釜中に壓搾せられてから再び村の小路の隅々にまで吹込み、招牌類をかたんに叩き付け、窓の戸をゆるがし、屋根瓦を捲き上げて、木々の梢や叢の中に唸つた。湖の浪は俄に湧き立つて防波堤に突きあたり、岸を越えて泡立ち騒ぎ、小舟に跳ね返つた。飛び散る砂塵は窓硝子を叩きつけ、木の葉は空中にきり／＼舞ひ上り、ストロヴの扉は煽り、家は揺れた。窓から外を覗いて見ると、寺の窓々は灯に明るく、鐘は續け様に鳴り渡つて、まだ目ざめない村の者を起さうとしてゐる。何故なればこの

アルプス嵐といふ奴はこの地方では地震と同じ程度に危険なものとせられてゐる。それは家屋を吹き倒す位のは朝飯前の事で、山の上から大きな岩の塊を吹き飛ばしさへする、そして我々が丁度麓に住んでゐるその山は、高さは千五百メートルに過ぎないが、その峰や頂には、大仕掛けの石投げには持つて来いといふあんなばい式に、岩塊がごろ／＼重り合つてゐるのであつた。然しさしもの狂風も三時間ばかり猛り狂つた後に危険は過ぎ去つた、そして翌朝村の噂に依ると、シウィツの或る百姓家の土堤つ腹を大きな岩が貫いて、右翼の方をすつかりさつて行つてしまつたが、幸ひ左翼の方に住んでゐた家族だけは無事であつた、といふ。

この恐い、生温い狂風が吹き止んだ後に霧が村と湖とをすつかり立罩めてしまつた。空は一面にかき曇つてゐるが、雨は一滴も落ちて来ない、その代り日光も全くさもない。そんな天候が三週間も續いたのだ、そして一切の物を灰色に見るに始まつたとすれば、それを眞黒に見るに終つた。これまでは、見る人の心を引立てたアルプスの風物も百メートル彼方の岩を望み見る事さへも出来なくなつてしまつた今では、全くその性質を失つて、人の心は只重々しく垂れ込めるばかりである。すべての旅人は故郷へ故郷へと急ぎ、ホテルはがらあきになつて、早くも十一月がやつ

て来た——望みなく陰鬱なあの十一月が。薄暗い日はさつさと暮れてしまふといふ、早く明るい灯の色を見たいと人は毎日願つた、空は鉛のやうに暗澹として何時になつたら晴れ行くものか望みさへなく、湖も薄暗く、四邊の風物も皆薄暗い。

風もなく、雨もなく、雷鳴もない。それまではあんなに變化に富んだ自然が、今は堪へ難い程に單調で、平靜で、死せるが如くに寂として聲もない——いつそ地震でも起つてくれればいゝ、とさへ思ふ位に平和である。光の源が最早働かなくなつた今では、あらゆる物の色は失はれてしまつた、目は鈍り、精神は懶惰に似た倦怠に垂れ籠められる。或る晩私はこの土地の或る役人に向つて、長い間太陽の光を見る事の出来ない愚痴をこぼすと、彼はこの地方の人に特有な落着き拂つた調子で答へた——

「太陽！ 太陽なら、ホッホフルーへ登りさへすれば、一日中見て居れますよ。」

ホッホフルーといふのは、我々が住んでゐる谿谷をめぐると小アルプス山脈の一つの峰で、ズリテルマよりも二百メートルばかり低い、それで若い英國人などがよく遊びに出かける山である。太陽崇拜家なる私は、太陽を目ざしての巡禮をやらうと決心した、そして十一月の或る朝早く出發した。

先に述ぶるが如く、いつ何時岩石の雨を降らす火山に變ずるかも知れないといふ恐いこの山の麓に住んでゐるゲルザウの村人は、昔から、何時死んでも差支ないといふ覺悟に慣れて、毎朝、午、晩の三度は缺かさずお寺に參詣する習慣になつてゐる。それでこの朝も八時頃、手に／＼祈禱書を持つた參詣人達に澤山出會つた。半マイルもある處から朝參りに出かけて来た二人の老婆は、歩きながら珠數を爪繰つてゐた。その一人がアヴェ・マリアを唱へると、他の一人はそれに應じてイン・ザエクラ・ザエクロルム・アーメンといふ折返し文句を入れる。そしてこのアヴェ・マリア……アーメンのお題目を繰返しながらお寺までの道中をやつて行くのだ！ そんな文句を繰返したところで、何の御利益がある譯でもあるまいけれど、少くともこのお婆さん達が無益な饒舌に舌を動かすといふ事だけは防げるわけである——私はふと、或る殿様が酒倉に入る家來には間斷なく口笛を吹かせる事にしたといふ昔話を思ひ出させられた。

この老人達と街道とを見棄て、いよいよ登りにかゝると、私は早速、鋭い忘れ難い印象を残すものに打つかつた。それは、第一の曲り角に立つてゐる胡桃の木で、その幹に基督の像と銘を書いた板とが打ち付けてあつて、百姓ゼビといふ者がこの胡桃の木から落ちて死んだといふ事が記して

ある。神よ、あはれなこの男の魂を救ひ給へ、アーメン！
 その次の曲り角には、白塗りの煉瓦でこしらへた小さな不思議な恰好のお堂が立つてゐる、それはまるで子供のこしらへた人形の家のやうな感じのするものである。格子から中を覗き込むと、聖家族の繪が祀られてゐる、多分十六世紀頃のものであらう、そしてその側には、死刑に處せられる者が刑場への途中この御堂の前に立ち止つて、しばし最後の祈念を凝す事が許されるといふ文句が掲げられてゐる。そんなら私の今歩いてゐる道は仕置場へ行く道なのだ。そして數分間にして私はその刑場に達した。それは湖の方へ突出してゐる山の一角に在つて、びつくりする程に見晴しのいゝ場所である。ピラトウス、アクゼンシュトック、ブオクゼルホルン、ビュルゲンシュトック等の峰から峰へと見はるかす斯くも素晴らしい眺めを最後の一瞥としてこの世に暇を告げる事が出来るものなら、死ぬのもいつそ一つの享樂と云つてもいゝかも知れない。人知れずひそかに縊り殺される事は何よりも厭だ、と云つたあのヴォルテールだつて、此處で殺されるのなら、恐らくその不満は洩さなかつたらう——彼がルソーの虚榮を非難して、若し自分の名が絞首臺上に掲げられさへしたら、彼は喜んで自ら死に就いたやらうといふやうな事を云つたのも、従つて偶然ではないの

だ。こゝよりはるか下の方の岸に近く、子殺し寺と呼ばれる氣味の悪い寺の輪廓がぼんやり見下される、そこでは昔悲哀のどん底に沈んだ一人の父親が、その餓多切つた子供を自分の手にかけて殺したといふ傳説が傳へられてゐる。以上合せて四つの物悲しい或は血腥い光景を灰色の朝の光の中に背後に残して、私は輝く太陽が待ち受けてゐる明るい處へと足を早めて登つて行つた。

栗の木や胡桃の茂つてゐる地域は間もなく通過して、山毛櫨の林に入つた。私は美しい牝牛や小汚い犬等がある牧人小屋に休憩してから、いよ／＼雲界へと突入した、それは霧と稱する物になつて、だん／＼と濃くなつて行き、遂にあたりの風景をも見えなくしてしまふ。物の姿をはつきり見定めようと骨を折るので目が痛む、木々や叢は雲煙の中に糺糊として姿を没し、梢から梢へと張り渡された無數の蜘蛛の巣の網には隙間もない程に滴が光つて、若し實際に森の妖婆といふやうなものがあるならば、彼女が幾千萬とも數知れぬリースハンカチーフを乾かす爲めにこんな木々の枝にかけ連ねたのかと思はれるばかりであつた。

山霧は呼吸を苦しくし、上衣や髪や髭や睫毛にまでもうささくかゝつては、不快な、かび臭い匂を擴げ、石に降りては足元も危い程につる／＼と泣らせる。森の内部のあらゆる

る物は朦朧と消え去り、木々の幹は見えると思ふ間もなく又直ぐにその中に影を没して、眼界を僅々數ヤードの狭さに縮めてしまひ、濃淡もない單調な薄墨の唯一色に吞まれてしまふ。

凡そ千メートルの幅を有するこの霧の層を——天界に達するまでには是非とも通過しなければならぬこの濡れて冷たい煉獄を私は辿り登らなければならないのであつた。然も私は、アルプスが終つて、灰色の虚無の境が始まる前には、必ずその區域が終ると云つたあの役人の言葉に飽くまでも信頼して、喘ぎ／＼登つて行くのだ。

私は氣壓計は携へてゐなかつたが、もう大分の高さまで登つて來た事が分つた、濃霧は次第に稀薄になつた、そして追々に清らかな空氣に近付いて來た。貴い酒の酔ひ心地に私は捉へられた、そして今、狭い山路の上から、さながらほの／＼と明け行く朝の光が捲き上げ戸の風景畫をぼんやり照し出すやうな微光がさし始めた。木立ちの姿もはつきりして來た、目も今迄よりは遠くが見える、耳には牝牛の鈴の音がちりん／＼と聞え出した——上の方からだ。そして、見よ、はるか頭の頭上には金色の雲が燦然と輝く。足を早めてもう數歩——日光の流れが黄色く散り残つた木の葉の上

に落ちる時、山毛櫨の下生は金と銅と青銅と銀の光に輝く。私は今秋の日の冷たさと濕つぽさの中に立つてゐる、然も太陽に灼熱せられる眞夏の景色を目の前に見る——その刹那、私は曾てメーラル湖上を帆船で渡つた時の事を思ひ出した、その時私は赫突たる太陽の光を浴びてゐた、然も丁度その時船の傍に、錨索程の距離の處を、霞交りの黒い夕立がさつと湖の面を打つた。……今私は太陽の光を眞面に浴びて立つてゐる。上には、はりもみの木や白樺の繁る北方の景色を見る、赤い牝牛達の遊んでゐる緑の牧場やささやかな褐色の小屋を見る——年取つた婦人はその敷居際に日向ぼつこをしながら、テッシン州で働いてゐる父ちゃん

の爲めの靴下を繕つてゐる、それから馬鈴薯の畑とラヴェンデルの茂りとダリアと金盞花とを見る。

そして私は太陽の熱に私の髪と外套とを乾かせ、まだ凍えてゐる體を温めて貰つた、私は萬象を生み育てる燃ゆる太陽の前に帽を脱いだ、——それは永遠に燃え續ける水素の焰から出來てゐるのか、それともまた未だ認識せられざる元素ヘリウムから出來てゐるのか、そんなことはどうでもいゝのだ。女性の助けを借らずに世界の體を生める最高の父よ、生と死とを與へ、寒暖、夏冬、豊凶を定むる萬能の支配者よ！

私は斯くして夏の氣分と緑の草原とに目を樂ませた後

に、今しも迎り來つた、足下の暗い奈落の底を俯して見た。こゝからは目の届かない湖の上には暗さと冷たさとが一面に擴がつてゐる、然しながら、それは此處から見ればちつとも暗くも冷たくもなく、光り輝く雪白の羊毛の如くに、矢張り同じく上の方から太陽に照されて、汚れた下界を蔽ひかくしてゐるのだ。そして白い雲の褥の上には、雪を頂くアルプスの峰の二つ三つが雲を破つて光つてゐる——矢張り同じく深く立竪めた銀の霧に圍まれ、空氣と日光の溶液から結晶し、新たに降り積める雪の海に漂ふ浮氷の如くに。それは實に文字通り塵界を超越したる光景である、それに對しては白樺の木蔭に遊ぶ牝牛の鈴の牧歌的情調さへも平凡なものになつてしまふ。

と忽ち、この山上には死せるが如き静寂が支配した後、下の方から——悲しい人間共が灰色の空の下で、ふるへ蠢いてゐる下界の方から、何やらびちや／＼するやうな物音が聞えて來た、それはだん／＼上の方へと近づいて來て、雲の褥の底を通して目で追ふことも出来るやうにさへ思はれた。それはまるで水車の音の如く、雨に水増す小川の流れの如く、又は、潮満ち來る浪の音の如くにも響いて來る！今や一つの叫び聲が下界の方から登つて來る——それはさながらこの湖をとり圍む四州の全住民が聲を揃へてウリロ

トシニトックの峰に向つて救ひを求むる叫喚の如くにも聞える、然しそれは實は外輪船の汽笛の音に過ぎなかつた、そしてこのホッホフルーの峰が雲の層を突き抜けて、清澄な空氣の中に漲り溢れる反響を幾重にも折り返して、こんな風に響き渡らせたものであつた。そしてもう正午である。私は再び山を下らなければならぬ、深い霧を通して下らなければならぬ——暗黒へ、陰濕へ、塵界へと……そして其處では太陽の光を仰ぐ事が出来るまでには、恐らく又々三週間も待たなければならぬのだらう！

——了——

死の舞踏

ストリンドベリ作
三井光彌譯

第一部

人物

エドガール 要塞砲兵大尉。
アリス 彼の妻、もとは女優。
クルト 検疫所長。
副人物——女中エンニ、老婆、歩哨（無言）。

場面

灰色石よりなれる要塞の圓塔の内部（灰色石は、ドレ一種の岩石にして、長石、輝石及び磁鐵よりなる）。

正面に、硝子の扉ある二つの大なる入口並び、硝子越しに砲壘聳えたる海岸と海面の一部を見る。入口の左右には、花鉢や鳥籠等を置ける窓あり。入口の右手にピアノ、舞臺の手前近くに縫物卓と二脚の脇掛椅子。左手舞臺の中段に、電信機を取付けたる書き物机、それより手前に人物の寫眞等を飾れる飾り棚。その側には一脚の半長椅子。壁に寄せて食器棚。天井には吊ランプ。ピアノの側の壁上、扮装せる女優の肖像の兩側に、リボンを付けたる月桂樹の大なる花輪二つかゝれり。扉の側に、軍服、サーベル等を吊せるむきだしの衣桁。その側に一の戸棚（婦人用の化粧道具や細々）。扉の左右には、水銀晴雨計かかれり。

第一幕

生温き秋の夕暮。要塞の入口は開かれて、一人の砲兵の海岸砲臺に歩哨に立てる姿が見える。彼は古代バイエルン型の兜帽を頂き、そのサーベルは時々夕日の紅き光にきらめく。海は薄暗くたそがれて音もなくしづまつてゐる。

大尉は縫物卓の左手なる脇掛椅子に坐し、指の間に火の消えたシガーを挟んでゐる。着古した軍服に乗馬長靴と拍車。疲れて、がっかりした顔色。

大尉は右手の椅子に坐して何も爲し居らず。同じく疲れてはゐるが、何物かを期待せる如き顔色。

大尉 少し弾いてくれないか？

アリス 「氣がなささうに、然し不平らしくはなく」何を演ればいゝんです？

大尉 何でもいゝよ！

アリス でもわたしに出来る曲は生憎みんなあなたお好きぢやないんでせう！

大尉 そしておれに出来る曲はお前さんが嫌ひと來てゐる！

大尉 もう直き鱈の節になるね？ もう秋だ！

アリス え、秋ですわね！

大尉 家内も外もすつかり秋だ！ 然し、秋になると家内も外も寒くなるにはなるが、鱈のフライにシトロンの薄く切つた奴でも添へて、ブルグンドの白葡萄酒を一杯引つかけるなんざあ、満更でもないて！

アリス おや大分舌が廻り出しましたね！

大尉 ブルグンド酒の序なら、酒窖にまだ残つてたか知ら？

アリス 五年前から、酒窖があつたなんて事さへ、わたしもう忘れて居りましたわ！

大尉 お前のおかまひなしにも困つてしまふなあ！ あれは銀婚式の時に要るんぢやないか！

アリス あなたは本氣でそんなお祝ひなんぞなさるおつもり？

大尉 あたり前ぢやないか！

アリス そんな事をなさるよりも、わたし達のこんなみじめな生活を、二十五年間のみじめな生活をなるべく人様の前にかくすやうにする方が却つてあたり前なんぢやないでせうか！

大尉 ねえアリス、成程みじめな物ではあつたかも知れ

る！

アリス 「それにけかまはずに」戸は開けて置いた方が宜しいでせうか？

大尉 お前のいゝやうでいゝよ！

アリス ぢやあ、さうしときませう！〔間〕何故あなた煙草をおあがりにならないんです？

大尉 おれはもう強い煙草は吸へなくなつてしまつたよ！

アリス 「殆ど、親切な、と云つてもよい程の優しい調子になつて」ぢやあもつと軽いのおあがりになればいゝのに！ あなたの云ひ草ぢやありませんが、あなたの「唯一の樂み」ぢやありませんか！

大尉 「樂み」？ 樂みつて一體どんな物だい？

アリス わたしなんぞに聞いたつて駄目ですわ！ あなたと御同様、そんな物には至つて縁の遠い方ですからね！……そんならウイスキーでもおあがりになつたらどう？

大尉 もう少し待たうよ！ 晩にはどんな御馳走があるんだい？

アリス わたしに聞いたつて分るもんですか！ クリスティンにお訊ねさいよ！

ないよ。然しおれ達だつてたまには、いゝなあ、と思つた事もなくはなかつた！ それに人間は、生きてゐる間はなるべくこの短い時間を利用しなけりや嘘だ、あとになつたら、もうおしまひだからなあ！

アリス おしまひですつて？ ほんとうにさうだつたらいゝんですけれど！

大尉 おしまひさ！ あとはもう、肥料車に載つてつて野菜畑にでも打ちまけてしまふだけの話ぢやないか！

アリス 人間はつまりその野菜畑の爲めにそんな大騒ぎをやらかすのね！

大尉 うむ、さうさ！ だがおれはそんな大騒ぎはしなかつたぞ！

アリス ほんとにそんな大騒ぎをなさる癖に！

問。 郵便はもう参りまして？

大尉 うむ。

アリス 肉屋の書附もありまして？

大尉 うむ。

アリス いくらになつてゐまして？

大尉 「ポケットより一枚の書附を取出して、眼鏡を鼻に載せるが、直ぐに取る」讀んで御覽！ もう見えん！

アリス お目がどうかしましたの？
 大尉 知らない！
 アリス お年のせいでせう。
 大尉 下らん事を云ふなつたら！
 アリス わたしなんかそんな事はないわ！
 大尉 ふむ！
 アリス 「書附を見て」これをあなたお拂ひになれて？
 大尉 拂へるよ、尤も今直ぐぢやないが！
 アリス そんなら、もつと後でね！一年も経つて、首をちよん斬られて、けちな恩給でも食ふやうになつてから拂はうと仰しやるのね。それでは遅すぎますわ！
 又、御病氣がぶりかへして来て……
 大尉 病氣？ おれは生れてからまだ一遍も病氣といふ物にかゝつた覚えのない人間だぞ、たつた一遍氣分のよくない事はあつたけれど！これからだつておれはもう二十年も生きるんだ！
 アリス でも醫者はまるでそれと違つた事を云つてますわ！
 大尉 醫者が？
 アリス え、でなけりや人の病氣の事なんぞそんなにはつきりと云へるもんですか？

大尉 おれの體は何處を捜したつて病氣らしいところなんかありはしないよ、これ迄だつて病氣なんぞした事はなかつた。これからだつてそんな物にとつゝかれる氣遣ひはありやしない、おれは病氣だなんて云つてる暇もなしに、老兵士のやうにポックリ往生すればいいんだ！
 アリス 醫者と云へば、ドクトルのところで今晚お客があるんですつてね！
 大尉 「昂奮して」うむ、それがどうしたといふんだ？ おれ達はドクトルの家と交際がないから招待もないまでの話ぢやないか、そして奴等と交際がないといふのも、此方でしたくないからしない迄の話だ、つまり奴等を輕蔑してゐるからなんだ、一體あんな馬鹿な奴等はないよ！
 アリス あなたの口にかゝつちやあ誰でもみんな馬鹿扱ひね！
 大尉 實際馬鹿者ばかり揃つてゐやがるからよ！
 アリス そしてあなただけは例外なのね！
 大尉 うむ、おれは少くとも、人生のあらゆる場合に處して立派にやつて来た人間だからな。だからおれは馬鹿ぢやないよ！
 問。
 アリス カルタでもやりませうか？

大尉 よからう！
 アリス 「縫物卓の抽斗よりカルタを取出して、切り始める」ドクトルが私宅の宴會に勝手に軍樂隊を使ふなんて……！
 大尉 「腹立たしく」彼奴一生懸命町へ出かけちやあ大佐におべつかを使つてやがるからさ！ おべつかを使ふ——ふむ、そんな眞似が出来るもんか！
 アリス 「札を配る」それでもイェルダとはわたしつき合つて居りましたわ、でもあの人わたしにはどうも不實だつたんですもの！
 大尉 奴等はみんなさうさ！……切札は何だい？
 アリス 眼鏡をおかけなさいよ！
 大尉 かけても駄目だよ！……さうく！
 アリス 切札はスピードですわ。
 大尉 「不機嫌に」スピード？
 アリス 「札を出す」……それはあなたの仰しやる通りかも知れせんわ、けれど、來たての將校の奥さん達にまで、わたし達はいつちも札付きの除け者にされてるのね！
 大尉 「札を出して、取る」どうでもいゝぢやないか、そんな事！ おれ達は一遍だつてお客をしたためしがある

ぢやなし、そんな風に思はれやしないよ！ おれは誰につき合つて貰はなくつてもいゝ、いくらでもひとり居れる人間なんだ——そして今迄だつてそれで立派にやり通して来たんだ！
 アリス わたしだつて！ 然し子供といふ物がありますからね、友達もなしに一人ぼつちで大きくなるのは可哀想ですわ！
 大尉 子供は子供で勝手に町で友達でも何でも捜すがいいさ！……この札を取るよ！ お前の手にはまだ切札がある？
 アリス もう一枚！ それはわたしが取れるのだつたに！
 大尉 六と八で十五と……
 アリス 十四よ、十四よ！
 大尉 六と八で十四か……おれは勘定する事も忘れてしまつたと見える！ それに二つで十六か！「欠伸をする」お前の番だよ！
 アリス もうお飽きなすつたのね！
 大尉 「札を出す」いゝや、ちつとも！
 アリス 「外の方に耳傾けつゝ」こゝまで音樂が聞えて來ますわ！

問。

アリス どうでせう、クルトも呼ばれたんでせうか？

大尉 あの男は今朝着いた筈だから、燕尾服を出す位の時間はあるだらうよ、こゝまで訪ねて来る暇はないかも知れないが！

アリス 検疫所長とか云ひましたね？ そんならこの島に検疫所が出来るとは？

大尉 うむ！

アリス あれでもわたしの従兄には相違ないし、わたしだつて、もとはあの人と同じ苗字だつたんですから……

大尉 そんな事は名譽でも何でもありませんよ！

アリス あなた……「きつぱりと」わたしの身内の事だけはどうぞかれこれ仰しやらないやうにして下さい、その代りわたしもあなたのお身内の事には決して立入りませんから！

大尉 よし／＼。もう一勝負やらうかい？

アリス 検疫所長つて醫者なんでせうか？

大尉 いや、單に事務を執るだけの、まあ一種の事務官とか書記とか云つたやうな物さ、それにクルトはまだ醫者にも何にもなつてゐないんだから！

アリス あれも氣の毒な男でした……

大尉 彼奴の爲めには金は使はせられるし……おまけに妻子を棄て、出奔した時なんぞは、散々な評判だつたよ！

アリス そんなにひどく云つちやあいけないわ、エドガール！

大尉 でも全くその通りだつたんだ！……それから彼奴が亞米利加くんだりでやつた仕事と云つたら！ 無論、

おれは彼奴に會ひたいなどとは手頭思つてゐない！ 然し面白い奴には相違なかつたよ、おれは彼奴を相手によく議論をやつたものだ！

アリス 素直な人でしたからね！

大尉 「昂然と」素直でも素直でなくつても、兎に角話せる人間だつたよ……この島と來た日にやあ、おれの話が分るやうな人間は一疋だつてゐやしないんだから……そろひもそろつて馬鹿者共の寄合ひなんだ！

アリス 不思議な事があるもんですね、あのクルトが丁度わたし達の銀婚式の時に來合せるなんて……お祝ひをするしないは別としても！

大尉 何が不思議なんだ！ あゝさうか、おれ達をめぐり合せたのはあの男だからといふんだらう、或は、お前をおれの處へ所謂かたづけしたのはあの男だからといふんだらう！

らう！

アリス だつて實際さうだつたんぢやありませんか？

大尉 たしかにさうだつたよ……あれも一つの思ひつきには違ひないさ……事の是非善惡の判断はお前に任せるとしてね！

アリス 輕はずみな一つの思ひつき……

大尉 ところがその爲めにひどい目に會つたのは、張本人の彼奴ではなくつてこのおれ達だと來てる！

アリス それにしても、わたし今迄ずうつと芝居の方に出てゐたらどんなだつたでせう！ あの頃のわたしの仲間は今ぢやどうしてみんな大立て者よ！

大尉 「起ち立る」さうだらうとも！ ラム水でも飲ま

う！ 「ビュッフェに立寄りラム水を調合して、立ちながら飲む」此處んところに足を載せる横木を一本取付けるといふんだがなあ、さうしたらまるでコペンハーゲンにゐるやうな、あの亞米利加バーでも飲んでゐるやうな氣持になれるんだがなあ！

アリス ぢやあ横木でも何でも早速こしらへさせたらいいでせう。そんな事でコペンハーゲン氣分になれるなら。何と云つてもあの時代がわたし達の花でしたわね！

大尉 「烈しく飲み續ける」うむ、お前あのニムブのナ

ヴァラン・オウ・ボンム(料理)を覚えてゐるかい？ (舌打ちをする)

アリス いゝえ、けれどわたしあのティヴォリの音樂會だけは今以て忘れせんわ！

大尉 お前は何しろお上品な趣味を持つてらつしやるからなあ！

アリス 趣味のある女を女房に持つのはあなたとつて惡くない筈ぢやありませんか！

大尉 それもさうさね……

アリス 女房自慢でもやらうといふ時にはね……

大尉 「飲みながら」ドクトルの家ではダンスをやつてゐるやがるな……バスクラリネットの四分の三調が聞えて來るよ——ボン——ボンボン！

アリス アルカーザル輪舞のメロデーが手に取るやうに聞えて來るわ！ ほんとうに——わたしなんぞ考へて見ると、ワルツを踊つたのは随分昔のことね！

大尉 お前それでもやつたらまだやれるかい？

アリス 「まだ」ですつて？

大尉 さうさ！ お前はもうダンスなんぞやれなくなつてるよ、屹度——尤もおれだつてさうだけれど！

アリス わたしはこれでもあなたより十も若いんですか

大尉 ぢやあ二人は丁度お似合といふものだよ——女の
方が十位ゐ若いのがあたり前なんだから！
アリス 言葉をおつゝしみなさい！ あなたはお爺さん
です、さうですとも——そしてわたしは女盛りですよ！
大尉 さうともく、それは無論の事だよ、お前はいく
らでも若くつて綺麗になれるよ——おれ以外の男達に向
つてはね——自分でその氣にさへなりやあ！
アリス もうランプを點けようぢやありませんか！
大尉 よからう！
アリス ぢやあ鳴らして下さいな！
大尉 「物憂げに書き物机に行きて、ベルを鳴らす」
エンニー 「右手より登場」
大尉 すまないけれど、どうぞランプを點けてくれませ
んか、エンニー！
アリス 「鏡く」お前、吊ランプに點けるんです！
エンニー はい、奥様！ 「吊ランプに火を點けにかゝる、
その間に大尉は彼女を見守る」
アリス 「短く」お前、ほやをちゃんと拭いて置いた
らうね？
エンニー はい、一寸ばかり！

アリス まあ何といふ返事をするんだい！
大尉 まあく……
アリス 「エンニーに」あつちへ行つといで！ わたし自
分で點けるから！ それが一番いゝんだ！
エンニー あたしも同感ですわ！ 「行きかける」
アリス 「起ち上つて」行つちまへつたら！
エンニー 「ためらひつゝ」あたしが出て行つてしまつ
たら奥様が何と仰しやるか拜見したいわ！
アリス 「沈黙」
エンニー 「出て行く」
大尉 「自ら體を動かしてランプを點ける」
アリス 「いくらか心配になつて來たらしく」あの女は
んに行つちまふでせうか？
大尉 行つちまつたつてちつとも不思議はないよ、然し
さうなつたらおれ達はどんな目に會ふか……
アリス あなたが悪いからですわ、あなたがあんまり増
長させるからですわ！
大尉 いや、さうぢやないよ！ いゝかね、彼奴等はお
れの云ふ事だけは何でもよくはいゝきくからね！
アリス 奉公人達の御機嫌ばかりとつてゐるからよ！
奉公人ばかりぢやないわ、あなたは目下の者には誰にだ

つていやにへこくするのね、暴君のお定りで奴隷根性
だからですよ！
大尉 さうかね！
アリス さうですとも、あなたは兵隊や下士などには矢
鱈に愛嬌を振り撒く癖に、同輩の人達や上官とは始終喧
嘩ばかりしてゐるぢやありませんか！
大尉 うつふ！
アリス 暴君つて物はみんなさうした物よ！……それは
さうと、あの女行つちまふでせうか？
大尉 そりやあ行つちまふだらうよ、直ぐに行つて何か
優しい言葉でもかけてやらなけりや！
アリス わたしが？
大尉 だつておれがそんな眞似をしたら、又女中の御機
嫌を取つてるとか何んとか云はれるだらう！
アリス 行かれてしまつたら！ したらわたし又何時
かのやうに何も彼も一手に引き受けて、この手なんか臺
なしになつちまふのね！
大尉 それだけで濟めばいゝがね！ エンニーが出て行
つたら、クリスティンだつて行つちまふだらう、したら
もうこの島では奉公人なんて者は一人だつて雇へない事
になつてしまふよ！ 何しろあの汽船の運轉士の奴め、

奉公口を搜しに來る程の奴等をこはらせを云つてはみ
んな追拂つてしまやがるからな……そして奴がそれをや
らないとしても、おれのとこの砲手の奴がやりをるから
な！
アリス ほんとに、あの砲手達にも困つてしまふのね、
うちの臺所で勝手に飲み食ひしてるのに、あなたは追拂
ひもしないんですもの！
大尉 それは出来ないよ、そんな事をやつたら、奴等だ
つて次の再役の時にはみんな逃げ出すに決つてるよ……
そんな事にでもなつた日にや、肝腎の砲庫を閉鎖しなけ
りやならんやうな騒ぎにならあな！
アリス そんな事にでもなつたら、それこそわたし達の
口が乾上つてしまふわ！
大尉 だから將校團は陛下にすがつて扶養料の出資をお
願ひする事になつたんだよ。
アリス 誰の爲めに？
大尉 砲手達の爲めにさ！
アリス 「笑ひ出す」馬鹿らしくつてお話にならないわ！
大尉 さうだ、少し笑つて見せてくれ！ 笑ふ事は必要
だよ、おれ達にやあ！
アリス わたしもう笑ふ事なんぞ忘れてしまひさうよ！

大尉 「シガーに火を點ける」忘れてしまつては困るよ！
……だが何しろ退屈さね！

アリス 全く面白くありませんわね！……もつとカルタ
をおやりになつて？

大尉 いや、もう澤山だ！

間。

アリス ねえあなた、わたしどう思つても腹が立ちます
わ、あの從兄いとこの新検査所長が赴任早々眞先まっさきにわたし達の
敵の奴等やつらのそこへ顔を出すなんて！

大尉 それはさうだけれど、どうにも仕方がないぢやな
いか！

アリス でもあなた、新聞の來島者名簿を御覽になつた
でせう——あの人はレンティエとしてありますわ！ だか
らあの人が金持になつたのに相違ありませんわ！ (レン
ティエは「レンテ」即ち利息、地代、配當
金等に依つて生活する無職の資産家)

大尉 「レンティエ」だつて！ さうか！ 金持の御親類
——實際うちの親類としては破天荒の人間さね！

アリス あなたの身内では成程さうでせうよ！ けれど
わたしの方の身内には金持なんぞ幾らもありましたから
ね！

大尉 あの男金持になつたとすると、屹度いやにお高く

止つてゐるやがるだらう、けれどおれは彼奴を圖に乗らぬ
やうに抑へ付けてやる！ そして決して内兜うちかぶとを見すかさ
れるやうなへまはやらないぞ！

電信機かた／＼鳴り出す。

アリス 何處からでせう？

大尉 「立てるまゝ」一寸靜にしてくれ、どうぞ！

アリス 早く聞いて下さいよ！

大尉 聞える、聞える、云つてゐる事が！ 子供達だよ！
〔機械に近寄り、應答を打つ、それから機械暫時鳴り續け
る、それを聞き終つて返信を打つ〕

アリス どういふんですの？

大尉 一寸待つてくれ！……〔終止の信號を鳴らす〕町
の本部から子供達が打つてよこしたんだ。ユーディトが
又加減が悪くつて學校を休んでるんだつて。

アリス 又！ それからどんな事を云ひました？

大尉 無論金さ！

アリス 何故ユーディトはそんなに急ぐんでせうね？ 來
年試験を受けたつて早過ぎる位のぢやありませんか！

大尉 お前さう云つてやつて見るさ！ それで効目があ
つたら面白いだらう！

アリス あなたこそ云つてやらなけりやいけませんわ！

大尉 おれは何遍云つたか知れやしないよ！ 然しお前
だつてまんざら知らないわけぢやないだらう、子供とい
ふ者はね、何でもしたい事をするものだよ！

アリス 少くともこゝのうちではね！

大尉 〔欠伸をする〕
あなたは自分の妻の前で欠伸あくびなんぞするんです
か？

大尉 ぢやあどうすればいゝんだ？……おれ達は毎日毎
日同じ事を繰返して他にはしやべる材料がないのがお
前には分らんのか？ お前が例の「少くともこゝの家で
は。」といふ定り文句を並べ出せば、おれだつて又例の
「何もうちに限つた事ぢやないよ。」と云ひ返したくなる
だらうぢやないか！ だがおれは今まで五百遍もさうい
ふ返事をして來たから、今度は返事代りに欠伸あくびをしたま
でさ。だからおれの欠伸の意味はね——返事をするのも
面倒臭いよといふ事なんだ、或は又「御尤も様でございま
す、天使様。」といふ意味に取つてもよければ「もういゝ
加減で止さうよ。」といふ意味だと思つて貰つてもいゝよ。

アリス あなた今晚は恐しく愛嬌があるのね！

大尉 まだ直き晩飯にはならないかしら？

アリス あなた御存じ——ドクトルのところでは今晚町の

グランド・ホテルから料理を取るんですつてね？

大尉 そんな事おれが知つとるもんか！ ぢやあえぞ山
鳥も出るだらうな！ 「舌打ちする」えぞ山鳥ハシバネと來た日に
やあ、鳥類の中では、この上なしの珍味なんだぜ、お前！
尤も其奴を豚脂ブタアブラなんかで揚げるのはちと野蠻だよ！……

アリス まあいやな！ 又食べ物の話ね！

大尉 ぢやあ飲み物の話ならいゝのかい？ 一體あの野
蠻人共はえぞ山鳥ハシバネを肴さかなにどんな酒を飲む積りなんだら
う？

アリス 何か弾いて見ませうか？

大尉 「書き物机に座を占める」いよ／＼最後の手段だ
ね！ よからうよ、例の葬送マーチや輓歌を御免蒙れる
なら……何しろお前のはまるで諷刺音楽だからな。おれ
はいつでもこんな風に補つて聞いてゐるんだよ——「聞
いてもおくれよ、わたしの不幸！ ミヤウ、ミヤウ！ 聞
いておくれよ、うちの人の邪慳よこしま！ ブルム、ブルム、ブ
ルム！ あゝあ、死んでくれたらどんなに嬉しかる！
彼奴が死んだらお祝ひの太鼓をドンチャンドンチャン——
果てはアルカーザルワルツにシャンペン奔走曲」といつ
た風にな。おつとシャンペンで思ひ出したが、もう二本残
つてる筈だつてな。どうだい、あいつを持つて來て、お

客でもある時のやうに、陽気にやつてしまはうぢやないか？

アリス いゝえ、いけません、あれはわたしのです、わたし自分で買つて置いたんです！

大尉 お前はいつでも経済家だよ！

アリス そしてあなたはいつでももけちん坊ね、少くともあなたの妻には！

大尉 ぢやあどんな事をして退屈をまぎらしたらいゝか一寸思ひ付けないよ！ 何か踊つてゝも見せようか？

アリス いゝえ、有難う！ もうあなたの踊りなんか駄目でせう！

大尉 家にお前の友達が一人ゐるといゝんだがな！

アリス 有難う！ あなたこそお友達でも連れていらつしやればいゝのよ！

大尉 いや有難う！ あれは然しもう試験済みだ、そして結果はお互に氣拙い思ひをするだけだった。然し實驗としては確に面白かつたよ——お客があるとおれ達は直ぐに上機嫌になつたからな……少くとも最初の間は……

アリス でもそれから後がね！

大尉 うむ、それはまあ云はない方がいゝ！
左手の扉を叩く音。

アリス 誰でせう、今時分？

大尉 エンニーなら戸なんぞ叩きはしないが！

アリス 行つてお開けなさい、「お入り」なんて大聲で叫ぶのはわたし大嫌ひよ、仕事場にでもゐるやうで！

大尉 「左手の扉の方へ行きながら」仕事場はお嫌ひかね！

再び扉を叩く音。

アリス 開けて御覽なさい！

大尉 「扉を開いて、渡された名刺を受取る」クリスティンだ！ エンニーは行つてしまつたのかい？ 「その答へは見物には聞えず、アリスに」エンニーは行つちまつたよ！

アリス それぢやわたし又おさんどんね！

大尉 兵隊の中から一人連れて来て、臺所の方でも手傳はせるといふわけには行かなくつて？

アリス もうそんな時代ぢやないよ！

大尉 ニーぢやないんでせう？
大尉 「眼鏡をかけて名刺を見詰めてから、アリスに渡す」見てごらん、おれには分らん！

アリス 「名刺を読む」クルト！クルトですわ！ 早く出迎へて頂戴よ！

大尉 「左手より去る」クルト！ 其奴はよかつた！

アリス 「髪を整へる、そして俄に生氣付けるやうに見える」

大尉 「クルトを連れて左手より登場」さあ、来たよ、裏切り者が！ しかしほんとはよく来てくれたなあ、君！

うんと抱き合つて再會を祝さうよ！

アリス 「クルトの方へ向つて」まあ、よく来てくれましたたわね、クルト！

クルト 有難う……随分久しい話ですね、お別れして以

大尉 来！
大尉 かうと……十五年になるかな！ お互に年をとつたよ！

アリス まあ！ でもクルトは變らないやうですわ！

大尉 まあかけ給へ、かけ給へよ！——それで、眞先にプログラムだが、君は何處かへ夕飯に呼ばれてやあしな

い？
クルト ドクトルの家に呼ばれてるんです、尤も行く約束はしてありませんがね！

アリス そんなら今晚は身内の者の側にいらつしやいよ！

クルト それが當然でせうね、でもドクトルは云はゞわたしの上役のやうなものですから、あとで面倒な事でも始まると……

大尉 何を下らない事を云つてるんだ！ おれなんぞは上役とか上官とかいふ奴の爲めに心配した事なんぞ一遍

だつてありはしないよ！

クルト 心配するしないは別として、面倒は屹度起りますよ！

大尉 この島では何と云つたつておれが殿様だ！ おれの背後にかくれさへすりやあ、指一本觸れる奴もありはしないよ！

アリス 静にしなさいよ、エドガール！ 「クルトの手を取る」ねえ、主人だの上役だのといふ面倒な事は考へず

に、兎に角此處にいらつしやいよ、どうしてもその方が正しくもあり、この場合適當つてもゐるやうですわ！

クルト ではさう致しませう！ 殊にわたしは此處では大いに歡待されるだらうと思ひますから！

大尉 そりやあ歡待されるに決つてるよ！ 我々の間にまだ片の付かない話が何か残つてゐるといふわけぢやな

し……

クルト 「一種不快の念をかくし得ず」

大尉 あんな事は何でもないよ！ 君は確にいくらからだ
らしがなかつたさ、だが何しろあの時分は君もまだ若か
つたからな。あんな事おれはもう綺麗に忘れてしまつて
るよ！ おれは何時までもあんな事をくよくよ思つてる
やうな人間ぢやないよ！

アリス 「當惑せし顔色」

三人縫物卓の側に座を占める。

アリス 時に、あなたは随分廣く世界をお廻りになつた
でせうね？

クルト さうです、そして今度はあなた方のところにか
くれがを求めて入港したといふわけです。

大尉 二十五年前に君が夫婦にしてくれた二人のところ
へね！

クルト いや、必ずしもさういふわけぢやなかつたんで
すけれど……そんな事はまあどうでもいゝです。然しあ
なた方が二十五年間もかうやつて平和にしてゐられると
ころを拜見するのは嬉しいですよ！

大尉 うむ、おれ達もどうにかかうにかこゝまで漕付け
ては來たよ、時々厄介な事もなくはなかつたがね、それ

でも、よく云ふ通り、どうにかまあ保つては行くのさ。

アリスなんかは決して不平を云へた義理ぢやないよ——
おれ達は現在何も不足のない身分だからね、金はどんど
ん入つて來るし。君は知らないかも知れんが、おれはこれ
でも有名な著述家なんだよ、教科書の編纂者として……

クルト さういふ、思ひ出しましたよ、この前お別れし
た時分にあなたは射撃術の本をお出しになつて、よく賣
れましたつけね！ 今でも士官學校で使つてゐますか？

大尉 使つてるよ、そしてあの種物では第一位を占め
てるよ、尤もその代りにもつと杜撰な物を使用しよ
うとした事もあつたがね……現にさういふ本も使はれて
はゐるよ、けれども全然價値のない物だからね！

心苦しき沈黙。

クルト あなた方は外國の方へおいでになつたといふ事
も承りましたが！

アリス え、コペンハーゲンへ参りましたの、五度も
ね！

大尉 さうだ！ アリスを舞臺から退かした時の話だ
よ、君！

アリス あなた、「退かした」ですつて？

ぢやないか……
アリス まあ俄に氣が大きくなり出したのね、あなた
は！

大尉 ところが、おれのお蔭で前途有望な舞臺生活がめ
ぢやくにされてしまつたとかいふんで……ふむ……そ
の償ひをやらされる段になつて、これをコペンハーゲン
へ連れて行く約束をしたのさ……そしておれはその約束
を守つたのだ——眞正直に！ 五遍も行つたんだ！ 五
遍！（と左手の指で數へる）——君はコペンハーゲンへ
行つた事があるかね？

クルト 「微笑しながら」いゝえ、わたしは多く亞米利加
の方にゐたもんですから……

大尉 亞米利加？ 亞米利加と云やあ君、浮浪人共の寄
せ集りみたいな恐しい國ぢやないか？

クルト 「不快らしく」コペンハーゲンはさうぢやない
ですね？

アリス あなたは……お子さんの事を……何かお聞き込
みになつて？

クルト いゝえ！
アリス かう申しては何ですけれど、あんな風にしてお
子さん方を打つちやつて行つてしまふのはちと輕卒な……

クルト わたしは決して打つちやつて行つたわけぢやな
いんです、裁判の判決で母親の方で引き取る事になつた
ものですから……

大尉 その話はもう止さうぢやないか！ 君があゝの事件
から手を引いてしまつたのはいゝ事をしたとおれは今で
は思つてるよ！

クルト 「アリスに」あなたのお子さん達は如何です？

アリス 有難う、二人とも町の學校へ行つて居りますの、
もうぢき大人ですわ！

大尉 うむ、どれもよく出來る子供でね、殊に伴の方は
素晴らしい頭だ！ ほんとに素晴らしい！ どうしても參謀
肩章ものだよ！

アリス うまく採用されさへすればね！

大尉 伴がかい？ 彼奴は陸軍大臣にだつてなれるよ！

クルト 話は別の事になりますが……時に、この島に檢
疫所が出來る事になりましたんで……ペストやコレラ等
のね。それであのドクトルが御存じの通りわたしの上役
になる筈なんですが……ドクトルつて一體どんな人間な
んでせう？

大尉 「人間」？ あれは君人間ぢやないよ！ 物知らず
のならず者さ！

クルト 「アリスに」それはわたしにとつては非常に不愉快な事ですね！

アリス まさかこの人が云つてる程に危険ぢやありませんのよ、ですけれど、どうもあまり感心の出来る人物ぢやないつて事はわたしも拒むわけには参りませんわ！

大尉 感心どころか、彼奴はならず者だつて云つてるぢやないか！ 他の奴等だつてみんなさうだけれど——税關吏でも、郵便局長でも、電話の交換手から、生薬屋、水先案内人共の——えゝと何とか云つたな——「親方」か、親方に至るまで……どうも此奴もならず者の碌でなし野郎ばかり揃つてやがるんだ、だからおれは彼奴等とは一切つき合はない事にしてるんだ！

クルト あなたはさうした連中みんなと仲が悪いんですか？

大尉 一人も残らず、みんなとだ！

アリス えゝほんとうの事ですわ、あんな連中とはとても交際なんぞ出来るわけのものではないつて事は！

大尉 まあ云つて見れば、この國中の暴君といふ暴君が一人も残らず此處に島流しになつてるやうなもんさね！

アリス 「皮肉に」全くその通りですわ！

大尉 「悪氣なしに」ふむ！ あてこすつてやがるな！

アリス そりやあいくらでもいらつしやいよ、この島の人達のところへだつて！ でも歸つて来るのは矢張りこのわたし達の處より他にはありませんわ、何と云つてもこゝにはほんとうのあなたのお友達が待つてゐるのですからね！

クルト あなた方のやうに右も左も敵の眞中に孤立してゐる事は恐くはないものでせうか？

アリス 愉快ぢやありませんわ！

大尉 いや恐くも何ともありませんよ！ おれは一體、生れてから始終敵ばかり相手にして来た人間なんだ、そして奴等はこのおれを害するどころか、却つて助けてくれたよ。だからおれは死ぬ時には威張つてかう云へる——おれは未だ曾て誰のおかげを蒙つた事もなく、

パンのかけら一つ他人から只で貰つた覚えのない人間だ！ おれの有つてる物は一から十までみんなおれのこの腕で贏ち得た物なんだから！

アリス さうですわ、エドガールの歩いて来た道は、決して薔薇の花びらを踏んで行くやうな氣樂なものぢやありませんでしたわ！

大尉 荆棘と石ころの、燈石の道さ……だが自力を以てだよ！ 君はこの「自力」といふ物を知つてるかね？

おれは暴君ぢやないよ、少くとも我が家に於てはさうぢやないよ！

アリス 一生懸命に辯解してるのね！

大尉 「クルトに」君、妻の云ふ事を本氣にしちやいけないよ！ おれは至極結構なお人好しの御亭主で、婆さんはまた世界に類なき模範的良妻と來てるんだから！

アリス 何か飲み物は如何、クルト？

クルト 有難う、只今はまあ！

大尉 ぢやあ君は……變つたんだね？

クルト ちと控へるやうに……

大尉 亞米利加式にかい？

クルト えゝ！

大尉 おれはその控へるといふ事が眞平御免さ、控へる位のなら全然よしちまふね！ 男子須く彼の酒杯を以て好敵手と爲すべしさ！

クルト この島の人達の話に戻りますが——わたしは商賈柄當然あらゆる人間と接觸する事になるでせうが……

うまくやつて行く事は大分面倒だらうと思ふんです、なるべく他の連中のいざこざに引き込まれないやうに用心はしてゐても、ついつつかりはまり込んでしまひ易いものですからね。

クルト 「簡単に」知つてます、然し自力といふ物の詰らなさをもう十年も前に見透してしまひました。

大尉 そんなら君は馬鹿だ！

アリス 「大尉に」まあ、エドガール！

大尉 さうさ、馬鹿だとも、苟も自力をもたないやうな奴なら！ そりやこの肉體の機關がびつたり止つてしまへば、例の肥料車で野菜畑に押出すより他には何んにも残らないつて事は、まぎれもない事實だ。然しだ、この機關が動いてゐる間は、踏んづけるんだ、擲るんだ、この手で以てな、この足で以てな——機械の續く限り、これが即ちおれの哲學だ！

クルト 「微笑しながら」いやお話をうかづつてると頗る愉快ですよ！

大尉 然し君は全然おれの云ふ通りだとは思つてゐないんだらう？

クルト えゝ、そりやあ思はれませんが。

軽くたゞいて見る、
 アリス 「クルトに」あなた夕飯を食べていらしつても
 いゝでせう？
 クルト えゝ、有難う。
 アリス でも何んにも御馳走は出来ませんわ、丁度女中
 に行かれつちまつたもんですから。
 クルト 結構ですとも。
 アリス まあ、無造作なのね。
 大尉 「晴雨計を見ながら」やあ降る／＼、お前達にも見
 せてやりたい位だ！ おれはちやんと先刻から氣壓の
 變化を感じてゐたんだ。
 アリス 「ひそかにクルトに」あの人はそりやあ神經質
 で感じが鋭敏なのよ！
 大尉 ぢきに夕飯を頂戴出来るでせうな！
 アリス 「起ち立る」わたし今臺所へ行つて支度をしよ
 うと思つてるところなの。まあ此處で、あなた方の哲學
 でも並べていらつしやいよ！ 「ひそかにクルトに」何で
 もこの人の云ふ事に逆らつてはいけませんよ、さうする
 とこの人折角の御機嫌が悪くなつてしまひますからね！
 それから、この人が少佐になれなかつたわけを訊ねる事
 だけは禁物よ！

クルト 「承知して領く」
 アリス 「右手へ行きかゝる」
 大尉 「クルトに向つて縫物卓に腰をかける」何かうま
 さうな物をこしらへて貰ひたいもんだね、おい、婆さん！
 アリス えゝ、お金を頂戴、どんな物でも差上げますか
 ら！
 大尉 口癖のやうに金々だ！
 アリス 「退場」
 大尉 金、金、金！ おれは朝から晩まで財布ばかり
 持ち廻つてるんで、おしまひにはおれが財布か財布がお
 れか、分らないやうな氣がして来るよ。君にはさうした
 心持が分るかしら！
 クルト えゝ分りますとも！ あなたと違ふのは只、わ
 たしのは紙入れになつたやうな氣がしただけです。
 大尉 ハ、ハ、ハ！ さうだ、君もその代物の味は知つて
 んだ！ 御婦人方といふ物の味をな！ ハ、ハ、しかも君
 は飛切上等の奴に打つかつたんだつけな！
 クルト 「我慢して」あの女の事はまあ過去に葬つて置
 きませうよ、今は！
 大尉 いやどうしてあれは正眞まがひなしの寶石だつた

よ！……おれも兎も角——何の彼のと云ふものゝ——
 いゝ女を貰ひあてたよ。結構な女だからね、何の彼のと
 は云ふやうなものゝ！
 クルト 「惡氣なくほゝゑみながら」何の彼のと云ふ
 ものゝね！
 大尉 笑ひ給ふな！
 クルト 「前の如くに」何の彼のと云ふものゝね！
 大尉 さうさ、兎に角彼女は忠實な妻であつたよ……賢
 母と云つてもいゝだらう、素晴らしい……然しまた「と右
 手の扉の方を窺つて」彼女には悪魔的な氣まぐれもある
 よ。君は知らないかも知れないけれど、おれはあんな女
 を押付けた君といふ物をひそかに怨んだ事もなくはなか
 つたよ。
 クルト 「人のいゝ調子で」然し、決してそんなわけぢや
 なかつた筈ですが！ ねえ、まあ聞いて下さいよ……
 大尉 いゝよ／＼！ 君は下らない事ばかりしやべつ
 てゐて、思ひ出したらさぞ不愉快だらうと思ふやうな事
 はみんな都合よく忘れてしまつてるんだね。悪く思はな
 いでくれ給へ！ おれはとかく部下に號令したり宣告し
 たりする習慣が付いてるものだからね！ 然し君はおれ
 の性質を呑み込んでるから、怒りはしないだらう。

クルト 怒りなんぞしやしません！ 然しわたしがあな
 たに奥さんを押し付けたとか何とかいふやうな事は、ま
 るで正反對ですよ！
 大尉 「雄辯を妨げらるゝ事なく」とにかく君、人生つて
 奴は變なものだとは思はないかね？
 クルト たしかにさうですね。
 大尉 それから人間、年をとるといふ事も——愉快な事
 ぢやあないが、考へて見ると興味はあるね。無論、おれ
 はまだ年寄になつたといふわけぢやないさ、でも近頃は
 何とはなしに自分の年齢といふ物が感ぜられ出して來た
 んだ。知合ひの人間は一人づゝだん／＼死んで行くし
 ——誰だつて淋しくなるよ！
 クルト 何と云つても、共に老い行く妻を持つてゐる人は
 幸福ですよ！
 大尉 幸福？ さう、幸福だらうね、子供といふものは
 大きくなれば自然親から離れて行つてしまふものだから
 ね。それにしても、君が子供達を棄てゝ行つてしまつた
 のはどうしても善くないよ！
 クルト さうです、然しわたしは決して子供達を棄てゝ
 しまつたわけぢやなかつたんです。つまり自分から取上
 げられたやうなものなんで……

大尉 君怒つちやあいけないよ、こんな事を云つたからつて！

クルト 決して怒つてるわけぢやないけれど、事實がさうだつたんですから！

大尉 いやそんな事實なんぞはどちらにしても、兎に角忘れられてしまつてる。だが君は全くひとりぼつちなんだね！

クルト 人間といふ物はどんな境遇にでも慣れるものですよ！

大尉 慣れる……どんな境遇にでも慣れるとは云ふやうなもの……全然ひとりぼつちの生活にも慣れ得るものだらうか？

クルト このわたしを御覽の通りですよ！

大尉 一體この十五年間に君はどんな事をやつて来たね？

クルト どういふお訊ねなんです？ この十五年間！

大尉 君は金儲けをして随分裕福になつたつていふ評判だぜ。

クルト そんな事があるもんですか。

大尉 別段君から金を借りようつていふんぢやないから大丈夫だよ……

クルト いえ、なんなら御用立てしても……

大尉 有難う、然し金が要る場合には銀行からも出せるからね。ねえ君「と右手の扉の方へ目をやつて」この家には何一つ不足な物もないんだ、おれに金でもなかつた日には、彼女は彼女で得手勝手な眞似をするやうになるだらうからね！

クルト まさか、そんな！

大尉 そんな事はないつて？ おれは知つてるよ、おれは！ まあ君、考へても見給へ——あの女はね、おれが一文なしの素寒貧になる日を年中眺ひながら待つてるんだぜ、それといふのも只、おれは自分の家族を養つて行く事も出来ないやうな人間だといふ事をおれに自認させて、得意になりたいといふ了見なんだ！

クルト だつてあなたは太へん収入があるつていふお話をしたか。

大尉 勿論収入はどつさりあるんだが……然しそれだけぢやあまだ十分とはいかないんだ。

クルト するとその収入といふのもあまり大したもんぢやあなささうですね——普通の概念で云へば！

大尉 人生つて何しろ變なものさ、それにまたこの人間つて奴もね！

電信機鳴り出す。

クルト 何ですか？

大尉 なあに時間の信號さ。

クルト 電話は引いてないんですか？

大尉 あるよ、臺所に。でも大抵電信を使つてるのさ、交換手の奴が人の話を盗み聞きしてみんなしやべり散らしやがるからね。

クルト ぢやあこの離れ島的生活も矢張り恐ろしい社會生活に洩れないんですね。

大尉 さうだ、それは全く恐ろしいといふより他の言葉もない始末さ。つまり全人生が恐ろしいんだ。そして君は來世といふ事を信じてゐるやうだが、その後こそそそ平和の境があるだらうと思つてるのかね？

クルト そこにも亦戦ひと嵐とがあるものでせうよ。

大尉 そこにも亦——「そこ」なんてものがあるならね、それ位なら——おれはいつそ寂滅を欲するよ！

クルト 苦痛なしの寂滅なんて物があるものと思つてらつしやるんですか、あなたは？

大尉 おれは苦痛も何んにもなしにぼつくり死んで行く積りだよ。

クルト さうですか、そんな事がちやんと分つてるんで

すか？

大尉 分つてるとも。

クルト あなたはどうも御自分の存在に満足してはゐられないやうに見えますね？

大尉 「溜息を吐いて」満足？ そんな物はおれの死んだ日に初めて得られるんだらうよ。

クルト 「身を起して」それはあなただつて分りはしませんよ！……然し、あなた方は一體此家でどうしようといふおつもりなんです？ 一體何が始まつてるんです？

こゝはまるで有毒な壁紙か何かのやうな匂がしますね、そして一寸でもこの家に入つた者は直ぐに病氣になつてしまひさうですよ。アリスに約束をしなかつたらわたしもうおいとましたいんだけど。この床下には何か死體でも埋めてあるんぢやあないですか、そしてこゝは、息をつくのも苦しい程憎悪で一杯になつてゐる。

大尉 「ぐつたりとなつて、空を見詰めたまゝ動かず」

クルト どうしたんです、エドガール！

大尉 「不動のまま」

クルト 「彼の肩を叩いて」エドガール！

大尉 「氣が付く」お前何か云つたかい？ 「きよろしく見廻す」おれはまた……アリスだと……あ、さう、君か

——あのな……〔再び意識がぼんやりする〕
クルト 恐い事だ！〔右手の扉へ行きて開く〕アリス！

アリス 〔臺所前掛をかけて登場〕どうして？

クルト 何だか分らないけれど、あれを見て！

アリス 〔落着いて〕この人はね、時々こんな風に気が遠くなる事があるんですの……ピアノでも弾きませうよ、さうすると目を覚めますわ。

クルト いや、そんな事をしちやいけませんよ、そんな事をしちや！ わたしにやらして見て下さい！ この人は今物が聞えるんですか？ 見えるんですか？

アリス 今は見えも聞えもせん。

クルト そしてあなたは平気でそんな事を云つてるんですね？ アリス、一體あなた方は此家でどうしようといふんです？

アリス あの人の聞いて御覧なさい！

クルト あの人の……あなたの夫ぢやありませんか！

アリス わたしには他人ですわ、二十五年前のお互に見知らぬ昔と同じやうに赤の他人ですわ。わたしこの人の事に就いては何んにも存じません……只あの……

クルト 一寸！ 聞いているかも知れませんよ！
アリス 今は何にも聞えやしませんよ。

外に喇叭の信號聞える。

大尉 〔がぼと跳ね起きてサーベルと制帽をつかむ〕失敬！ おれは一寸歩哨を檢閲して來なけりやならん。

〔正面の扉より退場〕

クルト 一體病氣なんですか？

アリス 存じません。

クルト 気がどうかなつてるんですか？

アリス 存じません。

クルト 相變らず飲みますか？

アリス 近頃では實際に飲むよりも吹聴する方が大袈裟ですわ。

クルト まあこゝに坐つていろ／＼話して下さいませんか、然し氣を落着けて、ほんとうの事をね。

アリス 〔坐す〕何からお話しゅうたらいいんでせう？ 二十五年間もこんな塔の中に押籠められて、憎み通してゐる人間に夜も晝も睨まれてゐなければならぬ、こんなみじめな境遇でも訴へればいゝんでせうか？ ほんとうにわたし、あの人が死んでさへくれたら、大口開いてからからと笑ひ出すかも知れない程に憎んで憎んで、憎み通してゐるんですわ！

してゐるのですわ！

クルト その位なら何故あなた方はいつそ別れてしまはないんです？

アリス それなんですよ！ わたし達はまだ婚約の間にも二度ばかり別れた事がありましたの。それからといふもの、わたし達はもう今日こそは、明日こそはと毎日毎日別れる日待ち焦れてゐるんです……でもどうした宿世の腐れ縁やら、どんなにもがいてもあがいても切れてしまふ事が出来ななんです。いつかなんぞ一度別れ／＼になつてゐた事がありましたの——尤も同じ家の中での事ですがね——五年間もですわ。今ではもうどつちか一人死にでもしなけりや別れられなくなつてゐるんですの。わたし達はよくそれを承知してゐるものですから、お互に、まるでこの苦みから解放してくれる救ひ主でも待つやうに死を待ち焦れてゐるんです。

クルト 何故あなた方はそんなに離れ／＼に孤立してゐるんです？

アリス だつてあの人がわたしを一人ぼつちにしてしまふんですもの。最初あの人はわたしの同胞といふ同胞を殘らず追拂つてこの家から根絶やしにしてしまひましたの——あの人は、自分で「根絶やし」と云つてゐるんですよ

——それから今度はわたしの友達やその他の人達までも

クルト 然しあの人の身内は？ その方はあなたが「根絶やし」を引受けたんですか？

アリス え、あの人の身内の連中と來たら、わたしの名譽も體面も臺なしにしてしまつた揚句、今度はわたしの命までも奪ひ兼ねない有様でしたからね。とう／＼わたしは電信で以て世間や他人と連絡を取らなければならぬやうな事になりましたの——電話だと交換手に聞かされてしまひますからね——それでわたし自分で電信を習つたんです、でもあの人はそんな事ちつとも御存じなしなの。だからこの事はあの人に云つちやあいけませんわ、それこそわたし殺されてしまひますからね。

クルト 何といふ恐いことだ！ 何といふ恐いことだ！……それはさうとあの人が自分の結婚の責任をわたしに押し付けようとするのはどういふ譯でせうね？ あの時のいきさつをお話するとかうなんです！——エドガールは一體青年時代からのわたしの友達だつたんです。ところがあの男は一目であなたに惚れ込んでしまつたといふわけでした。すると早速わたしの處へやつて來て橋渡しを頼むんです、わたしは一も二もなく拒絶しました。

「—そして、どうぞ怒らないで下さいよ、わたしはあなたの暴君的な、冷酷な性質をよく承知してゐたものですかね、だからわたしはあの人に注意してやつたんです：それでもきかないもんだから今度はあなたの兄さんの方へ廻してやつたんです、仲人になつて貰ふやうにね。」

アリス　わたしだけはあなたのお言葉を信じてをりますわ、けれどあの人は何しろあれ以來ずうつとさういふ風に自分でひとり決めに來てゐるんですから、思ひ返させようといふには容易の事ぢやないだらうと思ひますわ。

クルト　そんならこれまで通りわたしが悪い者になつてゐてもいいですよ、それであの人の苦痛がいくらかでも軽くなるといふんならね！

アリス　でもそれではあんまり……

クルト　わたしはそんな事には慣れてゐますよ……然しわたしにとつて心外な事は、自分の子供を見棄てたといふあの無實の罪を着せられる事です！

アリス　さういふ人なんですの、あの方は。何でも一寸心に浮んだ思ひつきを口に出して云つて見るんですね、するとそれをそのまま信じ込んで事實にしてしまふんです。でもあの方はあなたを好きらしいのよ、何でもあの方

人の云ふ事に逆らはないから一番氣に入るんでせうね。どうぞいつまでもわたし達が厭にならないやうにして頂戴！ あなたはわたし達にとつて一番いゝ時に來て下さつたんだと思ひますわ、わたしほんとに神様の思召しいふやうな有難い氣持がしますのよ、ねえ、クルト！ほんとにいつまでもわたし達を見棄てないで下さい、わたし達夫婦はたしかに全世界中の人間の中で一番不幸な男と女なのですから！〔泣く〕

クルト　わたしは或る結婚生活を近い距離から觀察した事があるんですが……それは實に慘憺たるものでした。然しこれは殆どそれ以上だ！

アリス　さう思つて？

クルト　ええ！

アリス　一體誰が悪いんでせう？

クルト　アリス！ その誰が悪いんだなんていふ詮索を止めたその瞬間になつて、初めてあなたはほつと息がつけるやうになるんですよ。何も彼も宿命として、堪へ忍ばなければならぬ試練としてあきらめるやうにして御覽なさい！

アリス　そんな事わたしには出來やしません！ あんまりですもの！〔起ち上りながら〕どうにも仕方のない

事なんですもの！

クルト　氣の毒な人達だ！……あなた方は一體何故お互にさうして憎み合つてるか分つてゐるんですか？

アリス　いゝえ！ 理窟も何もない盲目的な憎しみなんです——根據もなく、目的もなく、その代りに終りもない！—そしてあの方が何故一番死ぬことを怖がつてゐるのかお分りになつて？ あの方はわたしの再婚を恐れてゐるのよ。

クルト　では矢張りあなたを愛してはゐるんですね。

アリス　さうらしいの。でもそれだからつて、わたしを憎まないつてわけでもないんです。

クルト　〔獨言のやうに〕それは愛の憎しみと呼ばれる奴で、地獄から來たものだ！……あなたが何か弾いて聞かせでもするとあの方は喜びますか？

アリス　ええ、でも恐しいメロデーでなければ喜ばないんです——例へばあの『ポヤールの侵入』といったやうな凄曲でないとね。そんな曲を聞くとあの方はもう夢中になつて踊り出すんですよ。

クルト　踊るんですか？

アリス　ええ、あの方は時々ひどく陽氣になる事がありますの。

クルト　もう一つ……お差支へがなかつたら伺ひたいんですが、お子さん達は只今どちらに？

アリス　あなた多分御存じないんでせうね、二人亡くしたんですよ！

クルト　ぢやあなたも矢張りその苦痛を経験なすつたんですね？

アリス　わたしの経験しない苦痛なんてあるもんですか？

クルト　しかしあとのお二人は？

アリス　町に居りますの。家には置けないんです。あの方は子供達をそゝのかして、わたしに反抗させるやうにばつかり仕向けますから……

クルト　そしてあなたもあの方に向つて同じやうな事をやるのでせう。

アリス　ええ、無論ですわ。ですから家の中に黨派が二つ出來てしまつて、互に味方を殖やさうと争つたり、買収したりするやうな事にもなるんです、それで子供達を毒しないやうに、離れて暮す事にしたんです。子は鏡なると云ひますけれど、わたし達のは却つて二人の仲を引き裂く斧ですわ、一家の祝福となる可き物が呪詛になつてしまつたんです！ ほんとうにわたし時々、うちの一

家は神様に呪はれて永遠に苦まなければならぬ因縁の一族でもあるやうな気がして参りますわ。

クルト 墮落以來さうなんです、確に呪はれてゐるんですね。

アリス 「毒氣を含める眸と鋭き聲音とを以て」どういふ墮落のこと？

クルト 人類の最初の先祖の墮落の事ですよ。

アリス あゝさう、わたしは又他の事かと思つたもんだから。

問の悪き沈黙。

アリス 「手を合せて」クルト！ ねえ、幼馴染のあなた！ わたし今迄あなたに向つては正當な態度を執つてゐなかつたやうな気がしますわ。けれど今度といふ今度こそわたし罰を受けましたわ、そしてあなたはままと復讐を遂げてしまつたのね！

クルト 復讐なんて事はないです。誰も復讐なんかしやしません。そんな話はどうぞ止して下さい！

アリス あなた覚えていらしつて——御婚約をなすつたばかりの何時かの日曜の事を？ わたしあなた方を午餐にお呼びした事があつたでせう！

クルト どうぞそんな話は……

アリス わたしどうしても云はなきゃならないんです！ わたしのかうした心持をどうぞあはれんでやつて下さい！……あなた方がおいでなすつた時にはわたし達が内にゐなかつたので、あなた方はすぐ歸らなければなりませんでしたわね。

クルト あの時にはあなた方も丁度よそに呼ばれておいでになつたんですもの——そんな事今さらかれこれ云ふがものはありませんよ。

アリス クルト！ わたしたつた今あなたを夕飯に引止めた時には……何かしら戸棚にあるだらうと思つて居りましたの。「と顔を両手にかくして」ところが何んにもないんです、一切れのパンも……（泣く）

クルト 可哀想に、可哀想に、アリス！

アリス 今にあなたの人歸つて来て、何か食べたいと云ひ出して、何んにもないんでせう、そしたらあなたの人屹度怒りますわ。あなたはまだあなたの人怒つたのを御覽にならないけれど……あゝ、何といふ屈辱でせう！

クルト わたしこれから出かけて行つて何か見付けて来てもいいでせう？

アリス こんな島の中で何があつたんですか！

クルト 勿論わたしは爲めぢやありません、あなたやあ

なたの爲めです……一寸考へさせて下さい、一寸……

さうだ、あの人が歸つて来ても、わたし達は平氣で、笑つてすましてゐなければいけませんよ！ わたしは先づあなたに酒を飲ませるやうにしますからね……その間に何かうまい工夫をしますよ……なるべく先生を上機嫌にさせて置いて、何か一曲弾いて聞かせるんですね！ さあ、ピアノに向つて用意してらっしゃい！

アリス まあわたしの手を見て下さいな、こんな手でピアノなんぞ弾けるものか弾けないものか？ 眞鍮の道具を磨いたり、ガラスを拭いたり、火をおこしたり、掃除をしたり……

クルト でもお宅には召使が二人ゐるんでせう！

アリス さう云つてみませんか、兎に角士官としての體面上からも……でも女中なんか兎角出て行つてしまひますのよ、ですから一人も女中が居らないやうな事も折折ありますの……折々どころか大抵さうなんですの……

……それはさうと、わたしこの夕飯の一件をどう切り抜けたらいいんでせう？ いつそ火事でこの家が焼けつちまへば……

クルト そんな事を云つちやあ、アリス、そんな事を！

アリス 津波でもやつて来て、みんなをさらつて行つて

くれたら！

クルト いけない、いけない、わたしそんな話はもう聞きません！

アリス あの人が歸つて来たらどう云ふでせう？ どんな事を云つて怒るでせう？ 行かないで下さい、クルト、どうぞわたしの側から離れないでね！

クルト 行きませんよ、可哀想に……決して行きはしませんよ。

アリス え、でもあなたが行つちまつたら……

クルト あなたを打つんですか？

アリス わたしを？ いえ、そんな事をしようもんならわたしが出て行つてしまふといふ事があなたの人だつて分つてゐますからね。いくらわたし達のやうな人間だつて矜持といふ物は持たなければなりませんからね。

この時家の外に聲あり——「止め！ 誰か？——君か、よし！」

クルト 「起ち上る」あの人？

アリス 「ぎよつとして」え、あの人ですわ！

クルト 一體わたし達はどうすればいいんです？

アリス わたし分りませんわ、分りませんわ！

大尉 「正面奥より、元氣な聲で」さあ、用は済んだぞ！
……アリスの奴そのひまに十分にこぼし抜いたんだら
う。實際氣の毒な女ぢやないか、え君？

クルト 外は、天氣はどうです？

大尉 暴風と云つてもいゝ位だよ……〔冗談を云ひな
がら戸を少し開く〕塔の中には騎士の青鬚君と若い娘、そ
して外には抜き身の劍を持つた番兵が美しい娘を見張つ
てゐる……ところへ兄弟達がやつて来る、けれども番兵
は、見給へ、步調を取つて歩いてゐる！ いゝ番兵ぢや
ないか！ 見給へ！ メリタムタムタ、メリタリア・レエ
ー！ 一つ劍舞をやつて見ようか？ クルト君には是非
見せてやらなけりやあ！

クルト いや、それではなく『ボヤールの侵入』〔諾威人ハルフ
の方をお願ひしたものですな！

大尉 君あんな物を知つてゐるのかい、君が？……アリス、
前掛のまゝでいゝから、一つ弾いておくれ！ 來い、と
云つてゐるのに！

アリス 「しぶくピアノに就く」

大尉 「彼女の腕を捻る」おれのゐない間に蔭口をきゝ
居つたな！

アリス わたしが？
クルト 「身をそむける」

アリス 「『ボヤールの侵入』を弾く」

大尉 「書き物机の後にて、一種の匈牙利ダンスを模し、
拍車を踏み鳴らす。そのうち床の上に倒れる、然しクル
トとアリスはそれに氣付かず、アリスはその曲を終りま
で演奏し続ける」

アリス 「振向かず」もう一遍やるんですか？

沈黙。

アリス 「振向いて、大尉の意識を失ひて倒れ伏せるを見
る、但し彼の身體は書き物机の蔭になりて見物には見え
ず」あゝ、イェズス様！ 「胸の上に兩手を組み、心より
感謝し、重荷を下せる如くにほつと太息を吐く」

クルト 「振向いて、大尉の側に急ぐ」どうしたんです、
どうしたんです？

アリス 「最高潮に達せる緊張を以て」死んだのでせう
か？

クルト わたしには分りませんね。一寸手を貸して下さ
い！

アリス 「立てるまゝにて」わたしこの人に手を觸れる
のはいや……死んでるんですか？

クルト いゝえ！ 生きてゐますよ！

アリス 「太息を吐く」

クルト 「起き上らんとする大尉を助けて、椅子にかけさ
せる」

大尉 どうしたんだらう？ 「沈黙」どうしたんだらう？

クルト 轉んだんですよ！

大尉 何かあつたのかね？

クルト あなたは床に倒れたんですよ。御氣分は如何で
すか？

大尉 おれがかい？ まるで何ともありませんよ！

おれは何んにも知らないんだ！ 何故お前達はそんな處
に突立つて大口を開いて見てゐるんだい？

クルト あなたは御病氣なんですよ！

大尉 何を詰らん事を云つてゐるんだい？ 演れ、アリ
ス！……あゝ、又こゝが！ 「と前頭部を掴む」

アリス 分りましたか——あなたは御病氣なんですよ！
大尉 ぐづく喚くなつていふのに！ 只一寸氣が遠く
なりかけたばかりなんだ！

クルト 兎に角醫者を呼ばなくつちやあ！ 電話を掛け
て來ませう……

大尉 おれは醫者には診て貰はんよ！

クルト 診て貰はなけりやいけません！ わたし達の爲
めにも醫者を呼ばなければいけません、それでないとわ
たし達の落度になりますから。

大尉 來やがつたら追ひ出すまでさ、ピストルで撃ち倒
してやるからな！……あゝまた此處が！ 「と前頭部を
掴む」

クルト 「右手の扉の方へ」電話をかけて來ますよ！
〔退場〕

アリス 「前掛をはずす」

大尉 水を一杯くれないか！

アリス さし上げますとも。「水を一杯飲ませる」

大尉 ありがたう！

アリス あなた御病氣なの？

大尉 すまないが、どうも具合が悪くないやうだ。

アリス そんなら、今度はお體を大事になさるおつも
り？

大尉 だつてそんな事したらお前は厭がるだらう！

アリス さう思つてたら間違ひはないわ！

大尉 お前が待ちに待つてゐた時が遂にやつて來たん
だ！

アリス え、そしてあなたが決して来ないものと決め込んでみた時がね！

これはかうして坐つて居りながら、何だか下の方へずんずん沈んで行くやうな気がするよ、ねえ君、變ぢやないか？

大尉 おれの事を悪く思つてくれるなよ！

大尉 いや、一度も！

クルト 「右手より登場」困りましたな！

クルト 町から返事が来るまで、ドクトルの處へ行つて相談して来ませうよ。ドクトルは以前あなたを診た事があるんですか？

アリス 「大尉に」あなたがふだん無暗に威張り散らした報いですわ！

大尉 あるよ！

大尉 おれはだん／＼悪くなるやうな気がするよ……町から醫者を呼ぶやうにしておくれ！

クルト そんなら、あなたのお體はよく分つてゐるんですね！「左手へ」

アリス 「電信機の方へ行って」そんなら電信で！

アリス 返事は直ぐ参りますわ！ほんとにすみませんのね、クルト！然しなるべく早く歸つて頂戴ね！

大尉 「びつくりして、半ば身を起す」お前……電信が……かけられるのか？

クルト え、出来るだけ早く歸つて参りますよ！「退場」

アリス 「電信をかけたがら」え、かけられますわ！

大尉 親切だね、クルトは！まるで人間が變つてしまつた！

大尉 さうか？……ぢやあともかくやつてくれ！——今迄よく人をだまし居つたな！「クルトに」こつちへ来て、おれの側にかけてくれ給へ！

アリス さうですね、しかもいゝ方にね！でもわたしたちの不幸の中へ一緒に引きずり込まれるのは氣の毒ね、選りに選つてこんな場合に來合せて！

クルト 「大尉の側に坐す」

大尉 おれ達から見れば丁度もつちの幸さ！だがあの

男は一體どうなつてるんだらう！お前は氣が付いたかどうか知らないが、あの男はちつとも自分の身の上話はやべりたがらないやうだね？

大尉 術を受けたんぢやありませんか……

アリス わたしもそれが氣が付きましたわ、尤もその事は誰もまだ訊ねなかつたやうな氣がしますけれど！

大尉 成程！するとおれには思ひつかんな……でもクラフトの一家は？

大尉 考へて見ろ、あの男の生涯……それからおれ達の生涯！人間の生涯といふ物は一體みんなさういふ風に出來てるものかどうか、おれは知りたと思ふよ！

アリス さう、まるで牧歌にでもありさうな平和な家庭でしたわね、家は裕福だし、世間の人には敬はれるし、子供達はみんな出來が善くつてそれ／＼善い縁組みをするし……五十歳位の迄はほんとに申し分なく幸福無事でしたわね。ところへあの從妹のといふのが出て來て悪い事をした揚句、牢へ入れられたりなんぞしたもんだから、それで折角の平和も臺なしになつちやつたんです。家の名が始終新聞に出て散々に叩かれるやら……クラフト家の殺人事件の爲めに、あんなに尊敬された家柄の人間が世間に顔向けも出來ないやうな事になつてしまつて、子供達なんか學校から下らなければならなかつたつていふぢやありませんか……まあ何といふ事でせう！

アリス 多分同じやうなものでせうよ、世間の人達はわたし達のやうに口に出してはしやべりませんけれど！

大尉 一體おれはどこが悪いのか知らん！

大尉 時々おれはこんな風に思ふ事があるよ——不幸な人間といふものは不幸な人間だけを自分の周圍に牽き付けるやうになるし、幸福な人間はまた不幸な人間がいくら近寄つて來ても直ぐに追拂つてしまふんぢやないかと

大尉 心臓か腦だらう。まるで魂がかうふらく／＼と體から飛び出して、雲の中に溶け込んでしまひさうな氣がする。

な！だからおれ達のやうな不幸な人間は、一生涯人生の暗黒面だけを見せ付けられるんぢやないか知らん！

アリス 食慾はありますか？

アリス あなたは幸福な家族といふやうな物を見た事があつて？

大尉 さあ、一寸待つてくれ……まあないね……だが……あのエクマルクの家なんぞはどうだらう？

大尉 さあ、一寸待つてくれ……まあないね……だが……あのエクマルクの家なんぞはどうだらう？

アリス 何を仰しやるんです！奥さんが去年あんな手

アリス 何を仰しやるんです！奥さんが去年あんな手

アリス 何を仰しやるんです！奥さんが去年あんな手

大尉 うむ！ 夕飯はどうしたんだ？
 アリス 「不安らしく室の中を歩き廻る」 エンニーに聞
 いて見ませう！
 大尉 彼奴は行つちまつたんぢやないか！
 アリス あ、さう／＼！
 大尉 ベルでクリスティンを呼ぶといふよ、汲み立ての水
 を持つて来させるから！
 アリス 「鳴らす」 どうしたんでせう？……「又鳴らす」
 聞えないのかしら？
 大尉 行つて見ろ……彼奴も逃げて行つちまつたんぢや
 ないか！
 アリス 「行つて左手の扉を開く」 まあ、どうしたといふ
 んでせう？ あの子の行李が廊下に荷作りして投げ出し
 てありますわ！
 大尉 それぢや矢張り行つちまつたんだ！
 アリス まるで地獄だわ！……「床の上に跪いてわつと
 泣き崩れる」
 大尉 何も彼も一緒くただ！……そこへクルトの奴がや
 つて来て、このみじめな有様を残らず見てしまふんだ！
 これ以上の屈辱が世の中にもつとあるなら、さつさと出
 て来やがれ、今だ、さあ今の中だ！

アリス あゝ！ わたしの豫感を云つて見ませうか——
 クルトは行つたきりでもう歸つて来やしませんよ！
 大尉 彼奴のやりさうな事だ！
 アリス さうですとも、どうせわたし達は呪はれてゐる
 んですもの……
 大尉 それはどういふ事なんだ？
 アリス だつて、誰も彼もみんなわたし達の側から逃げ
 出さうとかゝつてゐるのが、あなたには分らないんです
 か？
 大尉 そんな事かまふもんか！ 「電信機鳴り出す」返
 事だ。静にしろ、おれが聞くから！……「誰も暇がない」？
 體のいゝ逃げ口上だ！……畜生奴！
 アリス 醫者を輕蔑した報いよ……そして診察料も拂は
 ないんですもの！
 大尉 さういふわけぢやないんだけど……
 アリス あなたはたとひ拂へても拂はうとしないんで
 す、醫者の仕事なんかでんで輕蔑してゐるんですもの。尤
 もあなたはわたしの仕事だつて他の人達の仕事だつて、
 みんな輕蔑してゐるんだけど！ そんな人の處へ誰が來
 てくれるもんですか！ 何の役にも立たないなんて馬鹿
 にするもんだから電話は切られてしまふし！ あなたに

かゝつちやあ鐵砲と大砲の他は三文の値打もないのね！
 大尉 そこに立つてゐてべちやくちやしやべるなど云つ
 たら！
 アリス 因果といふ物はどうせめぐつて来るものでは
 よ！
 大尉 何を馬鹿な、詰らん迷信を云つてるんだ！ よく
 婆さん達はそんな泣言を並べるものだよ！
 アリス あなたどつて今に屹度思ひあたりますわ！……
 あなた御存じでせう——あのクリスティンにだつて半年
 も給金を拂はないでゐるのが？
 大尉 うむ、その代り彼奴はちやんとそれ以上の泥棒を
 してゐるよ！
 アリス でもわたしその他にも彼女からお金を借りなけ
 ればならなかつたんですよ！
 大尉 お前のやりさうな事だ！
 アリス あなたはほんとに恩知らずね！ 子供達を町へ
 やる時の費用に借りたんぢやありませんか！
 大尉 クルトの奴が又歸つて來たやうだよ！ 彼奴も相
 變らず碌でなしで、その上に臆病なんだ！ だからこん
 な處はもう懲り／＼で、ドクトルの家の舞踏會の方がど
 んなに善いか知れないといふ事が口に出しては云へない

んだ。そしておれ達のところでまづい夕飯でも食ふ氣で
 待つてゐやあがる！……可哀想な奴よ、矢張り相變らず
 だ！
 クルト 「急いで左手より登場」 さあ、エドガール、行つ
 て來ました！……ドクトルはあなたの心臓の状態を詳し
 く知つてゐましたよ！
 大尉 おれの心臓を？
 クルト え、あなたの心臓は大分前から石灰化してゐ
 んですつて！
 大尉 そんなら石の心臓か？
 クルト そして……
 大尉 危険なかい？
 クルト え、つまりね……
 大尉 危険なんだつて？
 クルト え、！
 大尉 死ぬつてのかい？
 クルト 非常に養生が必要ださうですよ。先づ第一にシ
 ガーをよさなければいけません！
 大尉 「シガーを投げ出す」
 クルト 次に、ウィスキーも止めるんです！ それから

ベッドにやすむんです！
 大尉 「不安らしく」いや、そんな事はおれは厭だ！
 ベッドなんぞ眞平御免だ！ それこそおしまひだよ！
 そんな物に一度寝たら最後、もう再び起つ事が出来ないにきまつてる！ 今夜はソファアにやすまう！ それからまだどんな事を云つたね？
 クルト あの人はいろく親切に云つてくれましたよ、そして、呼びさへすれば直ぐにも来てくれるさうです。
 大尉 彼奴が親切だつて、あの猫かぶりか？ おれはあんな男の顔は見たくもないよ！ それから食物はどうだらう？
 クルト 今夜は何も食べない方がいゝさうです。そしてこれからは當分牛乳だけださうです。
 大尉 牛乳？ そんな物が喉を通るもんか！
 クルト 慣れなくちやあいけませんよ！
 大尉 いや、おれのやうに年とつてからは、慣れるなんて事はもう駄目だ！ 「頭を搦んで」あゝ又こゝが！ 「坐せるまゝぢつと空を見詰める」
 アリス 「クルトに」ドクトルは何と云ひまして？
 クルト 死ぬかも知れないつて！
 アリス まあ有難い！

クルト 氣を付けなさい、アリス、氣を！……さあ、あちらへ行つて枕と何か掛ける物を持つて来て下さい！ そのソファアに寝せるやうにしますから。それからわたし今晚は夜通しこの椅子に坐つて看護します。
 アリス そしてわたしは？
 クルト あなたはあちらへ行つておやすみなさい！ あなたが附いてゐると、却つて容態が悪くなるやうな氣がしますから。
 アリス どうぞ何でも云ひ付けて下さい！ わたし仰しやる通りにしますわ、あなたはわたし達二人を悪いやうにはして下さいませんから。「左手へ去る」
 クルト あなた方お二人をですよ——よく承知してゐて下さいよ、わたしは決してどちらの黨派にも引込まれるやうな事はしませんからね！ 「水さしを取りて右手より退場」
 大尉 「正氣づいて、身を起し、あたりを見廻す」さうか、奴等はおれを置去りにしやがつたんだ、悪黨奴等！
 戸外に吹きすさぶ風の音聞ゆ。それから正面の扉風の爲めに開いて、貧しげなる、不快なる容態の老婆内部をのぞき込む。

「老婆を見付けて不氣味らしく」誰だ？ 何の用だい？
 老婆 一寸戸を閉めようと思ひましてね、旦那様！
 大尉 どうして、どうしてそんな事を？
 老婆 丁度わたしがこゝを通りかゝりましたら、風であふられましたんで！
 大尉 貴様、何か盗まうとしたんだな？
 老婆 クリステインの話ぢやあ、盗る程のものないつて事でしたつて！
 大尉 クリステインだと？
 老婆 左様なら、旦那様、おやすみなさいまし！ 「扉を閉めて退場」
 アリス 「枕と蒲團を携へて左手より」
 大尉 誰だい、今扉のところ立つてゐたのは？ 誰かゐたのかい？
 アリス えゝ、貧民院のマーヤ婆さんならたつた今そこを通りましたわ！
 大尉 確だらうな？
 アリス あなた氣味が悪いんですか？
 大尉 おれが、氣味が悪い？ そんな馬鹿な事があるもんか！

アリス ベッドに寝たくないやと仰しやるなら、此處におやすみなさいな！
 大尉 「ソファアまで行つて横になる」これに寝よう！
 「とアリスの手を執らうとするが、彼女は手を引込める」
 クルト 「水さしを持ちて登場」
 大尉 クルト、おれの側から離れなしてくれ！
 クルト わたし今夜は夜どほしこゝに附いてゐます！
 アリスはあちらへ行つてやすんで貰ふんです！
 大尉 そんならおやすみ、アリス！
 アリス 「クルトに」おやすみなさい、クルト！
 クルト おやすみ！
 クルト 「椅子を取つてベッドの側に腰を下す」あなた靴は脱がないんですか？
 大尉 いや、軍人といふ者は常に武装してゐなければならん！
 クルト ぢやあなたは戦争の覺悟をしてるんですね？
 大尉 まあさうだ！……「ベッドに起き直つて」クルト！
 おれが自分の恥をさらけ出して残らず打ち明けた人間は後にも前にも君だけなんだよ！ おれは一つ聞いて貰ひたい事がある！ 若しおれが今夜死ぬやうな事があつた

ら……子供達の事をどうぞよろしく頼みます！
クルト 承知しました。

大尉 有難う、おれは君を信頼するよ！

クルト どうしてあなたはわたしのやうな者をそんなに

信頼して下さるのか、あなたはその説明がつかますか？

大尉 君とおれとは決して親友ぢやなかつた、おれは元

來友情なんていふ物を信じない人間なんだから。そして

君の家とおれの家とは生れながらの敵同士で、始終喧嘩

ばかりやつてゐたものだ……

クルト それにも拘らず、あなたはわたしを信頼して下

さるんですか？

大尉 さうだ！ 何故といふ事はないけれど！

沈黙。

大尉 君、おれは死ぬだらうと思ふかい？

クルト あなたどつて誰だつて人間はみんな同じ事です

よ！ あなただけの爲めに除外例が設けられるつて法は

ありません！

大尉 随分きついな！

クルト え……あなたも死ぬのは氣味が悪いです

か？ 例の肥料車と野菜畑ですよ！

大尉 若しそれだけでおしまひにならなかつたとしたら

どうだらう？

クルト さう思つてゐる人も澤山ありますね！

大尉 それで、死後は？

クルト たゞもう驚くことばかり！さうわたしは思ひ

ますね。

大尉 でもそれに就いちやあ人間はちつとも確實な物を

つかんではゐないよ。

クルト そりやあ誰にだつて分りはしません！ だから

我々はどんな物がやつて來ても敢て驚かないだけの覺悟

が必要なんです。

大尉 君はまさかそんな子供らしいんぢやないだらう、

地獄を信するなんて？

クルト あなたは自分で地獄のどん底に落ち込んでゐる

と云ひながら、それを信じないんですか？

大尉 あれは單に比喩的な話さ！

クルト でもあなたの描寫が餘りに眞に迫つてゐるも

んだから、詩的な比喩とか何とかいふやうな事を思つてゐ

る餘地がまるでなくなるんです。

沈黙。

大尉 おれのこの苦みが君に分つたらなあ！

クルト 肉體的の苦痛ですか？

大尉 いや、肉體的ぢやあないんだ！

クルト では精神的の苦痛なんですか——肉體的でも、

精神的でもない第三の苦痛なんて物がある筈がございませ

んからね！

間。

大尉 「ソファーに起き直つて」おれは死にたくないよ！

クルト ついさつきあなたは寂滅といふ事を望んだぢや

ありませんか？

大尉 うむ、それは苦痛を伴はない場合の話さ！

クルト でも寂滅といふ物は決してそんな物ぢやありませ

せん！

大尉 それぢやあこれがその寂滅といふ物なんだらう

か？

クルト まあその始まりでせうね！

大尉 おやすみ！

クルト おやすみ！

第一幕

前幕と同一の舞臺装置、但しランプは消えかゝつて
ゐる。正面の窓及びガラス扉越しに曇れる朝の空ほ
の見え、海は浪立てり。砲臺の歩哨は前幕のまゝ。
大尉はソファーに眠つてゐる。クルトは徹夜の疲れに
蒼ざめつゝ椅子に坐す。

アリス 「左手より登場」睡つてゐるの？

クルト え、夜が明けてからやうやく。

アリス 昨夜はどんな風でした？

クルト 時々は睡りましたがね、然し随分しやべりまし

たよ。

アリス どんな事を？

クルト 宗教といふ物に就いてまるで學生のやうに盛に

論じましたよ、我れこそ世界の謎を解決し得たといふや

うな顔をしてね！そして遂に夜明方に至つて靈魂不滅

の大原理を發見し得たんです。

アリス 名譽な話ね！

クルト 全く！……恐らくわたしの出會つた人間の中で

は最も自尊心の強い人でせう。「我れあり、故に神もあり。」——こんな事も云つてゐるんですからね。

アリス あなたはよく見抜きましたわね!……まあこの長靴を御覽じろ! この人は若し出来るものなら、それで以て世界中をべしやんこになる程踏んづけたかも知れませんわ! この靴で以て少くとも他人の家の庭や畑を蹂躪したり、他人の足の指やわたしの頭を踏んづけたりしたんです!……荒熊奴、今度こそとうとう弾丸を食ひ込んだね!

クルト 兎に角この人は悲劇的でないとするや喜劇的な人間なんですわ、そして随分こせ／＼したこまかい點があるかと思ふと、一方には確に偉大な物をもつてはいますよ! 然しあなたはたゞの一言もこの人を賞める言葉をもたないと仰しやるんですか?

アリス 「(坐す)」そりやあ賞めてやらないものでもありませんわ、この人が聞いてさへゐなかつたら、何故つて、何か一言でもおだて上げるやうな事でも口に出さうもんなら、この人はそれこそ誇大妄想になつてしまひますからね!

クルト 大丈夫聞えはしませんよ、モルヒネ劑を呑んだんですから!

アリス 貧乏な家に生れて同胞が澤山あつたもんですから、エドガールは早くから人に物を教へたりして家の暮しを助けて行かなければならなかつたのです、何しろこの人のお父さんといふのが、仕様のないのらくら者——

いゝえ、それ以上のやくざ者だつたものですからね。青春の喜びといふやうな物をちつとも知らずにあくせくするといふ事は、若い身空にはほんとうに辛い事だつたに相違ありませんわ、殊に、自分の子でもない澤山の、恩知らずな子供達の爲めにまるで奴隷のやうに眞黒になつて働くといふ事はね。わたしはまだ小さな小娘の時分に初めてこの人に會つたんですが、その頃はまだうら若い青年でしたけれど、冬でも外套なしなんです。それも二十五度なんていふ寒さにですわ……その癖小さな妹達には厚い毛織のマントをぬく／＼着せてゐるんです……それはほんとに感心なものでした、だからわたしもひそかに敬服したもんです、けれどこの人の醜いのはわたしもぞつとしましたわ……全く滅多にない程に醜い人ぢやありませんか?

クルト え、そしてその醜いのが單に醜いといふだけでなくて、何かしら氣味が悪くなるやうな所がありますね! 何時でもわたし達が仲違ひした時に、一番餘計そ

れが目立つんです。そしてこの人があなくなると、その幻影がだん／＼ぼうつと大きくなつて、恐しくてつかい、

變な形の物になつてしまつて、文字通り目の前に幽靈になつて現れて惱ますんですよ!

アリス そんならわたしの事も考へて見て下さいよ!……けれどね、この人の最初の士官時代は無論犠牲的精神で一杯でした。でも時々金持の人達の補助は受けてゐましたの。でもこの人は決してそんな物を有難いとも何とも思はないんです、そして人様から貰ふ物は、當然の貢物かなんぞのやうにお禮も云はずに平氣で受取つたものです。

クルト この人の事はもつとよく云ふ筈でしたが!

アリス わたしだつて、この人が死んでしまへば、もう決して悪口は申しませぬわ! わたしもうそんな事はすつかり忘れてしまひますわ!

クルト あなたはこの人を意地悪だと思つてゐたんですか?

アリス え、——でもこの人には、いくらか物に感じ易くつて、お人好しの性質もなくはありませんの!——敵として向うに廻した日にはほんとに恐い人ですけれど!クルト 少佐にならなかつたわけといふのはどういふん

ですか?

アリス それはあなた分つてゐるぢやありませんか! 自分達より下にゐてさへそんな我儘な人間を、誰が上役にしようなどとするもんですか! でもこの少佐の一件だけは一寸でも匂はせる事は禁物よ、自分では、少佐なんぞは眞平御免だなんて威張つてゐるんですからね。……子供の話は何か云ひました?

クルト え、頻りにユーディトに會ひたがつてゐました!

アリス 屹度さうでせう! まあ、あなた、ユーディトつてどんな子だと思ひます? わたしに楯を突くやうに一生懸命仕込まれたこの人の生き寫しといふ子なんですよ! まあどうでせう、あなた、自分の腹を痛めた生みの子が現在の母親に向つて……手を擧げるんですよ!

クルト まさか、あんまりひど過ぎる!

アリス 靜に! 少し動きますわ!……狸寝入りでわたし達の話を聞いてるんぢやないか知ら!……この人はそりやあ悪こすいんですからね!

クルト ほんとうに目をさましますよ!

アリス まるで悪鬼かなんぞのやうな顔をしてゐますわね! わたし氣味が悪くなつた!

沈黙。

大尉 「むく／＼動き出して目を醒し、起き直つてきよる

クルト 御気分は今如何です？

大尉 悪い！

クルト 醫者に診て貰ひませんか？

大尉 いや！……おれはユーディトに會ひたいんだ、娘に！

クルト それよりも先づお家の事を整理して置いた方が善くはないですか——若しひよつと……何か起るといけませんからね！

大尉 何を云つてるんだい、君は？ 何が起るだらうといふんだい？

クルト あらゆる人間に一人も例外なく起り得るあの事がです！

大尉 何だ、下らない事を！ おれがそんなに無造作にくたばつてたまるもんか、さう思つてゐてもらひたいね！ あんまり早く喜ぶなよ、アリス！

クルト まあお子さん達の事も考へて御覽なさいよ！
そして遺言状を作つてお置きなさいよ——奥さんには少

くとも家具を残して上げる事にしてね。

大尉 ぢやあ妻は、おれが生きてゐる間に遺産の相續をする事になるのかい？

クルト いゝえ！ 然し何か事が起つた場合に奥さんが一物も持たずに往來に投げ出されるやうな事があつても困るぢやありませんか！ 二十五年間もこんな家具を掃除したり手入れをして来た人間は、それを保有する権利があるのは當然だらうと思ふんです。隣付き法官を呼びませうか？

大尉 いや！

クルト あなたは残酷な人間ですね、わたしが思つてたよりも遙に残酷だ！

大尉 「失神してベッドの上に倒れる」又此處が！

アリス 「右手へ」臺所に人が来てゐますから、一寸行つて来なければなりませんわ。

クルト 行つてらつしやい！ こちらはそんなに用がありませんから！

アリス 「退場」

大尉 「目醒めて」さてクルト、君はこの島に出来る検査所をどんな風にやつて行く積りだね？

クルト 屹度うまく行くでせうよ！

大尉 いや、おれはこの島の命令者なんだよ、萬事君はおれに謀つて事をしなければいけない、いゝかい、この點を先づ忘れないやうにしてくれ給へ！

クルト あなたは一體検査所つて物を見た事があるんですか？

大尉 見た事があるか？ ふむ、君なんかまだ生れない中にもやんと見てるよ！ それでおれは豫め君に忠告して置かうと思ふんだが、消毒齋だけはあんまり海岸に近く置かない事だね。

クルト わたしはまた、是非海水の近くでなけりやならんと思つてたんですが……

大尉 それでほゞ君の御造詣の程も窺はれるといふもんだね。水は君、細菌の要素、細菌には缺く可からざる生活要素ぢやないか！

クルト でも鹽分を含んでる海水は汚物を洗滌するには是非必要な物ぢやないでせうか？

大尉 馬鹿だね、君は！……それはさうと、君は住居が見付かり次第、子供達を呼び寄せる積りかい？

クルト 呼び寄せねばならぬだらうとお考へですか？
大尉 無論さ、君がいやしくも一個の男子なら！ 君は

この點に於ても義務に忠實なところを見せたら、この島の人達はいゝ印象を受けるに相違ないと思ふよ！

クルト わたしは何時だつてその點に於ても忠實だつた積りですが！

大尉 「聲を高くして」君の最も弱點とするその點に於てだよ！

クルト だからあなたに云つたぢやありませんか……

大尉 「云ひ續ける」何故つて、あんな風に自分の子供を見棄てるつて法はあるわけのもんぢやないよ……

クルト もつといくらでも、どうぞ！

大尉 おれは君の親戚として、一番年長の親戚として、ほんとうの事實を君に云つて聞かせる一種の權利を持つてゐるやうに思ふ、君の耳には痛いかも知れないけれどね……そして君、それを悪くもつてはいかんよ！……

クルト あなた空腹ぢやありませんか？

大尉 うむ、空腹だよ！

クルト 何か柔かい物をおあがりになりますか？

大尉 いや、何か硬い物が欲しいね！

クルト そんな亂暴な事をしたらおしまひですよ！

大尉 病氣だけでも澤山ぢやないか、その上腹まで空かさせなくつても！

クルト　でも醫者がさういふんですからね！
 大尉　それから、酒も飲むな、煙草も吸ふなつてんだらう！
 君！　そんな風にして生きてる甲斐があると思ふかい、ない！
 クルト　死といふ奴は犠牲を要求するもんです、それではないと直ぐにやつて來ますよ！

アリス　〔數箇の花束、數通の電報及び手紙を携へて登場〕さあ、あなたに參りましたの！　〔書き物机の上に花を投り出す〕

大尉　〔得意になつて〕おれに！……どれ、見せろ！……アリス　え、只下士と樂隊と砲手達からよこしたんですの！

大尉　嫉^やいでるな、貴様！
 アリス　誰がそんな物を……月桂樹でもあつたら知らぬ事……でもあなたなんぞにそんな物を贈つてよこす人はまづないでせうね！

大尉　ふむ！……大佐からの電報だな……讀んでくれ給へ、クルト！　大佐はともかく紳士だよ……少しばかり頭の悪いところもなくはないがね！……これは何處から……何と書いてあるかな？　あゝユーディトからだ！

……濟まないけれど、君、直ぐこの次の船で來るやうに電信をかけてくれ給へ！……これは……さう！……矢張り渡る世間に鬼はなしだ、かうして病人の事を思つてくれるのは感心なものだよ——尤も病人と云つても只の病人ぢやないがね、功績のあつた人間であり、自分の生れた階級以上に出世して、その上何等裡にやましい點もなく非難も受けないといふ人物なんだからな！

アリス　わたしにはさつぱり分りませんわ！　一體この人達はあなたが病氣になつたのでお目出度いともいふんでせうか？

大尉　畜生奴！
 アリス　〔クルトに〕さう、何時かおひどくみんなに憎まれてゐた或る醫者がこの島から行つてしまふ事になつた時に、みんなが大振舞をした事があるんですよ——その人を送る爲めにではなくつてその人がゐなくなつたお祝ひにね。

大尉　この花は花瓶に挿して置け……おれは無論他人の好意なんぞを輕々しく信じはせんさ、大抵の人間は惡黨だからな、だが、かうした單純な敬意や見舞はほんとうの心からのものだよ、確に……これは誰が何と云つたつて、心からの見舞品に相違ないんだからな！

アリス　馬鹿ね！

クルト　〔電報を讀む〕ユーディトから返事です——暴風^{しげ}で汽船が出ないから來られないさうです。

大尉　それだけか？

クルト　いゝえ、まだあとがあります！

大尉　早く讀んでくれ給へ！

クルト　え、お父さんがあんまり酒を飲まないやうにといふお願ひです！

大尉　ふむ、生意氣を云つてやがる！　これがおれの子供だ！　おれの大事な一人娘だ……おれのユーディトだ！　おれの偶像だ！

アリス　そして、あなたの生き寫し！

大尉　これが人生か、そして人生の無上の喜びといふ奴か！　畜生、馬鹿げ切つてる！

アリス　それが即ちあなたの播いた種のとり入れよ！

あなたを娘をけしかけて母親に衝突かしたんでせう、だから今度は父親に反抗する番になつたのよ！　神も佛もない世の中だ、とても仰しやいよ！

大尉　〔クルトに〕大佐からはどう云つて來てるね？

クルト　即刻退職を許可するさうです！

大尉　退職？　おれはそんな物を願つてやつた覚えはな

いよ。

アリス　あなたはなくつても、わたしがあります！

大尉　誰がそんな物を受付けるもんか！

アリス　もう辭令が下つてますわ！

大尉　そんな物おれの知つた事か！

アリス　まあこの通りなんですの、クルト、この人にかつちやあ法も掟もあつた物ぢやないんです、人間の定めた秩序なんて物はてんで眼中にないんです……この人はあらゆる事物、あらゆる人間の上に自分だけ一人超然としてるんです、詰り全宇宙はこの人に利用される爲めに創造されたものなんです、太陽も月も只この人の讚美を星の世界へ傳へる爲めに空を廻つてるんです！　さうした人間なんですよ、うちの人は！　然もその實は——

少佐にもなり損ねた程のへつぽ、大尉で、飛んでもない駄法螺^{だばら}を吹いてはみんなに笑はれてばかりありますの——

尤も御自分ではみんなに畏敬されてるのだと思ひ込んでるんだから罪がありませんわ！　實は暗闇の中でびくびくしたり、晴雨計やそれと關係のある物は何も彼も信

じたりするやうな、氣の毒な人なんです！　そして大詰

は、例の手押車一杯の肥料といふところで梟^{かき}が付くんだわ——それも餘り上等の肥料にはなれませんがね！

大尉 「満足げに花束を以て煽ぎながら、アリスの云ふ事には耳を貸さず」お前クルトに朝飯を御馳走したかい？

アリス いゝえ！
大尉 そんなら早速上等の焼肉料理を二人前こしらへろ！ 二人前だよ！

アリス 二人前ですつて？

大尉 おれも食ふんだ！

アリス だつてわたし達は三人ぢやありませんか！

大尉 お前も食ふのか？ うむ、ぢやあ三人前にするさ！

アリス 一體何處からそんな物を持つて来るんです？

あなた昨晚クルトに夕飯を食べて行けつて云つたでせう、ところが實は家中捜したつてパンの皮だつてありはしなかつたんですよ、だからクルトは夜つびて空腹を抱へて起きてなけりやならなかつたんです、コーヒー一杯飲む事も出来ずにね！ コーヒーだつてもうありはしませんわ、それに何處でも通帳では物を賣つてくれなくなつてしまつたし……！

大尉 何の彼のと云つて貴様怒つてるんだな——昨日おれが御註文通りに死ななかつたもんだから！
アリス 御冗談でせう——昨日死ななかつたから怒つて

るなんて！ あなたが二十五年前に死ななかつたのが、……いゝえさ、わたしが生れない先に死んでゐなかつたのが、わたし口惜しいんです！

大尉 「クルトに」あれを聞いたかい、君！……君だつて結婚すりやあこの通りさ！ 結婚なんて物は神様のこしらへたもんぢやないつて事はこれでも明かだよ！
クルトとアリス 「互に意味ありげに顔を見合せる」

大尉 「起ち上つて扉の方へ行く」云ひたい事を勝手に云つてゐるさ！ おれは勤務に行かなけりやならんから！ 「古代バイエルン風の兜帽を冠り、サーベルを腰に吊し、マントを羽織る」誰か用があつたら、おれは砲臺の方へ行つてると云へ！ (この句獨逸版にのみありて、瑞典全集本になし)

クルトとアリス 「彼を引止めんとすれども能はず」
大尉 退け！ 「退場」

アリス えゝ、行つちまへ！ かなはないと見ると何時でも尻に帆掛けて逃げ出しつちまつて、自分の妻に退却の掩護をさせるんだ——飲んだくれの、法螺吹きの、嘘吐き野郎奴！ 畜生ッ！

クルト まるで底が知れない！
アリス えゝ、これでもあなたはまだ残らずは見えてゐな

いのよ！

クルト ぢやあもつとひどい事があるんですか？

アリス けれどわたし恥かしくつて云ふ事が……

クルト 然しあの人は一體何處へ行つたんです？ そして一體何處からあの恐い力は出て来るんです？

アリス えゝ、それが問題ですわ！ 今あの方は下士達のところへ出かけて行つて花のお禮を云つてますの……

それからみんなと一緒に飲んだり食つたりするんです！ それから今度は例の將校團の悪口が始まるんです……ほんとうにその爲めに今まで何遍首を蹴られようとしたか知れませんか。家族の者が可哀想だといふ同情があればこそ、かうやつてどうにか首だけはつながつてゐるんですけれど！ 自分では、あんまり豪邁すぎるんでみんなに怖がられてるんだと思つて、いゝ氣になつて納まつてますの！ そして、わたし達の爲めに何かとりなしてくれる士官の奥さん達をば、そりや、怨んで悪く云ふんですの！

クルト 實のところを申し上げると、わたしが此處へやつて来たのは、この海のとりにて平和を見出さうといふ爲めでした……そしてあなた方の事情はちつとも知らなかつたもんですから……

アリス ほんとにお氣の毒に！……それはさうと、あなた食事はどうなさいますの？

クルト わたしはドクトルの家へでも参りますが、然しあなたは？ 失禮ですがあなたの方の分はどうぞわたしに心配さして下さいませんか？

アリス でもあの人にそんな事を感付かれようもんなら、わたし殺されてしまひますわ！

クルト 「窓から外を覗きて」御覽なさい、あんな壘壁の上に突立つて風にさらされて居りますよ！

アリス 考へて見ればあの人だつて可哀想よ……そんな人間に出来上つてゐるといふ事がね！

クルト 可哀想と云へばお二人ともですよ……一體これはどうしたものでせうね？

アリス わたしには分りませんわ！……それから勘定書が一束も来てゐますの、あの方はまだ見もしませんけれど……

クルト 物を見ないといふ事も場合によつては幸福かも知れませんか！

アリス 「窓際にて」マントを開いて胸を風にさらして居りますわ！ 屹度死ぬつもりよ、あの方は！

クルト 死ぬつもりだらうとは、わたしには思はれませ

んね、と云ふのは、昨夜すんでの事に自分の命がおしまひになりさうに感じた時、あの人は、しつかりとわたしの命にしがみ付いて来て、わたしの内部の事情を根掘り葉掘りほじくり出したもんです、まるで、自分の肉體から脱け出してわたしの中へもぐり込んで来て、わたしの命を自分のものにして生きようとするやうな具合にね。

アリス それがそれあの人が吸血鬼だといふ理由なんですの——他人の運命に干渉して、他人の生活から生き血を吸ひ取り、他人の運命を決定したり左右したりしようとするんです——自分自身の生活はもうちつとも興味がなくなつたもんですからね。それから、よく覚えてお置きなさいよ、クルト、あの人が家庭生活の内幕へ引入れたり、自分の友達等と近付きにしたりしようもんなら飛んでもない事になつてしまひますよ——あの人はそんな物を残らずふんだくつて自分の物にしてしまはなけりや承知しないんですからね……その點にかけてはあの人はほんとに凄い魔力を持つて居りますの！……あの人があなたのお子さん達と知合ひにでもならうもんなら、なるかならない中につつかり自分の味方に手馴付けてしまふに決つてゐますわ、そして自分の力で左右して、自分の頭

通りに教育してしまふんです——あなたの御希望と丁度正反對な人間に出来上るやうにといふ事を第一の目的としてね。

クルト アリス、今思ひあたつたんですが、わたしの離婚の際にわたしの手から子供を奪つたのはあの人がちやなかつたんですか？

アリス もう古い話だから申し上げてしまひますけれど——お察しの通り、あの人がだつたんです！

クルト わたしもその疑ひは持つてゐたけれど、はつきりとは、分らなかつたんです！ 矢張り、彼奴だつたのか！

アリス あの時あなたはあの人を絶対に信頼して平和の使者として奥さんのところへおやりになつたんでせう、するとあの人は早速奥さんを手に入れて、子供を横取りする策略を吹つ込んだのですわ！

クルト あゝ、これは……！……何といふ事だ！

アリス それであの人の性格の別の一面がお分りになつたでせう！

クルト それからね、あの人が昨夜……自分でもう駄目だと思つた時に……わたしに頼んで約束をさせた事がある

るんですよ——將來お子さん達の面倒を見てくれといふ事をね！

アリス でもあなたは御自分のお子さんを奪はれた恨みの復讐をうちの子供達に晴らさうとはなさいませんでせうね？

クルト 自分の約束を立派に果たす事に依つての復讐ですか？ その復讐なら致しますよ！ わたしはどんな事があつても約束通りあくまでお子さん達の面倒は見上げて積りですから！

アリス それこそほんとうにこの上なしの復讐ですわ、さうした尊い雅量位あるあの人の嫌ひなものはないんですからね！

クルト それで自然に復讐が出来るわけですわね！

アリス わたしだつて正義の復讐は大好きですわ！ そして、意地の悪い事をした人間が報いを受けて苦むのを見てやりたくつてたまりませんの！

クルト あなたはまだそんな風の考へ方に止まつていらつしやるんですか？

アリス えゝ、わたしは何時になつたつてさうした女ですわ、そしてわたし、敵を赦すとか、敵を愛するなんて云ひ出した日には、それこそ偽善者になつたのです

わ！

クルト アリス、心の中に思つてゐる事を洗ひざらひ打ちまけてしまはないで、たまには見て見ぬふりして大目に見のがすといふ事が人間の務めになつてゐる場合も随分あるものです！ それが即ち寛容の徳といふもので、人間には誰にも必要な事なんですよ！

アリス わたしにはそんな必要がありませんわ！ わたしの生活は明けつ放しで、影日向がありませんからね、わたしは一體ごまかし札といふ物を使つた事のない人間ですわ！

クルト それはちと云ひ過ぎでせう！

アリス いゝえ、それでも云ひ足りない位ですわ！ あの男の爲めに、愛してもゐないあの男の爲めに、罪もなくして苦んだ事といふ物は……

クルト では何故あなたは結婚なんかしたんです？

アリス 分つてゐるぢやありませんか？……あの人がわたしを誘つて行つたからですわ！ わたしを誘惑したからですわ！ さあどんな風に云つたらいいでせう！ 然し一旦さうなると、わたし高い所へ登らうと思ひ出しましたの、社會の高い所へ……

クルト そしてあなたの藝術を棄てたんですわね！

アリス え、輕蔑されてゐた藝術をね！ でも御存じの通り、あの人はわたしをまんまと騙し了てたんです。あの人はわたし達の前には如何にも立派な生活がぶら下つてゐるやうな甘い事ばかり云つて聞かしたんです……美しい家庭やら何やらね！ ところが實はある物と云つたら借金ばかりでせう……金がかくつ付いてゐるのはびか／＼する軍服だけで、それもほんとうの金ぢやないと來てるんですもの！ つまりわたしはまんまと一杯食はされちやつたんです！

クルト 一寸待つて下さいよ！ 青年が戀に落ちた時には必ず光りかゞやく未來の希望を空想に描くに決つたものです……その希望がその通りに實現されなかつたからつて、それは宥してやらなければなりませんよ！ そんなことを云つた日には、わたしだつて同じやうな風に入を騙した覚えはあります、それでも、自分を嘔吐きだとは思つて居りませんか……何か壘壁の上に見えますか？

アリス あの人が打つ倒れやしないかと思つて見てるんですの！

クルト 倒れましたか！
アリス いゝえ、生憎倒れませんの！ あの人はいつで

もわたしを騙してゐるんです！
クルト それぢやわたしこれからドクトルと隣付き法官のところへ行つて來ます！
アリス 「窓際に腰かけて」行つて來て下さい、どうぞ！ わたし此處に坐つて待つてますわ。わたし待つ事なら幾らでも慣れて居りますからね！

第三幕

白晝に於ける同一舞臺裝置。砲臺上の歩哨の姿從前の如し。

アリス 「右手の脇掛椅子に坐す。その髪半白になり居る」
クルト 「扉をノックして後、左手より登場」御免、アリス！

アリス いらつしやい、あなた、さあお掛けなすつて！
クルト 「左手の脇掛椅子に腰を下す」汽船が今着いたところですよ！

アリス あの人もその船で來たのなら、これからどんな事になるかわたし分つてますわ！
クルト 來ましたよ、この船で、わたしはあの人のヘルメットがびか／＼するのを確に見たんです！ 一體町へ行つてどんな事をやつて來たんでせう！

アリス 大抵見當が付いてますわ。正装で出かけたんですから、屹度大佐のところへ行つたに相違ありません、それに訪問用の手袋なんか持つて行きましたから、訪問をして來たに相違ありませんわ！

クルト あなたは昨日のあの人の落着き拂つた態度に氣が付きませんでしたか？ 大人しく酒を止めて節制を守るやうになつてからは、まるで別人になつてしまひましたね——いやに落着いて、萬事控へ目勝ちで、思慮深くなつて……

アリス わたしにも分つてますわ！ そしてあの人が若し終始あんな素面であるやうだつたら、みんなにとつてそれこそ恐る可き惡魔になる時ですよ、あの人はウィスキに酔拂つて他愛もなくなつてゐるのが多分人類にとつての幸福ですよ！

クルト つまり酒の精があの人をすつかり骨抜きにしてゐたんですね……でもあなたは御覽になりませんか——死の極印を打たれてからといふもの、あの人は自己を高める一種の威嚴と云つた風の物を體得したやうですわ、尤も、例の靈魂不滅の新しい信仰が生ずると共に人生に對する違つた見方を體得した、といふやうな事もあり得るでせう——恐らくその爲めかも知れませんか。

アリス まるで、見當違ひの買ひ被りよ！ あの人は内心に恐しい事を企らんでゐるのです、ですから一寸外見はそんな風に見えますの！ あの人の云ふ事なんぞそのまゝ信じたならそれこそ大變な事になつちまひますわ、あ

の人は考へく／＼嘘を吐いてるんですからね！ 悪だくみを考へ出す事の上手さと云つたら、とてもあの人の足下にも寄付ける人はありませんわ……

クルト 「アリスに目を止める」アリス！ どうしたんです？ あなたはこの二日間で白髪になつてしまつたんですか！

アリス いゝえ、あなた、わたしは一體前から白いんですの、そしてあの人が死んだやうになつてしまつてからは染めるのも止したもんですからね！ 二十五年間もこんな要塞の中で……あなた、此處はもと牢屋だつたんですの！

クルト 牢屋！ 成程壁がさうらしいですね！

アリス わたしの顔色だつて矢張りその色ですわ！ 子供達までがこの牢屋の色に染まつてしまつたんです。

クルト わたしには殆ど想像する事もむづかしいですね、小さい子供達がこんな氣味の悪い壁の中で遊び戯れてゐられるものかどうか！

アリス えゝ、實際遊び戯れるなんて事は至つて稀でした！ そして亡くなつた二人の方は、光線不足の爲めにそんな事になつてしまつたんですの！

クルト ところで、一體これからさきはどんな事になる

とお思ひですか？

アリス えゝ、思ひ切つた打撃がやつて来るだらうと思ひますの、あなたにもわたしにもね！ あなたがユーディトの電報をお読みになつた時、あの人の眼からよく見覚えのある光がざらりと閃くのをわたし確に見付けたんです。無論その凄しい目の光はユーディトを射る筈のものなんですけれど、何と云つてもあの子は弾丸の届かない處にゐますからね、それであの人の憎しみはどさりとあなたの上に落ちかゝつて来たといふわけなんですの！

クルト ぢやあの人は一體わたしをどうしようといふ積りなんでせう？

アリス それははつきりとは云へませんが、けれどあの人は、他人の祕密を嗅ぎ出す事にかけては、とても信じられないやうな不思議な力をもつてると申しませうか、怪我の功名と申しませうか、そりやほんとにうまく嗅ぎあてますの……そしてあなただつてお氣付きの通り、あの人は昨日なんぞまる一日あなたの検疫所の事に頭を突込んでその事ばかり云つてゐましたし、あなたの生存から自分の生活の興味を吸ひ取つて、まるであなたのお子さん達だけの爲めに生きてると云つた風だつたぢやありませんか！ 「人喰ひ」——全くさうですわ！ あの人の自

身の生活なんて物はなくなりかけてゐるか、もうなくなつてしまつてゐて、他人の生活を自分の物にして生きてゐるんですからね！

クルト そんな印象は確にわたしも受けましたよ——あの人はもう我々とは違つた世界に住んでゐると云つたやうな感じをね。あの顔は、今や解體しかけてる人間の顔ですし、……そして眼といふと、まるで墓場や沼等にちらく／＼する鬼火かなんぞのやうに物凄く光つてゐるし！……いよく歸つて来ましたね！ あの人が嫉妬をやくかも知れないなんてお思ひになつた事はありませんか？

アリス いゝえ、そんな嫉妬なんかするにはあの人は餘りに氣位が高過ぎるんです！……「おれが嫉妬を感じなけりやならんやうな男があつたら、お眼にかゝらう！」——そんな事を云つてるんですからね、あの人と来た

ら！

云ひ出したら、何も彼も一々御尤もといふやうな顔をして聞いているんです！ わたしあの人のしやべる事ならどんな嘘だつて直ぐにわたしの字引で翻譯して本音を發き出すのはわけがありませんからね！……わたし何だか恐しい事が始まりさうな氣がしますわ……でも、クルト、どんな事があつてもよく落着いてゐなければ駄目よ！……わたし達の長い間の戦でわたしの唯一の強味は、どんな場合にも夢中になつてしまはずにぢつと自分を抑へてゐるといふ事だつたんですの……あの人と来たら、反對にウイスキーで直ぐかつとのぼせ上つてしまふもんだから何時でも敗けてしまふんです！……今に分りますわ！

大尉 「正装に、ヘルメット帽、マント、白手袋にて左手より。落着き拂つて一種の威厳を備へたれど、顔色蒼ざめ、目は凹み落ちたり。よろめきつゝ進み出で、ヘルメットとマントとを着けたるまゝ、クルトとアリスより遙か離れたる右手の椅子にとつかと坐す。會話中常にサーベルを膝の間にしてゐる」いや失敬！ こんな風をして失禮だけれど、少し疲れてゐるもんだからね！

アリスとクルト お歸りなさい！
アリス 如何ですの？
大尉 氣分は極上さ！ 只一寸疲れてゐるんでね！……

アリス 町では何か珍しい事がありましたか？
 大尉 うむ、少しばかり、善い事がね！ おれは醫者の處へも行つて来たよ、何でも無いんださうだ、攝生を守りさへすりやあ、もう二十年位は大丈夫なんださうだ！
 アリス 「クルトに」例の大嘘よ！ 「大尉に」それは結構でしたのね、あなた！
 大尉 うむ、さうだよ！

沈黙。その間に大尉何か自分に話しかけられん事を欲するものゝ如くに、アリスとクルトの方をじろじろ見やる。

アリス 「クルトに」今何か云つちやいけませんよ、向うの方から口を切らせるんです、すると自分の方から語るに落ちて尻尾を出しちまひますからね！

大尉 「アリスに」お前今何か云つたかい？

アリス いゝえ、わたし何んにも云やしませんわ！

大尉 「ゆつくりと」ねえ、クルト！

アリス 「クルトに」さあ始まりましたよ！

大尉 おれは、おれは町へ行つて来たんだよ、知つての通り！

クルト 「承知して領く」

大尉 おれは今日色々の人と近付きになつたがね……そ

の中に……若い志願兵が一人あつてね、「ためらひつゝ」砲兵のね！ 「間、その間クルトに不安の色あり」ところが……志願兵に缺員があるものだから、丁度こちらでね、それでおれは大佐と相談して、その男を此方へ連れて来る事にしたよ……これは君も喜んでくれるに相違ないと思ふ。殊に君が喜ぶに相違ないわけといふのは……その男は他でもない……君の……伴なんだ！

アリス 「クルトに」そら、いよ／＼吸血鬼の本性を發揮して来ましたわ！ ね！

クルト 普通の場合だつたらそれは親爺を喜ばせるかも知れませんが、わたしのやうな場合には只苦しいだけですわね！

大尉 君の云ふ事はおれには分らないよ！

クルト いや強ひて分つて下さるにも及ばないんです、只わたしはそれを望まないと申し上げて置けば澤山です。

大尉 さう、君はさういふ考へなんだね？……そんなら聞かして上げるがね、その青年はもう此方の隊へ轉任の命令を受けてゐるんだよ、そしてこの瞬間からもうおれの指揮下に立つてるんだよ！

クルト そんならわたしは是非とも他の聯隊へ轉ずるや

うにさせます！

大尉 それは君駄目だよ、君は自分の息子に對してはちつとも權利がないんだからね！

クルト ちつとも？

大尉 ないよ、裁判の判決で母親に親權が與へられてるんだからね！

クルト そんならわたしは母親と連絡を取る事にしませう！

大尉 なあに、それには及びませんよ！

クルト それには及びませんか？

大尉 うむ、その通り、その手續きはもうちやんとおれが済まして来たからね！

クルト 「起ち上るが、又腰を下す」

アリス 「クルトに」今度こそこの人は死ぬのが當然ですわ！

クルト 本當の「人喰ひ」だ！

大尉 さういふ次第さ！ 「アリスとクルトに直接に」お前達は何か云つたかね？

アリス いゝえ！ あなた耳がお悪いんぢやないの？

大尉 うむ、ちつとばかり……だがお前もつとおれの側へ寄つてくれたら、少し話があるんだが、内密で！

アリス そんな必要はありませんわ、そして證人が立會つてゐる方がどちらにも利益なこともあるものです！

大尉 そりやお前の云ふ通りだ、證人があるのは何時でも善い事だよ！……だが先づ第一に、遺言狀は出来上つたかね？

アリス 「彼に書類を渡す」除付き法官が自分で作つたんですよ！

大尉 お前の有利にだらう！……よし！ 「それを讀んでから、念入りにずた／＼に引裂き、床に投げ棄てる」

さうした次第さ！

アリス 「クルトに」あなたこんな人間を見た事があつて？

クルト これは人間ぢやあない！

大尉 さう、おれはアリスにかういふ事を云ひたいんだ！

アリス 「不安らしく」さあどうぞ！

大尉 「相變らず落着き拂つて」我々の不幸なる、慘憺たる結婚生活を打ち切らんとする、夙に言明せられたるお前の希望を容れ、夫と子に對するお前の愛情の缺乏に基き、また家政を執るに際してのお前の怠慢に基き、おれは今日町へ出た序に、裁判所へ離婚の訴へを提起して来た

よ！
アリス さう？ そしてその理由は？

大尉 「相變らず冷静に」今述べた理由の他には、全然個人的な理由なんだ！ 即ち、おれは尙二十年間も生きられるといふ事が明かになつた以上、この不幸なる結婚を止めて、より適当な他の結婚に乗り換へようといふ覺悟を決めたのだ——それはつまり、おれの運命を或る一人の女の運命と結び付けようといふ意味なんだ——夫に對する従順と共に、若々しさを、それから——遠慮なく云へば——幾分の美しさをも我が家にもたらしめてくれるやうな女の運命とね！

アリス 「指輪を抜き取りて大尉に投げ付ける」さあ、受取つて下さい！

大尉 「それを受取つて、チョコキのかくしにしまひ込む」この女は私に指輪を投げ付けました！ お立會ひの證人はこの點をよくお認め置き下されたい！

アリス 「起ち上り昂奮して」そしてあなたは、わたしを追ひ出して、他の女を引きずり込まうつてんでせう？

大尉 如何にも！
アリス かうなつたらもう何も彼も打ちまけてしまふ他はないわ！……クルト、この人はね、わたしに對して謀

殺未遂の罪を犯してゐるのですよ！

クルト 謀殺未遂？

アリス え、この人はわたしを海に突落したんです！

大尉 證人がないよ！

アリス 嘘ですよ！ ユーデイトが見てたんぢやありませんか！

大尉 それが何になるんだ？

アリス あの子が證人になつてくれます！

大尉 いや、そんな事は出来やしないよ、あの子は何んにも見はしないと云つてるからなあ！

アリス あなたがあの子を仕込んでそんな嘘を吐かせるんですよ！

大尉 いや、おれはちつとも仕込む必要なんかなかつたよ、お前が前からちやんと嘘を吐く事を教へ込んで置いてくれたもんだからね！

アリス あなたはユーデイトに會つて來たんですか？

大尉 うむ！

アリス あゝ困つたこと！

大尉 今や要塞は陥落した！ 十分間の猶豫を與へて敵に自由撤退を許す事にしよう！ 「時計を卓の上に置く」十分間だぞ、時計を卓の上に置いて！ 「心臓部に手をあ

で、ちつとする」

アリス 「大尉に馳せ寄つてその腕を捉へる」どうしたの？

大尉 知らん！

アリス 何か欲しくはありませんの？ 何か飲み物は？

大尉 ウィスキーか？ いや、おれは死にたくないんだ！

お前！……「すつくと立つ」おれに觸るな！……十分間

だぞ、それが経過すれば守備兵は斬り倒されるんだ！

「サーベルを抜き放つ」十分間！ 「正面奥より退場」

クルト 何だい、一體この人間は？

アリス 悪魔ですわ、人間ぢやありませんわ！

クルト 一體おれの件をどうしようといふ積りなんだらう？

アリス あの人はね、屹度人質に取らうといふんですよ、あなたを自分の自由にする事が出来るやうにね。あの人にはあなたをこの島の主立つた人達から引離して孤立にしてしまはうとするんです。……あなたは御存じかどうか知りませんが、この島は島の人達に「小地獄」と呼ばれてゐるんですの。

クルト それは知りませんでした！……アリス、あなた

はわたしの同情を呼び起した最初の婦人です、大抵の女はどんな不幸に出會つたつて自業自得で同情する餘地のない奴等ばかりなんですがね。

アリス どうぞ今わたしを見棄てないで下さい！ どうぞわたしから逃げて行つてしまはしないで下さい、あの人わたしを打つんですから……あの方はこの二十五年間わたしを打ち續けて來たんです……しかも子供達の見てゐる前でね……おまけにわたしを海の中へ突落したんです……

クルト その事を聞かされた以上、わたしは斷然あの男に反抗します！ わたしは實際何の悪意もなしにこの島へやつて來たんです、あの男の先年の侮辱や讒謗等も一向氣に止めずに！ わたしの子供達を奪つたのはあの男だつたといふ事實をあなたの口から聞かされた時でさへわたしは宥してやる積りだつたんです……何しろ相手は病人で死にかけてゐたんですからね……然し、今度といふ今度は、わたしの件まで奪はうとするに至つては、もうあの男は死ななければならん、彼か——或はこのわたしか、何方か。

アリス よく仰しやいました！ どうしておめ／＼この要塞を明け渡すもんか！ 要塞も彼奴も一緒くたに空中

に木葉微塵に爆發させてしまふんだ、わたし達も一緒に
すつ飛んだつてかまやしない！ 火薬の用意はわたしが
しますわ！

クルト わたしがこの島へ来た時には實際ちつとも悪い
感情を持つてなかつたんです、そしてあなた方の憎悪が
何だか自分の方にも感染して来さうに思はれた時、わた
しは逃げ出さうと思つたんです。然しもうかうなつてし
まつては、わたしは何處までもあの男を憎み通さず置
きません——丁度「悪」といふ物を憎んで来たと同じやう
に！……それで、これからどういふ風にしようといふん
です？

アリス 何時かあの人がわたしに戦略を授けた事があり
ますの！ それはね、太鼓を鳴らしてあの人の敵を驅り
集めて、同盟軍の味方を求めるのよ！

クルト 御覽なさい、あの人はわたしの妻をとらう／＼見
つけ出したんですよ！ 何故あの二人は三十年も前にめ
ぐり會はなかつたんだらう！ それこそ大地を震はすや
うな大喧嘩がおつ始まつたんだらうに！

アリス でも今度その二人が甘くめぐり會つたといふわ
けね……そして直き又別れるに決つてますわ！ あの人の
急所はわたしちやんと握つてゐますからね、わたし早

くからあの人を變だ／＼と思つてる事がありますの！
クルト この島では誰が一番あの人の苦手なんです？

アリス それはあの兵器監なの！

クルト 正直な人間ですか？
アリス え、さうです！……そしてその人は感付いて
るんです、わたしの……わたしも知つてる事ですがね：
……あの人と或る砲兵曹長とが企らんでゐることをその人
は氣が付いてゐるんです！

クルト 二人はどんなことを企らんだんです？……一體
どんな事を？

アリス 横領罪よ？
クルト 恐しい事だ！ いや、わたしはそんな事件には
關係したくありません！ そんな穢い物には手を觸れる
のもしやだ！

アリス ハ、ハ、ハ！ あなたはそんな事で敵を征伐する事
が出来るもんですか！

クルト 以前には出来たんです、だがもう駄目ですよ！
アリス 何故駄目なの？

クルト わたし氣が付いたんです——矢張りこの世には
正義といふ物が支配してゐるといふ事を！
アリス そんならその正義が来るまでだまつて待つてた

らいでせうよ！ そしたらあなたの息子さんがあの人の
に取られてしまふまでです！ 一寸わたしの白髪を見て
頂戴！……それでもまだ毛は澤山あるんですからね！……
……あの人はこれから再婚するつもりですつてね！ そし
たらわたしも自由の身になれるわ——再婚でも何でも出
来る自由な身にね！ そしてもう十分経つとあの人は縛
り上げられてこの下に禁錮されてしまふんです、この下
に「と足で床を踏みつけながら」この下にね……そしてわ
たしあの人の頭の上で踊つてやるんだわ、『ポヤールの
侵入』を……「兩手を腰にして二三回ダンスの足取りを
なす」……ハ、ハ、ハ！ そしてピアノをかき鳴らして彼奴
に聞かしてやるんだ！ 「矢鱈にピアノを打ち鳴らす」お
お！ 牢獄が入口を開く！ そして抜き身の劍を持つた
番兵はわたしを監視するんぢやなくつて、彼奴を……メ
リタムタムタ・メリタリアレエ！……彼奴を、彼奴を、彼
奴を監視する事になるんだ！

クルト 「酔へるが如き目をして彼女を見詰める」アリ
ス！ 魔女だな、矢張りあなたも！

アリス 「椅子の上に飛び上つて月桂樹の花輪を取下さ」
これをわたし引揚げの時に持つて行く事にするわ……勝
利の時には月桂樹をね！ それからこのひらく／＼するリ

ボン！ 少し埃が付いてゐるのね、でも常盤の緑は變らな
いわ！——わたしの若さと同じやうに！——わたし、こ
れでもまだお婆さんといふわけぢやあなくつてよ、クル
ト！

クルト 「輝ける眼もて」どうしても魔女だ！
アリス ……え、え、「小地獄」のね！……ちよいと、わたしこ
れからおめかしをやるわ……「髪をほどく」二分間で着
物を着て……それから二分間で兵器監のところへ出かけ
て行つて……それから、要塞の爆破！

クルト 「以前の如く」魔女だ！
アリス あなたは何時でもさう云つてたのね、わたし達
がまだ子供の時分にも！ あなた覚えてゐて——二人で
夫婦ごつこなぞをして遊んだあの時分の事を？ ハ、
ハ！ あなたはその頃から矢張り内氣で臆病だつたの
ね！

クルト 「眞面目になつて」アリス！
アリス え、さうだつたわ、あなたは！ そしてそれ
がまたあなたにはよく似合つてましたわ！ ねえあな
た！ 世の中にはなるべく内氣な男を好くお轉婆がある
ものよ、そしてまた、お轉婆を好く大人しい男も……あ
るつて話だわ！……あなた、あの頃ちつとはわたしを好

きだつたでせう、ねえ？
 クルト おれは一體何處にゐるんだらう！
 アリス 一人の女優の側にいらつしやるのよ——禮儀作法なんて事には無頓着だけれど、その他の事にかけてはあ申分のない淑女なのよ！ さうよ、さうよ！ でもわたしもう自由の身だわ、自由だわ、自由だわ！……一寸其方を向いていらつしやいよ、ジャケツをとり換へますから！

アリス 胸の鈕を外す。クルト矢庭に飛びついて女を両腕に抱き上げ、咽喉に噛み付く。女聲を立てる。すると彼は女を長椅子の上に投げ出して、あわて、左手より退場。

第四幕

同一の舞臺装置にて、夕。砲臺上の歩哨の姿は相變らず正面の窓越しに見える。月桂樹の花輪は椅子の背に引つけてある。吊ランブ既にともされたり。かすかなる音楽。

大尉、顔色蒼ざめ目は落ち凹みて、髪はやゝ白くなり、着古したる軍服に乘馬長靴を穿き、書き物机に坐し眼鏡をかけてバシアンスをなせり（バシアンスは一人にても爲し得。多くカルタを用ふ）幕間の音楽は幕の揚りし後にも、新人物の登場するまで續けらる。

大尉はバシアンスを續け居れど、時々痙攣的に肩をすくめ、不安らしく口を上げては耳を澄ます。バシアンスはいくらやつても決りが付かぬらしく、大尉はじれつたさうにカルタを取集める。それから彼は左方の窓へ行きて押開き、カルタを外に投げ出す。窓は開かれたるまゝにて、蝶番の處ががた／＼鳴つてゐる。彼は戸棚の處へ行きしが、窓のがた／＼するに驚か

され、振返りて、何事なるかを見届ける。戸棚よりウイスキーの黒き角樽を三本取出し、しげ／＼と打眺めて——扱てそれをも窓より投げ出す。次にシガーの箱を數箇取出し、その一つにちつと嗅ぎ入りて後、矢張り窓から投げ出す。それより彼は眼鏡を取外し、拭いて、それで見えるや否やを検す。それからこれをも窓より投げ棄てる。彼はよく目の見えぬ人の如くに家具の間をよるめき歩き、戸棚の上に、六本の蠟燭立てる大燭臺に火を點す。扱て花輪が目につきし故、それを取つて窓際まで行きしが、又引返す。ピアノの蔽布を以て注意深く花輪を包み込み、書き物机よりピンを持ち來りて、その隅々を留め、それを椅子の上に載せる。さてピアノに近付いて拳を以て鍵を叩き試み、鍵盤を閉ぢて後、鍵を窓から投げ出す。それから彼はピアノの上に灯を點す。扱て飾棚に行きて妻の寫眞を取出し、熱視して二つに引裂き、床上に投げ出す。窓の蝶番まだがた／＼する、彼は又もそれに驚かされる。

他の寫眞は一氣に腕もて掃き落し、靴にて寄せ集めて一山と爲す。それが済むと今度は疲れたやうに書き物机にぐつたりと坐し、心臓部を掴む。扱て卓上に點火し、吐息をつき、恰も忌はしき幻影を見るかの如くにちつと空を凝視す。再び起ち上つて戸棚に近付き、開いて中より青絹の紐もて結へたる一束の手紙を取出し、ストローヴに投げ入れて、戸を閉す。と、電信機こと／＼と鳴り出せしも、間もなく又靜寂に歸る。大尉は殆ど死の恐怖に襲はれしものゝ如くに戦慄しつゝ起ち上り、心臓部に手をあてたるまゝ聽耳立てゝ立ちすくむ。然し電信機よりは最早何も聞えぬ故、左手の扉の方へ耳を澄ます。其方へ歩み寄り扉を開いて一歩中に入り、腕に一定の猫を抱きて戻り來り、猫の背を撫でる。そして右手へ去る。この時音楽はたと止む。

アリス 〔正面の入口より登場。外出衣、黒き髪、帽子、手套——數多の燈火を見て打ち驚く〕
 クルト 〔左手より登場。神經質らしき顔付〕

アリス まるでクリスマス晩ね!

クルト どうでした?

アリス 「彼に手を差出して接吻させる」わたしにお禮を仰しやいよ!

クルト 「厭々ながら彼女の手に接吻する」

アリス 證人が六人よ、そのうち四人は岩のやうにしつかりした人なの。もう告訴してしまひましたからね、返事は電信で此處へ来る筈なの——こゝへ、要塞の眞中へね!

クルト さう!

アリス 「さう」なんて云はずに、有難うと仰しやいよ!

クルト どうしてあの人はこんなに澤山灯を點けたんだらう?

アリス 暗い處にゐると怖いからよ、無論……まあ電信機を御覽なさい! 丁度コーヒー挽きの把手見たいぢやありませんか——わたし挽いて、挽いて挽きまくるのよ。すると齒を引っこ抜く時のやうにいやな音を立て、豆が碎けるんだわ……

クルト あの人は一體この部屋で何をやらかしたんでせう?

アリス まるで引越し騒ぎのやうだわ! いつそ下界へ

引越しちまへばいよのに!

クルト アリス、そんな風に云つちやあいけない! わたしはどうもあまりいゝ氣持がしませんよ……何と云つたつてあの人は子供の時分からの友人だつたし、それにわたしの困る時には随分好意を寄せてくれた事だつてあつたんですからね……考へて見れば氣の毒にもなりませんよ!

アリス そしてこのわたしは氣の毒でも何でもないのでね——何の罪咎もないこのわたしは、あんな化物の爲めに折角の自分の經歷を臺なしにしてしまはなければならなかつたこのわたしは?

クルト 經歷々々つて、一體どんな御經歷なんです?

アリス 「御立派な物だつたんですか? そんなに」
「猛り立つて」何を仰しやるの、あなたは? 御存じないの、あなたは——わたしがどんな人間であるか、どんな人間であつたか?

クルト もう分つた、分つた!

アリス あなたも始めるの、もう?

クルト もう?

アリス 「クルトの首玉に飛付いて接吻する」
クルト 「彼女を兩腕に抱き上げて、彼女が聲を立てる程

咽喉に噛み付く!

アリス わたしに噛み付くのね!

クルト え、わたしはあなたに噛み付くんですよ、この咽喉の處にね、そして山猫のやうにあなたの生き血を吸ひたいんです! あなたつて人は、わたしの心にひそんでゐる煩惱に目をさませたんだ、幾年も幾年もかかつてわたしはこの煩惱を諦めと苦行とで押殺してしまはうとしてゐたのに! こゝへやつて来た時、わたしは自分をあなた方に比較してちつとは善い人間だと思つてゐました、然し今になつて見るとわたしは誰よりもみじめな人間になり下つてしまつた! あなたのその恐しい赤裸々の姿を見せ付けられてから、情慾がわたしを盲目にしてしまつてから、わたしは全身に漲る悪の力を感じてゐるのです、そして醜は美になり、善は醜い弱い物になつて来ました!……さあおいで、接吻で息の根を止めてくださいから!……(彼女を抱擁す)

アリス 「彼に左の手を見せて」あなたが解いて下さつた鎖の痕を御覽なさいよ! これまではわたし奴隷だつたんです、でももう解放されましたわ!

クルト けれどその代り今度はわたしがあなたを縛りますよ……

アリス あなたが?

クルト え、わたしが!

アリス わたし一寸さう思つたこともありましたが、あなたは屹度……

クルト 賈信者だらうつて!

アリス え、だつてあなたは人類の墮落だとか何だとか、いやに聖人振つた事ばかり云つてるんですもの!

クルト さうだつたか知ら?

アリス だからわたし、あなたは屹度お説教をしに来たんだらうと思ひましたの!

クルト さうだつたんですか?……一時間経つとわたし達はもう町にゐますね! そしたらわたしがどんな人間であるかよく分りますよ……

アリス 町へ行つたら今夜は一緒に芝居へ行くのよ、そして大勢の人達へわざと見せ付けてやるんです! わたしが他の男と逃げたといふ噂が廣まれば、あの人はこの上なしの赤恥をかく事になるんですからね! あなた分つて?

クルト 分りかけて来ましたよ! 牢屋だけぢやあの男には足りないといふんでせう?

アリス 足りませんとも! その上に赤恥をかゝしてや

らなけりやあ！
クルト それにしても變な世の中ですわね！ あなたが破廉恥な行爲をやつて、それであの人が恥をかく事になるなんて！

アリス 世間なんてどうせさうした頓馬なものよ！

クルト まるでこの牢屋の壁が、無数の罪人のあらゆる邪悪を残らず吸ひ込んでゐるやうですわね、そしてこの部屋に籠つてゐる空気を一寸吸つたゞけでも、誰にでもその悪氣が乗り移るんだ！ あなたは芝居や晚餐の事を思つてゐたやうでしたわね！ わたしは又伴の事を考へてたんですよ！

アリス 「手袋を以て彼の口のあたりを打つ」馬鹿！

クルト 「手を上げて、彼女の横面を撲らうとする」

アリス 「後に退きて」靜にしまさい！

クルト 御免なさい！

アリス 膝をついて！

クルト 「跪く」

アリス 顔を地べたにくつつ付けて！

クルト 「床に額をすり付ける」

アリス わたしの足に接吻して！

クルト 「彼女の足に接吻する」

アリス もう二度とするんぢやありませんよ！……お起ち！

クルト 「起き上る」おれは何處へ来たんだらう？ おれは一體何處にゐるんだらう？

アリス 分つてゐる筈だわ！

クルト 「ぎよつとしてあたりを見廻し」おれはもう何だか……

大尉 「杖にすがれる儘まじき姿にて、右手より登場」君と一寸話が出来ないだらうか、クルト、君と二人だけで？

アリス 自由撤退に關する事なんですか？

大尉 「縫物卓の前に坐して」どうぞ君、一寸でいゝからこゝに掛けてくれないか！ それからアリス、お前は一寸……遠慮をして貰ひたいんだがね、アリス！

アリス 今度はどんな事なんだらう？……何か又變つた事らしいわ！——「クルトに」どうぞ、そこにお掛け下さいな！

クルト 「しぶく、其處に腰を下す」

アリス そして年長者と智慧者の云ふ事をよくお聴きするんですよ！……それから若し電信がかゝつて來たら……一寸知らして下さいな！ 「左手へ去る」

大尉 「暫時の後、重々しく口を開いて」君はおれの、おれ達のやうな運命を理解する事が出来たかね？

クルト いゝえ、自分の運命すらよくは分らないんですからね！

大尉 然らばこの混沌たる物の中に存する意義は一體何だと思ふね？

クルト わたしにより善き瞬間に於てはわたしはこんな風に信じてゐたものです——我々はその意義なる物を自ら経験する事は不可能である、然も尙ほ無意識的に何物かの前に頭を下げる、それが即ち意義なんだ、といふ風に……

大尉 頭を下げる！ 自分自身以外に確乎たる或る物を認むるに非ずんば、おれは斷じて頭を下げる事なんぞ出来やしないよ！

クルト 如何にも御尤もです、然しあなたは數學家として、二三の既知の數が興へられた場合、それから未知の一點を見出す事が出来る事は疑ひがありませんね！

大尉 おれはその點を求めて、然も——遂にそれを見出す事が出来なかつたんだ！

クルト では屹度誤算なすつたんでせう、もう一遍やり直した方がいゝでせう！

大尉 おれはもう一遍やり直すだらう！……だが一體君はどうしてそんな諦念を體得したんだ？

クルト わたしはそんな諦念なんか體得しては居りませんよ！ どうぞ買ひかぶらないやうにして下さい！

大尉 君は多分氣が付いてゐるかも知れないけれど、おれは處世法といふ奴をかういふ風に解してゐるんだ——「撮み出せ！」即ち抹殺しては更に先へくと押進むんだ！ おれは大きな袋を一つこしらへて置いて、あらゆる屈辱をどしどしその中へ投り込んで置いたものだ。そしてその袋が一杯になると、どぶんと海の中へ投り込むんだ！——おれは信じてゐるが、凡そおれ位ゐる世の中にひどい屈辱を受けた人間もないだらう。だが、例の主義で抹殺して押進む時、そんな屈辱なんぞもうおれの前には存在しないんだ！

クルト あなたは如何にあなたの生活と周圍とを詩的に改造したお方であるかは、わたしも氣が付いて居りましたよ！

大尉 さうでもしなかつたら、どうしておれは生きて來られただらう、どうしておれは持ち堪へる事が出来ただらう！ 「心臓部を掴む」

クルト どうかなすつたんですか？

大尉 どうもいけない！「間」それから君の所謂「詩的改造」の能力が止む瞬間がやつて来る。すると現實が赤裸々に目の前に暴露せられる！……それは實際恐ろしい事だ！「今や彼は聲に老人らしき涙を湛へ、下顎を落して物語る」ねえ、君……「氣を取直し、いつもの聲にて」ゆるしてくれ給へ！……町へ行つて醫者に聞いて見たら、「再び涙聲になつて」おれはもう癡人だと云ふんだ……「普通の聲に戻りて」そしておれはもう長くは生きられないんださうだ！

クルト 醫者がさう云つたんですか？

大尉 「涙聲にて」さうだ、醫者がさう云つたんだ！

クルト では、あの事は、ほんとうぢやなかつたんですか？

大尉 何が？ あゝさうか……いや、あれはほんとうぢやなかつたんだ！

間。

クルト そんならもう一つの事も矢張りほんとうぢやなかつたんですか？

大尉 どんな事だね？

クルト わたしの伴が志願兵としてこちらの方へ赴任させられたとかいふ事です！

大尉 そんな話はちつとも聞いた事がないやうだね。クルト あなたはあなた自身の非行をも抹殺する能力も無限にもつてゐるらしいですね！

大尉 君の云ふ事はどうもおれには分らないよ！

クルト ではもうあなたもおしまひですわね！

大尉 うむ、もうおしまひに近いよ！

クルト そんなら、多分、奥さんを侮辱するやうな離婚訴訟を提起したとかいふのも、あれも、出鱈目なんです

か？

大尉 離婚？ いや、そんな話はちつとも知らなかつたよ！

クルト 「起ち上る」それぢやあなたは嘘を吐いたんだつて事だけは承認するでせうね？

大尉 君は随分ひどい言葉を使ふな！ だがお互に寛容の徳といふ事が大切だよ！

クルト ぢやあなたはその點を認めたんですか？

大尉 「きつぱりと、ほがらかなる聲にて」うむ、おれはそれを認めたよ！……だからあれはどうか宥してくれ、

クルト！ 何事も水に流してくれ！

クルト 男らしい一言でした！——然し實はわたしあなたを宥して上げるやうな事は一つもないんです！ そし

てわたしはあなたが思つてゐられるやうな人間ぢや決してないんです！ 少くとも今ではもうそんな人間ではなくなつてゐるんです！ 殊に、他の點はしばらく措いて、あなたのその告白を聴く資格のあるやうな人間ぢやあ決してないんです！

大尉 「明晰なる聲もて」人生つて奴は妙な物だつたよ！ 兎角つむじ曲りで、意地の悪い奴でね——おれの子供の時分からさうだつた……そして世間の奴等も意地悪ばかりそろつてやがるんだ、それでおれも自然根性がひねくれて行つたんだ……

クルト 「電信機の方へ目をやりながら、不安らしく室内を歩き廻る」

大尉 何を見てるんだい？

クルト 電信機を止めてしまふわけには行かないものでせうか？

大尉 いや、そんな事はしたくないよ！

クルト 「一層不安らしく」砲兵曹長のエストベリとかいふ男はどんな人間ですか？

大尉 正直な男だよ、いくらか商人根性はあるがね、勿論！

クルト では兵器監といふのは？

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉 あれはおれの敵ではあるが、悪く云ふ程の男でもないよ！

クルト 「窓から外を眺める、外には提灯の光がちら／＼動いてゐる」あちらの砲臺の上で提灯を持つて騒いでるのはどうしたんです？

大尉 提灯かね？

クルト さうです、そして人が大勢動いてゐますよ！

大尉 多分「雑伎」つていふ奴だらう——我々の言葉で云へば！

クルト それはどういふんですか？

大尉 四五人の兵士と伍長が一人さ！ 又何處かの可哀想な奴が暗い處へ打ち込まれるんだらう！

クルト おゝ！

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

大尉

認め得るやうな年輩になつて来たらしいんです！——でも或る行爲を見ると、その動機を知りたいといふ心持だけは大きいにありますよ……一體あなたはどうして奥さんを海に突落しなんぞしたんです？

大尉 おれには分らん！ 只、彼女が棧橋の上に立つてゐた時、おれには至つて自然な事のやうに思はれたんだ——彼女が海の中へはまり込むべき事がね。

クルト そして、あなたは、それを後悔もしないんですか？

大尉 しないねえ！

クルト 變ですわね！

大尉 うむ、確に變だよ！ 餘り變なもんだから、しまひにはそんな卑劣な事をしたのは斷じて自分ではないと信ずるやうになつた位なんだ！

クルト 奥さんがあなたに復讐するだらうといふ事は考へなかつたんですか？

大尉 彼女はもう十分にそれをやつたんぢやないだらうか？ そしてそれも甚だ自然な事だとおれは思つてゐるよ！

クルト どうしてあなたはそんなに早くそんな皮肉な諦めに到達する事が出来たんですか？

大尉 それはね、おれが一度死といふ奴に當面して以來、この人生つて物がこれ迄とは違つた顔を見せるやうになつたんだよ……ねえ、君、若し君がアリスとおれを裁くとしたら、どちらを正當とするね？

クルト どちらも正しくはありませんね！ 然しわたしはどちらにも無限の同情を寄せてみます——どちらかと云つたら、あなたの方に少し多いかも知れません！

大尉 握手さしてくれ給へ、クルト！

クルト 「片手を彼に差出し、他の手を大尉の肩にかけて」我が昔の親友！

アリス 「左手より。今度は日傘を持つてゐる」まあ、お睦しいこと！ ほんとうの友情ね……電信はまだかゝつて来なくつて？

クルト 「冷かに」まだですよ！

アリス ほんとうにいつまでぐづ／＼してゐるんだらう、わたしじれつたくなるわ、そしてじれつたくなれば、わたし自分の手でどし／＼やつ付けてしまひますからね……見ていらつしやい、クルト、わたし今この人に止めの鐵砲を打つよ！ すると見てゐる間に斃れてしまふわ……先づ彈丸を罩めて——わたしだつて射撃法位の

は心得てゐてよ、五千部の本がすつかり賣り切れなかつたこの人のあの有名な射撃法をね……それからわたし狙ひを付けて——撃つて！ 「傘を銃の如くに構へて狙ひを付ける」——あなたの新しい奥さんは如何です——あの若くつて、美しくつて、まだ知られない新夫人は？ あなた御存じないでせう！ でもわたしはちやんと知つてゐるよ——わたしのいゝ人はどうしてるか！ 「クルトの首玉に嚙り付いて接吻する、彼は彼女を突飛ばす」うちのいい人はピン／＼してるの、只少しはにかんでるのよ、まだね！……あなたはほんとにお目出度いお氣の毒な方ね、わたしなんか一寸も愛した覚えのないあなた、嫉妬をやくには餘りに自惚れが強過ぎるあなた、わたしに鼻つまみをつかまへられて散々小突き廻されてゐたのものとんと御存じなしでさ！

大尉 「サーベルを引抜いて彼女に切つてかゝる、然し徒らに家具を傷つくるのみ」

アリス 人殺し、人殺し！

クルト 「動かずに立つたまゝ」

大尉 「サーベルを手にするまゝ倒れる」ユーデイト！

アリス 萬歳！ くだばつた！

クルト 「正面入口の方へ退く」

大尉 「起ち上る」まだ死なゝいぞ！ 「サーベルを鞘に収め、縫物卓の側なる眩掛椅子に行きて腰を下す」ユーデイト！ ユーデイト！

アリス 「クルトの側へ行きて」さあ、行きませう——御一緒に！

クルト 「彼女を突飛ばす、彼女は倒れて膝を突く」地獄へでも行つてしまひなさい、もとの古巣へ！ 永久に左様なら！ 「去らんとす」

大尉 行かないでくれ、クルト、この女はおれを殺してしまふよ！

アリス クルト！ わたしを棄てないで、どうぞわたし達を見棄てないで！

クルト 御機嫌よう！ 「退場」

アリス 「態度を豹變して」まあ、なんて情ない奴でせう！ あんな者があなたのお友達なのね！

大尉 「優しく」ゆるしてくれ、アリス、そして此方へ来てくれ！ さあ早く！

アリス 「大尉に」彼奴はわたしがこれまで出會つた人間の中では一番情ない、一番ひどい偽善家よ！——あな

たは何と云つたつて男子だわ!

大尉 アリス、聞いてくれ!……おれはな、もう長くは生きられない體ださうだ!

アリス さうを?

大尉 醫者がさう云ふんだよ!

アリス そんならもう一つの事もほんとうぢやなかつたの?

大尉 さうだ!

アリス 「身の置き所もないやうに」まあ、わたし何んて事をしてしまつたらう!

大尉 どんな事だつてどうにかなるもんだよ!

アリス いゝえ、これだけはどうにもならない事なの!

大尉 いや、どうにかならないつて事はないものだよ、只そいつを抹殺して進みさへすれば!

アリス でも電信が! 電信が!

大尉 どの電信が?

アリス 「大尉の側に跪きて」わたし達は見放された人間なんでせうか? こんな事がどうしても起らなければならなかつたのでせうか? わたしは自分を、自分とあなたとを爆發させてしまつたんです! あゝ何故あなたにわたしを騙すやうな眞似をしなければならなかつたの

でせう! そして折も折とて、あんな男がやつて来て、わたしを焚き付けるやうな眞似をする事になんぞどうしてなつたんでせう……わたし達はもう駄目よ! どうぞ何事も助けて下さいな、どうぞ何も彼も宥して水に流して下さいな——あなたの廣いお胸でね!

大尉 この世界には宥されないと云ふ物なんぞあるもんぢやないよ! これ迄だつておれがお前に宥してやらなかつた事が一つでもあつたかい?

アリス その通りですわ……でもこればかりはどうにもならない事なんですの!

大尉 どんな事かおれには一向見當が付かないよ、悪だくみを發明するお前の素晴らしい獨創力は兼ねて承知してゐるが……

アリス あゝ、わたしこの苦みからさへ抜け出されるなら! 若しわたしこの難關さへ切り抜けられるなら、あなた、それこそあなたを大事にしますわ……あなたを愛しますわ!

大尉 おい、何だか狐につまゝれたやうな話ぢやないか?

アリス わたしの云ふ事をどうぞ信じて下さい——誰の力でももうわたし達は助からないのよ……全くどんな人

間の力でも!

大尉 では誰なら出来るといふんだ?

アリス 「大尉の目の中を覗き込みて」わたし分りませんわ! まあ考へて見て下さいな——子供達はどうなるんでせう、一生汚名を被せられて……

大尉 そんならお前は何か家名を汚すやうな眞似をしてしまつたのかい?

アリス わたしぢやありませんわ! わたしぢやありませんわ!……さうなつたら子供達は學校にだつて上つてゐられないでせうね! そして世の中へ出てからも、わたし達と同じやうに一人ぼつちで淋しい思ひをするのでせう、従つて自然わたし達のやうに意地の悪いひねくれた人間になつてしまふのでせう!……そんならあなた町へ行つた時、實はユーディトにもお會ひにならなかつたのね——今こそわたしやうやく分りましたわ!

大尉 うむ、實は會はなかつたんだ!……然し、それも「抹殺」だ!

電信機鳴り出す。アリス飛び上る。

アリス 「叫ぶ」とうく、わたし達の頭に災難が落ちかかつて来たわ! 「大尉に」それを聞くんぢやありませんよ!

大尉 「冷静に」そんな物を聞きはしないよ、お前もつと落着いてくれ!

アリス 「電信機の側に立ちながら、爪立ちして窓外を覗かん」と聞いてはいや、聞いてはいや!

大尉 「耳を抑へて」おれはかうして耳を塞いでゐるよ、リーサ!

アリス 「手を高くさし伸べつゝ跪きて」神よ、助け給へ!——逮捕隊がやつて参ります……「號泣して」天に在します神よ! 「黙禱を擬すものゝ如く唇を動かすやうに見える」

電信機尙ほしばらく鳴り續き、細長き紙そろ／＼と流れ出で、間も無く静寂に歸す。

アリス 「身を起し、紙片をもぎ取りて、口の中で讀む。それから目を天に向けて打ち仰ぎ、大尉の側に駆け寄りて、額に接吻する」無事に済んでしまつてよ! 何でもなかつたの! 「他の椅子に坐し、ハンケチをあて、烈しく泣き入る」

大尉 一體お前にはどんな祕密があるんだい?

アリス どうぞこればかりは訊かないで頂戴! もう済んでしまつたんですから!

大尉 ぢやさうして置かうよ、リーサ!

アリス まあ、あなた、三日前まではそんな優しい言葉をかけてくれた事は一度もなかったのね——一體どうしたんでせう？

大尉 うむ、それはね——初めて打つ倒れたあの瞬間、おれはもう墓場の向う側にゐる人間だったんだ。その時おれの見た物はもう忘れてしまった、然しその印象だけは今でも残つてゐるんだよ！

アリス それはどんな事だったんです？

大尉 希望さ——何かより善き物に對する！

アリス より善き物ですつて？

大尉 うむ！ これこそ人生そのものでなければならんとは、おれは、元來一度も信じたことがなかつたんだ……これこそは死だ！ 或は、それよりもつと悪い何かだ……

アリス そしてわたし達は……

大尉 一見お互に苦め合ふのが即ち我々の任務だったとでもいふ風に見えるぢやないか！

アリス そんならわたし達はもう遺憾なく苦め合つたんでせうか？

大尉 うむ、おれはさう思ふよ！ それから、こんな家によくも住んで来たものだな！〔四邊を見廻す〕……お

れ達はあとを片付けて、すつかり綺麗にして置かうぢやないか？

アリス 「身を起して」ええ、出来るならね！

大尉 「室内を見廻し」一日では駄目だ！ とても出来ん！

アリス そんなら二日がよりで！ 何なら幾日でもかゝつて！

大尉 さういふ事にしようね！

問。

大尉 「再び腰を下し」お前この度も矢張り自由の身になるわけには行かなかつたんだね！ そしてまたおれの體に繩を掛けるわけにも行かなかつたんだね！

アリス 「ぎよつとする」

大尉 おれにはちやんと分つてるよ、お前はおれを牢屋へ打ち込まうとしたんだらう、然しおれはそんな物は抹殺してしまふんだ……お前は今迄だつてもつとひどい事をしてるんだから……

アリス 「言葉なし」

大尉 然も横領罪とかいふ嫌疑に就いてはおれは全然潔白なんだぞ！

アリス そしてあなたの御意見では、わたしあなたの附

添着護婦にならなきやならない……？

大尉 お望み次第ではね！

アリス でなけりやわたしどうすればいゝんです？

大尉 おれは知らんよ！

アリス 「絶望的に、ぐつたりと腰を下す」ほんとうに永遠の苛責だわ！ そして終りといふ物はないんでせうか？

大尉 お互に忍耐の覺悟を以てすれば、矢張り終りといふ物はあるよ！ 恐らく死がやつて来る時に、ほんとうの生は始まるだらう！

問。

大尉 お前はクルトを偽善家だと思つてるんだね？

アリス 無論さうだと思ひますわ！

大尉 おれはさうは信じないよ！ だがおれ達の側に來る程の奴はみんな意地悪くなつて勝手な眞似をやる……クルトは弱い男だつた、そして悪の力は強いよ！

問。

大尉 見ろ、今では人生といふものがこのおれにとつて如何に平凡無味なものになつた事か！ 以前にはどしどし打つてかゝつて來たものだが、今ではたゞ遠巻きに脅

すだけだ！——多分これは間違ひがないだらうが、おれ達はもう三ヶ月経つと銀婚式の祝典を擧げるだらう……

クルトを例の立會人としてな……そしてドクトルとイエルダも呼ぶ事にしよう……兵器監は祝辭演説をやるだらうし、曹長の奴は屹度萬歳の音頭を取るよ、大佐だつて、我輩の觀察にして誤らざれば、自分の方からのこのこ出かけて來るね！——ふむ、お前笑つてるね！ だがお前あのアドルフの銀婚式の時の事を覚えてゐるだらう……あの野戦獵兵のさ！ あの時、銀婚式の嫁御寮は指輪を右手にはめなければならなかつたつけな、何しろ花婿先生夢中になつた瞬間に鼻アの左の指輪指を指揮刀で以てちよん切つてしまつたといふ騒ぎだつたさうだからな。

アリス 「ハンケチを口にあて、笑ひを押へる」

大尉 泣いてるのかい？——いや、屹度笑つてるのだから！——ねえお前、おれ達はまるで半分は泣きたいやうな、半分は笑ひたいやうな氣持ちぢやないか！ どちらが本當なのか……それはおれにも分らん……おれはこの間新聞で讀んだけれど、或る男が……七度離婚して……だから詰りその男は七度結婚した事になるんだが……最後の決着は、九十八近くの年になつてから一番初手の細

君と突走つて一緒になつたんださうだ！それが戀といふ曲者さ！……この人生といふ物は、果して眞面目な物か、それとも単におどけ芝居に過ぎないのか、それはおれにも分らない！そしてこの人生は單なる冗談に過ぎないとしても、冗談の人生といふ奴は決してそんなのんきな物ではなくて、最も痛ましい物であるといふ事もあり得る、そして嚴肅とか眞面目とかいふ方は、元來却つて落着きがあつて氣持のいゝものなんだ……だが折角眞面目な態度でやつてゐる所へ、何處かからひよ／＼飛び出して来てはそれをからかつて見る剽輕者があるよ……例へば、あのクルトのやうな男さね！……お前銀婚式はやる積りかい？

アリス 「黙したるまゝ」

大尉 うんと云へよ！そりやあ世間の奴等は笑ふだらうさ！だが、笑はれたつてかまやあしない！そしてら、一緒に笑つてやるまでさ！それともおどけ芝居は止しにして、お人柄相應鹿爪らしくやつて行くつもりかね？

アリス えゝ、わたしはもうどうでも！

大尉 「眞面目に」それでは銀婚式だ！……〔起ち上る〕抹殺しては更に先へと押進めよ、だ！——ではどん／＼

先へ進んで行かうよ！

註—この曲がストリンドベリの建設せる小劇場に於て上演せられし時舞臺監督ファルクは、最後の臺詞の後に大尉をしてウイスキーの罎の初めに於ける、大尉がラム水を調合して飲む動作に照應して、曲の結末に於て再び最初に復歸することを形の上に現す點に於て効果あるものとして作者もこれを認め、大尉の最後の臺詞の後に〔食器棚の方へ近づく〕といふト書きを附加する旨をノートに書き止め置けりといふ。

第二部

人物

エドガール
アリス
クルト
アラソン
クルトの息子。
ユードイト
エドガールの娘。
中尉

場面

白色と金色とを以て装へる楕圓形の客間。正面の壁には硝子屏はまり居り、扉打ち開かれたる故前方にテレリスを望む。そこには石柱の欄干をめぐらし、石柱の頭には、ペトウニエン草や紅ペラルゴニエン

草等を植ゑたる青白き陶器鉢を載せたり。このテレリスは公衆の遊歩場にて、その向うに海岸砲臺とそこに歩哨に立てる砲兵の姿を望む。尙ほはるか彼方には大洋。
室の左手に鍍金せるソファあり、その前に卓と椅子。右手に翼形ピアノ、書き物机、及び燧爐。舞臺の手前に亞米利加風の安樂椅子。書き物机の上に、鋼製の臺ランプとそれに附屬せる卓。壁には種々の古びたる油畫の額。

第一幕

アラン書き物机に倚り、數學をやり居る。ユーデイト正面の扉より入り来る、裾短き夏衣、編み髪を背後に、片手には帽子、片手にはラケット。彼女は一寸入口に佇む。アラン身を起す、眞面目に、恭しく。

ユーデイト 「眞面目に、然しなれしく」何故テニスをやりていらつしやらないの？

アラン 「おどろくと、感情を制しながら」僕忙しいもんですから……

ユーデイト あなた見た見なかつたの——あたし自転車を棚の木に立てかけて置いたでせう、木から離しては置きませんわ！

アラン え、たしかに拜見しました！

ユーデイト そんなら、それはどういふ意味だつたの？

アラン それは……僕にテニスをやりに来て貰ひたいつて事でせう……然し、僕は勉強を……僕數學の問題をやらなきやならないもんですから……そしてあなたのお父さんと來たら、中々やかましい先生なんですから……

ユーデイト あなた、うちのお父さんが好き？

アラン え、好きです！ よく生徒全部の面倒を見て下さいますから……

ユーデイト どんな人間でもどんな物でも、世話をやきたがるのよ、うちのお父さんと來たら。——あなたあたしといらつしやらない？

アラン 無論行きたいのは山々ですが——でも行けないんですもの！

ユーデイト そんならあたしお父さんにお暇を下さいつてお願いするわ！

アラン それはいけません！ 人にかれこれ云はれるばかりですよ！

ユーデイト あたしの言葉はお父さんにはきき目がないだらうと思つてらつしやるの？ なあに、あたしのしたい事なら、お父さんだつていゝつて云ふに決つてるのよ！
アラン そりやあさうでせう、あなたが強情を張り通すんですから！

ユーデイト あなたどつて随分強情だつてことだわ！

アラン 僕は狼の性ぢやありませんよ！

ユーデイト そんなら羊ね！

アラン その方がいゝですわ！

ユーデイト 何故あなたはテニスをやりに行かうつて云はないのか、そのわけを仰しやいよ！

アラン 御存じの辭に！

ユーデイト さあ、仰しやいよ！……あの、中尉の事でせう……

アラン え、あなたは實際は僕の事なんかこればつかりも思つてるんぢやないんでせう、でも中尉と二人つ切りでもあなたは矢張り詰らないんですね——僕が側にゐてやきもき苦んでゐるところを眺めないと！

ユーデイト まあ、あたしそんなに残酷な女なのかしら？
アラン 今まで知らなかつたわ！

アラン ぢやあ今度こそ分つたでせう！

ユーデイト そんならあたしこれから氣を付けて直すやうにするわ、残酷な女なんかになりたくありませんからね！ 殊にあなたの眼に悪く映るのはいやですもの！

アラン あなたはますく僕の上に勢力を振はうと思つてそんな風に仰しやるんでせう！ 僕は、とうからあなたの奴隷になつてるのに、あなたはそれだけに飽き足りなくつて、もつと奴隷を苦めて、猛獸の前に投げ出さうといふんでせう！ あなたは既に一人の男を爪で引つかけて生捕にして置きながら、今度は僕をどうしようとい

ふんです？ 僕は僕の勝手にさして置いて下さい、そしてあなたはあなたの御勝手にね！

ユーデイト そんならあなたはあたしを追い出さうといふのね？

アラン 「答へず」

ユーデイト そんならあたしもう行つちまひますわ！——親類同士だから時々は顔を合せなくちやならないけれど、あたしもうお邪魔はしないわ！

アラン 「再び机に向つて計算を始める」

ユーデイト 「まだ行かずに、アランの向へる机の方へ次第に近寄る」御心配は要りませんわ、あたし直ぐに歸りますからね……只一寸検疫所長のお宅つてどんな風か拜見するのよ！「あたりを見廻す」何も彼も白と金づくめね！——あら、大きなピアノ、ベッシェシュティンだわ！——え、——あたし達なんぞまだあの要塞の塔の中に住んでゐるのよ、お父さんが退職になつてからも……お母さんが二十五年間も押し籠められてゐたあの塔の中にね……それもやうやくお上のお情で許されてゐるのよ！
おうちはお金持ね、おうちは——

アラン 「靜に」僕のうちなんか金持でも何んでもありませんよ！

ユーデイト そんな事云つたつて、あなたはいつでもいゝ着物を着ていらつしやるぢやありませんか！——そして又、あなたの着る物は何でも善く似合ふのね！……ちよいとあなたあたしの云ふ事を聞いてゐて？「近付く」

アラン 「おとなしく」聞いてます！

ユーデイト そんな計算だか何だかやつてゐながら聞えるの？

アラン 僕は眼で聞くんぢやありませんよ！

ユーデイト え、あなたの眼は！……あなた自分の眼を鏡で御覧になつたことがあつて？

アラン 勝手にしなさい！

ユーデイト あなたあたしを輕蔑してるのね、あなたは！

アラン 輕蔑も何も、僕はあなたの事なんかで念頭に在りませんよ！

ユーデイト 「もつと近寄つて来て」兵隊がやつて来て刺し殺されるまでちつと坐つて計算してゐたといふアルキメデスのやうな人ね、あなたは！「ラケットでアランの用紙に觸る」

アラン 紙に觸らないで下さいよ！

ユーデイト アルキメデスも矢張りそんな事を云つたんですとさ！……あなた今屹度何か頭の中で考へ廻してる

のね！ あたしはあなたなしには生きてゐられないだらうといふやうな事を……

アラン どうしてあなたといふ人は僕をかまはずに置いてはくれないんです？

ユーデイト まあ大人しくしていらつしやいよ、あたし試験の時には屹度助けて上げますからね……

アラン あなたが？

ユーデイト え、あたし試験官を知つてるのよ！

アラン 「きつぱりと」それで？

ユーデイト 何んでも教官のお氣に入りになつてなければ駄目だつて事はあなたとつて御承知でせう？

アラン 教官つてお父さんと中尉の事を仰しやるんですか？

ユーデイト それから大佐もよ！

アラン そしてあなたに助けてさへ貰へば僕は勉強をやらなくつても済むといふんですか？

ユーデイト あなたは拙い翻譯家ね！

アラン え、原作が拙いもんでね！

ユーデイト 恥かしげもなく、よくそんな事が云へますね！

アラン 恥かしいですとも、あなたの爲めに、それから

僕自身の爲めにも！——僕はあなたの云ふ事なんぞに耳を貸したのが恥かしいんです！……何故あなたは行つちまはないんですか？

ユーデイト あなたはあたしが側にあるのが大好きだといふ事が分つてるからよ！——ほんとの事よ、あなたはいつもうちの窓の下を通るんでせう！ 町へ行く時だつていつもあたしと同じ船に乗るぢやありませんか！ あたしが船の前帆を操らなかつたら、あなたは町へ出る事も出来ないくせに！

アラン 「極り悪げに」若い娘といふ物はそんな事を云ふもんぢやありませんよ！

ユーデイト あなたあたしを子供だと思つてるの？

アラン あなたは善い子になる事もあるし、手に負へない女になる事もありますよ！ あなたはこの僕をあなたの羊に選んだんですね！

ユーデイト え、あなたは羊よ、だからあたしあなたを保護して上げるのよ！

アラン 「起ち上りて」狼なら何時でも悪い羊飼ひに決つてゐますよ！……あなたは僕を喰ひ殺さうつてんでせう……それが祕密の本音なんだ！ あなたはあなたのその美しい眼を抵當にして、僕の頭を受け戻さうつていふ

んでせう。

ユーデイト あら、そんならあなたあたしの眼を見たの？

アラン 「書類を集めて、右手へ去らんとする」

ユーデイト 「扉の前に立ち塞がる」

アラン 退いて下さい、でない……

ユーデイト でないと？

アラン あなたが若し男だつたら、ちえつ、そのまゝに

は！ でもあなたは娘ですからね！

ユーデイト だからどうしたといふの？

アラン 若しもあなたが一片の自尊心をもつてゐたら、自分が邪魔者にされると分つた場合、さつさと出て行く筈だといふんですよ！

ユーデイト い、わ、よく覚えてらつしやい！

アラン 承知しました！

ユーデイト 「腹立たしく、正面の方へ」ようく……覚えて……いらつ……しやいよ！ 「退場」

クルト 「左手より登場」何處へ行くんだい、アラン！

アラン あ、お父さんでしたか！

クルト 誰だい、あんなにあわて、飛んで行つたのは……

…庭木がまだざわ／＼してるよ！

アラン ユーデイトです！

クルト あの子はお轉婆だな、だがい、娘だよ！

アラン 意地悪で亂暴の娘は、いつでもい、娘だと云はれるんですね！

クルト そんなにやかましくいふもんじゃないよ、アラン！……お前はあの新しく出来た親戚の人達はあまり気に入らないのかね？

アラン エドガール小父さんは僕好きですが……

クルト さう、あの人には中々いゝところもあるよ……

アラン それから他の先生達はどうかね？ たとへばあの中尉なぞは？

アラン あの先生は非常に不公平です！ 僕に對して何か悪意を持つてるのかしらと思はれる事も時々ある位です！

クルト いや、そんな事はないだらう！……お前は人を見るにすぐ「こんな氣がする」だから困つてしまふよ！

アラン あんまり深く物事を考へずに、自分の義務を盡して正しくしてさへるればいゝもんだよ、そして他の人間は他の人間で勝手に考へたりしたりさして置くさ！

アラン えゝ、僕はさうしてるんです、でもみんなは僕

を關はずにそつとして置かないもんですからね！ つまり人を一緒に引きずり込むんですね……まるであの棧橋の下の鳥賊のやうに……噛み付きはしませんかね、でも渦を巻いて底の方へ吸ひ込むんです……

クルト 「やさしく」どうもお前は憂鬱になり易い質だと見えるね！ おれの側にゐるのはお前には適しないのかしら？ 何かお前物足りないと思ふやうな事はないかね？

アラン いえ、僕はこれまでこんなに楽しく暮した事はないんです……然し此處にゐると何だかかゝ息が詰るやうなところがありますけれど！

クルト この海岸に住んでゐるとかい？ そんならお前は海が好きでないの？

アラン いゝえ、大洋は大好きなんです！ けれどこんな海岸にはいやな海藻や、鳥賊や、水母や腔腸動物とか何とかそんな物がうよ／＼してゐますからね！

クルト 兎に角あんまり家の中に閉ぢ籠つてばかりゐるのはよくないよ！ 少し外に出てテニスでもやつたらどうだい！

アラン そんな事詰らないんですもの！

クルト お前ユーデイトの事を何か怒つてるらしいね？

アラン ユーデイトですか？

クルト お前は他人に對しては随分やかましい方で、ちつとも假借をしないやうだがそれはいけないよ、さういふ人間は結局孤獨に陥つてしまふものだからね！

アラン 僕は決して他人に對してさうやかましま過ぎるわけぢやないんですけれど、然し……何だか僕はまるで薪の一番下積みにでもなつてゐるやうな氣持がしてならないんです……そして火にくべられる順番がやつて来るまでちつと待つてゐるかなければならないやうな……僕は上の方から壓へつけられてゐるんです、僕の上になつてゐる一切の物から壓へつけられてゐるんです……

クルト では待つてるさ、お前の順番になるまで！ 薪はだん／＼減つて軽くなつて行くからね……

アラン えゝ、でも随分緩慢ですよ、そりやあひどく緩慢なものですよ！ あゝ、僕はそんな風にして下積みになつてゐる中に全身微かびてしまひさうですよ！

クルト 實際若いつて事はそんなに愉快なものぢやないね！ それでもみんなは若い者を羨んでゐる！

アラン さうでせうか？ ではお父さんも僕と代つて見たいんですか？

クルト まあ御免を蒙るよ！

アラン お父さんは知つてゐますか——若い者にとつて何が一番やり切れない事なのか？ 老人達が下らない事をしやべつてゐるのに、ぢつと坐つて沈黙を守らなければならぬといふ事です……僕だつて或る點に於てはそんな老人達よりも遙によく通じてゐる積りなんです……

クルト それでも矢張り沈黙を守つてゐなければなりません！ いや御免下さい、僕はお父さんを老人扱ひにする積りぢやないんですから！

クルト 何故老人扱ひにしないの？

アラン 多分かうでせう——僕は實はこの頃になつて初めてお互に知り合つたやうなものなんです……

クルト それともう一つは……お前はおれをもつと違つた人間のやうに想像してゐたからだらう！

アラン えゝ！

クルト 恐らくお前は別れて住んでゐたこの年月の間始終おれに對して温い感情を持ち續けてゐたといふわけはないだらうと思ふが！

アラン その通りです！

クルト お前おれの寫眞を見た事はあつたかい？

アラン えゝ、たつた一枚、それも餘りよく撮れてゐるんぢやなかつたんです！

クルト　そして老けてみたんだらう？

アラン　ええ！

クルト　十年程以前におれはたつた一晚で髪の毛が半白になつた事があつたよ！……その後それはだん／＼進んで来てはゐるがね！……いや、もつと何か他の事を話すでしょう！……御覽、小母さんが来るよ、おれの従妹の！
お前あの人をどう思ふね？

アラン　それは何んとも云ひたくありませんね！

クルト　ぢやあおれも訊くまい！

アリス　「極めて明るき色の夏の散歩衣を着け、日傘を携へて登場」お早う、クルト！「アランを去らしめるやうに目で知らす」

クルト　「アランに」お前は失禮しな！

アラン　「右手へ去る」

アリス　「左手のソファに坐す」

クルト　「その側の椅子にかける」

アリス　「云ひにくさうに」あの人が直き参りますから、そんなに御迷惑はおかけしませんわ！
クルト　迷惑する事なんかちつともないぢやありません

か？

アリス　でもあなたは厳格な考へを持つてらつしやるんですから……

クルト　自分自身に對しては、無論さうです！

アリス　ほんとにさうですわ！……わたしあの時の事を考へて見ますと全く無我夢中だつたんですね、あなたこそわたしの繩を解いて下さる唯一のお方だと只もう一圖に思ひ込んでしまつたものですからね！　でもあなたは流石にしっかりと忘れたわね……だからわたし達はある事はずらりと忘れてしまつてもいゝ權利がありますわ——實際わたし達の間には何んにもなかつたんですから！

クルト　ぢやさらりと忘れてしまひませう！

アリス　でも……あの人を忘れてしまつてゐるだらうとはわたしどうしても思はれませんの……

クルト　あの晩の事でせう——あの人を心臓の痙攣で卒倒してしまつて、もう死んだと思つてあなたが早手廻しに喜んで失敗した……？

アリス　ええ、その後あの方は恢復して、お酒を止めたもんですから、すつかり無口になつてしまひましたの！　今ではあの人ほんとうに氣味が悪いんですよ、何かしら

わたしなんぞには想像も付かないやうな事を心の中でたくらんでゐるらしいんですよ！

クルト　アリス、あなたの御主人は實際單純な好人物ですよ、わたしにだつてそりやあ親切にしてくれまますからね……

アリス　あの人の親切は氣を付けないと危険ですよ！

わたしも覺えがりますけれど！

クルト　さうですかね！

アリス　ではあなたも矢張り盲目にされてゐるんですわ！……あなたには危険が見えませんが、あの毘に氣が付きませんか？

クルト　氣が付きませんね！

アリス　ではもうあなたの身は破滅するに決つてるわ？

クルト　まさかそんな事は……！

アリス　まあ考へても御覽なさい——わたし此處にちつと坐つてゐながら、不吉な事が猫のやうにそつとあなたの側に忍び寄つて来るのを見てゐますの……そして、あなたに指して見せても、あなたはそんな物はちつとも見えやしないと仰しやるんですもの！

クルト　アランだつて、随分いゝ眼を持つてる方だけけれど、矢張りそんな物には氣が付きませんですよ！　尤も

あれは只ユーデイトだけを見てるんですがね、それは又いつでも親密な關係の擔保となる物なんですがね。

アリス　あなたユーデイトを御存じ。

クルト　あの人懐つこい子でせう——編み髪をお下げにして、可なり短い上衣を着けた……

アリス　その通りですわ！　でもこの間見た時には長い上衣を着て居りましたわ……そりやあまるで若奥様と云つた風なんです……でも髪を結び上げてゐるとそんなに若くは見えますよ！

クルト　ちつと早熟の方ですね、それはわたしも認めますよ！

アリス　そしてあの子はアランとテニスをやつてますのね！

クルト　遊戯である間はそれでもいいでせうよ！

アリス　さうですわね！……もう直きエドガールが参りますわ、そしてその安樂椅子に掛けますのよ、屹度！——あの方はその椅子が好きで／＼たまらないんですよ——盗みもし兼ねない位に！

クルト　ぢやあ差上げませう！

アリス　あの人をばそこに掛けさせて、わたし達は此處にゐませうよ。そしてあの人がかしやべり出したら——朝